

粟 田 遺 跡 (第 10 次 調 査)

三納アラミヤ遺跡 (第 1・2 次調査)

三納トヘイダゴシ遺跡 (第 1・3 次調査)

2 0 0 6

石川県野々市町教育委員会

野々市町中南部土地区画整理組合

粟 田 遺 跡 (第10次調査)

三納アラミヤ遺跡 (第1・2次調査)

三納トヘイダゴシ遺跡 (第1・3次調査)

2006

石川県ののいち
野々市町教育委員会

野々市町中南部土地区画整理組合



野々市町中南部土地区画整理事業地区遺跡分布(平成12年：北から)



三納トヘイダゴシ遺跡 第1次調査区 (東から)



三納アラミヤ遺跡 第1次調査区（南西から）



三納アラミヤ遺跡 第2次調査区（南から）



栗田遺跡(第10次調査)竪穴建物(竪穴状遺構) AW⑩ 2 ~ 8 (南西から)



三納アラミヤ遺跡(第1次調査)竪穴建物SA(1) 9・120・121 棚出(北から)



三納アラミヤ遺跡(第1次調査)遺物集中区SA(1)224 遺物出土状況



三納アラミヤ遺跡(第2次調査) 河道SA(2)1 (北から)



三納トヘイダゴシ遺跡 第1次調査区（南から）



三納トヘイダゴシ遺跡 第1次調査区（北から）



粟田遺跡 滿AW(0)25出土遺物



粟田遺跡 滿AW(0)61出土遺物



栗田遺跡 溝AW1075出土遺物



三納アラミヤ遺跡 穹穴建物SA(1)9 出土遺物



三納アラミヤ遺跡 穹穴建物SA(1)121出土遺物



三納アラミヤ遺跡 穹穴建物SA(1)120出土遺物



三納アラミヤ遺跡 遺物集中区SA(1)224出土遺物

例　　言

1 本書は、粟田遺跡(第10次)・三納アラミヤ遺跡(第1次・第2次)・三納トヘイダゴシ遺跡(第1次・第3次)の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2 遺跡の所在地は、石川県石川郡野々市町栗田・三納地内である。

3 調査原団は野々市町中南部土地区画整理事業にともなうものである。

4 調査にかかる費用は、野々市町中南部土地区画整理組合が負担した。

5 調査は、野々市町中南部土地区画整理組合からの依頼を受けて野々市町教育委員会が実施した。

6 現地調査は、平成11・12・13・14年度に実施した。遺跡名・面積・期間・担当者は下記のとおりである。

平成11年度　粟田遺跡(第10次)　　面　積　2,400m²

期　間　平成11年9月27日～平成12年1月14日

担当者　布尾和史　野々市町教育委員会文化課　主事

　　永野勝章　野々市町教育委員会文化課　主事

平成12年度　三納トヘイダゴシ遺跡(第1次)　面　積　3,400m²

期　間　平成12年5月9日～平成12年8月3日

担当者　布尾和史

平成13年度　三納アラミヤ遺跡(第1次)　　面　積　1,150m²

期　間　平成13年7月9日～平成13年11月16日

担当者　布尾和史

　　三納トヘイダゴシ遺跡(第3次)　面　積　550m²

期　間　平成13年7月9日～平成13年11月16日

担当者　布尾和史

平成14年度　三納アラミヤ遺跡(第2次)　　面　積　1,800m²

期　間　平成14年9月20日～平成14年12月26日

担当者　布尾和史

7 出土品整理は平成13年度から平成17年度に野々市町教育委員会が実施した。

8 報告書の刊行は平成17年度に野々市町教育委員会文化振興課が実施した。担当は水野勝章(野々市町教育委員会文化振興課　主事)、編集・執筆は布尾幸志(野々市町教育委員会　臨時職員)が行った。

9 現地調査から出土品整理、報告書刊行に至るまでには地元の方々をはじめとして下記の機関、個人の協力を得た。(五十音順、敬称略)

　追川吉生、大橋康一、垣内光次郎、柿田祐司、出越茂和、布尾和史、藤田邦雄、増山仁、村上伸之、柳石川県埋蔵文化財センター、野々市町中南部土地区画整理組合、野々市町都市計画課、野々市町史編纂室

10 本書についての凡例は下記のとおりである。

(1) 方位は座標北を指し、座標は国土交通省告示の平面直角座標第VII系に準拠している。

(2) 水平基準は海拔高であり、T, P, (東京湾平均海面標高)による。

(3) 出土遺物番号は、遺跡ごとに本文・観察表・挿図・写真で対応する。

(4) 挿図の縮尺は図に示すとおりである。また、写真図版における遺物の縮尺は統一していない。

(5) 土層図の注記は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財團法人　日本色彩研究所監修『新版　標準土色帖』に掲った。

11 調査に関する記録と出土遺物は、野々市町教育委員会が一括して保管・管理している。

目 次

第1章 位置と環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第2章 経緯と経過	5
第1節 調査の経緯	5
第2節 調査の経過	8
(1)試掘調査 (2)発掘調査 (3)整理作業・報告書作成 (4)調査体制	
第3章 調査と報告の方針	13
(1)遺構 (2)遺物	
第4章 粟田遺跡(第10次調査)	17
第1節 遺跡の概要	17
第2節 遺構	17
(1)縄文時代の遺構 (2)古代の遺構 (3)中世の遺構 (4)近世の遺構	
第3節 遺物	23
(1)縄文時代の遺物 (2)古代の遺物 (3)中世の遺物 (4)近世の遺物 (5)その他遺物	
第4節 小結	25
第5節 図面図版 遺構・遺物実測図	32
第5章 三納アラミヤ遺跡(第1・2次調査)	65
第1節 遺跡の概要	65
第2節 遺構	65
(1)縄文時代の遺構 (2)古代の遺構 (3)中世の遺構 (4)近世の遺構	
第3節 遺物	71
(1)縄文時代の遺物 (2)古代の遺物 (3)中世の遺物 (4)近世以降の遺物 (5)その他遺物	
第4節 小結	73
第5節 図面図版 遺構・遺物実測図	83
第6章 三納トヘイダゴシ遺跡(第1・3次調査)	137
第1節 遺跡の概要	137
第2節 遺構	137
(1)古代以前の遺構 (2)中近世の遺構	
第3節 遺物	140
(1)古代以前の遺物 (2)中近世以降の遺物	
第4節 小結	140
第5節 図面図版 遺構・遺物実測図	146

挿図目次

第1図 遺跡の位置	1	第43図 遺構分布図(1)(1/1,200、1/400)	83
第2図 野々市町の遺跡(1/30,000)	3	第44図 遺構分布図(2)(1/400)	84
第3図 試掘地点位置図	6	第45図 平面図(1)(1/200)	85
第4図 年度別調査区位置図	7	第46図 平面図(2)(1/200)	86
第5図 墓種分類図(1)古代・中世(1/6)	14	第47図 平面図(3)(1/200)	87
第6図 墓種分類図(2)近世以降(1/6)	15	第48図 平面図(4)(1/200)	88
要出路(第10次調査)			
第7図 野々市町の中世堅穴状遺構規模	28	第49図 繩文時代遺構全体図(1)(1/1,200、1/400)	89
第8図 遺構分布図(1/500)	32	第50図 繩文時代遺構全体図(2)(1/400)	90
第9図 平面図(1)(1/200)	33	第51図 遺構実測図SA(2)2325(1/40、1/20)	91
第10図 平面図(2)(1/200)	34	第52図 古代遺構全体図(1)(1/1,200、1/400)	92
第11図 稲文・古代遺構全体図(1/500)	35	第53図 古代遺構全体図(2)(1/400)	93
第12図 遺構実測図AW0020・25・27・48・49・50・51 78・100(1/40)	36	第54図 遺構実測図SA(1)①(1/80、1/40)	94
第13図 遺構実測図AW0010平行溝群(1/80)	37	第55図 遺構実測図SA(1)②(1/80、1/40)	95
第14図 中世・近世以降遺構全体図(1/500)	38	第56図 遺構実測図SA(1)③・遺物出土状況図SA(1)9 (1/80、1/40)	96
第15図 遺構実測図AW002(1/40)	39	第57図 遺構実測図SA(1)9(1)(1/80、1/40)	97
第16図 遺構実測図AW003(1/40)	40	第58図 遺構実測図SA(1)9(2)(1/40)	98
第17図 遺構実測図AW004・5(1/40)	41	第59図 遺構実測図SA(1)20・121(1/80)	99
第18図 遺構実測図AW006(1/40)	42	第60図 遺物出土状況SA(1)20・121(1/80、1/40)	100
第19図 遺物出土状況AW003・6(1/80)	43	第61図 遺構実測図SA(1)4・5・132(1/40)	101
第20図 遺構実測図AW007(1/40)	44	第62図 遺構実測図SA(1)14・20・127・138・149・157 (1/40)	102
第21図 遺構実測図AW008～10(1/40)	45	第63図 遺構実測図SA(1)2・3・22・25・26・28～31 ・70・96(1/80、1/40)	103
第22図 遺構実測図AW0018・42・43・60・65・66 (1/80、1/40、1/20)	46	第64図 遺物出土状況SA(1)31(1/200)	104
第23図 遺構実測図AW0074・82・97・134(1/40)	47	第65図 遺構実測図SA(1)31(1/40)	105
第24図 遺構実測図AW0016・80・83・98・99・110 (1/40)	48	第66図 遺物出土状況SA(1)224(1/80、1/20)	106
第25図 遺構実測図AW0028・29・52・58・62 (1/40)	49	第67図 遺物出土状況SA(2)1(1/200)	107
第26図 遺構実測図AW0056・57・63(1/40)	50	第68図 遺構実測図SA(2)1(1/40)	108
第27図 遺構実測図AW0072・95・122(1/40)	51	第69図 中世遺構全体図(1/1,200、1/400)	109
第28図 遺構実測図AW0044・45・127(1/40)	52	第70図 遺構実測図SA(2)2205(1)(1/100)	110
第29図 遺構実測図AW0024・25・61・75(1/200)	53	第71図 遺構実測図SA(2)2205(2)(1/40)	111
第30図 遺構実測図AW0024・25・61・75(1/80、1/40)	54	第72図 遺構実測図SA(2)119・120(1/100,1/40)	112
第31図 遺物出土状況AW0024・25・61・75(1/200)	55	第73図 近世遺構全体図(1/1,200、1/400)	113
第32図 遺物実測図(1)(1/3)	56	第74図 遺構実測図SA(1)250・251(1/200)	114
第33図 遺物実測図(2)(1/3)	57	第75図 近代以降遺構全体図(1)(1/1,200、1/400)	115
第34図 遺物実測図(3)(1/3)	58	第76図 近代以降遺構全体図(2)(1/400)	116
第35図 遺物実測図(4)(1/3)	59	第77図 遺構実測図SA(1)6(1/80)	117
第36図 遺物実測図(5)(1/3)	60	第78図 遺構実測図SA(1)225・226(1/100,1/40)	118
第37図 遺物実測図(6)(1/3)	61	第79図 遺物出土状況SA(1)225・226・242(1/200)	119
第38図 遺物実測図(7)(1/3)	62	第80図 遺物実測図(1)(2/3、1/3)	120
第39図 遺物実測図(8)(1/3、1/6)	63	第81図 遺物実測図(2)(1/3)	121
第40図 遺物実測図(9)(1/3)	64	第82図 遺物実測図(3)(1/3)	122
二納アラミヤ遺跡(第1・2次調査)			
第41図 二納アラミヤ遺跡周辺の古代堅穴住居規模	75	第83図 遺物実測図(4)(1/3)	123
第42図 三納アラミヤ遺跡周辺の古代掘立柱建物規模	76	第84図 遺物実測図(5)(1/3)	124
		第85図 遺物実測図(6)(1/3)	125
		第86図 遺物実測図(7)(1/3)	126
		第87図 遺物実測図(8)(1/3)	127
		第88図 遺物実測図(9)(1/3)	128
		第89図 遺物実測図(10)(1/3)	129
		第90図 遺物実測図(11)(1/3)	130

第91図	遺物実測図(1/3)	131
第92図	遺物実測図(1/3)	132
第93図	遺物実測図(1/3)	133
第94図	遺物実測図(1/3)	134
第95図	遺物実測図(1/3)	135
第96図	遺物実測図(1/3、1/1)	136
三納トヘイダゴシ遺跡(第1・3次調査)		
第97図	地籍図との対比状況	143
第98図	遺構分布図(1)(1/1,200、1/400)	146
第99図	遺構分布図(2)(1/400)	147
第100図	平面図(1)(1/200)	148
第101図	平面図(2)(1/200)	149
第102図	平面図(3)(1/200)	150
第103図	平面図(4)(1/200)	151
第104図	古代以前遺構全体図(1)(1/1,200、1/400)	152
第105図	古代以前遺構全体図(2)(1/400)	153
第106図	遺構実測図ST(1)1・ST(3)29(1/40)	154
第107図	遺構実測図ST(1)6・30(1/100,1/40)	155
第108図	遺構実測図ST(1)20(1/100)	156
第109図	中近世遺構全体図(1)(1/1,200、1/400)	157
第110図	中近世遺構全体図(2)(1/400)	158
第111図	遺構実測図ST(1)8・9・33・ST(3)1(1/40)	159
第112図	遺構実測図ST(1)7・8・11(1/100)	160
第113図	遺構実測図ST(1)平行溝群(1/100)	161
第114図	遺物実測図(1)(1/3)	162
第115図	遺物実測図(2)(1/3)	163
第116図	遺物実測図(3)(1/3)	164

表 目 次

第1表	合併後の町村名対応表	1
第2表	野々市町の遺跡	2
第3表	野々市町中南部土地区画整理事業に係る埋蔵文化財調査一覧表	8
第4表	粟田遺跡(第10次調査)遺物観察表	30
第5表	野々市町の中世界穴状遺構-観察表	27
第6表	二納アラミヤ遺跡(第1・2次調査)遺物観察表	79
第7表	三納アラミヤ遺跡周辺の古代遺跡消長表	74
第8表	三納トヘイダゴシ遺跡(第1・3次調査)遺物観察表	145

図版目次

粟田遺跡(第10次調査)		
図版1	AW002~8検出	
図版2	AW002・48~51断面、AW002完掘、AW002・3遺物出土状況	
図版3	AW003~6断面、AW005完掘、作業状況	
図版4	AW008~10・18断面、AW005~8完掘、作業状況	
図版5	AW0042・134遺物出土状況、AW0028・43・60・74断面、AW0060・74完掘	
図版6	AW0029・52・56・58・62・122断面、AW00122遺物出土状況	
図版7	AW0024・25・61・72・75断面、AW0025・61・75完掘	
図版8	遺物写真(1)	
図版9	遺物写真(2)	
図版10	遺物写真(3)	
図版11	遺物写真(4)	
図版12	遺物写真(5)	
三納アラミヤ遺跡(第1・2次調査)		
図版13	SA(1)調査区北半・南半検出	
図版14	SA(2)325遺物出土状況、SA(1)①~③完掘、SA(1)9検出、遺物出土状況	
図版15	SA(1)9・120遺物出土状況・断面、作業状況	
図版16	SA(1)120・121完掘、SA(1)120遺物出土状況、SA(1)4・121・132・138断面、SA(1)4床面	
図版17	SA(1)2・131・SA(2)1断面、SA(1)224・SA(2)1遺物出土状況、SA(1)2・3・131・SA(2)1完掘	
図版18	SA(2)119・120検出、SA(2)119・120・205断面、SA(1)119遺物出土状況、SA(2)119・120・205完掘	
図版19	SA(1)6・251・226断面、SA(1)226・SA(2)完掘、SA(1)226遺物出土状況	
図版20	遺物写真(1)	
図版21	遺物写真(2)	
図版22	遺物写真(3)	
図版23	遺物写真(4)	
図版24	遺物写真(5)	
図版25	遺物写真(6)	
図版26	遺物写真(7)	
図版27	遺物写真(8)	
三納トヘイダゴシ遺跡(第1・3次調査)		
図版28	ST(1)検出、ST(3)光澤	
図版29	ST(1)1・9・倒木跡群断面、ST(1)6遺物出土状況、ST(1)6・30完掘、作業状況	
図版30	ST(1)33・ST(3)1断面、ST(1)7・8・平行溝群①・③・ST(3)1検出、ST(1)33完掘、ST(1)8掘り下げ	
図版31	遺物写真(1)	
図版32	遺物写真(2)	

第1章 位置と環境

第1節 地理的環境

野々市町は、石川県のほぼ中央に位置する。本書で取り上げる粟田遺跡・三納アラミヤ遺跡・三納トヘイダゴシ遺跡は、野々市町の南部にあたる粟田地区、三納地区に所在する。これらは手取扇状地扇央部に立地し、現況は宅地・商業地と水田が広がる平坦な地形であるが、これは近代初頭に進行された耕地整理と近現代の土地開発によるもので、それ以前は手取川とその支流によって形成された細長い島状の微高地が点在し、その微高地に集落が展開してきた。このことは各時代における遺跡の立地からも確認できる。

第2節 歴史的環境

粟田遺跡・三納アラミヤ遺跡・三納トヘイダゴシ遺跡は、縄文時代から近世にかけての遺跡群である。周辺は近年、上地区画整理事業等に係る発掘例が増え、諸々の成果が挙がっている。

手取扇状地を形成した手取川は、当初、東接する富樫山地寄りであった流路が徐々に西南方向へ遷移したことが知られる。その動きは時代・時期ごとの遺跡分布の検討からも確認されており、流路の移動後に、人間の活動適地となるまでの時を経た後、人々の生活の舞台となった。そして残された「人間の活動痕跡」=遺跡は、踏査調査が行われることでわれわれの知るところとなる。

野々市町域における最も古い人間活動の痕跡は、縄文時代後期前葉後半にあたる気屋2式の土器が出土した押野大塚遺跡で確認される。後期中葉前半以降になると、扇状地扇端部の湧水地帯では御経塚遺跡や金沢市チカモリ遺跡、米泉遺跡などの集落遺跡が形成される。一方、扇央部付近では、少量の土器や打製石斧の出土する富樫館跡ノタ地区・清金アガトウ遺跡・上林新庄遺跡などとともに、多量の打製石斧が出土して円礎を母岩とする石斧製作関連資料の確認された粟田遺跡など、明確な居住施設を伴わない、短期的な土地利用の痕跡が確認されている。野々市町中南部地区の各遺跡からも、後期から晩期の土器片や、それに伴うと見られる打製石斧が数点ずつ出土する例が多く見られた。

こうした扇端部の湧水地帯における集落と、その周辺部での短暫的な活動痕跡という遺跡群の立地と性格の結びつきは、縄文時代晩期下野式頃まで継続する。

縄文時代晩期末の長竹式期から弥生時代中期前葉は当地域で



第1図 遺跡の位置

旧市町村名	合併後の名称	No.
唐津市	—	1
能美市	輪島市	2
能美郡	門前町 穴水町 能郷町 柳田村	3 4
珠洲郡	内菊町	5
羽咋郡	高木町 志賀町 志雄町 押水町	6
七尾市	能登島町 中山町 田舎浜町 日置町 豊西町 鹿島町	7 8
羽咋市	—	9
河北郡	内浦町 赤浦町 高松町 七味町 宇ノ氣町	10 11 12
金沢市	—	13
柏原市	鶴来町 河内村 鳥越村 吉野谷村 尾口村 白峰村 美川町 野々市町	14 15
能美郡	川北町 寺門町 辰口町 根上町	16 17
小松市	—	18
加賀市	山中町	19

第1表 合併後の町村名対応表

遺跡数が減少する時期にあたる。晩期の大集落遺跡であった御経塚遺跡も長竹式期にいたると遺構・遺物の量は減少する傾向をみせ、この時期を最後に集落は一旦廃絶されるようである。一方で扇部付近では遺物量が豊富な白山市乾遺跡が存在するが、継続期間は短く、ほぼ長竹式期の内に廃絶してしまう。

弥生時代前期と中期の柴山出村式期は、野々市町域を含む手取扇状地では、押野大塚遺跡や御経塚シンデン遺跡・御経塚遺跡ツカダ地区・栗田遺跡・上林遺跡など、土器片が少量散在する遺跡が知られるのみとなり、その一方で沖積地の小河川沿いでは白山市八田中遺跡や金沢市矢木ジワリ遺跡など土坑群や定量の遺物が出土する遺跡が見られるようになり、以後の初期農耕社会における遺跡立地の先駆けをなす。

手取扇状地から沖積地にかけては、島状高地の間の低地部を流れる河川や埋没河川が網の目状に存在する。こうした河川に沿って遺跡群が分布するようになるのが弥生時代中期後半以降であり、当初は沖積地、後期後半にいたると扇状地でも遺跡が分布するようになる。こうした遺跡群の動きは、沖積地や河川沿いの低湿な場所における、初期水稻耕作の開始と展開を反映したものと考えられる。

野々市町域では、中期後半の集落としては押野タチナカ遺跡が知られるのみである。後期に入ると遺跡数は増加の傾向を見せ、高橋川・伏見川流域で、押野ウマワタリ遺跡・押野タチナカ遺跡・横川・本町遺跡・高橋セボネ遺跡・扇ヶ丘ゴショ遺跡・十人川・安原川流域では、御経塚遺跡ツカダ地区・御経塚遺跡デト地区・御経塚オツコ遺跡・二日市イシバチ遺跡・長池ニシタンボ遺跡など⁵、小河川流域を単位とする遺跡群を形成する。

弥生時代終末期・古墳時代初頭を経て古墳時代前期に入ると、遺跡数は減少する傾向を見せる。手取扇状地周辺では、扇端部付近の標高8メートル付近のラインには沿うように遺跡が並ぶ傾向にある。御経塚シンデン遺跡は弥生時代後期から古墳時代初頭の集落と古墳時代前期の墓域が検出される遺跡であり、扇端部では該期の中心的な遺跡である。また同時期の集落として扇央部では小規模ながら堅穴建物が検出された上新庄ニシウラ遺跡が知られている。後に、御経塚シンデン遺跡では古墳時代前期の前方後方墳・方墳からなる古墳群の墳丘を破壊して、古墳時代後期の集落が形成されている。一方、扇央

No.	遺跡名	時期	No.	遺跡名	時期
1	栗田遺跡	縄文・古代・中世・近世	29	堀内館跡	縄文・中世・近世
2	三浦アラミヤ遺跡	縄文・古代・中世・近世・近代	30	南巾ノダ遺跡	弥生・古墳
3	三浦アヘイタゴン遺跡	縄文・中世・近世	31	喜原キツネヤフ遺跡	中世・近世
4	藤田川ナカシギジ遺跡	中世	32	喜原館跡	縄文・中世・近世
5	藤ニシヨサ遺跡	中世	33	扇ヶ丘ヤグラハコ遺跡	古代・中世
6	下新庄アラチ遺跡	古代	34	扇ヶ丘ハワイゴノ遺跡	縄文・弥生・古代・中世
7	下新庄タナカタ遺跡	古代	35	扇ヶ丘ゴショ遺跡	弥生・古代・中世
8	上林大塚	古墳	36	扇ヶ丘バガタ君跡	弥生
9	上林大塚遺跡	古代・中世	37	山川館跡	縄文・中世
10	上新庄ニシウラ遺跡	弥生・古墳・古代	38	喜原セボネ遺跡	弥生・古代
11	上林ナラダ遺跡	古代	39	柳川本町遺跡	弥生・中世
12	上林遺跡	弥生・古代	40	押野ウマワタリ遺跡	弥生・中世
13	安原ナシテ遺跡	弥生・古代	41	押野タチナカ遺跡・押野館跡	縄文・弥生・中世
14	清金アガトウ遺跡	縄文・古代・中世	42	押野大塚遺跡	縄文・弥生
15	木松人遺跡	縄文・古代・中世	43	上宮寺跡	中世
16	木松人骨館跡	古代・中世	44	野代遺跡	縄文
17	木松山遺跡	古代	45	三日市ヒカシタンボ遺跡	弥生・古墳・古代・中世
18	木松山正守遺跡・福井寺跡	古代	46	三日市A遺跡	縄文・弥生・古代・中世・近世
19	木松ダイカン遺跡	古代	47	二日市イシバチ遺跡	縄文・弥生・中世・近世
20	木松慶寺跡	弥生・古代・中世・近世	48	黒クボタ遺跡	古代・中世
21	古元館跡	不詳	49	徳用ヤタガラ遺跡	古代・中世
22	木松人遺跡	古代	50	具池キタノン遺跡	弥生・中世・近世
23	木松山遺跡	古墳	51	具池ニシタンボ遺跡	縄文・弥生・古墳・中世・近世
24	木松山りわん遺跡	古代・近世	52	御経塚オツコ遺跡	弥生・中世
25	法福寺跡	不詳	53	御経塚遺跡	縄文・弥生・古墳・古代・中世・近世
26	木松舟跡	不詳	54	御経塚坂跡	中世
27	人頭塚跡	古代・中世	55	御経塚シンデン遺跡・古墳群	弥生・古墳・中世・近世
28	三井館跡	中世			

第2表 野々市町の遺跡



第2図 野々市町の遺跡 (1/30,000)

部では上林古墳や白山市田地古墳など横穴式石室を伴う後期古墳が点在することが知られているが、築造主体となる集落が確認されておらず、野々市町南部における古墳時代集落の様相は明らかではない。

古代は、栗田遺跡・清金アガトウ遺跡など扇状地頭央部の集落の多くが開始され、扇央部の開発が進んだ時期である。なかでも扇状地開発のモニュメントとも言われる末松庵寺は、法起寺式伽藍配置で7世紀後半に創建、8世紀初頭まで存続したとされる。周辺では末松福正寺遺跡・末松ダイカン遺跡など7世紀前半の集落跡も確認されているが、遺跡数が増えるのは7世紀後半からであり、8世紀になると粟田遺跡の南に位置する上林・新庄遺跡群で集落が拡大する。三納アラミヤ遺跡はこの時期に相当する。この上林・新庄遺跡群は北と南でその様相を異にし、南は製鉄にかかる竪穴住居と掘立柱建物から成る手工業生産地区、北は溝に区画された計画的な建物配置やその後9世紀後半にかけて機能する大型建物を有し周辺を掌握する領主層が存在した地区であったことが窺える。

中世は、野々市町東部には扇が丘ハイゴク遺跡・扇が丘ゴショ遺跡など居館クラスの遺跡が検出されており、有力武士の居宅と考えられている。野々市町住吉町と扇が丘地区内には加賀の守護であった富樫氏の屋敷と考えられる富樫館跡が存在する。館の性格を明示できるような成果は上がっていないが、守護城下町の構造に関連づけられる都市構造の一端が判明しつつある。野々市町南部では13世紀から三納ニシヨサ遺跡・二納トヘイダゴン遺跡などの集落跡が確認されている。これらは輸入磁器を一定量所持し、溝によって区画された土地に小規模な掘立柱建物を配置するもので、その実態は自作農的小領主と考えられる。これらの集落は14世紀頃には廃絶し周辺の様相は近世まで明らかでない。

中世後半の集落は三日市八遺跡・長池キタノハシ遺跡など、野々市町北部に展開することが近年の調査で確認されている。

近世には粟田・三納地区は集落・水田となる。特に粟田地区については、「石川郡誌」に、「鎮守神社の西側にあった村を、粟田川の氾濫のため村全部を粟田新保に移した」という伝承が書き留められている。

近代は、大正時代に耕地整理が終了、水田となっている。三納アラミヤ遺跡では水門跡が確認され、調査区に隣接する現在の水門に繋がる変遷を知ることができる。

参考文献

- | | | |
|--------------|------|-------------------------------------|
| 野々市町史編纂専門委員会 | 2003 | 『野々市町史資料編1』 右川県野々市町 |
| 布尾和史・安 英樹 | 2005 | 「纏文晩期から弥生中期の遺跡群の変遷」『第4回考古占学研究会東海例会』 |
| 安 英樹・布尾和史 | 2005 | 「手取扇状地の遺跡動態」『中部弥生時代研究会 第10回例会発表要旨』 |

第2章 経緯と経過

第1節 調査の経緯

本書に収録の粟田遺跡第10次調査・三納アラミヤ遺跡第1・2次調査・三納トヘイダゴン遺跡第1・3次調査は、野々市町粟田地内および三納地内に位置する。当該地区は、近年まで遺跡としては粟田遺跡が発見されていたにとどまり、遺跡分布の実態は不明瞭であった。これは、農地としての土地利用が主であったため開発を契機とする発掘調査などがほとんど行われなかつたことに起因する。しかし、周辺地域の都市化に伴い当該地区も市街化区域として指定され、平成11年2月に生活環境の改善と宅地化の促進を目的とした野々市町中南部土地区画整理組合が発足、土地区画整理事業の開始に伴い遺跡の確認と発掘調査が行われることとなった。

野々市町中南部土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査事業は、平成10年に事業地内の試掘調査を行ひ、平成11年度からは現地調査を行つた。

野々市町中南部土地区画整理事業に係る埋蔵文化財の有無を確認するための分布調査や保護措置の必要性については、平成9年7月30日付けの教文第783号により、石川県教育委員会事務局文化財課長から野々市町教育委員会事務局文化課長と土木部都市計画課長宛てに通知されている。これを受け、平成10年10月7日の野々市町中南部土地区画整理組合の設立準備委員会では、埋蔵文化財に関する説明を野々市町教育委員会文化課が行つた。その後、平成10年10月19日付けで野々市町産業建設部長から野々市町教育長宛てに土地区画整理事業区域内の埋蔵文化財分布調査についての依頼がなされ、平成10年10月21日付けで野々市町教育長から野々市町産業建設部長宛てに土地区画整理事業区域内の埋蔵文化財分布調査を行う旨の回答をした。これに基づき、平成10年10月22日～同年11月6日に試掘調査を行つた。

方法は、事業区域内に平面1×1mの試掘坑を225箇所設定し、地山面が確認される深度まで掘削、平面および土層断面の観察を行つた。これにより、周知の遺跡である粟田遺跡のほか、三納アラミヤ遺跡・三納ニシヨサ遺跡・三納フジタコシ遺跡(のちに三納トヘイダゴン遺跡と改名)・藤平田ナカシンギジ遺跡の4遺跡が新規で発見された。この試掘調査の結果は平成10年11月12日付けで野々市町教育委員会教育長から野々市町産業建設部長宛てに回答している。この結果に基づいて、中南部地区土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施方針は、遺跡範囲のうち、道路や貯水池等の建設工事により遺跡が損壊する部分について調査を行うものとし、加えて、都市計画道路沿いに設定される用途区域で高層建築物の建築が予想される部分についても、本発掘調査が必要な部分に含むことが平成10年11月12日付け野々市町教育委員会文化課と野々市町産業建設部都市計画課・野々市町中南部土地区画整理組合との間で協議された。平成11年5月28日には、野々市町中南部土地区画整理事業地区埋蔵文化財に関する協定書が野々市町長と野々市町中南部土地区画整理組合理事長との間でかわされた。

三納アラミヤ遺跡・三納トヘイダゴン遺跡・三納ニシヨサ遺跡・藤平田ナカシンギジ遺跡・粟田遺跡に関する文化財保護法第57条の3に基づく届出は、平成11年6月14日付け第2号により野々市町中南部土地区画整理組合理事長から文化庁官宛てに行われ、平成11年6月14日付け野教文第77号により野々市町教育委員会教育長から石川県教育委員会教育長宛てに進達した。これを受けて平成11年6月21日付け教文第637号により野々市町教育委員会教育長宛てに石川県教育委員会教育長から埋蔵文化財発掘調査の届出に関する通知がなされた。

粟田遺跡第10次調査は平成11年に2,400m²を対象として行われた。野々市町と野々市町中南部土地区画整理組合は平成11年9月20日付けで埋蔵文化財発掘調査の委託契約を取り交わしている。発掘調査承諾書は平成11年8月24日付けで野々市町中南部土地区画整理組合理事長から野々市町教育委員会教育長宛てに出され、これを受けて、埋蔵文化財保護法第98条の2に基づき、平成11年10月20日付け野教文第117号



凡例：●道幅あり、△道幅あり、◆道幅・面積あり、マークなしはどちらも希望されていない

第3図 試掘地点位置図

により野々市町教育委員会教育長から文化庁長官へ埋蔵文化財発掘調査の報告を行った。現地調査は平成11年9月27日～平成12年1月14日にかけて実施、中世・近世の集落遺跡を主体とし、縄文時代から近世までの複合遺跡であることが確認されている。なお、平成11年度の発掘調査によって遺跡の範囲が従来の認識より東側と北側に広がることが確認され、平成12年4月5日付けで栗田遺跡の範囲拡張に関する協議書を野々市町長と野々市町中南部土地地区画整理組合理事長との間で取り交わしている。

三納トヘイダゴシ遺跡第1次調査は平成12年度に3,400m²を対象として行われた。町と組合との埋蔵文化財発掘調査委託契約は平成12年5月2日に締結している。発掘調査承諾書は平成12年5月8日付けで野々市町中南部上地区画整理組合理事長から提出された。埋蔵文化財保護法第58条の2第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査報告は、平成12年5月12日付け教文第46号で野々市町教育委員会教育長から石川県教育委員会に報告した。現地調査は平成12年5月9日～同年8月3日にかけて行われ、縄文時代の遺物散布地、中近世の耕作地などが確認されている。

三納アラミヤ遺跡第1次調査は平成13年に1,150m²を対象として行った。発掘調査の依頼は平成13年4月27日付けで野々市町中南部上地区画整理組合理事長から野々市町教育委員会教育長宛てに出され、同5月1日に発掘調査委託契約を締結している。発掘調査承諾書は平成13年7月9日付けで野々市町中南部上地区画整理組合理事長から提出された。これを受け、文化財保護法第58条の2第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査報告を平成13年7月9日付け教文第222号で野々市町教育委員会教育長から石川県教育委員会に提出した。現地調査は平成13年7月9日～同年11月16日にかけて実施した。縄文時代



第4図 年次別調査区位置図

から古代の旧河川、古代の集落跡などが確認されている。

三納トヘイダゴン遺跡第3次調査は平成13年に550m²を対象として行われた。発掘調査の依頼は平成13年4月27日付で野々市町中南部上地区画整理組合理事長から野々市町教育委員会教育長宛てに出された。

発掘調査承諾書は平成13年7月9日付けで野々市町中南部上地区画整理組合理事長から提出された。文化財保護法第58条の2第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査報告は平成13年7月9日付けの教文第223号により野々市町教育委員会教育長から石川県教育委員会に提出している。現地調査は平成13年7月9日～同年11月16日にかけて実施した。古代・中世の遺構が確認されている。

三納アラミヤ遺跡第2次調査は平成14年に1,800m²を対象として行った。発掘調査の依頼は平成14年9月12日付けで野々市町中南部上地区画整理組合理事長から野々市町教育委員会教育長宛てに出され、発掘調査承諾書は平成14年9月12日付で野々市町中南部上地区画整理組合理事長から提出されている。これを受けて、文化財保護法第58条の2第1項に基づく届け出が平成14年9月18日付けの教文第163号で野々市町教育委員会教育長から石川県教育委員会宛てに提出、同年9月20日には野々市町と野々市町中南部上地区画整理組合との間で埋蔵文化財発掘調査の委託契約が締結されている。

現地調査は平成14年9月20日～同年12月26日にかけて実施した。平成12年度に引き続き、縄文時代から古代の旧河川、古代の集落が確認されている。

第2節 調査の経過

(1) 試掘調査 現地調査の経過は、以下の通りである。

- 10月22日 調査着手。粟田地区から試掘開始。打製石斧と須恵器・土師器が多量に出土する。
- 10月23日 粟田地区を試掘。近世陶磁器が多数出土。
- 10月28日 粟田～三納地区を試掘。ピット・土坑が検出され、中世上師器など出土。
- 11月5日 藤平田地区を試掘。ピット検出。11月6日 調査終了。

(2) 発掘調査 現地調査の経過は、以下の通りである。

a) 平成11年度

粟田遺跡(第10次調査)

- 9月27日 南調査区から重機による表土除去開始。
- 10月4日 作業員による調査開始。
- 10月8日 表土除去完了。
- 10月12日 積穴建物群掘削開始。
- 10月18日 積穴建物群掘削終了。
- 10月21日 溝AW1025掘り下げ開始。



試掘調査の様子

- 10月26日 溝AW0025の東側遺構の掘り下げ。
 11月25日 北調査区遺構検出。
 11月30日 北調査区土坑掘り下げ。
 12月 5日 土地区画整理組合に対して現地説明会を実施。
 12月14日 航測。
 12月27日 現場事務所撤去。
 1月14日 埋め戻し。

b) 平成12年度

三納トヘイダゴシ遺跡(第1次)

- 5月 9～15日 表土除去(一回目)。
 5月18日 作業員による調査開始。
 5月19日 旧河川ST(1)1上層断面写真撮影。
 5月22日 旧河川ST(1)1完掘。
 5月26日 倒木跡から打製石斧出土。
 6月 5日 上偶出土。
 6月12～14日 表土除去(二回目)。
 6月15・16日 遺構検出。
 6月19日 耕作地ST(1)12掘り下げ。
 6月29日 耕作地ST(1)8下層遺構掘り下げ。
 7月 6日 航測(一回目)。



AW00豎穴群の調査

- 7月10・11日 布水中学校生4名、職場体験。
 7月14日 調査区北端遺構検出状況写真撮影。
 7月21日 流路ST(1)30掘り下げ。
 7月22日 溝ST(1)33掘り下げ。
 7月27日 航測(二回目)。
 8月 3日 現場事務所撤収。

平成13年度

三納アラミヤ遺跡(第1次)

- 7月12～17日 表土除去。
 7月23日 現場事務所建て上げ。
 7月25日 作業員による調査開始。
 7月30日 W14～16グリッド遺構検出状況写真撮影。
 8月 2日 豊穴建物SA(1)9・120・121検出。
 8月 6日 名古屋大学考古学研究室の学部学生が発掘調査参加(～8月31日まで)。
 8月 7日 土坑SA(1)4掘り下げ。
 8月10日 ピット掘り下げ開始。
 8月22日 豊穴建物SA(1)9掘り下げ開始。
 床面と思われる硬化面を確認。
 8月24日 豊穴建物SA(1)120を掘り下げ。



布水中学校職場体験



旧河川SA(1)131掘削の様子



取水遺構SA(1)226の調査

遺物出土状況図作成。

8月28日 堪穴建物SA(1)121掘り下げ。

焼土検出。

9月4日 旧河川SA(1)131掘り下げ開始。

9月10日 台風接近。このころ雨天多い。

9月18日 堪穴建物SA(1)121遺物取り上げ。

床面精査。

9月27日 遺物集中区SA(1)224遺物取り上げ。

9月28日 取水施設SA(1)226検出。

10月3日 堪穴建物SA(1)120カマド部分完掘。

10月4日 取水施設SA(1)226完掘写真。

10月9日 堪穴建物SA(1)9 遺物出土状況図作成。

10月12日 W2～4 グリッド遺構検出。

10月16日 水田跡SA(1)250掘り下げ。

10月19日 堪穴建物SA(1)120平面図作成。

10月24日 堺穴建物SA(1)9 土層断面図作成。

10月27日 堺穴建物SA(1)9 平面図作成。

11月9日 航測。

11月12～15日 補足図面作成。

11月14日 現場事務所撤収。

三納トヘイダゴン遺跡(第3次)

7月18・19日 表土除去。

10月19日 遺構検出開始。

10月23日 遺構検出状況写真撮影。

10月24日 旧河川ST(3)1掘り下げ開始。

10月29日 旧河川ST(3)1 土層断面図作成。

10月30日 完掘写真撮影。

11月9日 航測。

11月14日 現場事務所撤収。

平成14年度

三納アラミヤ遺跡(第2次)

10月1日 現地確認。

10月3日 調査区設定。

10月4～8・16・17日 表土除去。

10月21日 グリッド設定。

10月22日 作業員による調査開始。

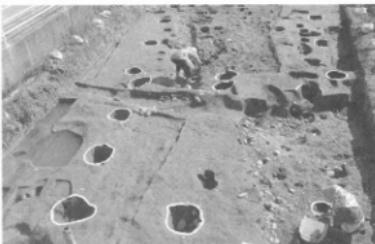
10月23日 遺構検出状況写真撮影。

10月24日 旧河川SA(2)2 挖削開始。

10月30日 旧河川SA(2)2 挖削終了。

10月31日 旧河川SA(2)2 土層断面図作成。

11月7日 旧河川SA(2)1 北側から掘削開始。



掘立柱建物SA(1)①～③の調査



ST(3)遺構検出の様子



利水遺構SA(2)205掘削の様子



旧河川SA(2)1掘削の様子

- 11月12日 利水造構SA(2)120・205掘削開始。
 11月21日 旧河川SA(2)1 打製石斧出土。
 11月22日 利水造構SA(2)205遺物取り上げ。
 11月29日 旧河川SA(2)1 のW16～21グリッド完掘写真撮影。
 12月2日 旧河川SA(2)1 のW24～26グリッド掘削開始。
 12月11日 雪が降り積もる。
 除雪を試みるも涙の一時撤退。
 12月16・17日 SA(2)1 のW24～26グリッド完掘写真撮影。
 12月18日 航測。
 12月24日 現場事務所撤収。



12月11日 雪

(3) 整理作業・報告書作成

整理作業は、平成13年度から平成17年度にわたって行った。

平成13年度は栗田遺跡(第10次)・三納トヘイダゴシ遺跡(第1次)・三納アラミヤ遺跡(第1次)出土遺物の洗浄と三納アラミヤ遺跡(第1次)出土遺物の記名・実測、現地調査写真を画像データ化する作業を行った。

平成14年度は三納トヘイダゴシ遺跡(第1次)出土遺物の記名と現地調査写真の画像データ化、栗田遺跡(第10次)出土遺物の実測を行った。

平成15年度は、三納トヘイダゴシ遺跡(第3次)と三納アラミヤ遺跡(第2次)出土遺物の洗浄・記名、三納トヘイダゴシ遺跡(第1・3次)と三納アラミヤ遺跡(第2次)出土遺物の実測を行った。

平成16年度は、現場図面・写真的整理と、発掘調査報告書作成のための図版作成・本文執筆・遺物写真撮影を行った。

平成17年度は、発掘調査報告書作成のための図版作成・本文執筆・遺物写真撮影を行った。



調査参加者

(4) 調査体制

a) 平成10年度 試掘調査

調査主体 野々市町教育委員会(教育長 田村昌俊)

担当課 野々市町教育委員会 文化課(課長 西本正明)

調査担当 横山貴広(野々市町教育委員会文化課 主査)

 布尾和史(野々市町教育委員会文化課 主事 県教育委員会文化財課より派遣)

 永野勝章(野々市町教育委員会文化課 主事)

調査期間 平成10年10月22日～同年11月6日

対象面積 45.6ヘクタール

b) 平成11年度 発掘調査 栗田遺跡(第10次)

調査主体 野々市町教育委員会(教育長 田村昌俊)

担当課 野々市町教育委員会 文化課(課長 高木 実)

調査期間 平成11年9月27日～平成12年1月14日

対象面積 2,400m²

調査担当 布尾和史・永野勝章

c) 平成12年度 発掘調査 三納トヘイダゴシ遺跡(第1次)

調査主体 野々市町教育委員会(教育長 田村昌俊)

担当課 野々市町教育委員会 文化課(課長 高本 実)

調査期間 平成12年5月9日～同年8月3日

対象面積 3,400m²

調査担当 布尾和史

d) 平成13年度 発掘調査 三納アラミヤ遺跡(第1次)、三納トヘイダゴシ遺跡(第3次)

調査主体 野々市町教育委員会(教育長 田村昌俊)

担当課 野々市町教育委員会 文化課(課長 高本 実)

調査期間 平成13年7月9日～同年11月16日

対象面積 1,150m²、550m²

調査担当: 布尾和史

e) 平成14年度 発掘調査 三納アラミヤ遺跡(第2次)

調査主体 野々市町教育委員会(教育長 田村昌俊)

担当課 野々市町教育委員会 文化課(課長 高本 実)

調査期間 平成14年9月20日～同年12月26日

対象面積 1,800m²

調査担当 布尾和史

f) 平成13～17年度 整理・報告書作成作業

担当課 野々市町教育委員会 文化課(平成16年12月まで)

(課長 高本 実: 平成15年3月31日まで)

(課長 中川保夫: 平成15年4月1日から)

野々市町教育委員会 文化振興課(平成17年1月から) (課長 中川保夫)

担当 布尾和史(平成15年3月31日まで)

永野勝章

竹田倫子・野村祥子・増山明美・小松真紀(野々市町教育委員会 臨時職員)

布尾幸恵(平成16年4月1日から) 野々市町教育委員会 臨時職員)



整理作業



報告書作成作業

第3章 調査と報告の方針

(1) 遺構

個々の遺構の名称は、各遺構番号の前に遺跡と調査年次を示すアルファベット、栗田遺跡(第10次)：AW00、三納アラミヤ遺跡(第1次)：SA(1)、(第2次)：SA(2)、三納トヘイダゴシ遺跡(第1次)：ST(1)、(第3次)：ST(3)を付し、時代・種類・グリッドに関係なく遺跡・調査年度ごとに1から通じて調査番号を付けることを基本とした。このため、同一の遺構であっても2つ以上の調査区にまたがって検出された場合は新たな番号を付している。

グリッドは公共座標に基づく10×10mの区画を設定し、北西隅の杭番号でその区画を呼称してこれを大グリッドとした。この際、各グリッド内を5×5mの区画で4つに分け、北西隅から時計回りにa・b・c・dという小グリッドを設定、遺物の取り上げ等に便宜を図った。番号を付していない遺構は、基本的に遺物が確認されなかつたもので、現地調査の段階で土層を確認したのみに留めた。その後、報告が必要と判断された場合は新たに番号を付けている。

個々の遺構の説明には本文・図面図版・写真図版を用いる。遺構の種類にはピット・建物跡・溝・土坑・旧河川・流路などがあり、これらについて位置・分類・規模・形状・覆土の堆積状況・出土遺物・重複とその前後関係などを記述した。

建物については、複数のピット(柱穴)で有意に囲まれた部分を掘立柱建物とした。掘立柱建物のうち、総柱建物とは梁行が2間以上あり柱穴が皆盤の凹状に並ぶものを差し、側柱建物とは梁行・桁行ともに2間以上あるが外側の柱穴のみで内側が存在しないものを差す。梁・桁については、便宜上、長軸を横・短軸を縦とする。なお、遺跡内は竪穴建物が確認されているが、この遺構については、床面に柱穴を伴うものを「竪穴建物」、床面に柱穴が確認されないものを「竪穴状遺構」とする。なお、他の報告書を参照した場合は、その報告書の記載に従った。

(2) 遺物

遺物の総数は、パンケースで、栗田遺跡(第10次) 16箱、三納アラミヤ遺跡(第1次) 13箱、三納アラミヤ遺跡(第2次) 8箱、三納トヘイダゴシ遺跡(第1次) 3箱、三納トヘイダゴシ遺跡(第3次) 1箱である。この中から遺構出土のものを中心に、残りの良いものや出土例の少ないものを選択して図化した。

遺物図版作成にあたっては個々の遺物を時代・器種・種別(または法量)毎にレイアウトしており、遺構出土の遺物については各遺構図版にも1/6で添付した。遺物図版の縮尺は原則1/3とし、小型の石器は2/3、大型の石製品は1/6、錢貨は1/1で掲載した。

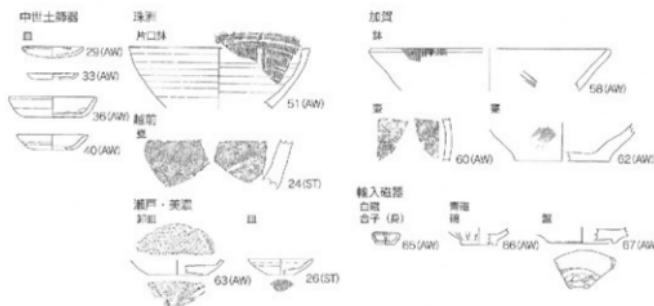
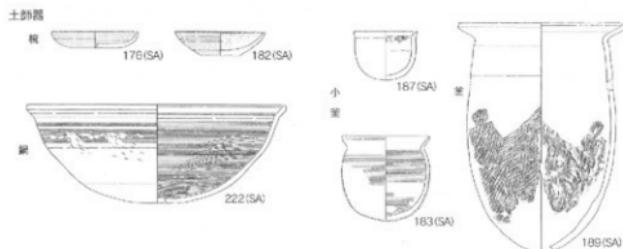
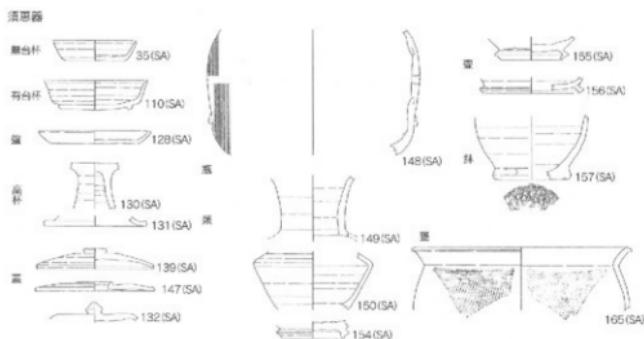
遺物の記述は、本文・観察表・図面図版・写真図版でおこなった。遺物の報告番号は遺跡単位に1から付与し、本文・観察表・図面図版・写真図版で共通する。

観察表は遺物の種類によって観察項目は異なるが、煩雑を避けるため表は統一の形式を取り、そのつど、外面色調：外、内面色調：内、釉色もしくは釉の種類：釉、胎土：胎、と付して区別した。色調は農林水産省農林水産技術会議事務局・財團法人 日本色彩研究所監修[新版 標準土色帖]に従った。胎土混和物のうち、「シャ」と表記されているものは、「シャモット」である。

绳文土器の型式名は『野々市町史 資料編』[吉田2003]で使用しているものを用いた。

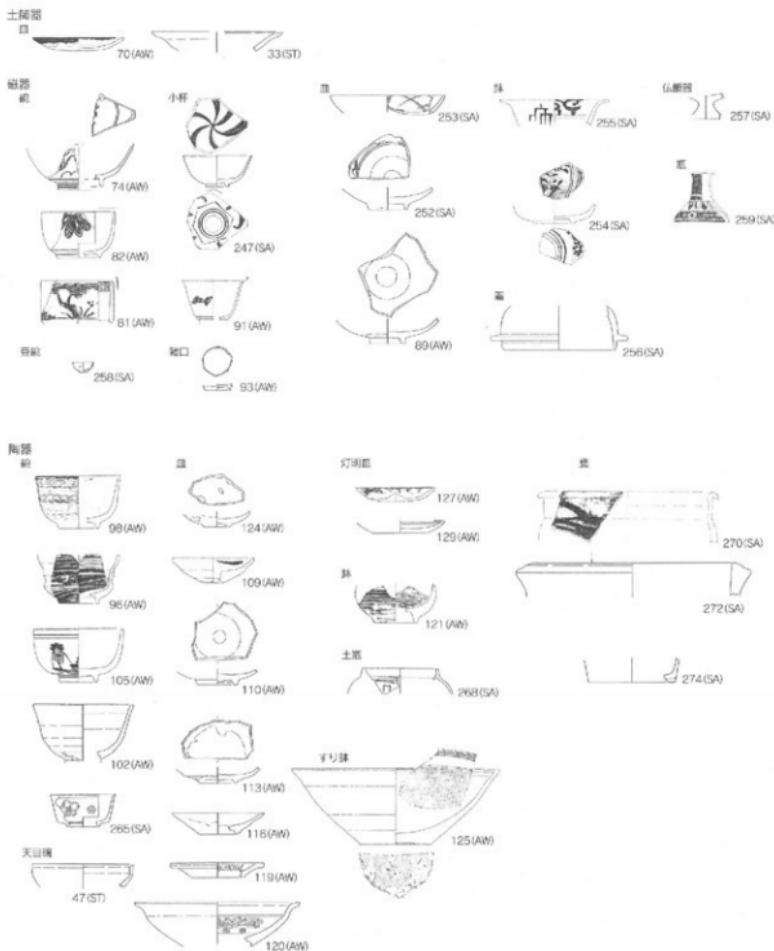
古代における土器の器種名は、須恵器・土師器とともに、基本的には北陸古代土器研究会で使用するものに準じている。なお、煮炊具に関しては従来使用されてきた「甕」は使用せず、煮炊き機能のイメージから「釜」を使用し、小型を小釜、大型の長胴を釜、浅身広口のものを鍋とした[小松市教委2002]。土器編年・年代観は田嶋明人氏の1988年と1997年発表の文献をもとにしている[田嶋1988、1997]。

中世の土器・陶磁器は、名称・時期とともに上師器が藤田邦雄[藤田1997]、珠洲焼が吉岡康暢[吉岡1994]、



(No.は博物番号、()内は出土した遺跡)

第5図 器種分類図(1) 古代・中世 (1/6)



(No.は地質番号、()内は出土した遺跡)

第6図 器種分類図(2) 近世以降 (1/6)

加賀焼が宮下幸夫[宮下1997]、瀬戸美濃が藤澤良祐[藤澤1991、2001]、輸入白磁は横田健次郎・森田勉[横田・森田1978]、青磁は上田秀大[上田1982]、青花は小野正敏[小野1982]に準じた。

近世の土器・陶磁器は、名称・時期とともに土師器皿類は増山 仁[増山1997]、肥前陶磁器類は[九州近世陶磁学会2000、2001]、筑前陶磁器類は[大橋1992]、越中瀬戸焼は[宮出1997]に準じた。

参考文献

- 石川県立埋蔵文化財センター 1994 「正友ヤチヤマ窯跡」
- 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会 1988 「シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題」
- 上田秀夫 1982 「14~16世紀の吉備碗の分類について」『貿易陶磁研究』2 日本貿易陶磁研究会
- 大橋康二 1992 「福岡の陶磁」「福岡の陶磁展」 佐賀県九州陶磁文化館
- 小野正敏 1982 「15~16世紀の染付瓶、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』2 日本貿易陶磁研究会
- 柿田祐司 1997 「加賀における9世紀代の土器様相」「北陸古代土器研究」6 北陸古代土器研究会
- 北野博司 1999 「須恵器貯蔵具の器種分類案」「北陸古代土器研究」8 北陸古代土器研究会
- 九州近世陶磁学会 2000 「九州陶磁の編年」
- 九州近世陶磁学会 2001 「国内出土の肥前陶磁」
- 小松市教育委員会 1999 「林タカヤマ窯跡」
- 小松市教育委員会 2002 「二ツ葉一貫山窯跡」
- 小松市教育委員会 2004 「八重向山遺跡群」
- 田崎明人 1988 「古代土器編年軸の設定」「シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題(報告編)」
- 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
- 田崎明人 1997 「加賀地域での10・11世紀土器編年と層年代」
「北陸の10・11世紀代の土器様相」北陸古代土器研究会シンポジウム資料
- 辰口町教育委員会 2005 「和気後谷窯跡群」
- 野々市町史編纂専門委員会 2003 「野々市町史 資料編1」 野々市町
- 藤澤良祐 1991 「瀬戸古窯跡群II-古瀬戸後期様式の編年」「瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要X」
- 瀬戸市歴史民俗資料館
- 藤澤良祐 1993 「瀬戸市史陶磁史綱四」 濑戸市史編纂委員会
- 藤澤良祐 2001 「瀬戸・美濃大窯製品の生産と流通」「戦国・誠豈期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品」
- 藤田邦雄 1997 「第2節 中世加賀國の土器様相」「中・近世の北陸」北陸中世土器研究会 桂書房
- 増山 仁 1997 「第3節 安江町遺跡出土の上峰器皿」「安江町遺跡」金沢市文化財紀要130
金沢市・金沢市教育委員会
- 宮下幸夫・田嶋正和・藤田邦雄・垣内光次郎 1990 「中世加賀の窯業研究」『石川考古学研究会誌』第38号
石川考古学研究会
- 宮下幸夫 1997 「在地窯「加賀窯」「中・近世の北陸」北陸中世土器研究会 桂書房
- 宮田進一 1997 「越中瀬戸の変遷と分布」「中・近世の北陸」北陸中世土器研究会 桂書房
- 横田健次郎・森田 勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心にして—」
『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館
- 吉岡康鶴 1994 「中世須恵器の研究」吉岡弘文館
- 吉田 淳 2003 「第2部(3) 出土遺物」「野々市町史」資料編1 右川東野々市町

第4章 粟田遺跡(第10次調査)

第1節 遺跡の概要(第8回)

粟田遺跡第10次調査区は古代・中世・近世を主体とし、他に縄文時代の遺物が僅かながら出土している。調査区のはば全域で遺構が検出されたが、その種類は調査区内で若干異なり、調査区北側は遺構密度が小さく土坑が中心、南側では建物・溝が多く検出された。以下時代ごとにその概要を述べる。

縄文時代はピット、土坑が検出された。遺構・遺物とともに少ないものの、打製石斧の出土がやや目立つ。

古代はピット、溝、土坑が検出された。主体となる時期は田嶋編年IV 2～V 1期で、釜などの土師器・煮炊具は少なく、須恵器杯類が多くを占める。墨書き器は確認されていない。

中世は堅穴建物、ピット、土坑が検出された。堅穴建物は調査区の東南隅に集中して検出され、特徴的な遺構分布を示している。主体となる時期は出土した中世土師器から藤田編年のII～III期：13～14世紀であるが、15世紀の遺物も僅かながら出土した。遺物は、中世土師器・珠洲片口鉢が多くを占める。供膳具の皿は中世土師器で占められ、碗は青磁が多い。日常用器としては櫛型は鉢類が多く、壺・甕類はわずかである。珠洲が70%近くを占め、加賀は少ない。瀬戸美濃は2点出土したに留まる。同時期の加賀の遺跡に比較して壺・甕類が少ないものの、産地では珠洲のものが多く、他と類似した様相を呈している。

近世はピット、土坑、溝が検出された。主体となる時期は17世紀後半～18世紀前半であるが、その後の遺物も散見される。この時期は、幅の広い溝が矩形に展開することが特徴として挙げられる。遺物は、碗・皿・鉢については肥前陶器より肥前磁器が僅かながら多く出土し、越中瀬戸がそれに次ぐ。この様相は、17世紀後半～18世紀前半の加賀地方の農村部の遺跡である八田中中村遺跡と同様である。

近代以降は居住区ではなく水田となったことが、調査区壁土層で確認されている。

第2節 遺構

(1)縄文時代の遺構(第11・12回)

縄文土器や石器が遺構に伴うものを縄文時代の遺構として報告する。

a) 土坑

AW0078 (第12回)

E11cグリッドに位置する。平面形は略方形で、径167×96cm、深度40cmである。覆土は黒褐色粘質土である。出土遺物は打製石斧(8)である。

b) ピット

ピットは調査区全体に点在しているが、覆土や形状から所属する時期を特定するのは困難で、建物等を復元するには至っていない。

AW0020 (第12回)

C16dグリッドに位置し、平面形は略円形で径50×50cm、深度9cmである。覆土は暗褐色土で、出土遺物は縄文土器(1)が1点である。

AW0026 (第12回)

C15dグリッドに位置し、平面形は楕円形で径70×41cm、深度51cmである。覆土は微量の砂が入る暗灰色土で、出土遺物は打製石斧(7)である。

(2)古代の遺構(第11~13図)

a) ピット

古代に属するピットは南調査区南側に散在する。覆土は褐色土と暗褐色土のものがある。ここでは建物や塀列を構成しないものをまとめた。遺物が出土しないピットは、覆土や分布状況から古代と考えた。

AW0027 (第12図)

C15bグリッドに位置する、平面形が梢円形を呈するピットで、径90×38cm、深度8cm。遺物はない。

AW0048 (第12図、図版2)

C16dグリッドに位置し、平面形が略円形を呈する。径33×28cm、深度21cmを測る。覆土は褐色土を主とする。遺物はない。

AW0049 (第12図、図版2)

C16bグリッドに位置し、平面形が不整形を呈する。径156×124cm、深度35cmを測る。覆土は褐色土を主とする。遺物はない。

AW0050 (第12図、図版2)

C16dグリッドに位置し、平面形が梢円形を呈する。径44×40cm、深度24cmを測る。覆土は褐色土を主とする。遺物はない。

AW0051 (第12図、図版2)

D16aグリッドに位置し、平面形が梢円形を呈する。径116×95cm、深度31cmを測る。覆土は褐色土を主とする。遺物はない。

AW00100 (第12図、図版2)

D13dグリッドに位置し、平面形は梢円形を呈する。径50×44cm、深度27cmで覆土は暗褐色土である。須恵器無台杯⁰⁰が出土した。

b)溝

AW0022 (第11図)

AW0022は全長25mのC16グリッドからE15グリッドに向かってのびる溝である。軸はE-15°-Nで、幅40~100cm、深度9~37cmを測る。覆土は黒色土をベースに、地山上ブロックが若干混入する。遺物はない。

c)その他の遺構

平行溝群

AW00130ほか(第11・13図)

ここでは、一定の間隔・軸を有して展開する小溝状遺構が集中している箇所を平行溝群として取り上げる。この溝群に遺物は無いが、覆土の観察から古代として報告する。これらの溝の共通項として、①ほぼ同一な軸・方向・間隔を有する、②ほぼ直線を呈する、③遺構の深度が浅いことが挙げられる。なお、第10次調査区では一部が確認されただけであり、その多くは第11次調査区で検出された。

平行溝群は、B11グリッド付近(平行溝群A)とB・C17グリッド付近(平行溝群B)に確認された。検出範囲が狭いために明らかではないが、どちらも若干傾きが異なる。深度はいずれも浅い。

(3)中世の遺構(第14~23図)

a) 壁穴建物・壁穴状遺構

AW002 (第15図、図版1・2)

C17d・D17cグリッドに位置する、平面形が梢円方形の壁穴建物である。当初、遺構の半分が調査区外であったため、抵張して検出した。径280×200cm、深度9~10cmである。床面はやや平坦で、壁の立ち上がりは緩い。壁穴に伴うピットが2基(P1・P2)確認できた。他に、壁穴建物のプラン外側に6基

のピットか確認されている。北東には幅60cmほどの溝が検出されているが、本竪穴建物に伴うものか否かは判然としない。遺構覆土は黒褐色土を主体とし、東側に地山ブロックが多く混入する。須恵器瓶(24)が竪穴建物の底面近くから出土しており、古代の可能性もあるが、周辺に中世の堅穴建物・堅穴状遺構が集中していることもあり、中世の遺構と判断した。他には鉄製品(147)が出土している。

AW003 (第16・19図、図版1~3)

D17aグリッドに位置する。略方形を呈する竪穴建物AW003aと南北にやや長い竪穴建物AW003bの2基が重複している。共に確認面からの深さは浅く、遺構の立ち上がりは明瞭でない。3aは径290×270cm、深度5~20cmである。床面はほぼ平坦でよくしまっており、硬化していた。なお、遺構内南側に土坑状の落込みが検出され、黒色土と灰黄褐色土が覆土として確認された。ピットが多数検出されており、いずれも黒褐色土上の覆土を持つ。3bは径360×240cm、深度3cmである。中世土師器皿(42)・釘(146)が出土している。

AW004 (第17図、図版1~3)

D17bグリッドに位置する堅穴建物である。遺構検出時に確認されたものの、覆土は深いところで5cm程度しか検出できず、遺構の形状を明確にすることはできなかった。検出面において地山である礫層がほぼ露呈しているような状況であったことから、床面が遺構の確認面より高い可能性があり、その場合にはある程度土を埋めて床面を作っていたものと考えられる。また、AW004はAW005と切り合っているが、土層の観察からはAW004がAW005より古いことが確認されている。平面形は略方形で径約350×300cm、深度2~5cm程度を測る。遺構内にはピットが散見される。覆土は褐色土である。遺物はない。

AW005 (第17図、図版1~3~4)

D16dグリッドに位置し、平面形が隅丸方形を呈する堅穴状遺構である。AW005はAW004と重複しており、上層の観察からはAW005がAW004より新しいことが判明した。調査区内で最も平面形の整った堅穴状遺構で、径390×330cm、深度約30cmである。壁の立ち上がりは明瞭で、地山である礫層を掘り込んで作られる。底面は平坦であり、北側には出入り口状の2段のテラスが付属する。ピットは見られなかった。覆土は褐灰色土を主とする。遺物は覆土から須恵器有台杯(19)が出土しているが、混入である。この他、碎片であるが中世土師器が出土した。

AW006 (第18~19図、図版1~3~4)

D16c~dグリッドに位置し、平面形が隅丸方形を呈する。調査区内で最も大きな堅穴建物で、径390×360cm、深度20~64cmを測る。壁の立ち上がりは明瞭で、底面は平坦である。底面にピットは確認されなかつた。堅穴の周囲にはテラス状の段が形成される部分や、土坑、ピットが掘り込まれている。土層断面で見ると堅穴とほぼ同時に埋まっている部分がほとんどで、それらは堅穴に伴う可能性が高い。

遺構検出面では、覆土中に礫が多量に確認された。周辺の地山か礫層であることから、他の堅穴建物・堅穴状遺構などを掘削した際の礫が、廃絶後埋没中の本遺構に投棄された可能性がある。覆土は褐灰色土で、レンズ状に堆積していた。東側には炭化物・灰層も確認されている。遺物は多く、混入とみられる須恵器有台杯(17)・杯蓋(21)・甕(25・27)の他、中世土師器皿(33・37・39・40)、珠片片口鉢(46・47・50・51・53・54・55)、加賀甕(61・62)、鉄製品(143・148)、炉石(136・137)が出土している。遺物の出土レベルを見ると、多くが覆土2a・b層からの出土で、21・51が床面から出土している。

AW007 (第20図、図版4)

D16a・bグリッドに位置し、近世の溝AW0024に切られる。平面形が隅丸方形を呈する堅穴建物で、径320×290cm、深度2~3cmを測る。遺構は浅く、覆土はほとんど残っていないかった。底面からはピットと土坑が検出された。遺物は出土していないが、周辺の状況と覆土から中世と判断するものである。

AW008 (第21図、図版1~4)

E16aグリッドに位置する平面形が不整形の堅穴状遺構で、径350×290cm、深度33~42cmを測る。礫層

の地山を掘り込んでおり、覆土は褐灰色土である。碎片のため図示し得ないが、中世土師器と須恵器が出土している。

b) 土坑

土坑は、竪穴建物の分布する付近と南調査区東側の2か所の分布域が見られる。竪穴建物付近にはAW(0)9・10・18・43・97・134、南調査区東側にはAW(0)60・74・82・98・110が検出された。

AW(0)9 (第21図、図版4)

D15cグリッドに位置する平面形が不整形の土坑。近世のピットと重複している。径250×230cm、深度53cmを測る。覆土は褐灰色土を主とする。中世土師器皿(34・38)と珠洲片口鉢(44)のほか、越前型の碎片が出土している。

AW(0)10 (第21図、図版4)

D15dグリッドに位置する平面形が略方形の土坑で、南辺が古代の溝AW(0)22を切る。径190×160cm、深度25cmを測る。覆土は黄褐色土を主とする。中世土師器の破片が出土した。

AW(0)18 (第22図、図版4)

C17aグリッドに位置する。平面形は不整円形で、径180×148cm、深度4cmを測る。覆土は微量の砂を含む褐灰色土で、中世土師器皿(35)が出土している。

AW(0)43 (第22図、図版5)

D15bグリッドに位置する。平面形は略円形で、径98×90cm、深度28cmを測る。礫屑を掘り込んで構築され、覆土は黒褐色土を中心とする。加賀鉢(58)が出土した。

AW(0)60 (第22図、図版5)

E12dグリッドに位置する。東側が攪乱で削平され、本来の形状・規模は不明。遺存径112×100cm、深度30cmを測る。覆土は黒褐色土を主とする。中世土師器皿(29)が出土した。

AW(0)74 (第23図、図版5)

D13cグリッドに位置する。西側を近世の溝AW(0)25によって削平され、本来の形状・規模は分からない。遺存径245×176cm、深度24cmを測る。覆土は褐灰色土を主とする。珠洲片口鉢(52)、加賀鉢(56)が出土した。

AW(0)82 (第23図)

E12bグリッドに位置し、平面形が不整形を呈する。径140×80cm、深度46cm、覆土は黒褐色粘質土である。遺物はない。

AW(0)97 (第23図)

D16aグリッドに位置する、平面形が不整形の土坑である。径295×194cm、深度2~36cm。遺構の立ち上がりは明確でない。遺物はない。

AW(0)98 (第24図)

E15aグリッドに位置する。南辺を近世の溝AW(0)25、北辺を近世の土坑AW(0)28と重複しており、本来の形状・規模は不明。調査区東壁の観察(第30図)では遺構の壁の立ち上がりが見られず、あるいはAW(0)25に伴う落ち込みと考えられる。珠洲片口鉢(45・49)が出土している。

AW(0)110 (第24図)

E10cグリッドに位置する。調査区壁の観察からこの遺構の南側が農道下に伸びていることが確認された。確認できた径は324×230cm、深度11~15cmである。覆土は黒褐色土を主とする。須恵器無台杯(11)と中世土師器皿(31)が出土した。

AW(0)134 (第23図、図版5)

C15cグリッドに位置する、略円形の土坑である。径112×80cm、深度10cmを測り、覆土は黒褐色土を主とする。瀬戸美濃鉢(63)が出土した。

c) ピット

中世のピットは、南調査区東側に散見される。いずれも建物として認識するには至らなかった。覆土はいずれも黒褐色土を主とする。

AW1046 (第24図)

D16bグリッドに位置し、平面形が不整円形を呈する。径48×40cm、深度8cmを測る。砥石(135)が出土した。

AW1080 (第24図)

E12cグリッドに位置する、平面形が略円形のピット。径50×38cm、深度9cmを測る。輸入青磁碗(66)が出土している。

AW1083 (第24図)

E12bグリッドに位置する、平面形が橢円形のピット。径46×28cm、深度16cmを測る。碎片のため図示し得ないが、中世土師器が出上した。

AW1099 (第24図)

E15aグリッドに位置する、平面形が楕円形のピット。径54×38cm、深度28cmを測る。碎片のため図示し得ないが、油煙痕のある中世土師器が出上した。

d) 溝

AW1065・66 (第22図)

AW1024などによって途切れるが、本来同一の溝であった可能性がある。南西～北東にかけてやや屈曲しながら伸びる溝で、D17bグリッドからD16bグリッドにかけて検出されたが、遺構の立ち上がりが明瞭でない部分も多い。AW1065は幅55～68cm、深度6～10cmを測る。混人品として須恵器杯(20)・杯蓋(23)が出土した。AW1066は、幅42～100cm、深度6～12cmを測る。遺物はない。共に中世の遺物は出土していないが、中世の竪穴建物・竪穴状遺構群の間を抜けており、軸も概ねそろうので中世の遺構と理解した。

e) その他の遺構

埋納遺構

AW1042 (第22図、図版5)

D15cグリッドに位置する、平面形が略円形の土坑である。径64×60cm、深度27cmで覆土は褐灰色土を主とする。覆土の上面～中層にかけて中世土師器が多数出土した。そのうち、図示できるものが30・32・41である。

(4) 近世の遺構 (第14・23～31図)

a) 土坑

近世の土坑は、AW1025の東側と北調査区東側に分布が見られる。

AW1028 (第25図、図版5)

E14cグリッドに位置し、平面形が略方形を呈する。疊層の地山に掘り込まれた土坑で径165×130cm、深度35cmを測り、覆土は暗灰褐色を呈する。遺物はなく、覆土の観察とAW1025との位置関係から近世の所産と判断した。

AW1029 (第25図、図版6)

E14cグリッドに位置する。AW1098と重複しており、本来の形状・規模は不明。遺存する径179×40cm、深度34cmを測る。覆土は疊が多く詰まり、ブロック状に入る土も見られることから、埋め戻しと思われる。肥前磁器小杯(92)と越中瀬戸皿(117・118)が出土している。

AW1052 (第25図、図版6)

D14cグリッドに位置し、平面形は不整円形を呈する。径144×125cm、深度35cmを測り、覆土は褐灰色土を主とし、上層は粘質を帯びるが下層は砂質である。遺物はなく、土層の観察から近世と判断した。

AW1056 (第26図、図版6)

D13bグリッドに位置し、平面形は隅丸方形を呈する。礫層内に掘り込まれた土坑で径214×176cm、深度43cmを測り、覆土は褐灰色粘質土である。遺物は多く、土師器皿(71)、肥前磁器碗(74・87)・皿(89)、肥前陶器碗(95・101)・皿(110)、肥前掘鉢(122)のほか、中国青磁盤(67)が出土した。

AW1057 (第26図)

D13aグリッドに位置し、平面形は隅丸方形を呈する。径250×165cm、深度58cmを測り、覆土は青灰色粘質土が水平に堆積しており、水成堆積であろう。遺物はない。

AW1058 (第25図、図版6)

D13dグリッドに位置し、平面形は梢円形を呈する。径192×115cm、深度35cmを測る。土師器皿(72)、肥前磁器小杯(91)が出土している。倒木跡の可能性が考えられる。

AW1062 (第25図、図版6)

E13cグリッドに位置し、平面形が不整円形を呈する。東側が擾乱と重複しており、本来の形状は不明であるが、遺存径236×210cm、深度62cmを測る。覆土は、下層に粘質土が溜まる。下層が埋没したのちしばらく開口していたものか、上層には疊が多數混入していた。肥前磁器碗(75)が出土した。

AW1063 (第26図)

E13cグリッドに位置する、平面形が不整形を呈する土坑である。径360×250cm、深度20cmを測る。瀬戸美濃陶器皿(64)が出土した。

AW1072 (第27図、図版7)

E14cグリッドに位置する、平面形が略円形の土坑である。径130×118cm、深度90cmを測り、覆土は、上層は褐灰色粘質土で、底面近くにぶい黄褐色粘質土が見られた。肥前陶器と近世土師器皿が出土しているが、碎片のため実測しえなかった。

AW1095 (第27図)

D16cグリッドに位置し、平面形が不整形を呈する。径156×85cm、深度36cmを測る。肥前陶器碗(104)、瀬戸美濃皿(119)が出土した。

AW10122 (第27図、図版6)

D9b～E9bグリッドに位置し、全長478cmを測る土坑である。東側の梢円形部分と西側の略円形部分から成り、3基の上坑が連続したものであろう。東側は径315×206cm、深度65cmを測り、この場所から桶についていたものと思われる竹の籠が出土した。籠の径は約120cmで1段のみ遺存していた。西側の土坑は径185×163cm、深度47cmを測る。覆土は褐灰色粘質土を主とする。肥前磁器碗(76・79)、肥前陶器皿(112)、下駄(139・140)が出土した。桶が設置されていたことから、肥溜と思われる。

AW10127 (第28図)

B7b～dグリッドに位置し、全長456cmを測る土坑である。東側の不整形部分と西側の略方形部分から成り、東側は径371×200cm、深度30cmを測り、覆土は灰褐色粘質土を主とする。西側は径190×185cm、深度69cmを測る。肥前陶器碗(96)が出土した。

b) ピット

近世の遺物が出土したピットについて述べる。

AW1044 (第28図)

D15dグリッドに位置し、平面形が略円形を呈する。径48×44cm、深度25cmを測る。土師器皿(69)が出土した。

AW1045 (第28図)

D16bグリッドに位置し、平面形が不整形を呈する。径104×60cm、深度31cmを測る。図示し得ないが、漆被膜が確認された。覆土から近世と判断した。

c)溝

AW0024 (第29~31図、図版7)

C14~16・D~E16グリッドに位置する。C14グリッドでAW0025より分岐して調査区外に伸び、C15グリッドで再び検出される。ここからE16グリッドまで直線に伸びて調査区外に出る。幅40~100cm、深度約35cmを測る。覆土は褐灰色土を主とし、上層がより粘質が強い。疊は混入していない。肥前磁器碗(78・83)、肥前陶器碗(103・106)が出土している。

AW0025 (第29~31図、図版7)

C14・D11・13~15・E15グリッドに位置する。分割して検出されているがその間は第11次調査区に存在する。E15グリッド調査区壁からC14グリッドまでやや北に振れながら直線に伸びたあとほぼ直角に屈曲し、屈曲部分でAW0024と合流する。その後は若干東に振れて調査区外に出、D11グリッドで調査区壁にぶつかる。幅150~240cm、深度34~48cmを測る。覆土は褐灰色土を主とし、上層により粘性の高く灰色味の強い土が検出された。この溝は3回の掘削が行なわれていることが、調査区北壁の観察から判明した(第30図)。1回目は北壁断面(第30図a断面)第23層・東壁断面(第30図e断面)第11層、2回目は北壁断面第15・16層・東壁断面第7層、3回目には北壁断面第13層・東壁断面第6層がそれぞれ相当するものと考えられる。2回目は1回目の幅をほぼ踏襲し、深度を若干浅くして掘り返しているのに対して、3回目は幅・深度ともに小規模となる。この傾向はAW0025に並行するAW0075にも見て取れる。掘削時期については、混入した遺物も多く明確でないが、下層で17世紀前後の擂鉢(123)が出土していることから、1回目の掘削はその時期を下限と考えることができる。また、3回目の掘削は、2回目の溝が第14層で埋没してから掘削されていること、覆土が1・2回目の褐灰色土とは若干色調を異にすることや、疊を含まないことが特徴的で、土層断面からは、近代の耕地整理前に掘削された可能性が高い。

出土遺物は、近世の土師器皿(70)、肥前磁器碗(73)、肥前陶器碗(94・102)・擂鉢(123)、越中瀬戸皿(113)のほか、縄文時代の打製石斧(4~6)、古代の須恵器有台杯(15)、中世土師器皿(43)、加賀壺(60)・鉢(57・59)、中国青磁盤(68)、石製行火(132・133)、砥石(134)を図示した。

AW0061 (第29~31図、図版7)

D13~14グリッドで検出された、全長13.6mの溝である。AW0025とはほぼ並行して検出され、AW0025を意識して掘削されたものと考えられる。幅60~70cm、深度10~26cmを測り、覆土は黒褐色土または灰褐色土である。疊を多数含む。肥前磁器碗(85・86)・皿(88)・鉢(90)・猪口(93)、肥前陶器碗(97・100・108)、越中瀬戸皿(114)、火鉢(130)のほか、古代の須恵器無台杯(12)を図示した。

AW0075 (第29~31図、図版7)

C11グリッドで検出された。主体は第11次調査区にあると考えられる。確認された部分では幅80~120cm、深度30~50cmを測り、覆土は灰褐色土を主とする。第30図a断面の観察では3回の掘削が認められ、2回目の掘削は1回目とはほぼ同規模で掘り返されているが、3回目は幅も狭く、浅くなる。2回目の底面には大き目の疊が多数混入しているのが見られた。近世の肥前磁器碗(80)、肥前陶器碗(107)・皿(111)・擂鉢(124)、土師器灯明皿(127・128)のほか、中世の珠洲片口鉢(48)、鉄製品(141)を図示した。

第3節 遺 物(第4表)

遺物の記述には、本文・観察表・図面図版・写真図版を用いる。当調査区では、縄文~近代までの遺物が出土している。種類と器種による分類は第3章に示した。

(1)縄文時代の遺物(第32図、図版8)

土器(1・2) 縄文土器は2点を図示した。1は眼鏡状突帯の施文される浅鉢の破片で、時期は下野式である。2は深鉢の底部である。他はすべて碎片である。

石器(3~8) 扇製石斧が1点、打製石斧が5点出土した。3は小型の定角式扇製石斧で石材は流紋岩である。遺構検出面である黄褐色土上面で出土した。4~8は打製石斧で一部欠損するものもあるが、おむね完形に近い。7のみ縄文時代の遺構から出土したが、ほかは他時期の遺構出土である。

(2)古代の遺物(第33図、図版8)

須恵器(9~27) 21点を図化した。このうち16点が供膳具である。時期は出島編年のIV2~V1期が多い。産地は南加賀窯が大半を占めると思われる。10が古代のピットAW00100から出土したほかは、他時期の遺構や遺物包含層からの出土であった。9~12は須恵器無台杯で、13~19は須恵器有台杯、20は須恵器杯である。21~23は須恵器蓋、24は須恵器瓶類、25~27は須恵器甕である。

土師器(28) 包含層から出土した釜を1点図化した。

(3)中世の遺物(第34・35図、図版9・10)

土器(29~43) 中世土師器の皿は15点図化した。29~35は小皿、36~43は大皿である。すべて在地産の手づくねで、時期は藤田編年II~V期にわたるが、最も多いのはIII期である。29~35は体部の調整によって2種類に分けられる。36~43も、体部に段をもち口縁部まで急角度で立ち上がる36・37と、体部の段がほとんどなく口縁部までゆるく立ち上がる38~43がある。29・43は口縁部に油煙痕が見られた。これらのうち、竪穴建物AW003から42、AW006から33・37・39・40が出土した。中世の土坑からは29~32・34・35・38・41、ピットからは36が出土し、ほかは他時期の遺構から出土した。

陶磁器(44~68) 珠洲片口鉢(44~55)、加賀鉢(56~59)、壺(60)、甕(61・62)、瀬戸美濃卸皿(63)・皿(64)、輸入品の青磁碗(66)・盤(67・68)と白磁合子(65)が出土している。

珠洲の片口鉢は12点図化した。時期は吉岡編年I~V期である。44・45は卸目がなく、46~55は卸目が施されている。47は横方向の卸目を施したあとに縱方向の卸目を施している。51~53は使用による磨耗が激しく卸目がかなり消えているが、他はさほど使用痕跡が顕著ではない。55は底部外面に静止糸切り痕が明瞭に残る。竪穴建物AW006から46・47・50・51・53~55が、土坑から44・45・48・52が出土し、ほかは他時期の遺構から出土した。

加賀は鉢類を4点、甕を2点、壺を1点図化した。時期は宮下編年のII~IV期に属する。56・57は口縁部まで卸目が施され、58は体部中程に一部残るのみである。59には卸目が確認できない。60は壺の胴部片である。61・62は甕肩部と底部である。61は体部内面にナデツケの痕が見られた。竪穴状遺構AW006から61・62が出土、土坑から56・58が出土したが、ほかは他時期の遺構から出土した。瀬戸美濃2点の内、卸皿の63は漆縫の痕跡が確認された。時期は藤澤編年古瀬戸中III期であり、中世の遺構から出土した。

輸入磁器は白磁と青磁の2種類である。白磁は65を1点図化した。合子の身部分である。66は青磁碗で、鎌倉弁文が施された底部片、67・68は青磁盤の底部片である。66のみ中世の遺構出土である。

(4)近世の遺物(第36~38図、図版10・11)

土器(69~72・127・128・130) 土師器皿(69~72)・灯明皿(127・128)・火鉢(130)が出土した。皿は増山編年の16世紀後半~18世紀と時期は幅広いが4点しか出土せず、組成の多くを占めるほどには至っていない。灯明皿は19世紀前半である。すべて近世の遺構から出土した。

陶磁器(73~126・129・131) 磁器は碗(73~87)・皿(88・89)・鉢(90)・小杯(91・92)・猪(1193)、陶器

は碗(94~108)・皿(109~120)・鉢(121)・擂鉢(122~126)・灯明皿(129)が出土した。产地は肥前(波佐見)・越中瀬戸・瀬戸・美濃・在地のほか、輸入磁器が確認されている。

肥前の碗は大橋編年の中16~17世紀後半では陶器製が多く、17世紀中~18世紀中は磁器製のものが増える。86は18世紀に出現するとされる、いわゆる「コンニャク印判」の施された染付碗である。他には波佐見の陶胎染付(104・105)、美濃(119)のものが確認されている。皿の多くは越中瀬戸であるが、1点のみ景德鎮の民窯(131)のものが確認された。

擂鉢は肥前が多い。遺物は、近世の遺構と、近世の遺構が集中する地点から出土している。

(5)その他遺物(第38~40図、図版12)

石 器(132~137) 行火(132・133)・砥石(134・135)・炉石(136・137)が出土した。行火は壇内光次郎氏の分類によればII種b類[壇内1990]で、煤がつき、赤化した被熱痕跡が見られる。132は加賀市水田丸産の軽石凝灰岩で、133は小松市滝ヶ原産の凝灰岩である。いずれも15世紀後半以降もので、近世の溝AW0025から出土した。砥石は凝灰岩製の中砥石である。134は近世の溝AW0025、135は中世のピットAW0046から出土している。炉石はいずれもAW006から出土したもので、煤が付着し被熱の痕跡が見られる。

土製品(138) 土鍾1点を図示した。

木 器(139・140) 露卯下駄が2点出土した。近世の土坑AW00122から出土している。

鉄製品(141~148) 刀子・鎌などが出土した。143・146~148は中世の竪穴建物・竪穴状遺構から、141は近世の溝から出土した。141・142は木製の柄部分が遺存している。

第4節 小 結

(1)竪穴建物・竪穴状遺構(第7図、第5表)

当遺跡では竪穴建物・竪穴状遺構が多数検出された。報告では古代の遺物が出土したAW002・8や遺物が出土しなかったAW004・5・7も、覆土や遺構の規模が類似したAW003・6で中世土器群・珠洲・加賀などが主体的に出土したことから中世の遺構と判断した。時期は、出土遺物から13~14世紀と考えられる。当遺跡の特徴としては、①密集して検出された②同一地点での建て替えが少ない③13~14世紀に集中して構築されたことが挙げられる。まずは以下で、野々市町域を中心に竪穴建物・竪穴状遺構の動向をまとめてみたい。

野々市町では、扇が丘ゴショ遺跡SK302(14世紀前半)【石川県立埋蔵文化財センター1998】、扇が丘ハワイゴク遺跡SI03~05・11~14(中世前期・後期)【野々市町教委2003a】、長池キタノハシ遺跡(14世紀後半~16世紀)【野々市町教委2000a】、富樫館跡鬼ヶ窪地区SI1・SK1とナガドイ地区SI1(14世紀前半~15世紀前半)【野々市町教委2003b】、押野館跡SI1・2・竪穴状遺構2(14世紀)【野々市町史編纂専門委員会2003】、堀内館跡SK06~08(13世紀末~14世紀初頭)【野々市町教委2003c】で中世の竪穴建物・竪穴状遺構(竪穴状上坑)が検出されている。なお、扇が丘ハワイゴク遺跡では、土坑として抽出されている1区SK06・12・13・15もSI03と同一規模であり、集合して検出されている状況も当遺跡と類似することから、これを竪穴状遺構に含める。また、5区SK33・39~43・47は掘立柱建物と重複していることから、これも掘立柱建物に付属する竪穴状遺構と考えることとする。また、富樫館跡ジョウカク地区SK1も竪穴建物である可能性がある。

各遺構の規模をグラフ化したものが第7図である。大きいものは押野館跡SI1・2(14世紀)の650×650cm、もっとも小さなもので堀内館跡SK06(13世紀末~14世紀初頭)の120×100cmである。ただし、扇が丘ハワイゴク遺跡と長池キタノハシ遺跡を見ると長軸約4m程度を境に分布が異なっており、長軸4m以下をAタイプ、長軸4mより上をBタイプとした。扇が丘ハワイゴク遺跡ではAタイプで占められ、長

池キタノハシ遺跡ではAタイプも若干存在するが多くはBタイプである。よって、まず第一に、時期や集落の性格により規模に差が生じることが考えられる。

堅穴建物から出土する遺物は中世土器類のほか、珠洲・加賀・越前、瀬戸美濃天目・皿、石製品(炉縁・石臼・石鉢)などバラエティに富む。いずれも加賀地域の中世集落に通常見られる遺物であり、堅穴建物に関する特徴的に出土するものはない。

内部施設は、石積が長池キタノハシ遺跡SX07・28・36・44・46、貼床が長池キタノハシ遺跡SX36と上林新庄遺跡SK9322、柱穴が押野館跡SI1・2と当遺跡、テラス状の段差が扇が丘ハイゴク遺跡SI12と当遺跡に見られた。

遺跡内での他構造との位置関係については、扇が丘ハイゴク遺跡SI2・SK33・39~43・47は5区掘立柱建物群に付属した施設と考えられ、さらに1区では掘立柱建物には付属しないものの、SK06・12・13・15・SI03が柵列の東側に列状に集中して検出されている。それぞれは一辺が頃なり合う程度に重複し、まったく同じ場所に重複して作られることはない。押野館跡SI1・2は掘立柱建物群の北側に列状に並び、切り合はない。堀内館跡SK06~08は館内を区画する清SD08に沿って並び、それぞれ切り合はない。長池キタノハシ遺跡では、溝に区画された敷地内に小規模な掘立柱建物・堅穴状造構がセットとして構築され、同一地点で多数重複している。

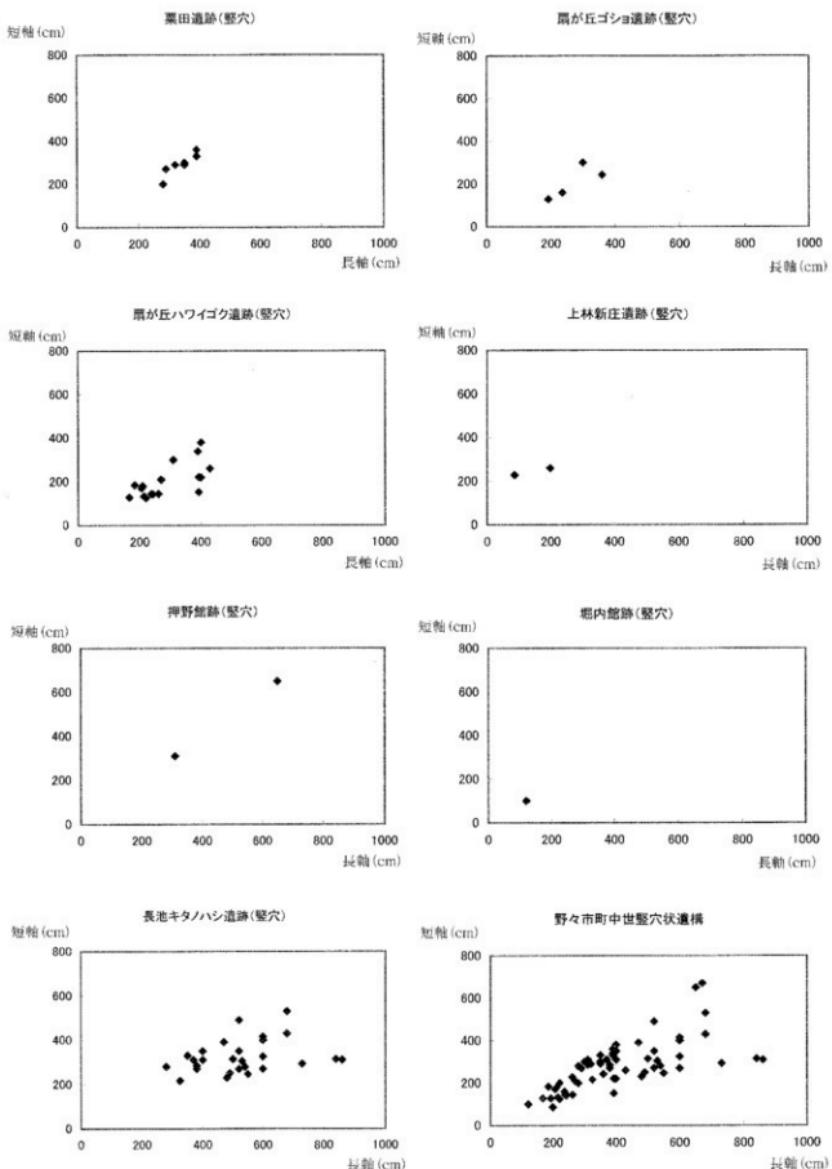
以上、野々市町で検出された堅穴建物について見てきた。出土する遺物はいずれの遺跡も内容に差はない、時期や遺跡の性格による違いも見られない。また、立地についても、扇状地扇尖部の遺跡と扇側部の遺跡ととともに確認されることや、どちらかに規模の大きなもののみが検出される、または内部構造が異なる、というような状況ではないため、今回確認した事例では扇状地における立地の違いは規模や内部施設を決定する要因とは考えられない。平面形は円形・隅丸方形・隅丸長方形が多く、平面的な規模はA・Bの2タイプが存在する。この規模の組成については、遺跡によって差があり、長池キタノハシ遺跡では2タイプ確認されるが、扇が丘ハイゴク遺跡や当遺跡ではAタイプしかない。内部施設は、中世後期の長池キタノハシ遺跡で貼床や石積が確認されるが、他の遺跡では柱穴やテラス状の段差のみである。この内部施設については、中世後半の遺跡である長池キタノハシ遺跡でBタイプの堅穴建物があり、なおかつ貼床や石積が顕著である点を考えると、中世前半よりも後半で規模の拡大や内部施設の工夫がなされる傾向にあることが伺える。ただし、この内部施設については、同じ15世紀~16世紀の長池キタノハシ遺跡と富樫館跡ナガドイ地区でも違いがあることから、中世後半においても規模や内部施設の選択は個々の集落内で行われていたと見るべきであろう。

これらの堅穴建物の多くは掘立柱建物のある集落に検出される場合が多い。しかし、当遺跡では堅穴建物のみがまとめて検出されている。調査範囲の制約や、掘立柱建物として認識し得なかつたビットも考慮しなければならないが、堅穴建物のみで構成される中世の集落遺跡は加賀では未検出であり、扇が丘ハイゴク遺跡1区で見られるような、掘立柱建物と重複しない部分に堅穴状造構が集中して構築された状況を栗田遺跡についても想定すべきであろう。小松市佐々木アサバタケ遺跡[石川県立埋蔵文化財センター1988a・b]でも、堅穴状造構が掘立柱建物と重複しない南側の低地部分に集中して検出されていることから、この状況は栗田遺跡の立地する手取扇状地に限らず、中世の加賀地域において、普遍的に見られる状況と考えられる。

野々市町で検出される堅穴建物・堅穴状造構については、中世を通じて(1)平面形は円形・隅丸方形・隅丸長方形が多い(2)出土する遺物に特別な意味合いが窺われない(3)扇尖部・扇端部の遺跡で確認され、それぞれの立地の違いでの規模や出土遺物・時期的な特徴の違いも見られない、という状況にある。ただその中でも、中世後半の富樫館跡ナガドイ地区のように中世前半と似た状況を示す遺跡が見られるとともに、同じく後半の長池キタノハシ遺跡では内部施設に貼床や石積が確認され、堅穴建物の規模もBタイプが多くを占めるようになっている。このことは、当地において、堅穴建物と堅穴状造構に関する

遺物名	基盤名	基盤	深度	発見場所	遺物	時期	立場	
栗川遺跡(第100)	AW01	290	300	10	山腹斜面	土器陶器、石器		
	AW02	290	400	20	内部に瓦片	土器陶器、石器		
	AW03	290	5	内部に瓦片	なし			
	AW04	390	330	22	テラス	土器陶器、瓦片		
	AW05	390	330	22	テラス	土器陶器、瓦片		
	AW06	390	360	64	テラス	土器陶器、瓦片		
栗川遺跡(第100)	AW07	390	300	3	内部に瓦片	土器陶器、瓦片		
	AW08	390	250	45	テラス	土器陶器、瓦片		
	SK02	300	53	伊藤	伊藤	14C後～15C前		
	SK03	300	300	51	伊藤	伊藤		
	SK04	256	160	伊藤	伊藤			
	SK05	152	伊藤	伊藤	伊藤			
栗が丘ゴシロ遺跡	SK06	192	128	伊藤	伊藤	14C後～15C前		
	SK07	250	53	なし	なし			
	SK08	400	250	21	なし			
	SK09	310	300	20	土器陶器、瓦片	土器陶器、瓦片		
	SH12	390	340	42	テラス	土器陶器、瓦片	SU1より前	
	SH13	490	260	15	テラス	土器陶器、瓦片	中井初期?	
	SH14	400	380	25	テラス	土器陶器、瓦片	中井初期?	
	SK05	250	53	伊藤	伊藤			
	SK12	250	144	14	伊藤	伊藤		
	SK13	252	145	16	伊藤	伊藤		
栗が丘ハイコク遺跡	SK15	184	184	44	伊藤	伊藤		
	SK33	166	128	64	伊藤	伊藤		
	SK39	243	153	36	土器上部茎、青面鏡	土器上部茎、青面鏡		
	SK40	283	153	11	土器上部茎、青面鏡	土器上部茎、青面鏡		
	SK41	263	152	12	土器上部茎、青面鏡	土器上部茎、青面鏡		
	SK42	214	133	20	土器上部茎、青面鏡	土器上部茎、青面鏡		
	SK43	167	15	土器上部茎	土器上部茎			
	SK47	206	171	58	土器上部茎	土器上部茎		
	上林新竹遺跡	SK9022	198	96	31	黒手足	13C	
	SK9023	260	228	43	黒手足合多もつ土野西	11C		
木戸入遺跡	SK9040	250	200	39	土手跡	13C		
	木戸入遺跡	SH1	670	670	なし	なし		
	木戸入遺跡(ノリドリ跡)	SH1	310	286	15	内蔵に瓦片	14C後～15C前?	
	木戸入遺跡	SH1	650	650	35	内蔵・外側に瓦片	14C後～15C前?	
	木戸入遺跡	SH2	650	650	35	外側・外側に瓦片	14C後～15C前?	
	木戸入遺跡	SH3	650	650	35	外側・外側に瓦片	14C後～15C前?	
	木戸入遺跡	SH6	120	100	59	なし(奥)・土手跡	14C後～15C前?	
	木戸入遺跡	SH7	120	100	45	なし(奥)・土手跡	14C後～15C前?	
	木戸入遺跡	SH8	120	100	105	なし(奥)・土手跡	14C後～15C前?	
	木戸入遺跡	N-2-SX01	680	530	25	土手上部茎、鐵打、瀬戸口、石臼	15C後～16C前	
木戸入遺跡	N-2-SX02	680	430	28	土手上部茎、瀬戸口	15C後～16C前		
	N-2-SX03	520	270	28	石臼	15C後～16C前		
	N-2-SX04	520	280	28	土手上部茎、瀬戸口	15C後～16C前		
	N-2-SX05	460	397	24	土手上部茎、瀬戸口	15C後～16C前		
	N-2-SX06	520	490	44	土手上部茎、瀬戸口	15C後～16C前		
	N-2-SX07	600	325	24	土手上部茎	15C後～16C前		
	N-2-SX08	650	40	40	土手上部茎、瀬戸口	15C後～16C前		
	N-2-SX09	400	350	25	土手上部茎、瀬戸口	14C後～15C前		
	N-2-SX10	860	310	25	瀬戸口	14C後～15C前		
	N-2-SX11	280	28	瀬戸口	14C後～15C前			
木戸入遺跡	N-2-SX12	300	314	40	土手上部茎、瀬戸口	14C後～15C前		
	N-2-SX13	270	310	38	土手上部茎、瀬戸口	14C後～15C前		
	N-2-SX14	470	390	38	行火、五輪塔、砾石	14C後～15C前		
	N-2-SX15	13						
	N-2-SX16	600	415	37	中手土手跡、石臼、石棒、砾石	15C後～16C前		
	N-2-SX17	480	230	41	中手土手跡、石臼	14C後～15C前		
	N-2-SX18	460	28	28	中手土手跡	15C後～16C前		
	N-2-SX19	280	24	中手土手跡	15C後～16C前			
	N-2-SX20	22						
	S-1-SX01	460	250	32	中手土手跡、瀬戸口	15C後～16C前		
原状地盤側部	S-1-SX02	280	280	25	中手土手跡、瀬戸口	15C後～16C前		
	S-1-SX03	280	280	30	中手土手跡	15C後～16C前		
	S-1-SX04	280	28	34	中手土手跡	15C後～16C前		
	S-1-SX05	550	247	29	中手土手跡	14C後～15C前		
	S-1-SX06	540	280	22	中手土手跡	14C後～15C前		
	S-2-SX07	225	139	25	行火、鐵打	14C後～15C前		
	S-2-SX08	530	305	30	行火、鐵打、瀬戸口	14C後～15C前		
	S-2-SX09	300	30	30	中手土手跡、瀬戸口	14C後～15C前		
	S-2-SX10	490	310	29	中手土手跡、瀬戸口	14C後～15C前		
	S-2-SX11	135	27					
原状地盤側部	S-2-SX12	160	40					
	S-2-SX13	240	42	中手土手跡、瀬戸口	14C後～15C前			
	S-2-SX14	390	40	行火	14C後～15C前			
	S-2-SX15	600	270	39	點狀・石標	14C後～15C中		
	S-2-SX16	270	39	點狀・石標	14C後～15C中			
	S-2-SX17	270	39	點狀・石標	14C後～15C中			
	S-2-SX18	36						
	S-2-SX19	230	25					
	S-2-SX20	410	26					
	S-2-SX21	18						
原状地盤側部	S-2-SX22	280	280	25	中手土手跡	15C後～16C前		
	S-2-SX23	280	280	30	中手土手跡	15C後～16C前		
	S-2-SX24	280	28	34	中手土手跡	15C後～16C前		
	S-2-SX25	550	247	29	中手土手跡	14C後～15C前		
	S-2-SX26	540	280	22	中手土手跡	14C後～15C前		
	S-2-SX27	225	139	25	行火、鐵打	14C後～15C前		
	S-2-SX28	530	305	30	行火、鐵打、瀬戸口	14C後～15C前		
	S-2-SX29	300	30	30	中手土手跡、瀬戸口	14C後～15C前		
	S-2-SX30	490	310	29	中手土手跡、瀬戸口	14C後～15C前		
	S-2-SX31	135	27					
原状地盤側部	S-2-SX32	160	40					
	S-2-SX33	240	42	中手土手跡、瀬戸口	14C後～15C前			
	S-2-SX34	390	24	行火	14C後～15C前			
	S-2-SX35	280	280	40	中手土手跡、瀬戸口	14C後～15C前		
	S-2-SX36	600	270	39	點狀・石標	14C後～15C中		
	S-2-SX37	270	39	點狀・石標	14C後～15C中			
	S-2-SX38	36						
	S-2-SX39	230	25					
	S-2-SX40	410	26					
	S-2-SX41	18						
原状地盤側部	S-2-SX42	280	280	25	中手土手跡	15C後～16C前		
	S-2-SX43	520	230	39	中手土手跡、瀬戸口	14C後～15C前		
	S-2-SX44	600	400	30	火口、瓦礫堆積、行火、亂石、砾石	14C後～15C前		
	S-2-SX45	300	30					
	S-2-SX46	310	30	石標?	石臼	14C後～15C前		
	S-2-SX47	310	30	石標?	中手土手跡、瀬戸口	14C後～15C前		
	S-2-SX48	280	28					
	S-2-SX49	380	220	34	中手土手跡	14C後～15C半		
	S-2-SX50	380	220	34	中手土手跡	14C後～15C半		
	S-2-SX51	26						
林-SX	林-SX52	480	5					
	林-SX53	444	10					
	林-SX54	230	260	20				
	林-SX55	540	314	20	中手土手跡	14C後～15C前		
	林-SX56	540	18					
	(空欄は記載なし)							

第5表 野々市町の中世堅穴状遺構一覧表



第7図 野々市町の中世整穴状遺構規模

中世前半と後半の違いを示す可能性がある要素として、今後留意していく必要があろう。

(2)土師器埋納遺構

当遺跡では、中世土師器を埋納した上坑AW0042が検出された。このような遺構は、野々市町では扇ヶ丘ゴシヨ遺跡SX201（13世紀後半）[石川県立埋蔵文化財センター 1998]、押野館跡94号土坑（14世紀後半～末）、末松A遺跡24号A6 埋納ピット（14世紀後半～末）[跡石川県埋蔵文化財センター 2005]で検出されている。これらは他種類の遺物の混入がほとんど無く、時期がまとまっているもので、大型の掘立柱建物を伴うことが多いため、遺構の性格は建物建設の際に行なわれた地鎮祭祀と関連があるものと考えられている。当遺跡では、AW0042の周辺にピットが点在しているものの掘立柱建物として認識するには至らなかつたので、建物に付随しないものも存在することが今回確認された。その性格については今後検討していきたい。

参考文献

- 石川県立埋蔵文化財センター 1988a 「佐々木アサバタケ遺跡Ⅰ」
石川県立埋蔵文化財センター 1988b 「佐々木アサバタケ遺跡Ⅱ」
石川県立埋蔵文化財センター 1998 「扇ヶ丘ゴシヨ遺跡」
垣内光次郎 1990 「中世北陸の暖房文化」『石川考古学研究会々誌』33 石川考古学研究会
跡石川県埋蔵文化財センター 2005 「末松遺跡」
東北中世考古学研究会 2001 「掘立と竪穴」高志書院
野々市町教育委員会 1998 「富樫館跡Ⅰ」
野々市町教育委員会 1999 「富樫館跡Ⅱ」
野々市町教育委員会 2000a 「長池キタノハシ遺跡」
野々市町教育委員会 2000b 「上林新庄遺跡・上林古墳・上林テラダ遺跡・下新庄タナカダ遺跡」
野々市町教育委員会 2002 「扇ヶ丘ヤグラダ遺跡」
野々市町教育委員会 2003a 「扇ヶ丘ハイイゴク遺跡」
野々市町教育委員会 2003b 「富樫館跡Ⅲ」
野々市町教育委員会 2003c 「堀内館跡」
野々市町史編纂専門委員会 2003 「野々市町史 資料編1」石川県野々市町
北陸中世考古学研究会 2004 「掘立柱建物から礎石建物へ」
三浦ゆかり 1995 「石川県内出土の下駄について」『石川考古学研究会々誌』38 石川考古学研究会

第4表 粧出遺跡(第10次)遺物観察表

器 文 器番号	実測 番号	出土地点 No.ほか	種類	器種	口径 (mm)	底面 (mm)	底径 (mm)	残存率	色調	色調	胎土混和物	備考
1	200	AW090	陶文上部	盤	106	25	25	少片	外: 黑褐	内: 黑褐	石英	ト野式
2	209	AW091	陶文上部	盤	68	25	25	少片	外: 黑褐	内: 黑褐	石英、黑色物	
高麗 青磁 出土地点	No.ほか	種類	器種	直径 (mm)	底面 (mm)	底径 (mm)	残存率	地平	白材	重量(g)	備考	
3	207	AW092	D16グリッド	石器	56	34	9.5	完形	灰	灰		
4	212	AW093	石器	打削石斧	153	85	30	完形	灰	灰		
5	過4	AW094	石器	打削石斧	181	90	36	完形	灰	灰		2点揃合
6	過5	AW095	石器	打削石斧	142	85	35	欠形	灰	灰		
7	過6	AW096	PIT	石器	154	97	27	欠形	灰	灰		
8	過7	AW097	石器	打削石斧	128	76	20	完形	灰	灰		

古代 器番号	実測 番号	出土地点 No.ほか	種類	器種	口径 (mm)	底面 (mm)	底径 (mm)	残存率	色調	色調	胎土混和物	備考
9	179	AW098	陶土	筒状器	129	34	15	全形	外: 黑褐	内: 黄褐色		曲輪N'2新~V1期
10	163	AW099	陶土	筒状器	122	32	20	口縁下1/2	外: 黑褐	内: 黑褐		曲輪N'2新~V1期
11	165	AW010	1	筒状器	122	32	20	口縁下1/2	外: 黑褐	内: 黑褐		曲輪V期
12	172	AW091	筒状器	筒状器	90	35	14	口縁下1/4	外: 黑褐	内: 黑褐		
13	175	AW092	筒状器	筒状器	111	40	22	全形	外: 黑褐	内: 黑褐		
14	180	AW093	D9.0グリッド	瓦片	119	40	25	全形	外: 黑褐	内: 黑		曲輪N'2新~V1期
15	195	AW094	E15グリッド	瓦片	82	25	15	外: 黑褐	内: 黑		曲輪N'2新~V1期	
16	177	AW095	筒状器	筒状器	82	25	15	外: 黑褐	内: 黑			
17	9	AW096	筒状器	筒状器	96	25	12	口縁下1/2	外: 黑褐	内: 黑		
18	178	AW097	筒状器	筒状器	64	35	15	外: 黑	内: 黑			
19	4	AW098	筒状器	筒状器	76	35	15	外: 黑	内: 黑			
20	70	AW099	3. 土から1cm上	瓦	119	25	15	口縁下1/5	外: 黑	内: 黑		
21	24	AW010	瓦	188	25	15	口縁下1/6	外: 黑	内: 黑			
22	125	AW011	瓦	149	25	15	口縁下1/2	外: 黑	内: 黑			
23	71	AW012	3. 土から5cm下	瓦	117	25	15	全形	外: 黑	内: 黑		
24	1	AW013	瓦	117	25	15	頭部	外: 黑	内: 黑			
25	10	AW014	瓦	147	25	15	尾部	外: 黑	内: 黑		長石	
26	183	AW015	北高麗区分付	瓦	90	25	15	少片	外: 黑	内: 黑		
27	15	AW016	18. 雷車中層	瓦	90	25	15	少片	外: 黑	内: 黑		
28	182	AW017	北朝区包含部	瓦	203	口縁下1/2	外: 黑	内: 黑				

中世 器番号	実測 番号	出土地点 No.ほか	種類	器種	口径 (mm)	底面 (mm)	底径 (mm)	残存率	色調	色調	胎土混和物	備考	
29	79	AW018	中世土器	盤	85	35	25	全形	外: 黑	内: 黑		勝田Ⅰ期	
30	55	AW019	11.	中世土器	盤	21	21	少片	外: 黑	内: 黑		勝田Ⅰ期	
31	66	AW020	中世土器	盤	21	21	21	口縁下1/4	外: 黑	内: 黑		勝田Ⅰ期	
32	57	AW021	2.	中世土器	盤	21	21	少片	外: 黑	内: 黑		勝田Ⅰ期	
33	19	AW022	A-A'ベルト	中世土器	盤	24	9	全形	外: 黑	内: 黑		勝田Ⅰ期	
34	3	AW023	中世土器	盤	24	16	24	口縁下1/9	外: 黑	内: 黑		勝田Ⅰ期	
35	128	AW024	中世土器	盤	22	15	20	全形	外: 黑	内: 黑		小色石、石英	
36	81	AW025	2.	中世土器	盤	124	29	全形	外: 黑	内: 黑		勝田Ⅰ期	
37	22	AW026	中世土器	盤	75	25	25	頭部	外: 黑	内: 黑		赤色物、石英	
38	5	AW027	瓦	122	20	20	口縁下1/2	外: 黑	内: 黑		勝田Ⅰ期		
39	8	AW028	2.	中世土器	盤	131	25	25	口縁下1/2	外: 黑	内: 黑		勝田Ⅰ期
40	23	AW029	17. 床面	中世土器	盤	100	25	25	全形	外: 黑	内: 黑		勝田Ⅱ期
41	58	AW030	13.	中世土器	盤	13	25	25	少片	外: 黑	内: 黑		勝田Ⅱ期
42	2	AW031	3. 中国	中世土器	盤	108	25	25	少片	外: 黑	内: 黑		勝田Ⅱ期
43	38	AW032	西周	中世土器	盤	108	25	25	全形	外: 黑	内: 黑		勝田Ⅱ期
44	7	AW033	南	中世土器	盤	270	25	25	口縁下1/8	外: 黑	内: 黑		砂礫
45	123	AW034	勝田	口縁下	260	25	25	口縁下1/8	外: 黑	内: 黑		吉岡Ⅲ期	
46	14	AW035	14. 連生中層	中世土器	口縁下	少片	25	25	外: 黑	内: 黑			
47	12	AW036	13.	中世土器	口縁下	少片	25	25	外: 黑	内: 黑			
48	121	AW037	5.	中世土器	口縁下	少片	25	25	外: 黑	内: 黑			
49	122	AW038	5.	中世土器	口縁下	少片	25	25	外: 黑	内: 黑			
50	36	AW039	5.	中世土器	口縁下	少片	25	25	外: 黑	内: 黑			
51	12	AW040	23. 連生	中世土器	口縁下	260	25	25	外: 黑	内: 黑			
52	95	AW041	3.	中世土器	口縁下	少片	25	25	外: 黑	内: 黑			
53	17	AW042	d.	中世土器	口縁下	少片	25	25	外: 黑	内: 黑			
54	21	AW043	1.	中世土器	口縁下	少片	25	25	外: 黑	内: 黑			
55	18	AW044	19.	中世土器	口縁下	少片	25	25	外: 黑	内: 黑			
56	98	AW045	4.	中世土器	口縁下	少片	25	25	外: 黑	内: 黑			
57	39	AW046	25. 西端	加賀	248	25	25	少片	外: 黑	内: 黑		吉岡Ⅲ期	
58	56	AW047	22.	加賀	248	25	25	少片	外: 黑	内: 黑		吉岡Ⅲ期	
59	40	AW048	13. 西端	加賀	320	25	25	少片	外: 黑	内: 黑		吉岡Ⅲ期	
60	29	AW049	22.	加賀	248	25	25	少片	外: 黑	内: 黑		吉岡Ⅲ期	
61	20	AW050	13. 連生中層	加賀	248	25	25	少片	外: 黑	内: 黑		吉岡Ⅲ期	
62	11	AW051	13. 連生中層	加賀	248	25	25	少片	外: 黑	内: 黑		吉岡Ⅲ期	
63	120	AW052	1.	加賀	248	25	25	少片	外: 黑	内: 黑		吉岡Ⅲ期	
64	73	AW053	加賀	248	25	25	少片	外: 黑	内: 黑		吉岡Ⅲ期		
65	119	AW054	1.	中世土器	口縁下	34	17	28	少片	外: 黑	内: 黑		吉岡Ⅲ期
66	128	AW055	中世土器	加賀	248	25	25	少片	外: 黑	内: 黑		吉岡Ⅲ期	
67	47	AW056	5. 蔵前店	加賀	90	15	15	口縁下1/4	外: 黑	内: 黑		吉岡Ⅲ期	
68	42	AW057	中世土器	加賀	102	15	15	口縁下1/2	外: 黑	内: 黑		吉岡Ⅲ期	

近世 器番号	実測 番号	出土地点 No.ほか	種類	器種	口径 (mm)	底面 (mm)	底径 (mm)	残存率	色調	色調	胎土混和物	備考
69	59	AW0584	土師器	皿	106	25	25	口縁下1/5	外: 黑	内: 黑	砂	吉岡Ⅳ期
70	41	AW0585	1. 磁磁	皿	116	16	40	完形	外: 黑	内: 黑	砂	吉岡Ⅳ期
71	50	AW0586	1. 磁磁	皿	101	15	45	口縁下1/4	外: 黑	内: 黑	砂	吉岡Ⅳ期
72	60	AW0588	土師器	皿	122	19	45	口縁下1/2	外: 黑	内: 黑	砂	吉岡Ⅳ期

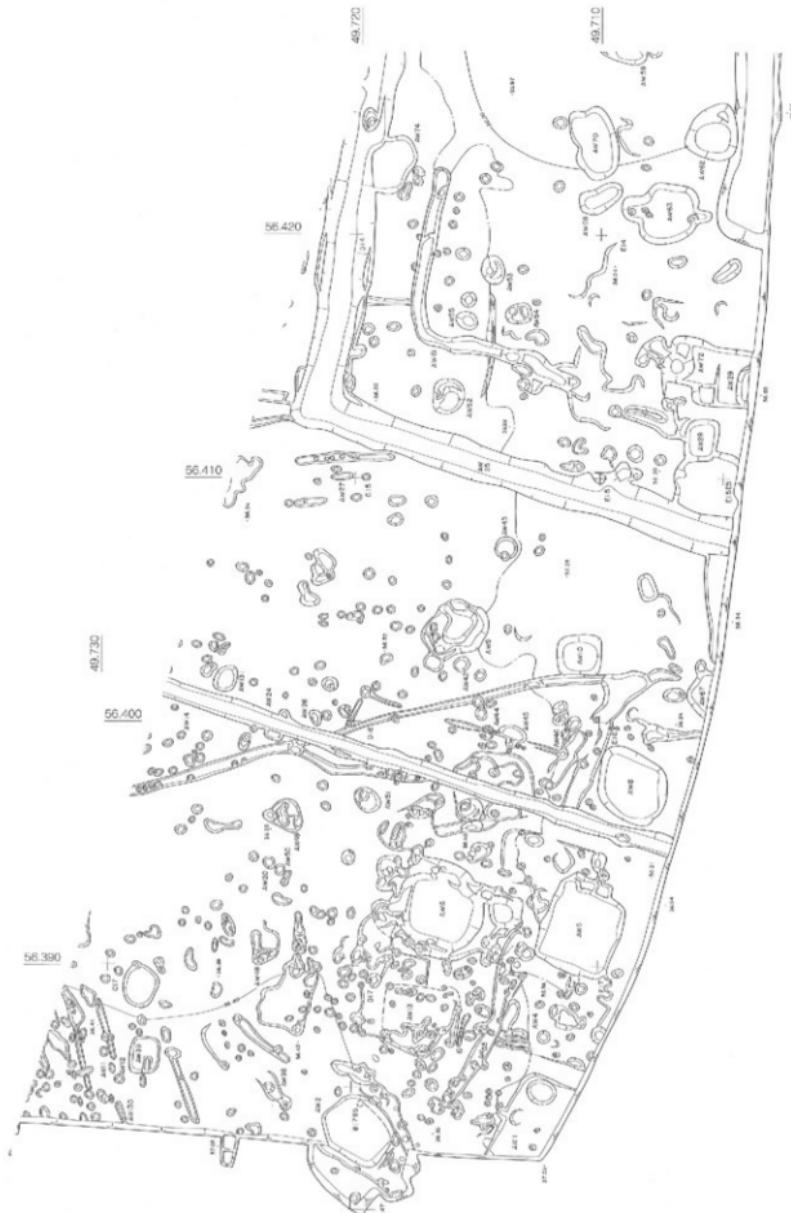
測量 番号	出土地点	No.ほか	種類	器種	口径 (mm)	高さ (mm)	残存半 径	色調	色調	船上遺物	備考		
73	45 AW005		縦型	碗	105	-	口縫 1/4	輪: 透明輪	胎: 黄白	見出	IN(人頭・鳥)		
74	51 AW006	6. 縦型	縦型	碗	50	底部 1/4	輪: 透明輪	胎: 黄白	見出	IN(人頭・大輪)	見出		
75	124 AW006		縦型	碗	48	底部 1/3	輪: 透明輪	胎: 黄白	見出	IN(人頭・大輪)	見出		
76	161 AW00122		縦型	碗	50	底部 5/9	輪: 透明輪	胎: 黄白	見出	IN(人頭・大輪)	見出		
77	212 AW006		縦型	碗	114	-	口縫 1/2	輪: 透明輪	胎: 黄白	見出	IN(人頭・大輪)	見出	
78	66 AW004		縦型	碗	47	全体 1/4	輪: 透明輪	胎: 黄白	見出	IN(人頭・大輪)	見出		
79	160 AW0122		縦型	碗	60	底部 2/9	輪: 透明輪	胎: 黄白	見出	IN(人頭・大輪)	見出		
80	99 AW0075	7	縦型	碗	83	口縫 1/5	輪: 透明輪	胎: 黄白	見出	IN(人頭・大輪)	見出		
81	192 AW006	E&dグリッド	縦型	碗	88	全体 1/5	輪: 透明輪	胎: 黄白	見出	IN(人頭・大輪)	見出		
82	187 AW09	E14cグリッド	縦型	碗	89	57	全体 1/3	輪: 透明輪	胎: 黄白	見出	IN(人頭・大輪)	見出	
83	64 AW004		縦型	碗	32	全体 1/5	輪: 透明輪	胎: 黄白	見出	IN(人頭・大輪)	見出		
84	193 AW00	D9グリッド	縦型	碗	86	-	全体 1/6	輪: 透明輪	胎: 黄白	見出	IN(人頭・大輪)	見出	
85	86 AW001	i-b	縦型	碗	53	底部 1/2	輪: 透明輪	胎: 黄白	見出	IN(人頭・大輪)	見出		
86	76 AW006	5	縦型	碗	88	-	全体 1/4	輪: 透明輪	胎: 黄白	見出	IN(人頭・大輪)	見出	
87	52 AW006	2. 横型	縦型	碗	94	60	全体 1/4	輪: 透明輪	胎: 黄白	見出	IN(人頭・大輪)	見出	
88	77 AW001	5	縦型	碗	93	42	底部 1/3	輪: 青白稍	胎: 黄白	見出	IN(人頭・大輪)	見出	
89	49 AW006	4. 横型	縦型	碗	94	41	全体 1/2	輪: 青白稍	胎: 黄白	見出	IN(人頭・大輪)	見出	
90	74 AW001	1	縦型	碗	71	底部 1/3	輪: 青白稍	胎: 黄白	見出	IN(人頭・大輪)	見出		
91	62 AW008		縦型	小杯	74	-	口縫 1/6	輪: 透明輪	胎: 黄白	見出	IN(人頭・大輪)	見出	
92	67 AW009		縦型	小杯	69	-	口縫 1/3	輪: 透明輪	胎: 黄白	見出	IN(人頭・大輪)	見出	
93	82 AW003	1-i	縦型	口?	32	底部 8/9	輪: 透明輪	胎: 黄白	見出	IN(人頭・大輪)	見出		
94	44 AW002	20	縦型	碗	49	40	全体 1/3	輪: 透明輪	胎: 黄白	見出	IN(人頭・大輪)	見出	
95	48 AW006	出面	縦型	碗	42	42	底部 2/3	輪: 透明輪	胎: 黄白	見出	IN(人頭・大輪)	見出	
96	159 AW002	2	縦型	碗	50	50	全体 2/9	輪: 台脱	胎: 透明輪	見出	IN(人頭・大輪)	見出	
97	85 AW006	e-h	縦型	碗	86	-	全体 1/5	輪: 自然	胎: 黄白	見出	IN(人頭・大輪)	見出	
98	143 AW006	E&dグリッド	縦型	碗	103	64	全体 1/3	輪: 自然	胎: 黄白	見出	IN(人頭・大輪)	見出	
99	187 AW006	E&dグリッド	縦型	碗	103	56	全体 1/3	輪: 白	胎: 黄白	見出	IN(人頭・大輪)	見出	
100	210 AW001		縦型	碗	106	-	口縫 1/12	輪: 白	胎: 帆立貝	見出	IN(人頭・大輪)	見出	
101	51 AW006	5. 横型	縦型	碗	122	-	口縫 1/4	輪: 白	胎: 帆立貝	見出	IN(人頭・大輪)	見出	
102	27 AW005		縦型	碗	103	67	全体 1/4	輪: 透明輪	胎: 黄白	見出	IN(人頭・大輪)	見出	
103	63 AW001±8		縦型	碗	49	-	底部 1/3	輪: 透明輪	胎: 黄白	見出	IN(人頭・大輪)	見出	
104	97 AW006	8	縦型	碗	110	65	全体 1/4	輪: 透明輪	胎: 黄白	見出	IN(人頭・大輪)	見出	
105	211 AW00		縦型	碗	110	65	全体 1/4	輪: 透明輪	胎: 黄白	見出	IN(人頭・大輪)	見出	
106	214 AW024		縦型	碗	114	-	全体 1/8	輪: 透明輪	胎: 透明白	見出	IN(人頭・大輪)	見出	
107	100 AW007	t	縦型	碗	92	-	口縫 1/8	輪: 透明輪	胎: 黄白	見出	IN(人頭・大輪)	見出	
108	84 AW006	a-b-横	縦型	碗	93	61	全体 1/3	輪: 透明輪	胎: 透明白	見出	IN(人頭・大輪)	見出	
109	210 AW00		縦型	盤	100	-	口縫 1/6	輪: 透明輪	胎: 黄白	見出	IN(人頭・大輪)	見出	
110	153 AW006	3. 横型	縦型	盤	118	-	全体 1/2	輪: 透明輪	胎: 黄白	見出	IN(人頭・大輪)	見出	
111	162 AW005	5	縦型	盤	119	-	口縫 1/6	輪: 透明輪	胎: 黄白	見出	IN(人頭・大輪)	見出	
112	165 AW00122		縦型	盤	119	-	全体 1/2	輪: 透明輪	胎: 黄白	見出	IN(人頭・大輪)	見出	
113	32 AW005		縦型	盤	119	-	全体 1/2	輪: 透明輪	胎: 黄白	見出	IN(人頭・大輪)	見出	
114	143 AW006	1-i	縦型	盤	116	-	全体 1/2	輪: 透明輪	胎: 黄白	見出	IN(人頭・大輪)	見出	
115	188 AW006	E&dグリッド	縦型	盤	116	-	全体 1/2	輪: 透明輪	胎: 黄白	見出	IN(人頭・大輪)	見出	
116	215 AW006	E14cグリッド	縦型	盤	112	26	全体 1/3	輪: 透明輪	胎: 黄白	見出	IN(人頭・大輪)	見出	
117	68 AW002	中層	縦型	盤	112	45	全体 1/3	輪: 透明輪	胎: 黄白	見出	IN(人頭・大輪)	見出	
118	66 AW002		縦型	盤	112	45	全体 1/3	輪: 透明輪	胎: 黄白	見出	IN(人頭・大輪)	見出	
119	115 AW005		縦型	盤	114	18	全体 1/3	輪: 透明輪	胎: 黄白	見出	IN(人頭・大輪)	見出	
120	213 AW00		縦型	盤	209	-	全体 1/3	輪: 透明輪	胎: 黄白	見出	IN(人頭・大輪)	見出	
121	191 AW003	D9グリッド	縦型	盤	114	-	全体 1/3	輪: 透明輪	胎: 黄白	見出	IN(人頭・大輪)	見出	
122	61 AW006		縦型	盤	256	-	口縫 1/8	輪: 透明輪	胎: 黄白	見出	IN(人頭・大輪)	見出	
123	34 AW005	下層	縦型	盤	119	-	全体 1/3	輪: 透明輪	胎: 黄白	見出	IN(人頭・大輪)	見出	
124	110 AW007	6	縦型	盤	119	-	全体 1/3	輪: 透明輪	胎: 黄白	見出	IN(人頭・大輪)	見出	
125	185 AW006	E13nグリッド	縦型	盤	254	92	90	全体 1/3	胎: 黄白	内: 透明	見出	IN(人頭・大輪)	見出
126	166 AW00	黄土背景	縦型	盤	298	-	全体 1/8	胎: 透明	内: 透明	内: 透明	見出	IN(人頭・大輪)	見出
127	106 AW0075	1	土質	盤	97	17	全体 1/8	胎: 透明	内: 透明	内: 透明	見出	IN(人頭・大輪)	見出
128	107 AW0075	1	土質	盤	93	-	全体 1/6	胎: 透明	内: 透明	内: 透明	見出	IN(人頭・大輪)	見出
129	194 AW003	北側底土裏面	盤	66	-	全体 1/3	胎: 透明	内: 透明	内: 透明	見出	IN(人頭・大輪)	見出	
130	78 AW006	7-透	火鉢	火鉢	133	80	全体 2/3	胎: 透明	内: 透明	内: 透明	見出	IN(人頭・大輪)	見出
131	S 1 AW00	E14cグリッド	中層	皿	200	-	全体 1/2	胎: 透明	内: 透明	内: 透明	見出	IN(人頭・大輪)	見出

その他

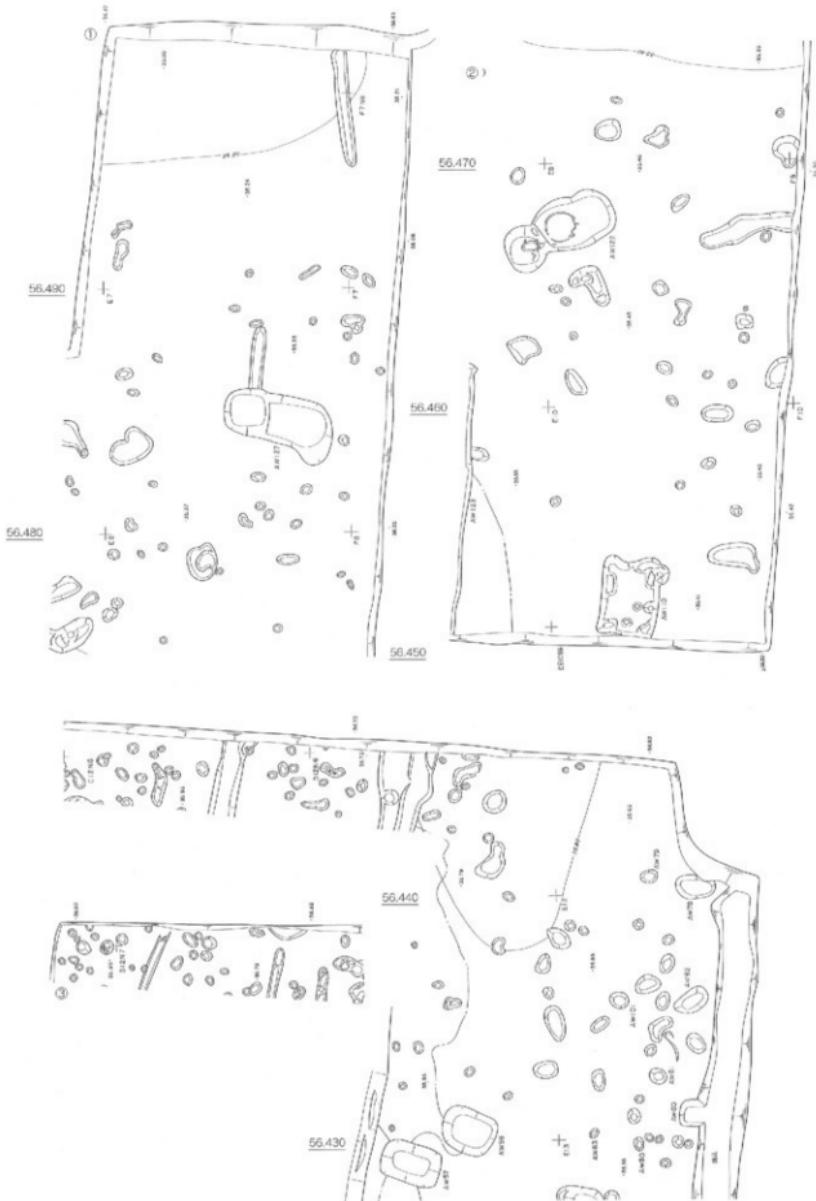
測量 番号	出土点	No.ほか	種類	器種	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	残存半 径	色調	胎土質和物	備考
125	AW005	5	石製品	火手	296	158	110	-	火山礫石質	重215g、水丸丸	
132	37 AW002		石製品	火手	-	-	-	-	火山礫石質	重270g、丸ヶ峰	
134	43 AW005		石製品	風呂	49	37	8	-	火山礫石質	重13g	
135	46 AW006		石製品	風呂	65	46	17	-	火山礫石質	重13g	
136	T1 AW006	16. 横型	石	臼	237	-	-	-	-	-	
137	T1.5 AW006	20	石	臼	296	158	110	-	火山礫石質	重215g、水丸丸	
138	208 AW00		石製品	臼	38	44	33	-	火山礫石質	重270g、丸ヶ峰	
139	221 AW0022		木製品	下駄	665	71	17	全体 1/2	-	-	
140	220 AW0022		木製品	下駄	240	87	46	全体 1/2	-	-	
141	秧 1 AW0075	5	織物品	刀子?	-	-	-	-	-	-	
142	秧 2 AW00		織物品	刀子?	-	-	-	-	-	-	
143	秧 3 AW006	20	織物品	刀子?	-	-	-	-	-	-	
144	秧 4 a AW000		織物品	刀子?	-	-	-	-	-	-	
145	秧 4 b AW000		織物品	刀子?	-	-	-	-	-	-	
146	秧 5 AW003	F 3	織物品	刀子?	-	-	-	-	-	-	
147	秧 6 AW002	④	織物品	刀子?	-	-	-	-	-	-	
148	秧 7 AW006	5	織物品	刀子?	-	-	-	-	-	-	



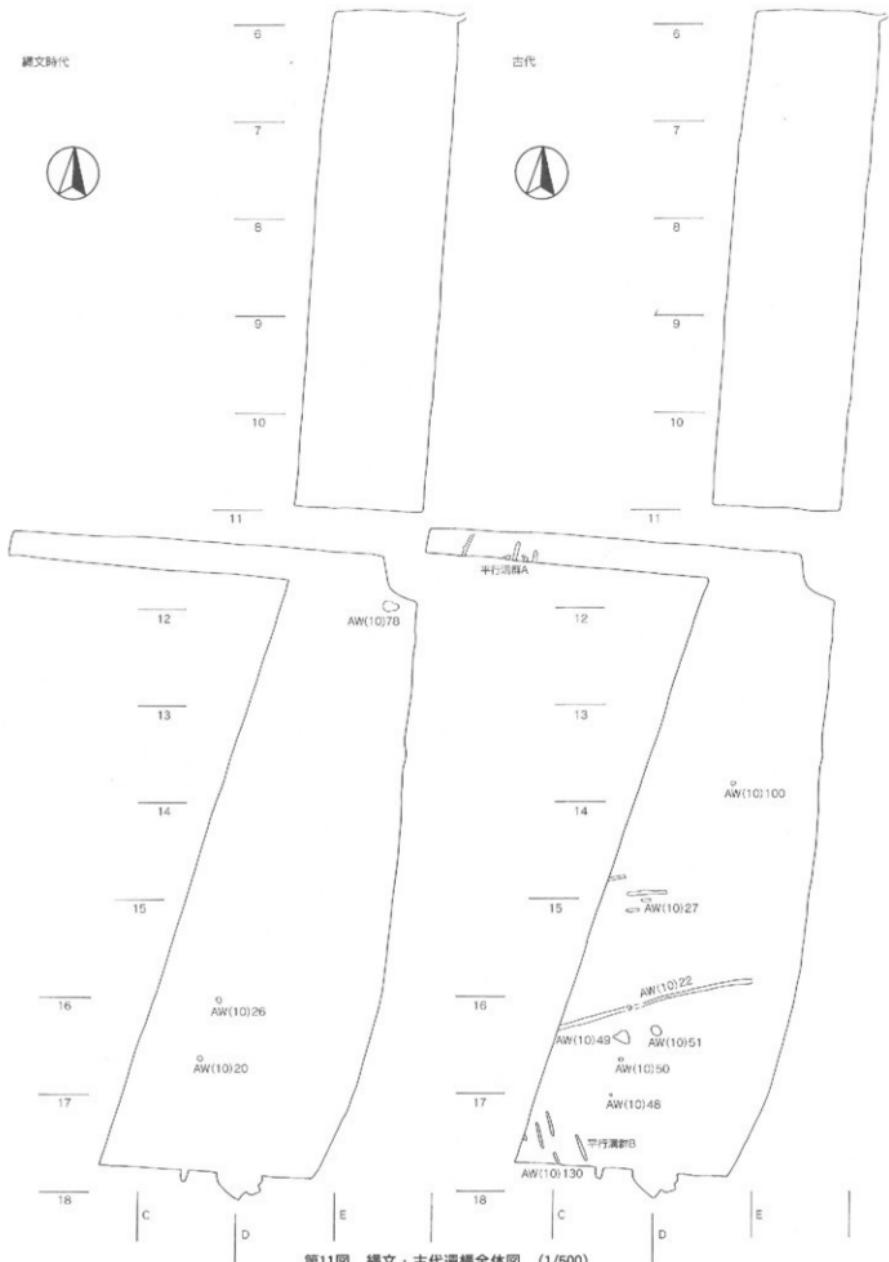
第8図 粟田遺跡(第10次)遺構分布図 (1/500)



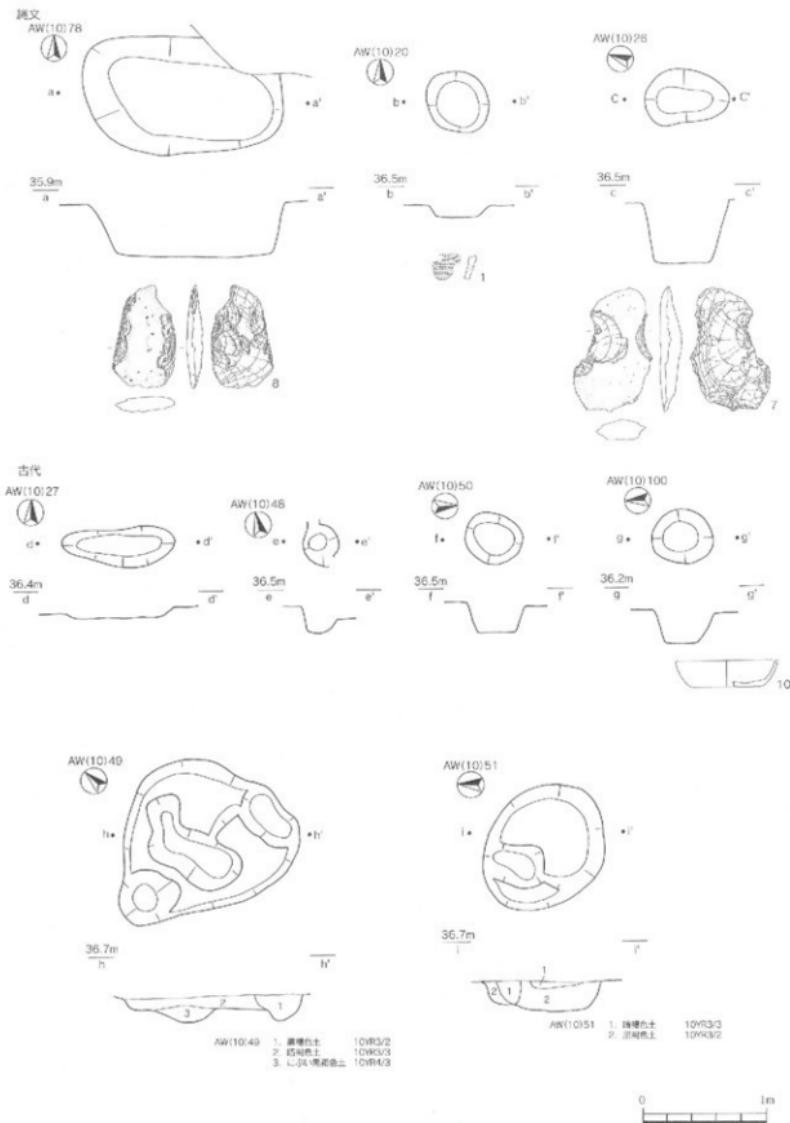
第9図 粿田遺跡(第10次)平面図(1) (1/200)



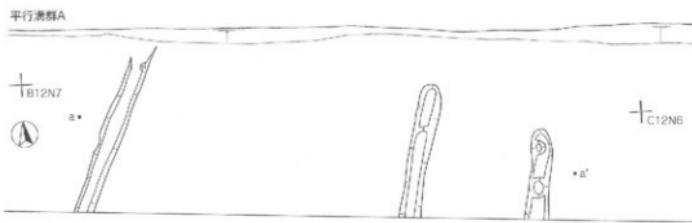
第10図 粟田遺跡(第10次)平面図(2) (1/200)



第11図 縄文・古代遺構全体図 (1/500)



第12図 遺構実測図 ピットAW(10)20・26・27・48・49・50・51・100、土 坑AW(10)78 (1/40)



36.2m
a ————— a'

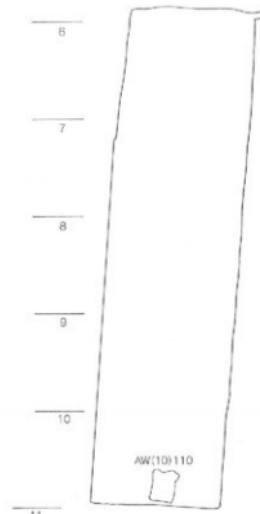


37.0m
b ————— b'
37.0m
c ————— c'

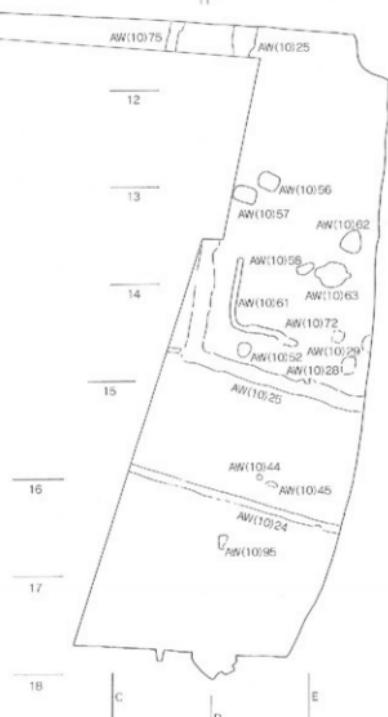
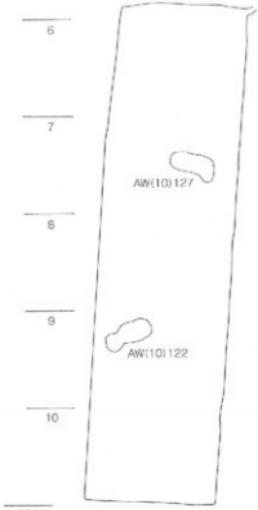


第13図 遺構実測図 AW(10)平行溝群 (1/80)

中世

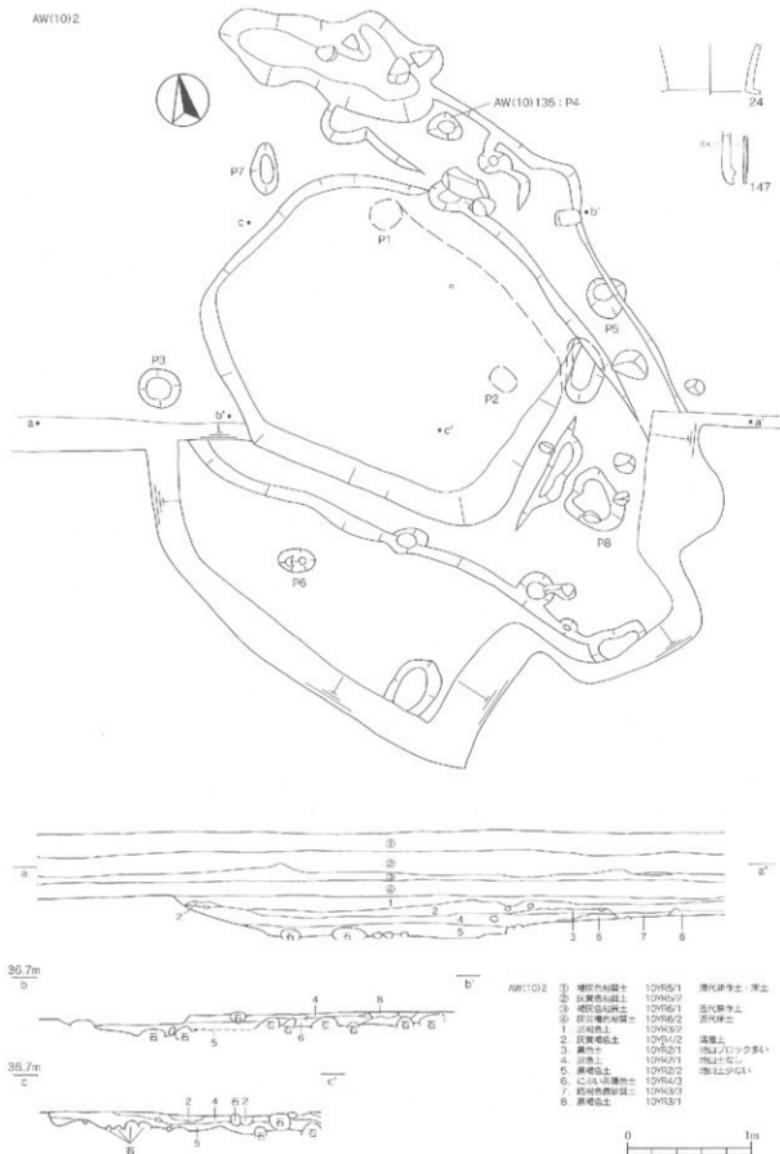


近世以降



第14図 中世・近世以降遺構全体図 (1/500)

AW(10)2



第15図 遺構実測図 積穴建物AW(10)2 (1/40)



36.7m
a

a'

36.7m
b

b'

36.6m
c

c'

36.6m
d

d'

36.6m
e

e'

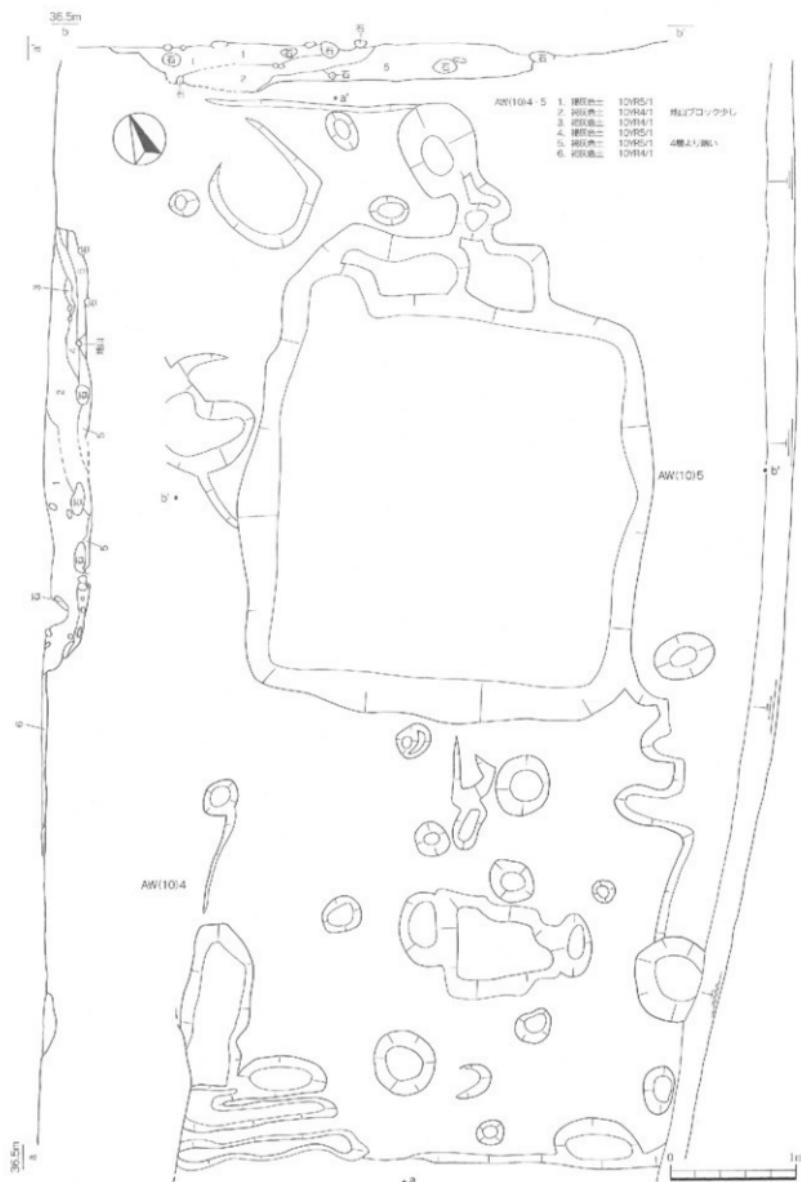
AW(10)3-P1
1. 黄褐色土 10F3/2
2. 黑色土 10F4/2

AW(10)3-P2
1. 黑褐色土
2. 暗褐色土
3. 淡黄褐色土

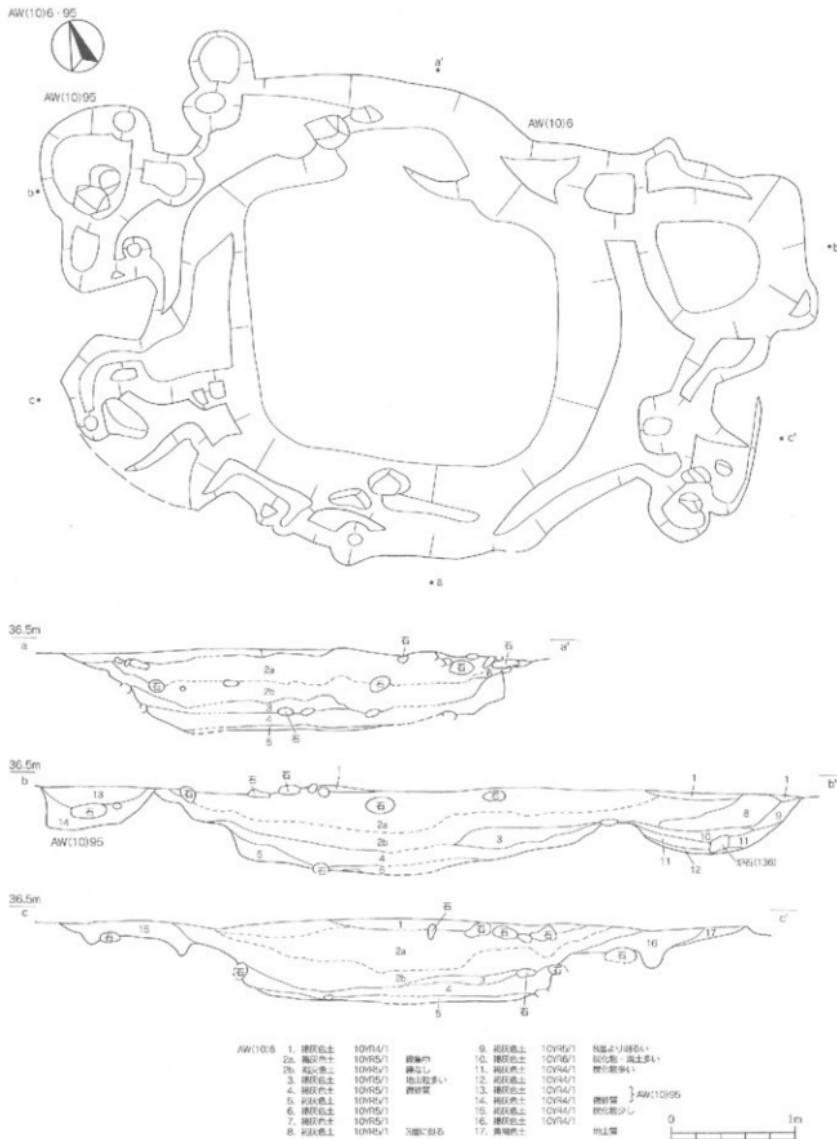
AW(10)3-P3
1. 淡黄褐色土
2. 黑色土
3. 淡黄褐色土
地山ブロック多い

0 1m

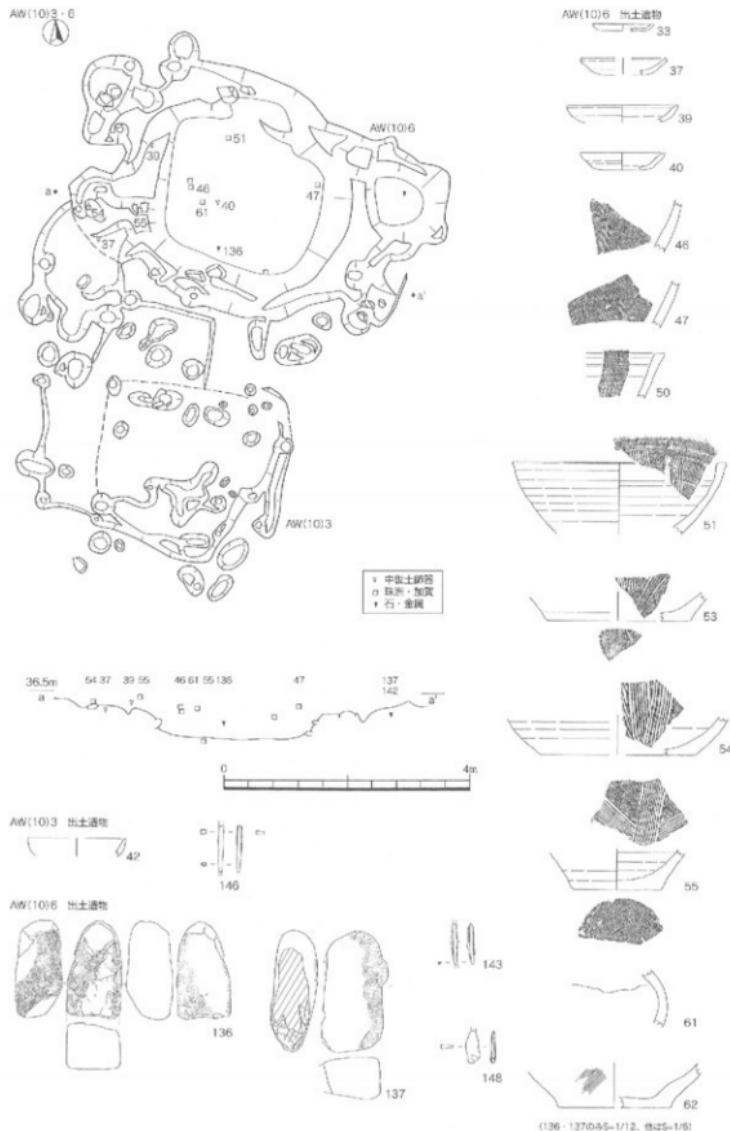
第16図 遺構実測図 積穴建物AW(10)3 (1/40)



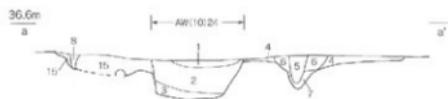
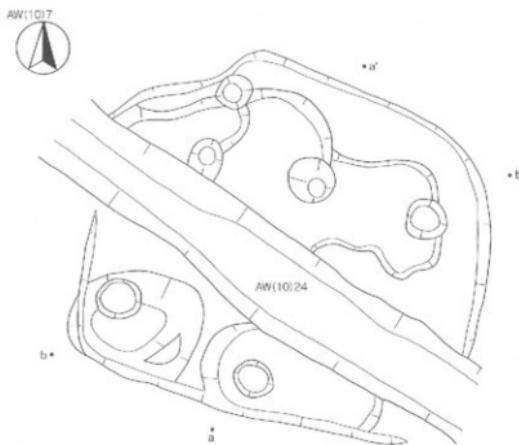
第17図 遺構実測図 壁穴建物AW10.4・壁穴状遺構AW10.5 (1/40)



第18図 遺構実測図 穴状遺構AW(10)6 (1/40)



第19図 遺物出土状況 積穴建物AW(10)3・6 (1/80)

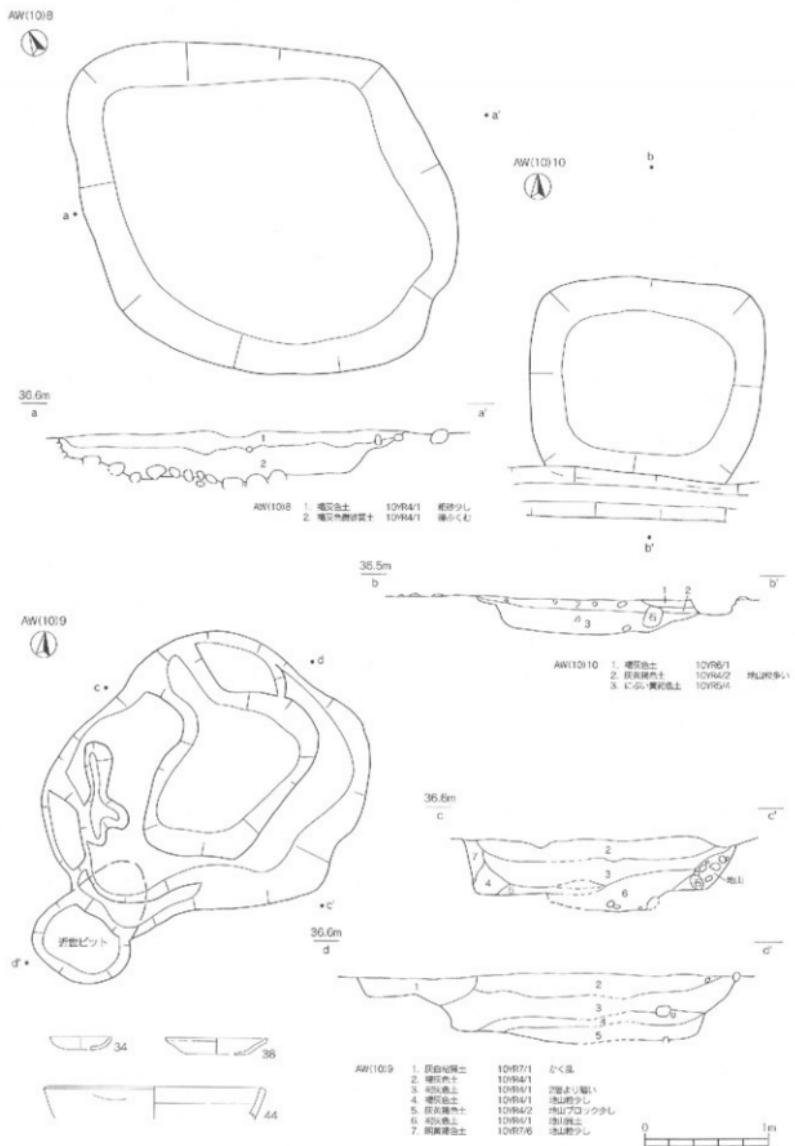


	AW(10)7	AW(10)24
1.	軟弱多孔隙土	12R6v1
2.	軟弱セメント土層	12R5v1
3.	軟弱多孔隙土	12R5v1
4.	弱硬風化土	12R4v1
5.	弱硬風化土	12R4v1
6.	弱硬風化土	12R4v1
7.	灰質弱硬風化土	12R6v2
8.	無機性土	12R3v2
9.	無機性土	12R3v2
10.	無機性土	12R3v2
11.	無機性土	12R3v2
12.	無機性土	12R3v2
13.	無機性土	12R3v1
14.	無機性土	12R3v3
15.	弱硬風化土	12R3v3

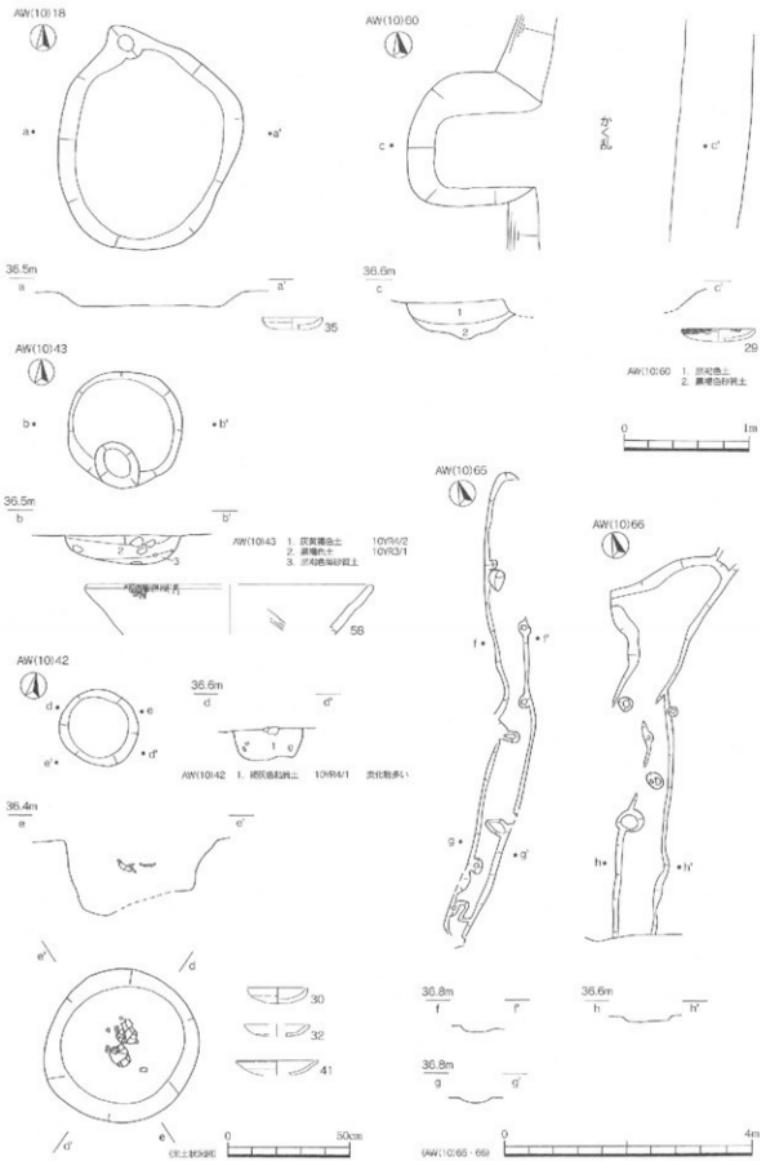
柱山ブロック多い
柱山石多い



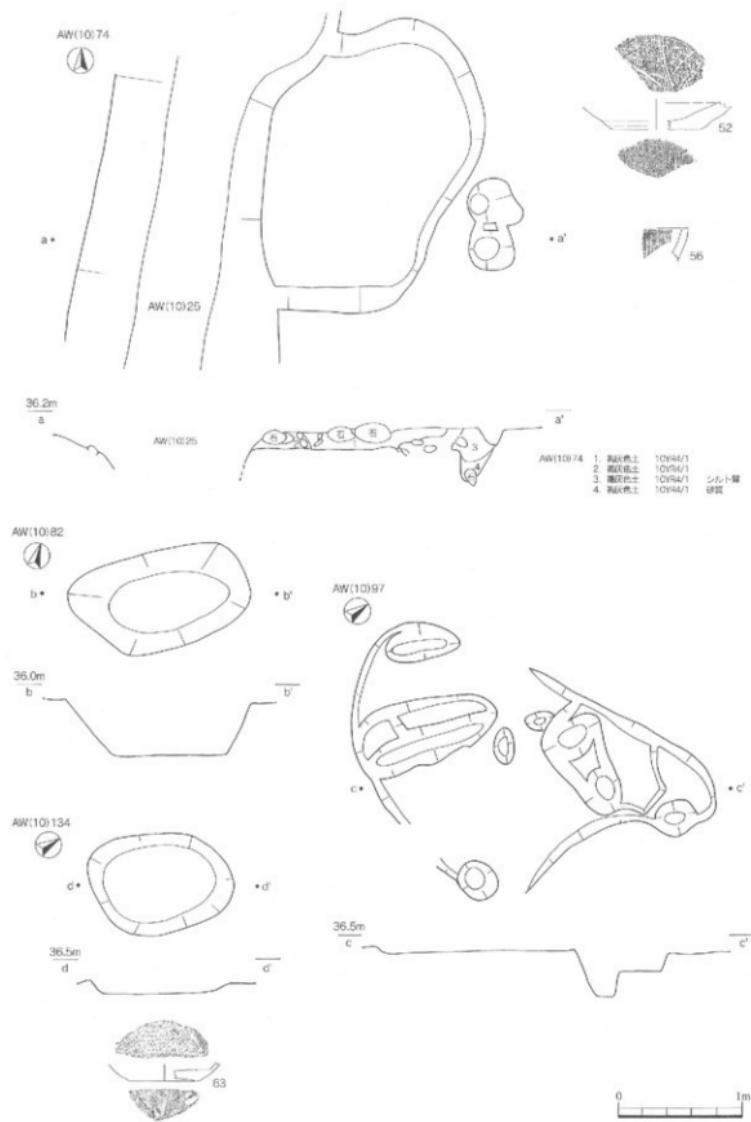
第20図 透構実測図 壁穴建物AW(10)7 (1/40)



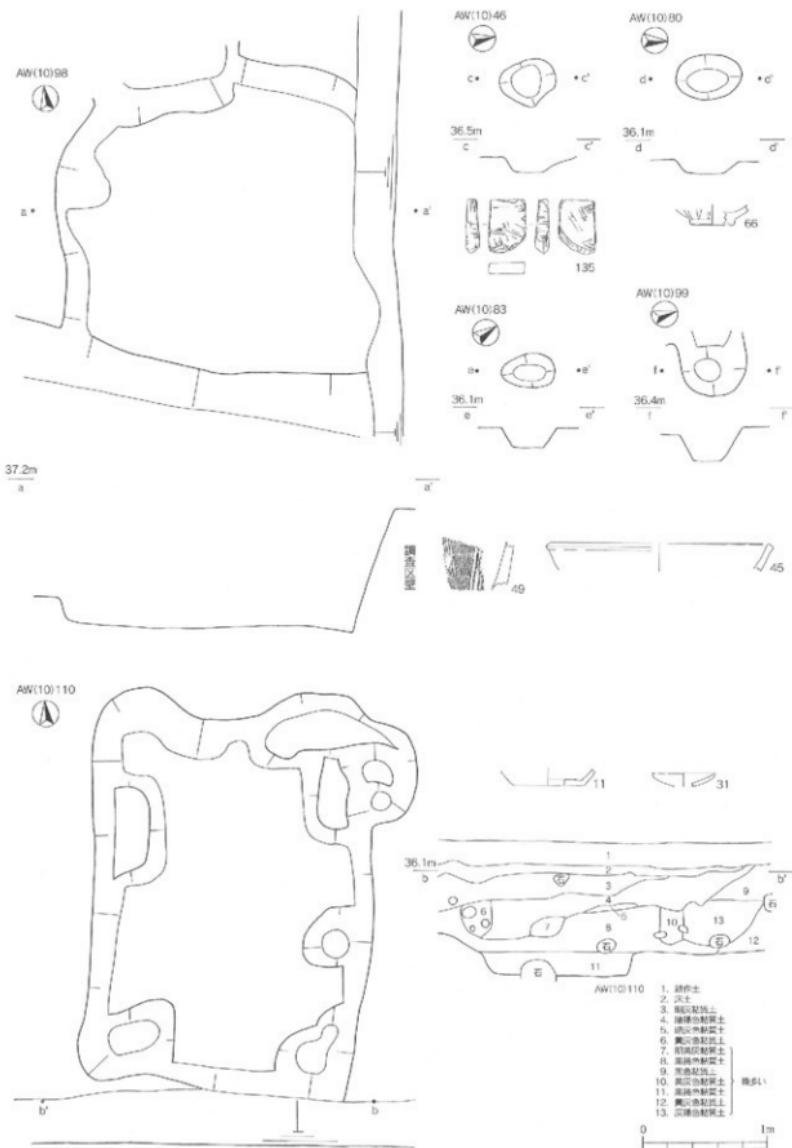
第21図 遺構実測図 坪穴状遺構AW(10)8、土坑AW(10)9・10 (1/40)



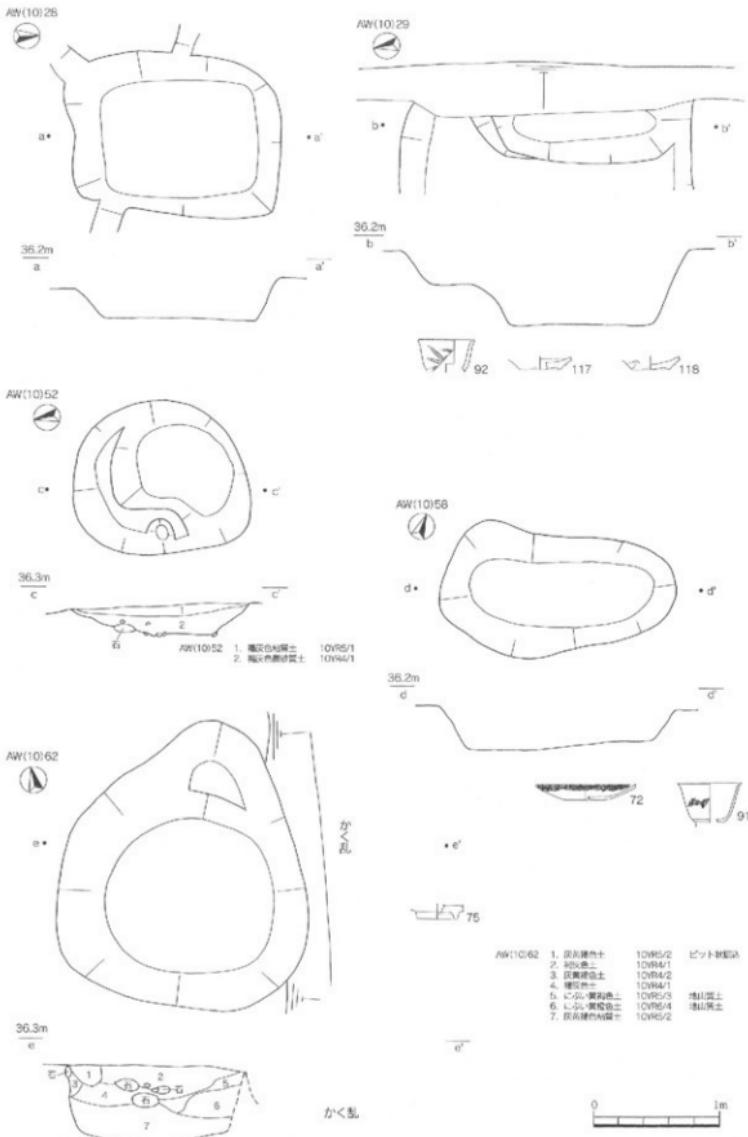
第22図 遺構実測図 土坑AW1018・43・60、溝AW1065・66、埋納遺構AW1042 (1/80、1/40、1/20)



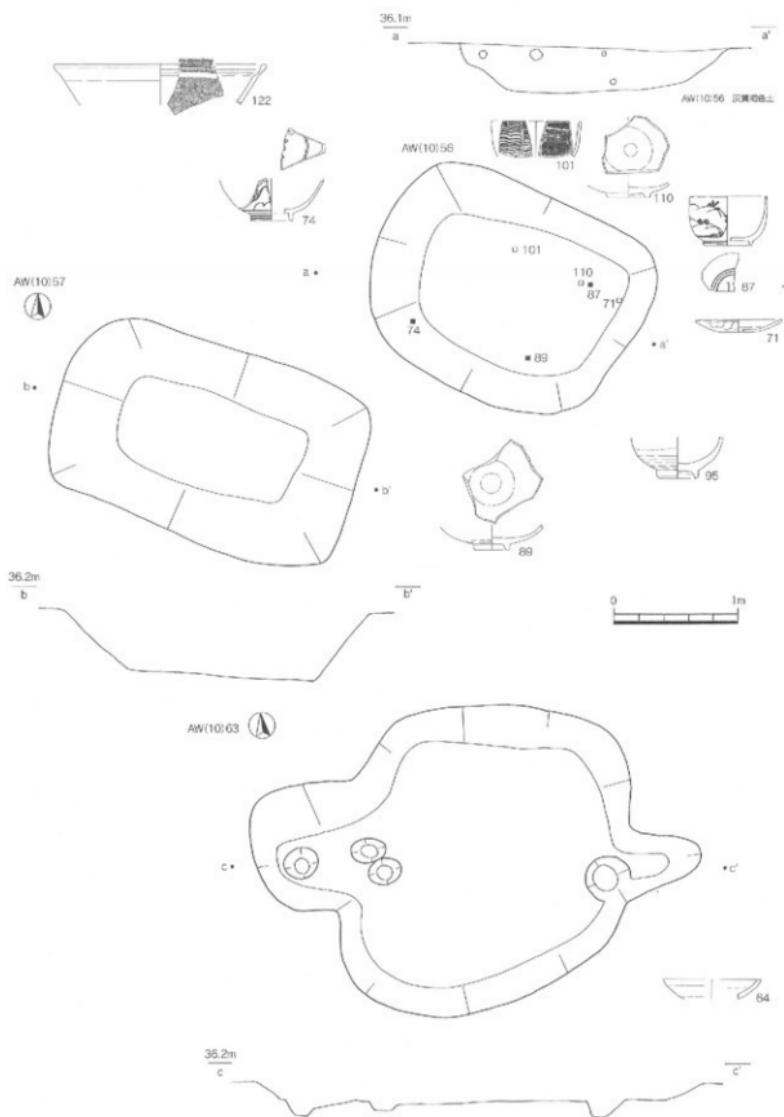
第23図 造構実測図 土坑AW10/74・82・97・134 (1/40)



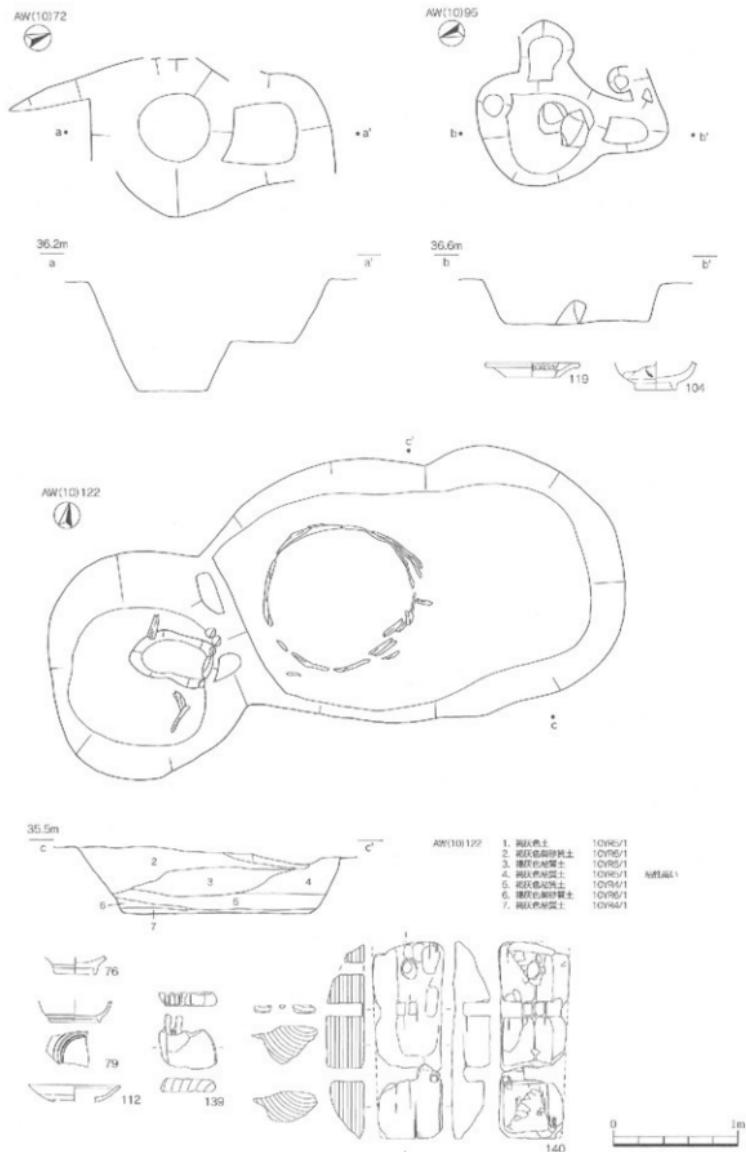
第24図 遺構実測図 土坑AW(10)98・110、ピットAW(10)46・80・83・99 (1/40)



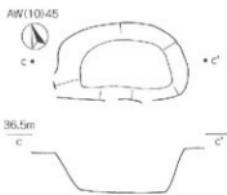
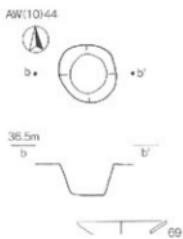
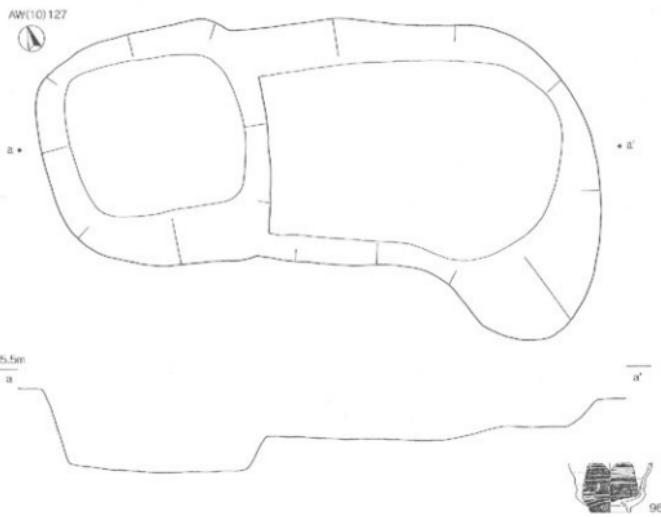
第25図 遺構実測図 土坑AW10/28・29・52・58・62 (1/40)



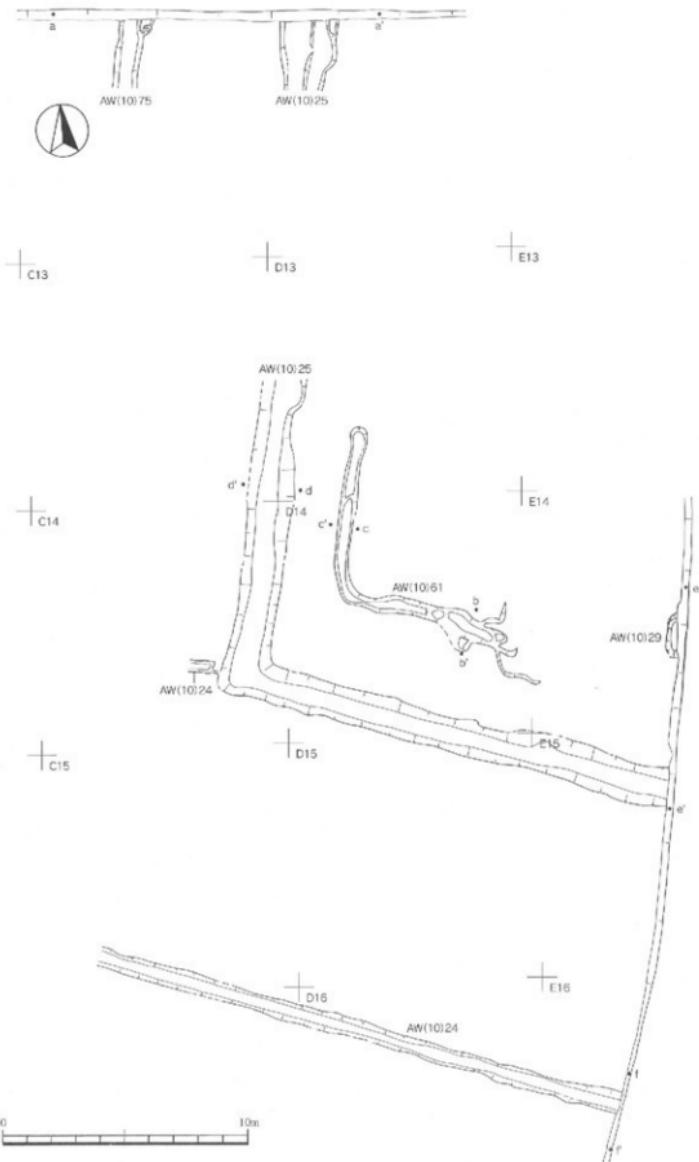
第26図 遺構実測図 土坑AW10/56・57・63 (1/40)



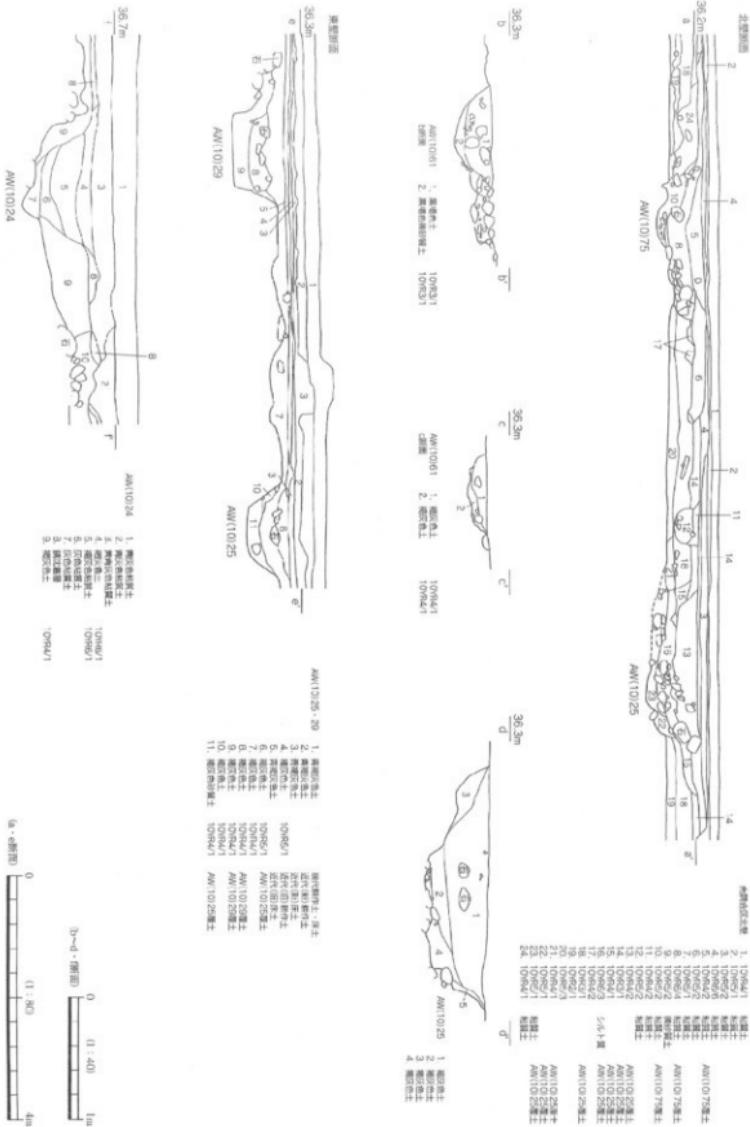
第27図 遺構実測図 土坑AW1072・95・122 (1/40)



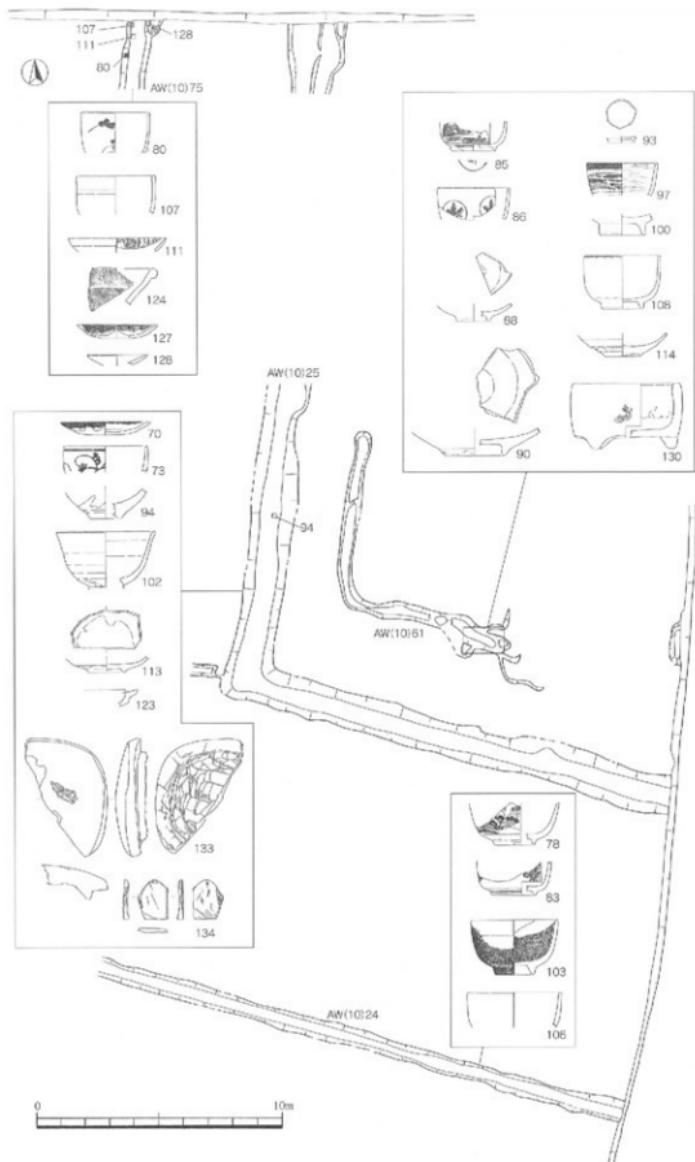
第28図 遺構実測図 土坑AW(10)127、ピットAW(10)44・45 (1/40)



第29図 遺構実測図 溝AW(10)24・25・61・75(1) (1/200)



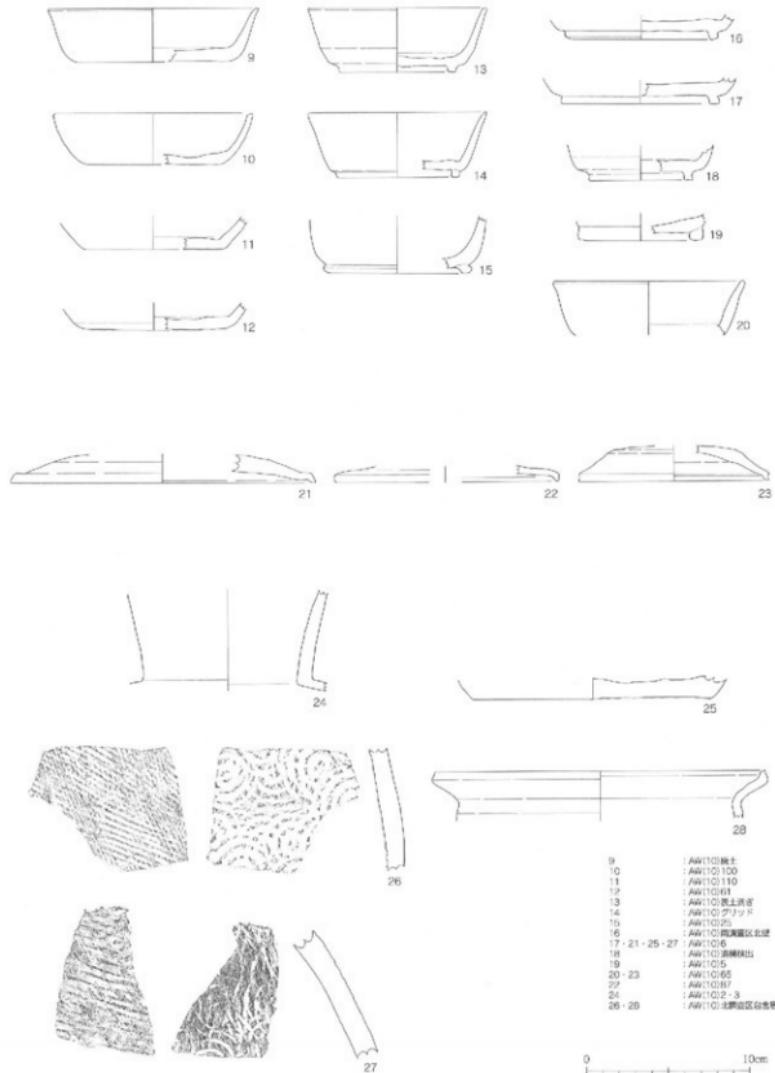
第30図 遺構実測図 満AW(10)24・25・61・75(2) (1/80、1/40)



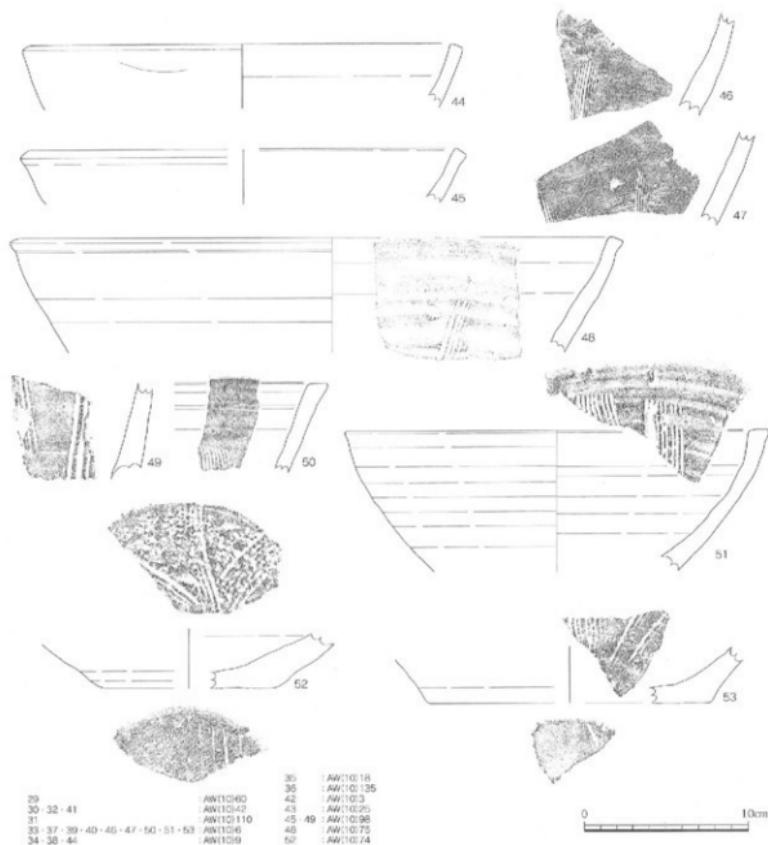
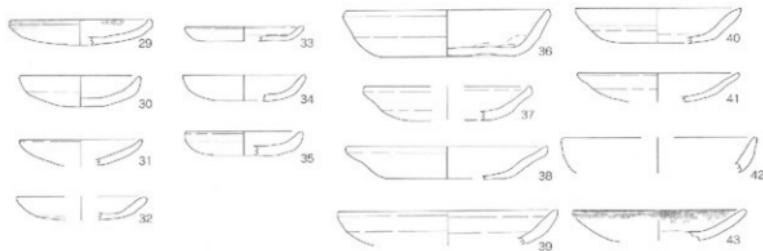
第31図 遺物出土状況 溝AW(10)24・25・61・75 (1/200)



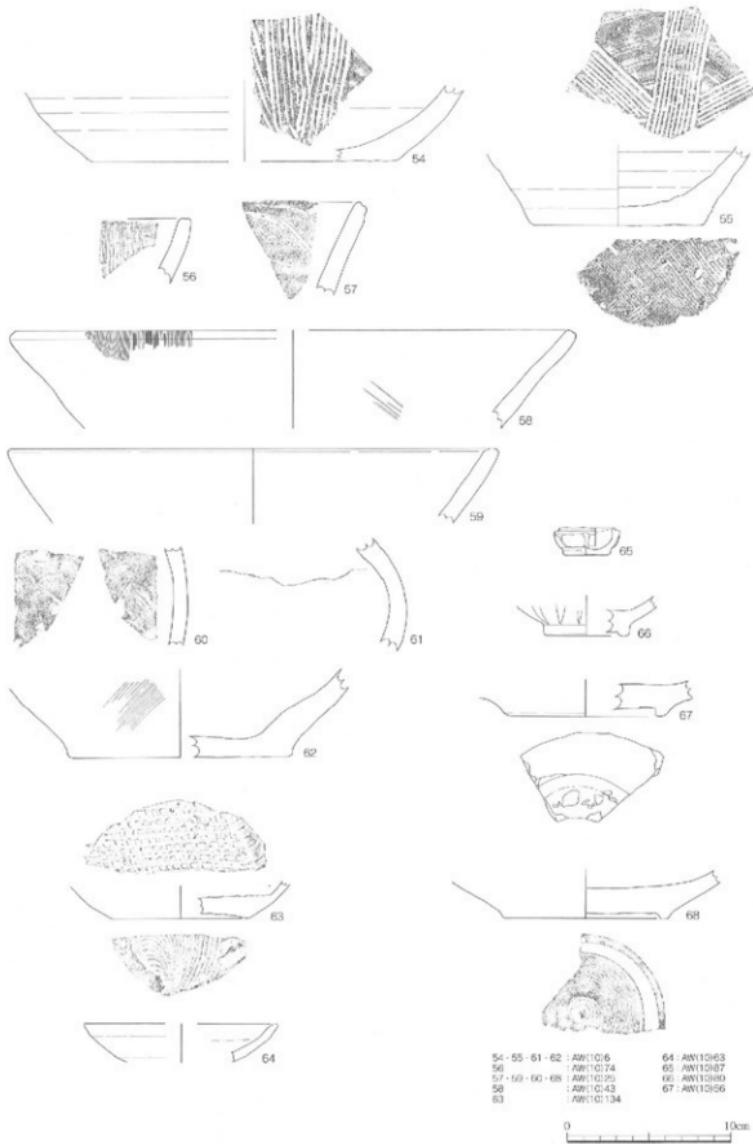
第32図 粟田遺跡(第10次) 遺物実測図(1) (1/3)



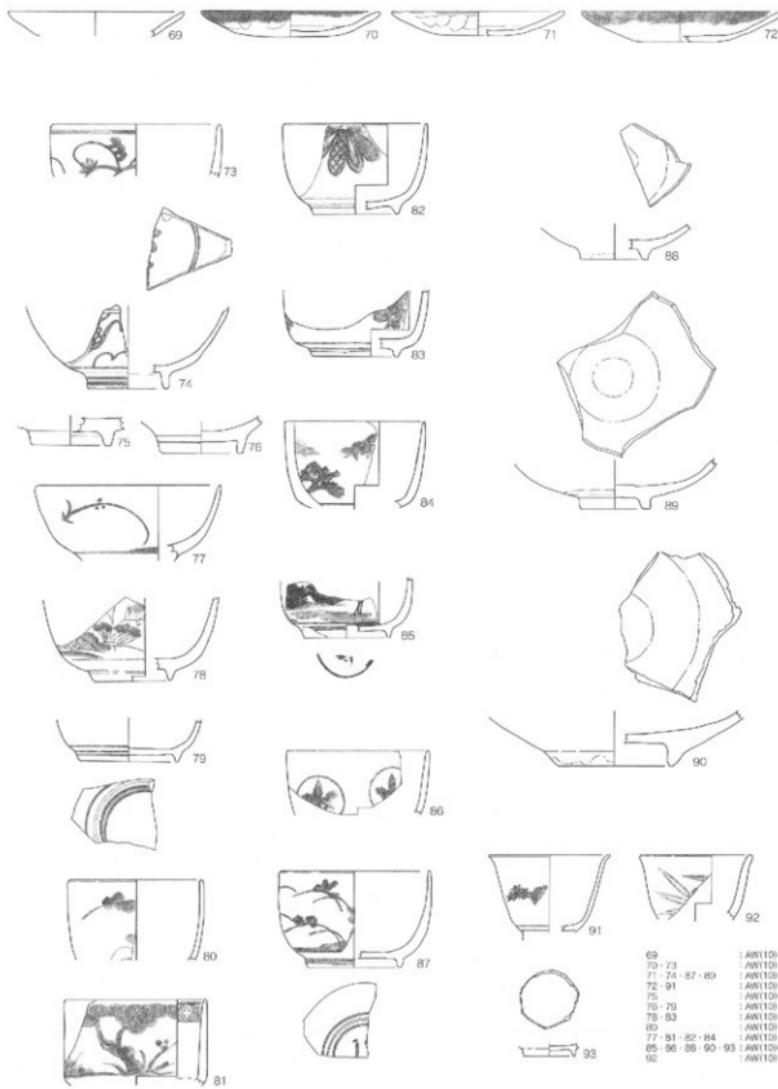
第33図 粟田遺跡(第10次) 遺物実測図(2) (1/3)



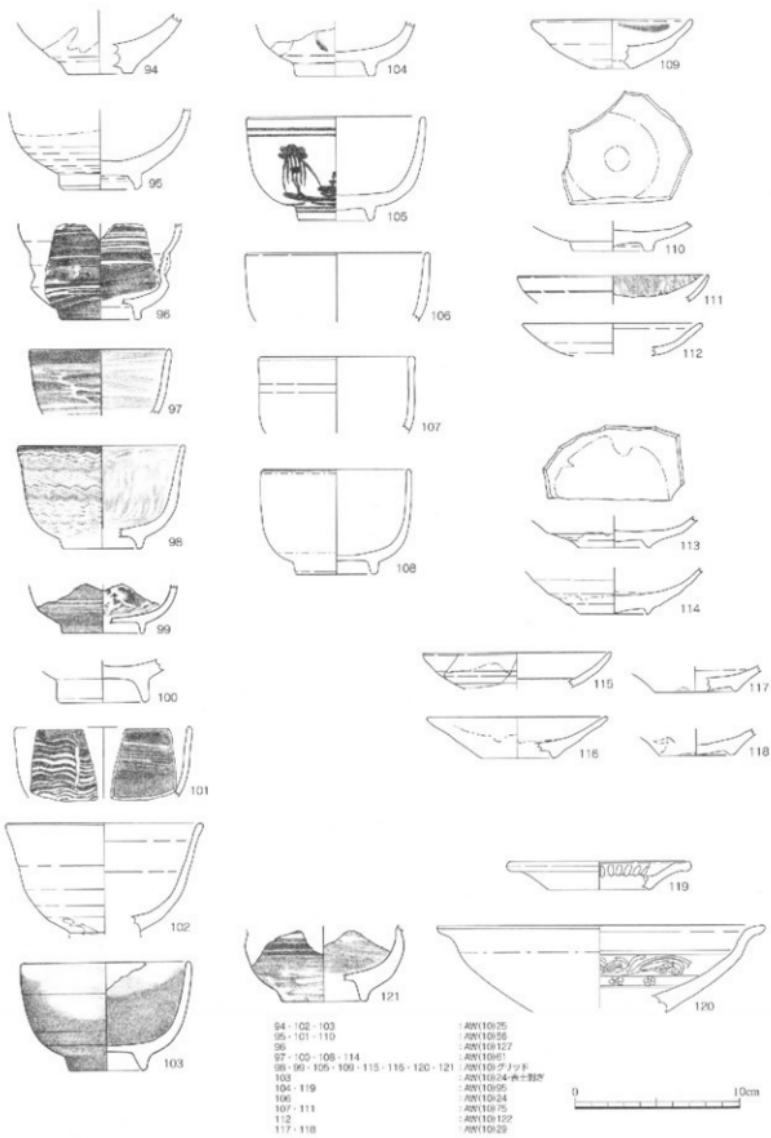
第34図 粟田跡(第10次) 遺物実測図(3) (1/3)



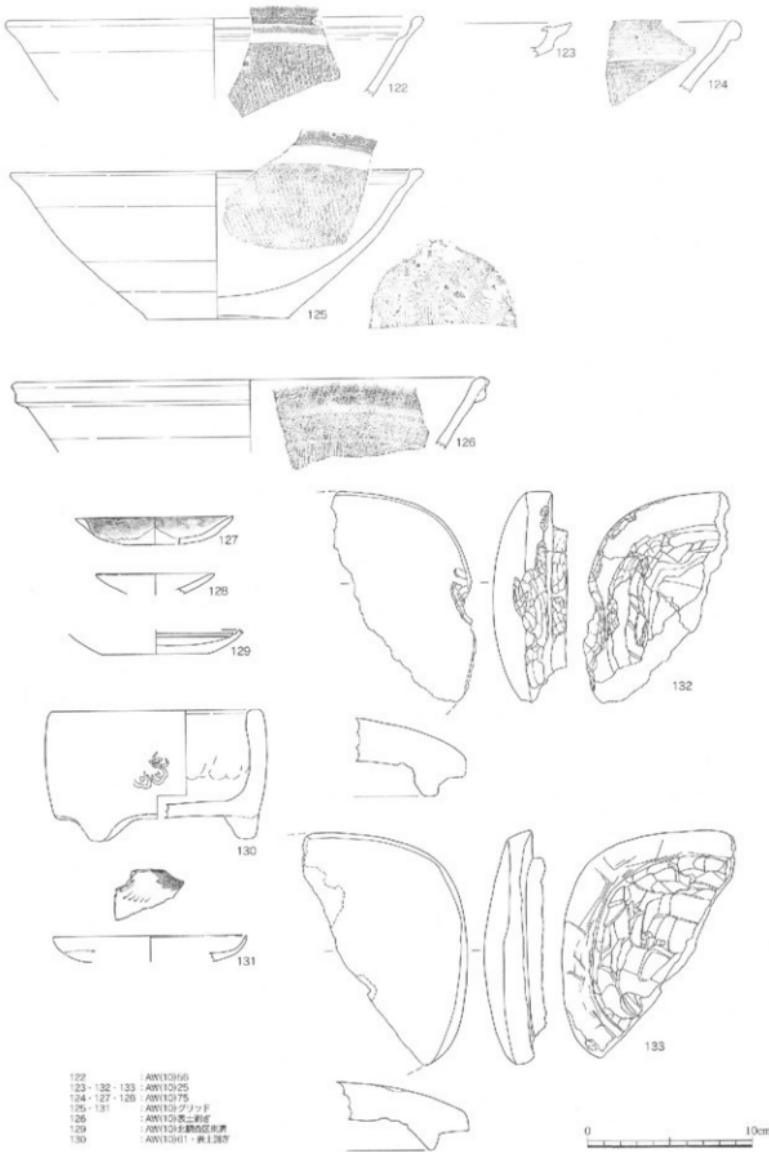
第35図 粿田遺跡(第10次) 遺物実測図(4) (1/3)



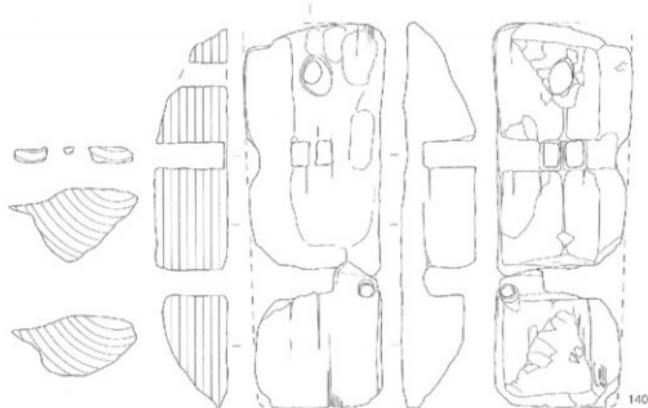
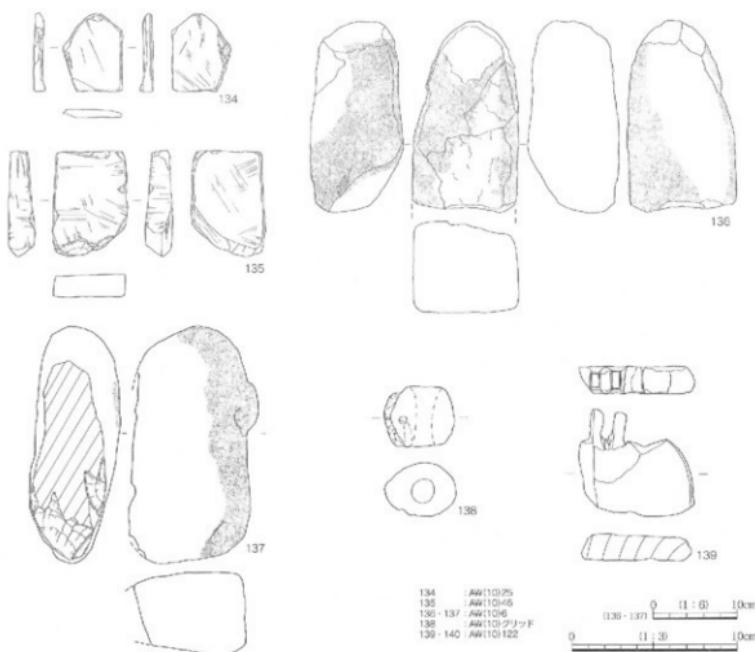
第36図 栗田遺跡(第10次) 遺物実測図(5) (1/3)



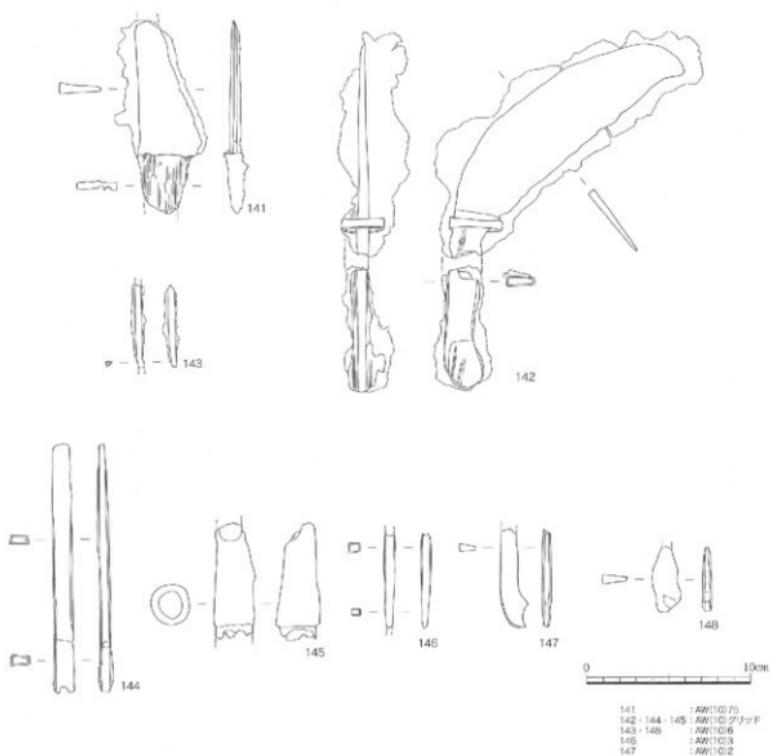
第37図 栗田遺跡(第10次) 遺物実測図(6) (1/3)



第38図 粟田遺跡(第10次) 遺物実測図(7) (1/3)



第39図 栗田遺跡(第10次) 遺物実測図(8) (1/3, 1/6)



第40図 粟田遺跡(第10次) 遺物実測図(9) (1/3)

第5章 三納アラミヤ遺跡(第1・2次調査)

第1節 遺跡の概要(第49・50・52・53・69・73・75・76図)

当遺跡は古代を主体とし、縄文・中世・近世・近代以降の遺構・遺物も確認されている。調査区のほぼ全域で遺構が検出され、第1次調査区では古代の集落跡・旧河川や近世の水田、第2次調査区では古代の旧河川と中世の利水遺構を確認している。なお、第1次調査区は用水路により調査区が南北に分断されているため、5グリッドラインより北を北調査区、南を南調査区と呼称する。

縄文時代は第1次調査区で旧河川、第2次調査区で旧河川と石器の製作跡が確認された。打製石斧・土器が出土している。

古代の遺構・遺物は第1次調査区で掘立柱建物・竪穴建物・土坑・ビット・溝・道路状遺構・旧河川が、第2次調査区では旧河川が検出された。建物や土坑はそれぞれまとまりをもって検出されており、計画的に集落が形成されたことが考えられる。遺物は須恵器・土師器を主体とし、鉄滓も少量出土した。

中世は、第2次調査区で利水遺構・溝が検出されている。中世土師器・輸入磁器・加賀が出土した。

近世は第1次調査区で水出しと利水遺構が検出された。遺物は肥前の碗・皿や壺類で、いずれも少ない。

近代以降は、第1次調査区で水門跡と旧河川が、第2次調査区で溝が検出された。遺物は碗皿類などが出土している。

第2節 遺構

(1)縄文時代の遺構(第49~51・65・68図)

a)河川

SA(1)131(第49・65図、図版17)

W8~11グリッドに位置し、第1次調査区の中央付近を南東から北西に横断する。確認された最大長は約37m、幅7mだが、これは古墳時代以前の河川と古代の河川がほぼ同一地点で重複しているため、古墳時代以前は西側3m部分が相当する(古代の河川部分については後述する)。W8~9グリッド部分は未掘削のため深度は不明であるが、確認できたところでは深度1.2~1.4mである。覆土は暗褐色土を主とし、一部に黒褐色土が見られる。遺物は縄文土器(1・3~7・11)、打製石斧(17・27・28)である。

SA(2)1(第50・68図、図版17)

W~X20~27グリッドに位置し、第2次調査区の南側はほぼ全域で南北に検出された。この遺構もSA(1)131と同じく古墳時代以前の河川と古代の河川が重複しており、古墳時代以前に相当する部分が若干幅広く、深い。調査区の制約のため確認はできないが、SA(1)131とSA(2)1は蛇行して北流する同一の旧河川であると思われる。確認できた地点では、長さ80m、最大幅8m、最も深いところで1.5mを測る。覆土は第68図a断面(調査区南壁)で第16~25層、第68図b断面では第21~26層に相当し、暗褐色土に一部シルト質や地山ブロックを含む。縄文土器(10)、打製石斧(19~22・30~32)が出土した。

b)石器製作跡

SA(2)325(第51図、図版14)

W23グリッドに位置する。平面形は不整形で、径約3.5×3mを測るが、東側と南側の遺構の立ち上がりは不明瞭である。床面は凹凸が激しく、深度は10~30cmである。覆土は黒褐色土をベースとする。打製石斧(26)のほか、石器製作に伴うと見られる剥片が多く出土した。なお、この遺構は上層を旧河川SA(2)1によって削平されており、その際に混入したと見られる須恵器・土師器が確認された。

(2)古代の遺構(第52~68図)

a) 挖立柱建物

当遺跡では古代の建物跡は掘立柱建物と竪穴建物の2種類が確認された。竪穴建物どうしは重複がなく、出土遺物の時期差もほとんどないことから、ほぼ同時期と考えられる。掘立柱建物については出土遺物に乏しく、それぞれの前後関係は不明であるが、同一地点での建て替えと見られ、掘立柱建物どうしは大きく前後しない時間に建てられたと考えられる。

1号掘立柱建物：SA(1)①(第54図、図版14)

W12~13グリッドに位置する3×2間の側柱建物である。平面形は若干歪んでいる。最大長軸6.6m、短軸5.4mで平面積35.64m²、軸はN-10°-Wである。構成ピットはSA(1)105・107・108・123・125・232・236・SA(1)①-P1・P2・9-P8で、南側桁のSA(1)9-P8が若干南にずれる。ピットの平均径が最も大きいのはSA(1)105で径76×64cm、小さいものはSA(1)108で径50×40cmを割り、最も深いものはSA(1)105で38cm、浅いものはSA(1)125で11cmである。ピットの平均径は約58cm、深度約27cmとなる。柱間はSA(1)9-P8とSA(1)105間の2.9mが最も長く、最も短いのはSA(1)123とSA(1)232間の2mである。覆土は暗褐色土と暗灰色土を主とする。SA(1)①-P2が3号竪穴建物SA(1)121と重複しており、SA(1)121が古く、SA(1)①-P2が新しい。遺物は、SA(1)123横のピットから須恵器無台杯(41)・盤(127)、土師器釜(207・211)が、SA(1)232から須恵器無台杯(39)が出土した。41が岡崎編年IV 2(古)期、39がIV 2期と考えられる。

2号掘立柱建物：SA(1)②(第55図、図版14)

W12グリッドに位置する3×2間の側柱建物である。最大長軸4.4m、短軸4.2m、平面積18.48m²で、軸はN-9°-Wである。構成ピットはSA(1)109・111・119・122・126・127・129で、西側梁が欠ける。ピットの平面形が最も大きいのはSA(1)126で小さいのはSA(1)122、深度が最も深いものはSA(1)111、浅いものはSA(1)119である。ピットの平均径は約56cm、平均深度が28cmである。柱間は最も長いところがSA(1)119とSA(1)122の間の2.12m、短いのはSA(1)109からSA(1)129の1.38mである。覆土は暗褐色土を主とする。碎片のため実測していないが、ピットSA(1)111から土師器釜片が出土している。

3号掘立柱建物：SA(1)③(第56図、図版14)

W12~13グリッドに位置する、3×1間の側柱建物である。平面形は長方形を呈し、最大長軸4.8m、短軸3.75m、平面積18m²、軸はN-9°-Wである。構成ピットはSA(1)104・106・128・9-P19・P20・③-P1・P2・P3である。ピットの平面形が最も大きいのはSA(1)9-P20、小さいものはSA(1)③-P2で、深度が深いのはSA(1)9-P20、浅いものはSA(1)③-P1であるが、SA(1)③-P1はSA(1)6と重複している。柱間は最も長いところが梁の3.75m、短いのはSA(1)③-P1・2間とSA(1)③-P3・SA(1)128間の130cmである。遺物はない。

b) 竪穴建物

1号竪穴建物：SA(1)9(第56~58図、図版14・15)

W12~13グリッドに位置する。東側を近代以降の溝SA(1)6に切られ、南東隅のSA(1)9-P1部分以外、東側の遺構の肩は遺存していない。遺存部分から考えると平面形は長方形で、長軸9.2m、短軸3.3mである。覆土は暗褐色土を主とし、部分的に地山質の多い褐色土が見られる。第5・6層はSA(1)9の覆土であり、第7層は床充填土の可能性がある。第11層は硬化面で、貼り床が部分的に観察された。なお、第5層は遺構の北側に多く、第6層は南側に多いことから、当遺構はふたつの竪穴建物が南北に重複している可能性がある。焼土や炭化物は見られず、カマドの所在は不明である。当遺構は床面上に多数のピットが確認されるが主柱穴を構成するものは不明である。他に、遺構の西側に並んで検出されたSA(1)109・237などもあり、これらもSA(1)9に関連するもの(出入り口)となる可能性があると思われる。床面のピットは小型で浅いものが多い。P7は竪穴の南西隅に掘り込まれた土坑である。覆土の堆積状況から本竪

穴に伴う遺構として理解できる。須恵器有台杯(92)、土師器楕(176)・釜(188・191・196・220)・小釜(184)、鉄釘(290)が出土した。遺物の時期は田嶋編年Ⅱ～Ⅴ期にわたるが、遺構の時期は、Ⅴ期である196が上層の出土であり、主体となる時期はこれ以前と思われる。

2号竪穴建物：SA(1)120（第59・60図、図版15・16）

U～W11グリッドに位置する。西側が調査区壁にかかり、全体は明らかではない。確認できた部分で南北4m、東西2.8mである。覆土は暗褐色土を主とし、貼り床と考えられる硬化した第8層が確認された。また、遺構の南側に張りだした部分のうち、a・cに特に焼土と炭化物が多いため、この部分がカマドである可能性が高い。一方、当遺構の中央部分で検出された焼土については、床面との間に間層を持つことから、当遺構が廃絶した後のものである可能性がある。床面上では浅めのピットが東側と北側壁面に添って多数検出されている。ピットの径は20～30cmで深度は5～15cm。覆土は暗褐色土を中心とする。遺物は覆土中から多数出土している。このうち、須恵器無台杯(55)・有台杯(87・114)と土師器釜(189・190・192・193・195・202・205・212・213・214・215・216・219)・小釜(183)を図示した。遺物の時期は1号竪穴建物SA(1)9と同じくⅡ～Ⅴ期にわたるが、床面近くから出土しているものはⅢ～Ⅳ期が多いので、遺構の時期はⅡ～Ⅲ期となろう。

3号竪穴建物：SA(1)121（第59・60図、図版16）

W12グリッドに位置し、西側が調査区壁にかかるため、全体は明らかでない。確認できた部分で南北3.3m、東西1.4mである。覆土は暗褐色土を主体とし、地山土粒が混入する層と炭化物や焼土が混入する層が確認される。特に焼土が多く確認された南側の第15層は面的な広がりを持つことからカマド部分に相当し、さらに第10層部分は煙道と考えられる。床面は、調査区壁側に一部硬化面が見られた他、北端に、焼土の入る一段下がった土坑状の部分が検出された。床面にピットは少ない。1号掘立柱建物SA(1)①～P2と重複しており、前後関係では3号竪穴のはうが古い。遺物は須恵器有台杯(100)・甕(173)、土師器釜(218)が出土している。100はⅣ2(古)期と考えられる。

c) 土坑

当遺跡の土坑は、掘立柱建物・竪穴建物の北東側、SA(1)131の西岸に集中する傾向が高い。

SA(1)4（第61図、図版16）

W14グリッドに位置する。東側が調査区壁に掛かるため全形は明らかでないが南北180×東西90cm、深度10cmである。覆土は暗褐色土を主とする。土師器釜(200・203)・小釜(185)、鉄滓(286)が出土した。200・203はいずれも田嶋編年のV期と考えられる。

SA(1)5（第61図）

W14グリッドに位置する。この地点に焼土や遺物が集中して検出されており、これらをまとめた。焼土は3地点確認される。焼土1は径40cm程度の硬化面の中央に強い焼け込みがあり、土師器釜(197)が出土した。焼土2は径30cm程度でオレンジ色の強い焼け込みが確認されている。焼土3は長さ50cm、幅10cm程度の細長い形状をしており、焼け込みは弱い。焼土2・3に遺物はない。この焼土3の西側に遺物集中地点があり、暗褐色土を主とした層に土師器釜(208)が出土している。197はⅢ期と考えられる。

SA(1)132（第61図、図版16）

W12グリッドに位置する。平面形は不整形で、径132×120cm、深度25cmを測る。覆土は暗褐色土を主とし、第3層に炭化物を多く含む。土師器釜(199)と須恵器の碎片が出土した。V期と考えられる。

SA(1)138（第62図、図版16）

W11グリッドに位置する。平面形は不整形で径260×194cm、深度40～69cmを測る。覆土は暗褐色土を主とし、第6層には地山ブロックが多く混入する。須恵器有台杯(88)・杯蓋(137)、土師器釜(217)が出土した。

SA(1)149（第62図）

W11グリッドに位置する。平面形は略三角形をなすが、南側は近代以降の溝SA(1)6と重複し、全体は不明である。南北290cm、東西150cm、深度約10cmを測る。碎片のため図示していないが⁵、土師器釜片が出土した。

SA(1)157（第62図）

W11グリッドに位置する。平面形は梢円形を呈し、径100×56cm、深度14cmを測る。碎片のため図示していないが⁵、土師器釜片が出土した。

d) ピット群：SA(1)南側集中区（第52図）

第1次調査区において、1号竪穴建物SA(1)9の南側と道路状遺構SA(1)3の間、約15メートルにわたる区間にピットが集中している。これらは不規則に分布し、建物を構成するには至っていないため、ピット群として報告する。遺物が出土した遺構を中心にSA(1)14・20・22・25・28～31・70を図示した。平面形は梢円形を呈し、径は40～50cm、深度10～30cmのものが多い。覆土は暗褐色土を主とし、黒褐色土・褐色土も見られる。遺物は須恵器・土師器の他、縄文時代の土器や打製石斧が混入している。このうち、SA(1)14出土の鉄滓（287）、SA(1)30出土の打製石斧（14）、SA(1)25出土の須恵器無台杯（54）、SA(1)28出土の須恵器無台杯（53）・土師器小釜（186）、SA(1)29出土の土師器釜（209）を図化した。いずれも碎片のため時期は不明である。これらのピット群は、掘立柱建物や竪穴建物から離れた場所にあり、後述する道路状遺構と同時期の所産と考えられよう。

e) 旧河川

SA(1)131（SA(1)224含む）（第52・64～66図、図版17）

U～W8～12グリッドにかけて確認される北北西に流下する旧河川である。第2節(1)で述べたように、当遺構は古墳時代以前と古代の旧河川部分が重複しているW10グリッドのみ最下層まで掘削を行い、他はトレンチを入れ層序を確認するに留めた。長さ約40m、最大幅約8m、最大深度約1mを測る。覆土は大きく上層・中層・下層、最下層（古段階）に分けられ、最下層からは繩文土器が出土し、上層～下層までは古代の遺物が出土しているため、上層～下層は古代、最下層は縄文時代～古墳時代と考えられる。下層は疊層の上にシルト層があり流景豊富な河川であったと考えられ、この層に最も遺物が多い。中層上面は遺物集中区SA(1)224（後述）のほか、完形に近い土器が多い。遺物は、第3節(1)で述べた縄文土器・石器のほか、須恵器無台杯（34～36・42・43・51・56）・有台杯（65・72・77～79・85・91・99・105・110・118・120・124）・盤（128）・杯蓋（133・136・139・146）・瓶類（148・150・151・154・158）・甕（167・168・172・174・175）、土師器楕（177・179・181）・釜（198・201）・小釜（187）が出土している。

SA(1)224はW9グリッドで確認された、旧河川SA(1)131内の土器集中地点である。ここでは、土師器鍋が正位に出土した他、その内部と周囲から須恵器・土師器供膳具が集中して出土した。このうち、須恵器無台杯（37・38）・有台杯（64・70・96）・杯（60）・盤（129）・杯蓋（141）・土師器楕（182）・鍋（222）、鉄滓（289）を図化している。

SA(2)1（第53・67・68図、図版17）

W20～27グリッドに位置し、北北東に流下する旧河川である。第2節(1)で述べたように、当遺構は古墳時代以前（古段階）と古代（新段階）が重複している。長さ80m、最大幅8m、深度1.9m、覆土は第68図a断面（調査区南壁）第2～15層、第68図b断面第1～20層が相当し、暗褐色土が主だが下層にいくほどシルト質が強くなる。a断面第15層やb断面第20層などの最下層には礫や砂と、古代の遺物が多い。須恵器無台杯（44～50・52）・有台杯（66・69・71・73～76・80～84・86・90・93～95・98・102～104・106・107・109・111～113・115～117・121～123・125）・杯（58・59・61）・杯蓋（134・135・138・140・143～145・147）・高杯（130・131）・壺（155・156）・壺蓋（132）・瓶類（149・152・153）・鉢（157）・甕（159・160・162・164～166・169～171）、土師器楕（178・180）・釜（194・204）・不明品（221）が出土している。

また攪乱部分から中世土師器(223)、肥前磁器皿(253)、土器用途不明品(275)、砥石(278)が出土した。なお、第3次調査区でSA(2)1の南側部分に古代の集落跡が確認されていることから、集落から河川への投棄によるものと思われる。

f) 道路状遺構

SA(1)2・3 (第63図、図版17)

W15グリッドに位置する。SA(1)2を南側の側溝、SA(1)3を北側の側溝とし、その間の長さ9m、幅3.5mの部分が道路と考えられる。溝の傾きはE-5°-Sで、SA(1)2・3はそれぞれ幅40~60cm、深度10~20cm。覆土は上層が暗褐色土、下層が黒褐色土である。遺物は須恵器無台杯(63)の他、碎片で須恵器有台杯、土解器釜が出土している。

(3) 中世の遺構 (第70~72図)

a) 溝

SA(2)119 (第72図、図版18)

W16~18グリッドにかけて位置する、長さ17m、幅120~200cmの溝である。一部、近世の遺構であるSA(2)182に切られる。深度35cm、覆土は褐灰色土で礫が多く入る。輸入青磁碗(227)と砥石(279)の他、混入品である打製石斧(15)、須恵器無台杯(40)が出土した。

b) 利水遺構

SA(2)120・205 (第69~72図、図版18)

SA(2)120はW19~22グリッドに位置する溝で、SA(2)205はV~W22~23グリッドに位置する不整形の土坑である。関連する遺構でありまとめて報告する。

SA(2)120は長さ32m、幅80~130cm、深度約10cmの溝で、W22グリッドでSA(2)205に接続する。北端は途切れるが、SA(2)119に向かっている。覆土は褐灰色土を主とし、下層に微量の砂と地山土ブロックを含む層が見られる。混入品の打製石斧(25)、須恵器有台杯(108)が出土した。

SA(2)205は南北10m、東西10mに亘る不整形の遺構で、東側に伸びる溝を持つ。底面は凹凸が激しい。覆土は暗褐色土を主とし、地山である黄褐色土がブロック状に含まれる層も確認された。最低でも2~3回の掘り返しがなされており、必要に応じて範囲を拡張していった状況が見て取れる。混入品の須恵器有台杯(89)・甕(163)が出土している。

全体として、SA(2)205を中心として東側と北側に延びる溝が作られている。この時期の旧河川は調査区内では検出されず、その規模や流路は明らかでないものの、近世の河川が、後述するようにSA(1)225、近代の河川がSA(1)252のように調査区東側で蛇行している状況が見えるので、中世においても概ね似たような流路であった可能性は高い。よって、近世・近代の旧河川SA(1)225・252のように調査区の東側に位置していたならば、東側の溝はこの河川から取水して水溜であるSA(2)205を通過、用水SA(2)120を経て水を誘導する利水施設と考えられる。他には、SA(2)205を舟着き場としてSA(2)120を舟用水路とする見方もあるが、舟が通過するにはSA(2)120が細いことや、SA(2)205の周囲や床面に栈橋や舟をもやうためのピットが見られないことから、蓋然性は低い。よってここでは利水施設と考えておきたい。

このような利水遺構は、野々市町では例が無い。同時期の水田・扇遺構こそ調査区内では確認できなかつたが、当遺跡で中世の居住施設が検出されなかつたことと、近隣の三納ニシヨサ遺跡・三納トヘイダゴシ遺跡では13~14世紀の集落跡が確認されていることから、当遺跡は周辺の三納ニシヨサ遺跡・三納トヘイダゴシ遺跡と関連した耕作域の可能性も考えられる。

(4) 近世の遺構 (第73・74図)

SA(1)250・251 (第74図、図版19)

第1次調査区の北調査区では、近世の水田遺構とそれと付随する用水と考えられるSA(1)250・251が検出されている。一連の遺構でありまとめて報告する。

SA(1)250は、V～W1～4グリッドに位置する。W3グリッドで検出された段差によって南北に区画されており、この段差から北側①は南北18m、東西7.5m、南側②は南北17.5m、東西は最大で7mを測る。U～W2グリッド付近には耕作痕と思われる小ピットが点在する。覆土は上層が当時の耕作土と床土、下層に薄く旧土壤の暗褐色土が残る。なお、溝SA(1)251の東側③には床土のみが検出された。肥前陶器碗(265)、九谷描鉢(269)のほか磁器小杯(248)が出土した。

SA(1)251は、W1～5グリッドに位置する溝である。長さ36m、幅は最大で1.6m、深度10～20cmである。両側に畦と考えられる幅1m程度の土手状の部分がありその間が溝となる。覆土は灰褐色土を主とする。瀬戸美濃鉢(225)、肥前磁器碗(228)、筑前陶器皿(266)、砥石(277)が出土した。

(5)近代以降の遺構(第75～79図)

a)土坑

SA(2)3(第76図)

T21グリッドに位置する。径1.8×1.5m、深度14cmで、覆土は青灰色粘土。碎片のため実測していないが、現代の磁器が出土した。

b)溝

SA(1)6(第77図、図版19)

W11～13グリッドに位置し北北西に流下する溝である。長さ23m、幅は最大で120cm、深度10cmである。途中で東西方向の現代の溝に切られる。覆土は上層が淡青灰色シルト、下層が青灰色粘土である。西側の古代の堅穴建物SA(1)9を切るかたちで造営されたため、近代以外の遺物も多く混じる。古代の須恵器無台杯(57)、有台杯(67・97・119・126)、杯(62)、甕(161)のほか、中世の加賀鉢(224)、近世以降の肥前磁器碗(232)・皿(252)、肥前陶器皿(267)、産地不明磁器碗(243・244)、陶器土瓶(268)、越前甕(272)、鉄釘(291)、寛永通宝(294)、土鍤(282・283)、砥石(276)が出土した。

SA(2)101(第75・76図)

W15～16グリッドに位置し、第1次調査ではSA(1)1として確認されていた。長さ15m、幅120cm、深度10cmを測る溝である。覆土は青灰色微砂土。遺物は第1次調査で土鍤(280・281)、甕(293)が、第2次調査で石巖(12)、近世以降の磁器碗(242)・豆碗(258)が出土した。

SA(2)480(第75・76図)

V21～22グリッドに位置する。径400×120cm、深度5cmの土坑に長さ7.5m、幅80cm、深度20cmの溝がT字状に接続する。肥前磁器碗(229・236)、肥前陶器碗(264)の他、現代の土管が出土した。

c)旧河川

SA(1)225(第78・79図)

V6～7・W7～9グリッドに位置する旧河川である。調査区内を南東から北西に横断し、確認された部分だけで長さ20m、幅4m、深度50～70cmを測る。覆土は青灰色土を主とし、下層には礫が多い。第3・4層は水の流れによって堆積した砂質層である。河川内には取水施設の基礎と見られる木組みSA(1)226が設置されていた(後述)。出土した遺物は多く、打製石斧(18)のほか、近世以降の肥前磁器碗(245)・猪口(231)・肥前系鉢(255)・瓶(260)・蓋(256)、瀬戸美濃磁器碗(234)・小碗(246・247)・陶器甕(270)、再興九谷蓋付鉢(254)、産地不明磁器碗(237～241)・徳利(262)、陶器上瓶(273)、仏飯器(257)、ガラス瓶(298・299)、セロロイド樽(300)、軒平瓦(285)、金属製品(295・296)が出土した。近世～近代の遺構であろう。

SA(1)252(第75・79図)

第1次北側調査区の南西隅と、南調査区のSA(1)242を繋ぐ部分に位置する河川である。途中が調査区外に相当するため、一部しか検出されていないが北北西に流下する河川である。覆土は青灰色土を主とする。河川内にはコンクリートを用いた桟SA(1)242が設置しており、旧河川SA(1)225内の木桟SA(1)226と同様に收水施設の基礎と思われる。土層の堆積からSA(1)252がSA(1)225よりも新しい。

SA(1)252から遺物は出土しなかつたが、SA(1)242出土遺物がこの河川の年代を示す。

d)取水施設

SA(1)226 (第78・79図、図版19)

SA(1)226はW8グリッドに位置する。検出標高は27.80～28.00mである。長さ2.4mの横木の両端に4mの縦木が平行して付けられ、その間に30～40cm間隔で長さ1.6mの横木が7本はめ込まれている。なお、横木を支撐するために縦木に掘り込まれたほぞ穴が8箇所確認されており、南から数えて三番目の横木が失われている。縦木の北端には横木に差し込むための凸部も確認されていることから、北端の横木も失われていることが分かる。河川の底を20cmほど掘り込んだ中に、長錐を河川方向に向けて設置されていた。

出土遺物は多い。肥前磁器碗(230・233)・皿(251)、肥前陶器碗(263)の他、近代の磁器瓶類(259)、陶器甕(271)、平瓦(284)を図示した。

SA(1)242 (第79図)

W6グリッドに位置する。検出標高は28.00mである。調査区の制約のため、全形を確認できていない。調査区内で検出されたのは、長さ3.6m、幅30cmの南東～北西に置かれた断面四角形の棒状のコンクリートと同じく棒状の長さ1.6m、幅24cmのコンクリートの接合部分である。近代以降の磁器瓶類(261)、陶器甕(274)、ガラスの牛乳瓶(297)、煙管(292)を図示した。

第3節 遺物(第6表)

遺物の記述には、観察表・本文・図面図版・写真図版を用いる。当調査区では縄文～近代までの遺物が出土している。種類と器種による分類は第5・6図に示した。点数はすべて破片数である。

(1)縄文～古墳時代の遺物(第80～82図、図版20・21)

土 器(1～11) ほとんどが碎片である。1は眼鏡状突帯の施される晩期下野式期の浅鉢。2・3は横位の沈線が施文される。4・5は横位の条痕文が外面に施文される。6・7・8・9は内外面無文。7はII線部の破片、10・11は底部の破片である。小片が多く時期を確定できる遺物に乏しいが、おおむね縄文時代晩期後半頃のものと思われる。

石 器(12～32) 打製石斧が多くを占める。他には、石鏃・剥片石器を各1点図化している。12は石鏃で先端部と脚部が一部欠損している。13は上下両端側からの剥離痕が認められるので楔形石器であろう。打製石斧は19点出土している(14～32)。形態は短筒状のものは無く、ほとんどが撥形で、表面に躍皮を残す。29には磨耗痕が観察された。石材は火山裸凝灰岩が多く、ほかに凝灰岩・砂岩・安山岩などが見られる。なお、図化していないが、出土した打製石斧と同一石材の未製品および製作過程と思われる破片が、第2次調査区旧河川SA(2)1内のSA(2)325付近から出土している。

(2)古代の遺物(第83～92図、図版9～13)

須恵器(33～175) 杯類(無台杯・有台杯・高杯)・杯蓋・瓶類・壺・甕が出土した。時期は田嶋編年のII～IV期が多く、一部VI期まで下る。產地は南加賀窯が多くを占めるとともに、高松窯のものも見られる。墨書きされたものや明瞭な墨痕を残す硯転用のものはない。33～57は無台杯、58～63は底部が不明の杯類、

64～126は有台杯、127～129は盤、130・131は高杯、133～147は杯蓋、148～154は瓶類、155～158は壺・鉢類、159～175は甕である。このうち、62は瓶類の底部である可能性がある。147は高松産の杯蓋で、野々市町では出土例が少ない。1次調査区から2次調査区にかけて蛇行しながら北流する一連の旧河川であるSA(1)131・224・SA(2)1から出土したものが多いことから、周辺の古代集落からの投棄による資料と思われる。

土師器(176～222) 槌皿類(176～182)・釜(183～221)・鍋(222)が出土した。槌皿類は少なく、ほとんどが煮水用の釜である。SA(1)9やSA(1)120などの堅穴建物から出土したものが多く、河川からの出土は少數である。222は河川SA(1)131内上層の遺物集中区SA(1)224から出土した。内面にコゲ、外面に焼成時の黒斑と煤の痕跡が残る。須恵器杯(37・38・60・64・70・96・129・141)・盤(129)・杯蓋(141)が共伴していた。

(3)中世の遺物(第92図、図版13)

土 器(223) 中世土師器の皿が数点出土したが、223を図化した。古代の河川であるSA(2)1の攪乱部分から出土している。

陶磁器(224～227) 加賀鉢(224)・瀬戸美濃鉢皿(225)・輸入白磁碗(226)・青磁碗(227)をそれぞれ1点図化した。中世の満SA(2)119から出土した227以外は、SA(1)6など他の時期の遺構から混入品として出土している。

(4)近世以降の遺物(第93～95図、図版26・27)

土 器(275) 不明品を1点図化した。

陶磁器(228～274) 磁器碗類(228～248)・皿(249～253)・鉢(254・255)・蓋(256)・仮飯器(257)・豆碗(258)・瓶類(259～262)、陶器碗類(263～265)・皿(266・277)・瓶類(268・273)・擂鉢(269)・壺(270)・甕(271・272・274)が見られる。多くは肥前であるが、一部に瀬戸美濃や九谷も見られる。当調査区の特徴として近代以降の遺物が非常に多いが、これらは旧河川SA(1)225・SA(1)252からの出土が多数を占める。碗は磁器製が多く、大橋編年Ⅱ～Ⅳ期に相当するものが出土しているが、近代以降も多数出土している。皿は見込みを「蛇の目釉剥ぎ」した大橋編年Ⅲ～Ⅳ期のものが多い。産地は、近世は肥前が占めるが、近代以降は産地が不明のものがほとんどである。

(5)その他遺物(第96図、図版27)

石製品(276～279) 砥石を4点図化した。276・279に一部被熱痕跡がある。

土製品(280～283) 土鍤を4点図化している。SA(1)1・6から出土した。山本直人氏の分類によれば[山本1986]、Ia類に属する。「奈良～平安時代にかけての管状土鍤では形態的に側縁部がふくらむI類のものがほとんど」とされることがから古代の聚落に伴うものと思われる。

瓦(284・285) 平瓦と軒平瓦を図化した。これ以外にも瓦の破片は近世以降の旧河川SA(1)225とSA(1)252から多数出土している。

鉄 淚(286～289) 4点図化した。いずれも橢形涙で、286と289はそれぞれ古代の土坑SA(1)4と土器集中区SA(1)224から出土した。

金属製品(290～296) 釘(290・291)・煙管(292)・簪(293)・錢貨(294)・やっこ(295)・鏡(296)を図化した。SA(1)9とそれを切るSA(1)6から出土した290・291が古代の可能性があるが、取水施設SA(1)242から出土した292や旧河川SA(1)225から出土した295・296など、近世以降の産と考えられるものが多い。

ガラス・セルロイド(297～300) 甕類と櫛を図化した。近世・近代の旧河川SA(1)225と取水施設SA(1)242からは他にも多数のガラス製品が出土した。

第4節 小 結

(1)三納アラミヤ遺跡と周辺の古代集落について

はじめに 今回の調査では、古代の集落跡が確認された。当遺跡では旧河川SA(2)1の南側の第3次調査区でも古代の集落が確認されており、古代の集落が広く展開しているものと思われる。ここでは主に、当遺跡の古代における①建物規模②建物内部のカマドの位置③集落立地について、周辺の古代集落遺跡との関連についてまとめておきたい。なお、ここで取り上げる堅穴建物や掘立柱建物の規模については、堅穴建物の平面積20m²未満をaタイプ、平面積20m²以上～40m²未満をbタイプ、平面積40m²以上をcタイプとし、掘立柱建物の平面積40m²未満をAタイプ、平面積40m²以上～100m²未満をBタイプ、平面積100m²以上をCタイプとする。

最初に、当遺跡の建物規模と内部施設についてまとめておく。堅穴建物については、堅穴建物SA(1)9は東側を近代以降の溝SA(1)6と重複しており、遺存部分の平面積約30m²であるので、規模はbタイプとなる。堅穴建物SA(1)120・121はその大半が調査区外にあるため、面積は不明である。堅穴建物の主体となる遺物は田嶋編年II～IV期となる。掘立柱建物の規模については、1号掘立柱建物SA(1)①が約36m²、2号掘立柱建物SA(1)②は約18m²、3号掘立柱建物SA(1)③は18m²であるので、当遺跡の掘立柱建物は全てAタイプに属する。これらの掘立柱建物は遺物からIV～V期に属すると考えられる。内部施設については、カマドは堅穴建物SA(1)120・121で確認された。SA(1)120・121は調査区外にその大半が伸びるもの、カマドは調査区内、すなわち建物内の東南隅に存在する。

周辺の遺跡の概要 三納アラミヤ遺跡周辺で、当遺跡とはほぼ同時期に存続しているのは下新庄アラチ遺跡・下新庄タナカダ遺跡・上林新庄遺跡・上林テラダ遺跡・上新庄ニシウラ遺跡・末松A遺跡である。次に、それぞれの遺跡の概要を述べる。時期は各報告書の記載に拠った。

当遺跡の南に位置する上林・新庄遺跡群は、下新庄アラチ遺跡・下新庄タナカダ遺跡・上林新庄遺跡・上林テラダ遺跡・上新庄ニシウラ遺跡・上林遺跡からなる。これらの遺跡の消長は横山貴広氏の論考に詳しい[横山2003a、2003b]。それによると、7世紀初頭(田嶋編年Ⅰ期)に成立する上林テラダ遺跡と上林新庄遺跡西半に続き、7世紀後半から8世紀初頭(田嶋編年Ⅱ～Ⅲ期)にかけて上林新庄遺跡南半と上新庄ニシウラ遺跡の南エリア、上林新庄遺跡北端・下新庄アラチ遺跡・下新庄タナカダ遺跡の北エリアに発展しつつ分割される。北エリアが9世紀中頃(田嶋編年Ⅴ2期)まで続くのに対し、南エリアは9世紀前半(田嶋編年Ⅴ1期)で終息する。遺跡の特徴としては、南エリアが製鉄関連集団と思われるのに対し、北エリアが円筒窯や仏龕などを出土し、集落の当初から計画的な建物配置がなされている点で「極めて政治色の濃い集団」[横山2003a]と考えられている。堅穴建物は上林新庄遺跡と下新庄アラチ遺跡に多い。下新庄アラチ遺跡にはaタイプの堅穴建物が多いのに比べ、上林新庄遺跡にはbタイプが多く、cタイプの堅穴建物も存在する。上新庄ニシウラ遺跡では棟数自体は少ないものの、a～cタイプの堅穴建物が検出されている。下新庄タナカダ遺跡ではaタイプの堅穴建物しか検出されていない。掘立柱建物は上林新庄遺跡と下新庄アラチ遺跡でAタイプが多く、B・Cタイプは5棟程度に留まる。いっぽう、上新庄ニシウラ遺跡はBタイプが多い。

粟田遺跡は当遺跡に最も近い古代の集落である。粟田地区は8・9世紀(田嶋編年Ⅱ～V期)〔徳島県埋蔵文化財保存協会1991〕、中林地区は8世紀前半～9世紀中頃(田嶋編年Ⅱ～V2期)〔石川県野々市町教委1992〕、藤平地区は8世紀後半～9世紀前半(田嶋編年Ⅳ～V1期)〔石川県野々市町教委2000〕と、調査地点によって存続時期が微妙に異なるが、集落の構成は堅穴建物が主となる時期から掘立柱建物が主となる形態へ移行するなど、類似した状況を呈している。堅穴建物はaタイプが多く、掘立柱建物はA・Bタイプがある。

清金アガトウ遺跡〔野々市町教委2000〕は当遺跡の西側に位置する。8世紀後半～10世紀後半(田嶋編年

田嶋編年 遺跡名	H 2	H 3	Ⅲ	IV 1	IV 2	V 1	V 2	VI 1	VI 2	VI 3	W	遺構
三納アラミヤ遺跡												掘3、堅3、道路、耕作域
粟田遺跡												掘18、堅30、道路、耕作域
下新庄アラチ遺跡												掘54、堅48、溝
下新庄タナカダ遺跡												堅3
上林新庄遺跡												掘56、堅65、溝
上林テラク遺跡												
上新庄ニシウラ遺跡												掘15、堅5、土坑
上林遺跡												
清金アガトウ遺跡												掘6、堅16、道路
末松A遺跡												掘25、堅29
末松福正寺遺跡												
末松ダイイカン遺跡												堅12、掘23

第7表 三納アラミヤ遺跡周辺の古代遺跡発見表

IV～VI期)の遺物が確認されているが、集落の盛期は9世紀後半(田嶋編年V 2期)と考えられる。明確な堅穴建物は報告されておらず、A・Bタイプの掘立柱建物が2棟検出された。

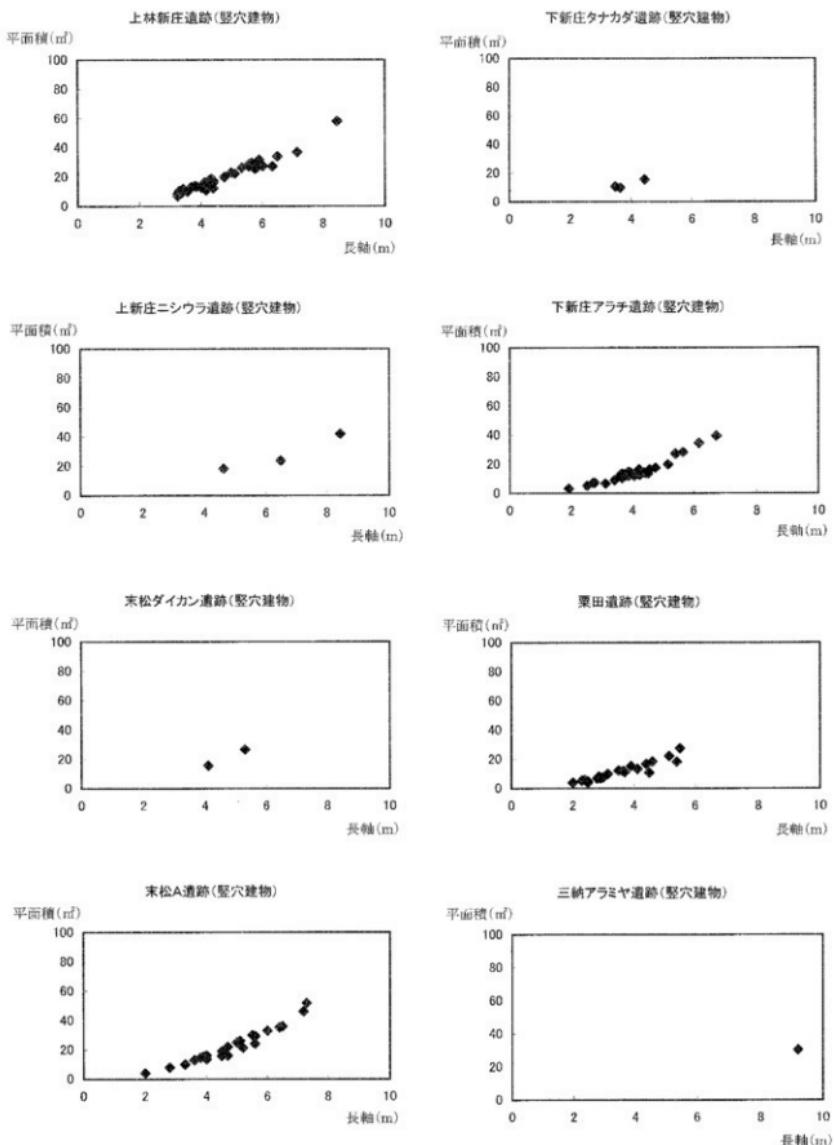
末松遺跡群は当遺跡の西南に位置する末松廃寺を中心とした遺跡群で、末松A遺跡・末松B遺跡・末松しりわん遺跡・末松廃寺・末松ダイイカン遺跡・末松福正寺遺跡・末松信濃館跡からなる[跡石川県埋文センター2000、石川県教委・跡石川県埋文センター2005]。末松B遺跡は遺構が希薄で、後述する末松ダイイカン遺跡の縁辺部にあたると考えられている。末松ダイイカン遺跡は7世紀後半(田嶋編年I～II期)に堅穴建物を主体として成立するが、8世紀中頃(田嶋編年IV 1期)以降は掘立柱建物が主体となる。末松福正寺遺跡は7世紀(田嶋編年I～II期)の遺跡で、堅穴建物が検出されている。これらは堅柱をもつもののや南東角にカマドを持つものが確認されている。全体が解る堅穴建物は末松ダイイカン遺跡と末松A遺跡に多い。末松A遺跡の堅穴建物はa・bタイプが多く、掘立柱建物はAタイプが多い。

存続時期 以上、周辺の遺跡を概観してきた。当遺跡の主体時期は7～9世紀(田嶋編年II～V期)で、下新庄タナカダ遺跡や上新庄ニシウラ遺跡と類似する。田嶋明人氏によれば[川畠1996]、当遺跡が位置する手取扇状地扇尖部は7世紀後半(田嶋編年II期)以降の集落が多く確認されている。田嶋氏の分類によれば当遺跡は宮櫻用水系中流域Dブロックに位置し、上林・新庄遺跡群や粟田遺跡と同じブロックに存在する。このブロックは盛期をII～IV期に持つとされ、当遺跡の盛期とも合致する。

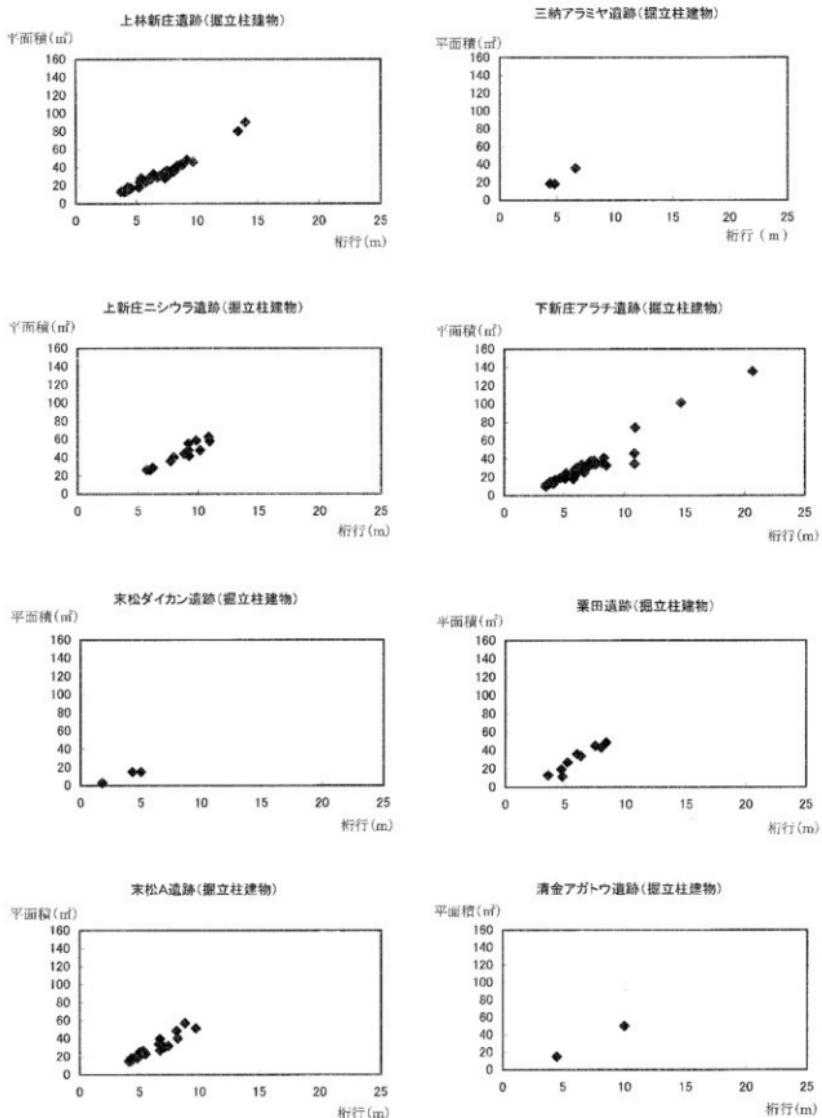
建物規模 古代の建物規模については、川畠誠氏の論考がある[川畠1995]。これによると、面積20m以上40m未満の3間×2間の掘立柱建物は8世紀中頃(田嶋編年IV 1期)以降主体を占める。一方、堅穴建物は面積20m以上40m未満のものが7世紀後葉～8世紀前葉(田嶋編年II～III期)まで多数存在するとされる。当遺跡の堅穴建物SA(1)9は平面積約30m²、掘立柱建物は1号掘立柱建物SA(1)①が約36m²、2号掘立柱建物SA(1)②は約18m²、3号掘立柱建物SA(1)③は18m²であるので、川畠氏の結果と合致する。周辺においても、この規模の堅穴建物が確認されている遺跡の多くが田嶋編年II～III期に属し、当遺跡と時期的にほぼ合致する(第41図)。当遺跡の掘立柱建物は全てAタイプに属し、下新庄アラチ遺跡や上林・新庄遺跡、粟田遺跡で確認されている規模と類似する(第42図)。下新庄アラチ遺跡を例に取れば、これらAタイプは田嶋編年III～IV期まで多く確認されており、これも当遺跡の時期と合致する。

以上のように、当遺跡の建物規模は近隣の同時期の遺跡と比較して突出した規模ではなく、時期的な様相にも整合することが解った。

カマドの位置について カマドは1号堅穴建物SA(1)9には検出されず、堅穴建物SA(1)120・121で確認された。SA(1)120・121は調査区外にその大半が伸びるもの、カマドは建物内の東南隅に存在する。このような配置は、上林・新庄遺跡や下新庄アラチ遺跡、末松遺跡群でも多く確認されている。末松A遺跡



第41図 三納アラミヤ遺跡周辺の古代竪穴住居規模



第42図 三納アラミヤ遺跡周辺の古代掘立柱建物規模

は田嶋氏の分類によれば郷用水系中流域Bブロックに属する遺跡で[田嶋1996]、土師器煮炊具に近江型や青野型と呼ばれる畿内外縁部系統の土器や、東日本系、在地系と、多数の系統が見られる遺跡であり、近江や丹波をはじめとする移住者と、在地系の人々によって展開された集落であることが指摘されている[柿川2005]。当遺跡には、首見の限りでは他地域の影響が見られる土器は出土していないか、SA(1)120・121のような、堅穴焼物におけるカマドの位置という点では同時期に展開していた近隣の集落と同じ様相を呈しており、宮裡用水や郷用水といった水系を超えて現象化している点が注意される。

集落立地 当遺跡は調査区が南北に細長く、調査区の東側を旧河川SA(1)131・SA(2)1が縱断していることもあって、一見したところ、河川の強い規制を受けて成立した集落のように見える。しかし当遺跡では、この自然河川に影響されない直線的な道路状構造SA(1)2・3が確認された。古代においては道路の方向は、土地区画である「条里」に規制される例があるが、稲田遺跡で確認された道路状構造はN-21°-Wの主軸であり、当遺跡はN-45°-Wであるなど、当遺跡周辺の遺跡についてはその主軸方向は各遺跡で異なる。また、当遺跡周辺では「条里」は、近代の地籍図にその痕跡を残すいっぽう、下新庄アラチ遺跡のSD07（田嶋編年Ⅲ～Ⅳ期）が「条里」の可能性が指摘されている。さらに下新庄アラチ遺跡は、SD07を基準として集落内の建物配置に際し方形区画が意識されている事例が確認され、当遺跡から北に約2km離れた上荒屋遺跡でも9世紀（田嶋編年V期）の「条里」が確認されている[小西1991]。このように、同じ扇状地でも施工には時期幅が見られることや、上荒屋遺跡に隣接する横江庄遺跡では建物配置が条里的な間隔を有さない[金田1996]ことなど、「条里」かれい、どの程度の範囲で施工されたかなど不明な点が多い。しかし、周辺の集落の状況を考えた場合、集落配置を決定する要因として微地形や自然河川以外の要素として、「条里」も考えておく必要があるものと思われる。

まとめ 以上、当遺跡と周辺の古代集落との比較を通して、当遺跡の位置づけを考えてきた。当遺跡は、建物規模においては同時期の古代集落と類似した傾向にある。そして、存続時期に関しては同じ水系に位置する上林・新庄遺跡群や稲田遺跡と密接に関連しながら展開した様相を示し、さらにカマドの位置に関しては末松遺跡群のように異なる水系とも類似した状況であることが分かった。このような、水系を超えて共通点が確認されるという状況は、それ以前の弥生時代や古墳時代の集落が基本的に水系単位で消長すること異なり、水系を超えた地域単位でのまとまりを示すものであろう。田嶋氏も、II期からIII期にかけて「用水系に沿った開発以上に、東西の軸線（道路）の設定を契機とした展開」[田嶋1996]が手取扇状地中流域でみられるとしており、このように考えれば、古代における当遺跡は、扇状部周辺の「村落群における前時代的諸関係を内締めするような、政治的に集村した律令的村落群」[前川1996]の一部をなすととらえることができるのではないだろうか。また、そういう村落だからこそ、古代においては国家権力による耕地整理手段であった「条里」よりも強く意識されていた可能性が考えられよう。

（2）近世以降の取水施設

第1次調査では、旧河川内に設置された木製とコンクリート製の基礎が発掘された。これら2基の遺構については、ともに河川内にあることから何らかの利水施設であることが考えられる。調査時点において、現代の木呂川から北北東方向の集落である三納地区へ分水するための鉄製の水門が両遺構に近接して設置されていたことを重視すれば、これらは、先代、先々代の水門の基礎部分とみなすことが妥当と思われる。

水門は、平成16年の野々市町役場新庁舎の建設により場所が若干移動し、現在に至っているが、この水門は「狐藪水門」という名称で呼ばれていることが「野々市町史 集落編」[野々市町2004]に記載されている。水門が近代から現代にかけて木枠→コンクリート枠→鉄筋コンクリートという素材的な変化と、徐々に北へずれるという場所的な推移をみせていることが確認でき、第1次北側調査区で確認された水門遺構と共に、三納地区で現代まで続く水田経営と水利の歴史を理解する上で一助となる成果といえ

よう。

参考文献

- 石川県教育委員会・鶴石川県埋蔵文化財センター 2005 「末松遺跡」
石川県野々市町教育委員会 1992 「粟田遺跡第二次発掘調査報告書」
石川県野々市町教育委員会 2000 「粟田遺跡藤平地区・清金アガトウ遺跡」
石川県野々市町教育委員会・野々市町南部土地区画整理組合 1998 「上新庄ニシウラ遺跡」
石川県野々市町教育委員会・野々市町南部土地区画整理組合 1999 「下新庄アラチ遺跡」
石川県野々市町教育委員会・野々市町南部土地区画整理組合 2000 「上林新庄遺跡・上林占塙・上林テラダ遺跡
下新庄タナカダ遺跡」
鶴石川県埋蔵文化財センター 2000 「野々市町末松遺跡群」
柳田祐司 2005 「第4章第2節 古代前半期の末松A遺跡」「末松遺跡」
石川県教育委員会・鶴石川県埋蔵文化財センター
川端 誠 1995 「石川県内の古代建物に関する基礎的考察」『鶴石川県埋蔵文化財保存協会年報6』
鶴石川県埋蔵文化財保存協会
北野博司 1997 「古代北陸の地域開発と出羽」「蝦夷・律令国家・日本海」
日本考古学協会1997年度秋田大会実行委員会
北野博司 2000 「古代北加賀の政治勢力」「市史かなざわ、第6号 金沢市」
金沢章裕 1996 「第一・章加賀国石川郡の条里プランと横江庄」「東大寺領横江庄遺跡II」松任市教育委員会
小西昌志 1991 「金沢市上荒屋遺跡の条里遺構」「条里制研究」7
鶴石川県埋蔵文化財保存協会 1991 「粟田遺跡発掘調査報告書」
川崎明人 1996 「手取扇状地にみる古代遺跡の動態」「東大寺領横江庄遺跡II」松任市教育委員会
野々市町史編纂専門委員会 2004 「野々市町史 集落編」石川県野々市町
前田清彦 1996 「第5章 まとめ」「松任市三浦・幸明遺跡」松任市教育委員会
松任市教育委員会 1996 「松任市三浦・幸明遺跡」
山本直人 1986 「石川県における古代中世の網造業の展開」「石川考古学研究会誌」29
横山貴広 2003a 「第二節 奈良後期～平安期の集落」「野々市町史資料編1」石川県野々市町
横山貴広 2003b 「扇状地における新興開発領主層の台頭とその後の展開」「富山大学考古学研究室論集 異氣樓
秋山進午先生古稀記念論集刊行会
吉岡康暢 1996 「北陸の初期庄園遺跡と横江庄遺跡」「東大寺領横江庄遺跡II」松任市教育委員会

第6表 三納アラミヤ遺跡(第1・2次)遺物観察表

種類		実用 品番 番号	出土地点	No.ほか	種類	器種	口径 (mm)	高さ (mm)	底径 (mm)	残存率	色調	色調	出土記物	備考
1 137 SAU131 W10下層		西文土器	瓦片	無	織物	織片					白: に赤、青斑	白: に赤、青斑	砂綿多	
2 29 SAU135 W15グリッド		西文土器	瓦片	無	織物	織片					白: に赤、青斑	白: に赤、青斑	砂綿多	
3 31 SAU136 W15下層		西文土器	瓦片	無	織物	織片					白: に赤、青斑	白: に赤、青斑	砂綿多	
4 156 SAU131 W16下層		西文土器	瓦片	無	織物	織片					白: に赤、青斑	白: に赤、青斑	砂綿多	
5 155 SAU131 W16下層		西文土器	瓦片	無	織物	織片					白: に赤、青斑	白: に赤、青斑	砂綿多	
6 169 SAU131 W16グリッド		西文土器	瓦片	無	織物	織片					白: に赤、青斑	白: に赤、青斑	砂綿多	
7 158 SAU131 W10下層		西文土器	瓦片	無	織物	織片					白: に赤、青斑	白: に赤、青斑	砂綿多	
8 30 SAU138 W15グリッド		西文土器	瓦片	無	織物	織片					白: に赤、青斑	白: に赤、青斑	砂綿多	
9 7 SAU131 V2グリッド		西文土器	瓦片	無	織物	織片					白: に赤、青斑	白: に赤、青斑	砂綿多	
10 55 SAU21 W24		西文土器	瓦片	無	織物	織片					白: に赤、青斑	白: に赤、青斑	砂綿多	
11 156 SAU131 W10下層		西文土器	瓦片	無	織物	織片					白: に赤、青斑	白: に赤、青斑	砂綿多	
12 24 SAU201 W26グリッド		石器	石器	26	17	4					安山岩	白		
13 64 SAU128 石器		石器	石器	31	13	8	光沢				石英岩	白		
14 31 SAU128 石器		石器	石器	250	77	285	光沢			石英岩	白			
15 19 SAU219 W17グリッド		石器	石器	235	52	22	刀部欠損			火山噴出岩	白			
16 13 SAU219 W17グリッド		石器	石器	242	101	24	基部欠損			火山噴出岩	白			
17 128 SAU131 石器		石器	石器	135	83	22	光沢			火山噴出岩	白			
18 74 SAU125 W7下層		石器	石器	280	72	22	光沢			火山噴出岩	白			
19 53 SAU219 W22グリッド		石器	石器	242	62	215	光沢			火山噴出岩	白			
20 32 SAU219 V22グリッド		石器	石器	200	62	215	光沢			火山噴出岩	白			
21 9 SAU21 W26グリッド		石器	石器	129	84	36	光沢			火山噴出岩	白			
22 10 SAU21 W18グリッド		石器	石器	355	71	32	光沢			火山噴出岩	白			
23 15 SAU244 1		石器	石器	365	92	39	光沢			火山噴出岩	白			
24 15 SAU244 1		石器	石器	164	101	24	光沢			火山噴出岩	白			
25 11 SAU230 W8下層		石器	石器	142	83	24	光沢			火山噴出岩	白			
26 8 SAU225 3		石器	石器	184	84	30	光沢			火山噴出岩	白			
27 167 SAU131 W10グリッド		石器	石器	136	80	35	光沢			火山噴出岩	白			
28 131 SAU131 W8下層		石器	石器	119	83	33	光沢			火山噴出岩	白			
29 14 SAU2 灰 U22グリッド		石器	石器	92	103	28	基部欠損			火山噴出岩	白			
30 52 SAU21 W24グリッド		石器	石器	67	68	225	基部のみ			火山噴出岩	白			
31 3 SAU21 2		石器	石器	69	75	19	从属のみ			火山噴出岩	白			
32 77 SAU21 W26グリッド		石器	石器	61	71	18	基部のみ			火山噴出岩	白			

古式 樹脂 骨器		出土地点	No.ほか	種類	器種	口径 (mm)	高さ (mm)	底径 (mm)	残存率	色調	色調	出土記物	備考
33 62 SAU110	無	無	無	無	無	114	34	25	全体1/6	内: 灰	外: 灰	砂綿少	田嶋V 2 周
34 44 SAU131	30、下層	無	無	無	無	114	32	25	全体1/5	内: 灰	外: 灰	砂綿少	田嶋V 2 (新)
35 59 SAU132	58、37、50、上層	無	無	無	無	129	88	90	全体1/3	内: 灰	外: 灰	砂綿多	田嶋V 2 (古)
36 169 SAU131	42、下層	無	無	無	無	130	33	90	全体1/5	内: 灰	外: 灰	砂綿少	田嶋V 1 周
37 186 SAU224	14	無	無	無	無	120	32	68	全体1/6	内: 灰	外: 灰	砂綿多	田嶋V 1
38 177 SAU224 3	無	無	無	無	無	134	30	70	全体1/6	内: 灰	外: 灰	砂綿少	田嶋V 1
39 60 SAU132	無	無	無	無	無	128	90	90	全体1/6	内: 灰	外: 灰	砂綿少	田嶋V 2 周
40 20 SAU219 W17G	無	無	無	無	無	130	80	90	全体1/3	内: 灰	外: 灰	砂綿少	田嶋V 2 周
41 87 SAU212 1	無	無	無	無	無	123	38	90	全体1/5	内: 灰	外: 灰	砂綿少	田嶋V 2 (古)
42 133 SAU131 W8下・中	無	無	無	無	無	132	80	90	全体1/5	内: 灰	外: 灰	砂綿少	田嶋V 2 (新)
43 151 SAU131 48、下層	無	無	無	無	無	126	34	80	全体1/4	内: 灰	外: 灰	砂綿少	田嶋V 2 (古)外 ヒラタ形
44 91 SAU21 W27	無	無	無	無	無	140	35	80	全体1/2	内: 灰	外: 灰	砂綿少	田嶋V 2 (新)
45 196 SAU21 W27	無	無	無	無	無	133	30	90	全体1/3	内: 灰	外: 灰	砂綿少	田嶋V 2 (新)
46 119 SAU21 W27下層	無	無	無	無	無	131	91	95	全体1/2	内: 灰	外: 灰	砂綿少	田嶋V 2 (新)
47 118 SAU22 3	W26下層	無	無	無	無	138	30	85	全体1/6	内: 灰	外: 灰	砂綿少	田嶋V 2 (新)
48 92 SAU21 W26	無	無	無	無	無	156	32	99	全体1/6	内: 灰	外: 灰	砂綿少	田嶋V 2 (新)
49 67 SAU21 30	無	無	無	無	無	145	34	100	全体1/6	内: 灰	外: 灰	砂綿少	田嶋V 2 (新)
50 57 SAU21 21	無	無	無	無	無	158	31	100	全体1/6	内: 灰	外: 灰	砂綿少	田嶋V 2 (新)
51 178 SAU131 W26下層	無	無	無	無	無	90	35	90	全体1/6	内: 灰	外: 灰	砂綿少	田嶋V 2 (新)
52 22 SAU131 W26グリッド	無	無	無	無	無	86	35	90	全体1/7	内: 灰	外: 灰	砂綿少	田嶋V 2 (新)
53 26 SAU131 77	無	無	無	無	無	121	37	90	全体1/7	内: 灰	外: 灰	砂綿少	田嶋V 2 (新)
54 28 SAU21 71	無	無	無	無	無	85	34	80	全体1/4	内: 灰	外: 灰	砂綿少	田嶋V 2 (新)
55 93 SAU21 52、腰	腰	腰	腰	腰	腰	88	35	80	全体1/4	内: 灰	外: 灰	砂綿少	田嶋V 2 (新)
56 138 SAU131 13、下層	腰	腰	腰	腰	腰	88	35	80	全体1/2	内: 灰	外: 灰	砂綿少	田嶋V 2 (新)
57 43 SAU16 W11グリッド	腰	腰	腰	腰	腰	75	24	25	全体1/5	内: 灰	外: 灰	砂綿少	田嶋V 2 (新)
58 81 SAU21 W26腰下層	腰	腰	腰	腰	腰	134	24	25	全体1/8	内: 灰	外: 灰	砂綿少	田嶋V 2 (新)
59 82 SAU21 W26	腰	腰	腰	腰	腰	121	24	25	全体1/8	内: 灰	外: 灰	砂綿少	田嶋V 1 周
60 179 SAU124 14	腰	腰	腰	腰	腰	63	24	25	全体1/4	内: 灰	外: 灰	砂綿少	田嶋V 1
61 120 SAU21 W27腰下層	腰	腰	腰	腰	腰	166	24	25	全体1/2	内: 灰	外: 灰	砂綿少	田嶋V 1 周
62 41 SAU16 W11グリッド	腰	腰	腰	腰	腰	69	24	25	全体1/6	内: 灰	外: 灰	砂綿少	田嶋V 2 (新)
63 12 SAU21 2	腰	腰	腰	腰	腰	62	24	25	全体1/2	内: 灰	外: 灰	砂綿少	田嶋V 2 (新)
64 186 SAU124 9	腰	腰	腰	腰	腰	67	24	25	全体1/4	内: 灰	外: 灰	砂綿少	田嶋V 2 (新)
65 162 SAU131 11、トコト	腰	腰	腰	腰	腰	60	24	25	腰部分欠損	内: 灰	外: 灰	砂綿少	田嶋V 2 (新)
66 66 SAU21 W26腰下層	腰	腰	腰	腰	腰	63	24	25	全体1/4	内: 灰	外: 灰	砂綿少	田嶋V 2 (新)
67 36 SAU16 W11グリッド	腰	腰	腰	腰	腰	68	24	25	全体1/2	内: 灰	外: 灰	砂綿少	田嶋V 1 周
68 1 SAU224 2	腰	腰	腰	腰	腰	62	24	25	全体1/4	内: 灰	外: 灰	砂綿少	田嶋V 2 (新)
69 127 SAU131 W26腰下層	腰	腰	腰	腰	腰	103	38	37	全体1/6	内: 灰	外: 灰	砂綿少	田嶋V 2 (新)
70 128 SAU124 3	腰	腰	腰	腰	腰	64	24	25	全体1/4	内: 灰	外: 灰	砂綿少	田嶋V 2 (新)
71 201 SAU21 W27	腰	腰	腰	腰	腰	63	24	25	全体1/4	内: 灰	外: 灰	砂綿少	田嶋V 2 (新)
72 137 SAU131 2、中腰	腰	腰	腰	腰	腰	116	46	50	全体1/7	内: 灰	外: 灰	砂綿少	田嶋V 2 (新)
73 98 SAU21 W27	腰	腰	腰	腰	腰	80	24	25	全体1/2	内: 灰	外: 灰	砂綿少	田嶋V 2 (新)
74 126 SAU21 W26腰下層	腰	腰	腰	腰	腰	73	24	25	腰部分欠損	内: 灰	外: 灰	砂綿少	田嶋V 2 (新)
75 107 SAU21 W27腰下層	腰	腰	腰	腰	腰	80	24	25	全体1/4	内: 灰	外: 灰	砂綿少	田嶋V 2 (新)
76 48 SAU21 15	腰	腰	腰	腰	腰	82	24	25	全体1/3	内: 灰	外: 灰	砂綿少	田嶋V 2 (新)
77 142 SAU131 40、下層	腰	腰	腰	腰	腰	74	24	25	全体1/2	内: 灰	外: 灰	砂綿少	田嶋V 2 (新)
78 160 SAU131 38、下層	腰	腰	腰	腰	腰	78	24	25	全体1/2	内: 灰	外: 灰	砂綿少	田嶋V 2 (新)
79 161 SAU131 47、下層	腰	腰	腰	腰	腰	68	24	25	腰部分欠損	内: 灰	外: 灰	砂綿少	田嶋V 2 (新)
80 111 SAU21 W27腰下層	腰	腰	腰	腰	腰	72	24	25	全体1/3	内: 灰	外: 灰	砂綿少	田嶋V 2 (新)

種名	英語 名前	出土地点	%ほか	種類	器物	白径 (mm)	高さ (mm)	底径 (mm)	西脇等	色調	色調	出土品種類	備考
81	SA2011	W25最上層	直筒型	有台杯		86	底部1/4	外・灰	内・灰	砂綿多			
82	SA2011	W26最上層	直筒型	有台杯		75	底部1/2	外・灰白	内・灰白	砂綿少			
83	SA2011	W26最下層	直筒型	有台杯		27	全体2/3	外・灰	内・灰白	砂綿多	曲輪V期		
84	110	SA2011	W27下	直筒型	有台杯	69	底部1/3	外・灰	内・灰	砂綿多	曲輪IV期		
85	144	SA1031	29. 地上	直筒型	有台杯	101	50	全体1/2	外・明オリーブ灰	内・灰	砂綿少	曲輪IV(2)期	
86	50	SA2011	13.	直筒型	有台杯	63	底部1/2	外・灰	内・灰	砂綿少			
87	108	SA1020	75. 地から15cm	直筒型	有台杯	27	底部1/4	外・灰	内・灰白	砂綿多			
88	66	SA1038	直筒型	有台杯		54	底部1/3	外・灰	内・灰	砂綿少			
89	10	SA2011	直筒型	有台杯		29	全体1/2	外・灰	内・灰	砂綿少			
90	59	SA2011	W26最下層	直筒型	有台杯	111	24	全体3/5	外・灰	内・灰	砂綿少		
91	153	SA1031	45. 地上	直筒型	有台杯	109	45	全体1/2	外・灰	内・灰	砂綿少	曲輪V期	
92	4	SA1019	4. 地から2.0m	直筒型	有台杯	123	40	全体1/4	外・灰色	内・灰黑色	砂綿少	曲輪IV(2)期	
93	99	SA2011	W27	直筒型	有台杯	90	底部1/5	外・灰	内・灰	砂綿少			
94	300	SA2011	W27	直筒型	有台杯	87	底部1/3	外・灰	内・灰	砂綿少			
95	65	SA2011	W26最上層	直筒型	有台杯	99	底部1/5	外・灰	内・灰	砂綿少			
96	184	SA1024	7	直筒型	有台杯	94	底部1/2	外・灰	内・灰白	砂綿多			
97	37	SA1016	W11グリッド	直筒型	有台杯	92	底部1/3	外・灰白	内・灰白	砂綿少			
98	109	SA2011	W26b	直筒型	有台杯	144	42	全体1/3	外・灰	内・灰白	砂綿少	曲輪Ⅳ期	
99	166	SA1031	51. 地上	直筒型	有台杯	80	底部死光形	外・灰	内・灰白	砂綿多			
100	50	SA10121	8. 地から8.5cm	直筒型	有台杯	119	45	全体1/2	外・灰	内・灰白	砂綿少	曲輪V(2)期	
101	3	SA0322	1	直筒型	有台杯	91	底部1/6	外・灰	内・灰白	砂綿少			
102	97	SA2011	W27	直筒型	有台杯	83	全体1/3	外・灰	内・灰	砂綿少			
103	69	SA2011	W26最下層	直筒型	有台杯	86	底部1/5	外・灰白	内・灰	砂綿少			
104	60	SA2011	W26最上層	直筒型	有台杯	87	底部1/2	外・灰	内・灰白	砂綿多			
105	147	SA1031	W8. リット	直筒型	有台杯	88	底部外形	外・灰	内・灰白	砂綿少	曲輪Ⅳ期		
106	155	SA2011	W27最下層	直筒型	有台杯	95	底部1/3	外・灰	内・灰白	砂綿少			
107	106	SA2011	W27最上層	直筒型	有台杯	97	底部1/2	外・灰	内・灰白	砂綿少			
108	66	SA06120	直筒型	有台杯		120	底部1/6	外・灰	内・灰	砂綿少			
109	MA	SA2011	W26最上層	直筒型	有台杯	293	底部1/4	外・灰	内・灰	砂綿少	曲輪Ⅳ期		
110	365	SA1031	W8.5 中層	直筒型	有台杯	145	42	全体1/2	外・灰	内・灰白	砂綿少	曲輪Ⅳ期	
111	70	SA2011	W26最下層	直筒型	有台杯	95	底部1/3	外・灰	内・灰白	砂綿少			
112	61	SA2011	W26最下層	直筒型	有台杯	99	底部1/5	外・灰白	内・灰白	砂綿少			
113	45	SA2011	W26c	直筒型	有台杯	163	43	全体1/2	外・灰白	内・灰白	砂綿少	曲輪Ⅳ期	
114	109	SA1020	75. 地から20cm	直筒型	有台杯	120	底部1/2	外・灰	内・灰白	砂綿少			
115	104	SA2011	W27	直筒型	有台杯	118	底部1/4	外・灰	内・灰白	砂綿少			
116	106	SA2011	W27	直筒型	有台杯	118	底部1/3	外・灰	内・灰白	砂綿少			
117	108	SA2011	W27最下層	直筒型	有台杯	118	底部1/6	外・灰	内・灰	砂綿少			
118	129	SA1031	W8. 下	直筒型	有台杯	114	底部1/2	外・灰	内・灰	砂綿少			
119	39	SA1016	W11グリッド	直筒型	有台杯	119	底部1/5	外・灰白	内・灰白	砂綿少			
120	152	SA1031	39. 地上	直筒型	有台杯	102	底部死光形	外・灰	内・灰白	砂綿少			
121	102	SA2011	W27	直筒型	有台杯	96	底部1/3	外・灰	内・灰	砂綿少			
122	62	SA2011	W27最下層	直筒型	有台杯	126	底部1/5	外・灰	内・灰白	砂綿少			
123	89	SA2011	W27.5最下	直筒型	有台杯	131	底部1/7	外・灰	内・灰	砂綿少			
124	149	SA1031	52. 地上	直筒型	有台杯	180	61	全体1/3	外・灰	内・灰白	砂綿少		
125	120	SA2011	W27.5	直筒型	有台杯	159	69	全体1/2	外・灰	内・灰白	砂綿少	曲輪Ⅳ期	
126	49	SA0116	W11グリッド	直筒型	有台杯	121	全体1/6	外・オーリーブ	内・灰	砂綿少	曲輪Ⅳ期		
127	86	SA0123	上層	直筒型	有台杯	182	22	全体1/8	外・灰白	内・灰白	砂綿少	曲輪Ⅳ(2)期	
128	PG4	SA1031	15. 16. 下脚	直筒型	有台杯	158	18	全体1/2	外・灰白	内・灰白	砂綿少	曲輪Ⅳ期	
129	81	SA0224	4 - 13.	直筒型	有台杯	172	19	全体1/2	外・灰	内・灰白	砂綿少	曲輪Ⅳ期	
130	85	SA2011	31.	直筒型	有台杯	146	底部1/8	外・灰	内・灰白	砂綿少	曲輪Ⅳ期		
131	87	SA2011	W26	直筒型	有台杯	166	全体1/6	外・オーリーブ	内・灰	砂綿少	曲輪Ⅳ期		
132	78	SA2011	W26最上層	直筒型	有台杯	146	底部1/8	外・灰	内・灰白	砂綿少	曲輪Ⅳ期		
133	130	SA1031	W8. 下	直筒型	有台杯	104	底部1/6	外・灰白	内・灰白	砂綿少			
134	74	SA2011	W26最下層	直筒型	有台杯	104	全体1/3	外・灰	内・灰	砂綿少			
135	128	SA2011	W27最下層	直筒型	有台杯	104	全体1/5	外・灰	内・灰	砂綿少			
136	145	SA1031	31. 地上	直筒型	有台杯	104	全体1/5	外・灰白	内・灰白	砂綿少			
137	67	SA0158	杯立	-	-	-	-	-	-	-	-		
138	43	SA2011	1	直筒型	杯立	-	-	-	-	-	-	砂綿少	
139	136	SA1031	W9. 下層	直筒型	杯立	163	29	全体1/4	外・灰白	内・灰白	砂綿少	曲輪Ⅳ期	
140	75	SA2011	W26最上層	直筒型	杯立	159	26	全体1/5	外・灰	内・灰白	砂綿少	曲輪Ⅳ期	
141	185	SA0224	4	直筒型	杯立	164	126	全体1/6	外・灰白	内・灰白	砂綿少	曲輪Ⅳ期	
142	62	SA1020	直筒型	杯立		156	121	全体1/6	外・灰白	内・灰白	砂綿少	曲輪Ⅳ期	
143	90	SA2011	W26上 - W27	直筒型	杯立	168	31	全体1/2	外・灰	内・灰白	砂綿少	曲輪Ⅳ期	
144	88	SA2011	W27	直筒型	杯立	124	114	全体1/4	外・灰	内・灰白	砂綿少	曲輪Ⅳ期	
145	86	SA2011	W26	直筒型	杯立	124	114	全体1/4	外・灰	内・灰白	砂綿少	曲輪Ⅳ期	
146	137	SA1031	W9. 中	直筒型	杯立	139	121	全体1/6	外・灰	内・灰白	砂綿少	曲輪Ⅳ期	
147	73	SA2011	W26最下層	直筒型	杯立	168	13	全体1/4	外・灰	内・灰白	砂綿少	曲輪Ⅳ期	
148	145	SA1031	32. 地上	直筒型	杯立	168	13	全体1/5	外・灰	内・灰白	砂綿少	曲輪Ⅳ期	
149	125	SA2011	W27最下層	直筒型	杯立	168	13	全体1/5	外・灰白	内・灰白	砂綿少	曲輪Ⅳ期	
150	135	SA1031	32. 地下 - 33. 地上	直筒型	杯立	168	13	全体1/5	外・灰白	内・灰白	砂綿少	曲輪Ⅳ期	
151	TA	SA2011	4. 中脚下	直筒型	杯立	118	底部1/2	外・灰	内・灰白	砂綿少	曲輪Ⅳ期		
152	79	SA2011	W26	直筒型	杯立	130	全体1/6	外・オーリーブ	内・灰	砂綿少	曲輪Ⅳ期		
153	80	SA2011	W26最下層	直筒型	杯立	101	底部碎片	外・オーリーブ	内・灰	砂綿少	曲輪Ⅳ期		
154	150	SA0131	53. 下脚下	直筒型	杯立	86	底部1/2	外・灰	内・灰	砂綿少	曲輪Ⅳ期		
155	65	SA2011	W26最下層	直筒型	杯立	105	底部2/3	外・灰	内・灰	砂綿少	曲輪Ⅳ期		
156	66	SA0201	29.	直筒型	杯立	142	底部1/6	外・灰白	内・灰白	砂綿少	曲輪Ⅳ期		
157	127	SA2011	W27最下層	直筒型	杯立	111	底部1/3	外・灰	内・灰白	砂綿少	曲輪Ⅳ期		
158	171	SA1031	W11グリッド	直筒型	杯立	80	底部1/2	外・灰白	内・灰白	砂綿少	曲輪Ⅳ期		
159	83	SA2011	W26最上層	直筒型	瓶	258	底部1/9	外・オーリーブ	内・灰	砂綿少	曲輪Ⅳ期		
160	84	SA2011	W26最上層	直筒型	瓶	214	底部1/4	外・灰	内・灰	砂綿少	曲輪Ⅳ期		
161	44	SA1016	W13.5グリッド	直筒型	瓶	229	底部1/4	外・灰	内・灰	砂綿少	曲輪Ⅳ期		
162	166	SA2011	29. 地上	直筒型	瓶	260	底部1/5	外・灰	内・灰	砂綿少	曲輪Ⅳ期		
163	66	SA0201	3. 地上	直筒型	瓶	253	底部1/6	外・灰白	内・灰白	砂綿少	曲輪Ⅳ期		
164	124	SA2011	W27最上層	直筒型	瓶	237	底部1/2	外・灰	内・灰	砂綿少	曲輪Ⅳ期		
165	72	SA2011	W26最下層	直筒型	瓶	214	底部1/3	外・灰	内・灰	砂綿少	曲輪Ⅳ期		
166	85	SA2011	W26最下層	直筒型	瓶	209	底部1/4	外・灰	内・灰	砂綿少	曲輪Ⅳ期		
167	174	SA1031	W8. グリッド	直筒型	瓶	205	底部1/8	外・灰	内・灰	砂綿少	曲輪Ⅳ期		
168	123	SA2011	4. 地上	直筒型	瓶	220	底部1/3	外・灰	内・灰	砂綿少	曲輪Ⅳ期		
169	123	SA2011	W27下	直筒型	瓶	205	底片	外・灰	内・灰	砂綿少	曲輪Ⅳ期		

中 世

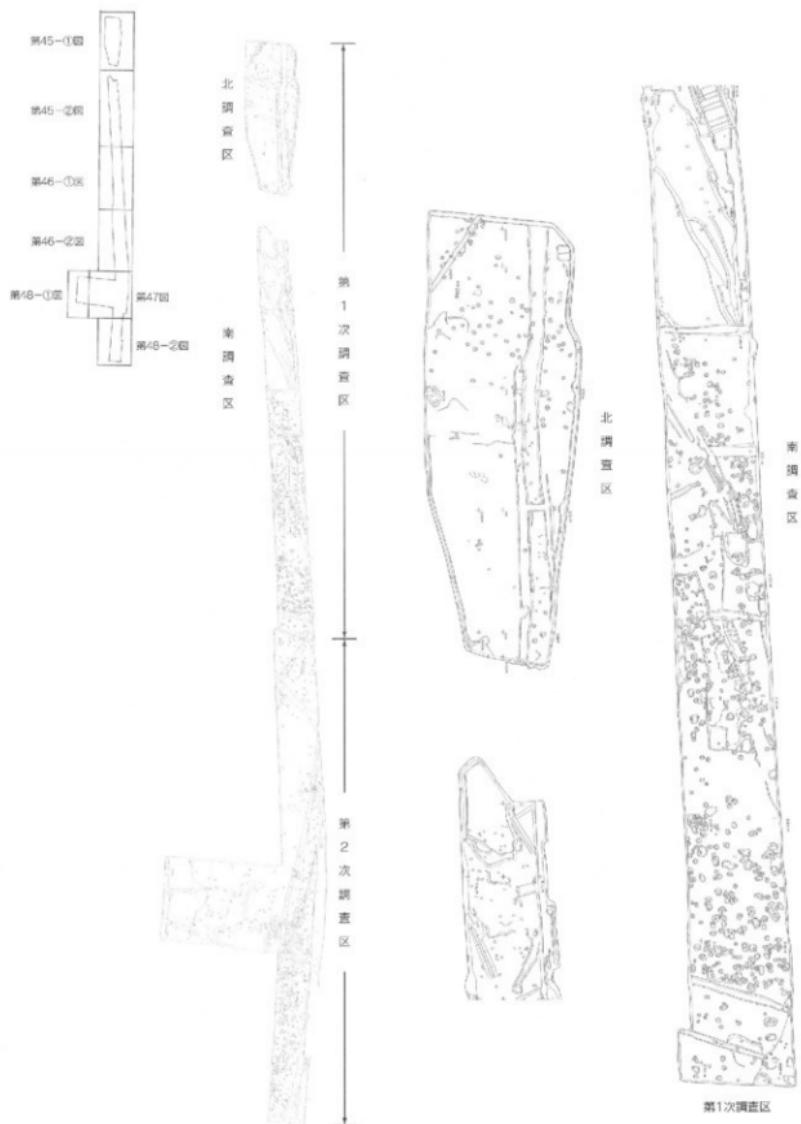
新民以嚴

指標	実測値	出土地点	%	性別	年齢	身長 (cm)	胸高 (cm)	筋延 (cm)	残存率	色調	色費	船上部材	備考
228	108	SAU-0261	W3グリッド	雄性	成年	83	83	45	筋延1/2	褐・青褐色	褐・灰白	船・底	船・底(内装材用)
229	4	SAU-0260	雄性	成年	83	83	45	筋延2/3	褐・透明褐色	褐・灰白	船・底	底板、内装材(人形用)	
230	57	SAU-0266	雄性	成年	83	83	45	筋延1/4	褐・透明褐色	褐・灰白	船・底	船・底(内装材用)	
231	42	SAU-0255	W7グリッド	雄性	童子	82	82	45	筋延1/4	褐・透明褐色	褐・灰白	船・底	船・底(内装材用)
232	58	SAU-0216	W1グリッド	雄性	成年	93	93	61	筋延1/6	褐・青褐色	褐・灰白	船・底	船・底(内装材用)
233	50	SAU-0266	雄性	成年	83	83	49	筋延2/2	褐・透明褐色	褐・灰白	船・底	船・底(内装材用)	
234	79	SAU-0255	W8グリッド	雄性	成年	83	83	48	筋延2/2	褐・透明褐色	褐・灰白	船・底	船・底(内装材用)
235	21	SAU-0218	雄性	成年	83	83	48	筋延1/4	褐・透明褐色	褐・灰白	船・底	船・底(人形用)	
236	5	SAU-0260	雄性	成年	96	96	51	筋延1/5	褐・青褐色	褐・灰白	船・底	船・底(人形用)	
237	111	SAU-0225	W8 木棒上	雄性	成年	85	85	45	筋延1/2	褐・透明褐色	褐・灰白	船・底	近代

地名	実測番号	出土地点	No.ほか	種類	器種	口径 (mm)	高さ (mm)	底径 (mm)	機械孔	色調	色調	出土資料物	備考
238	112	SAU0225	W.8 - 木砂上	漆器	刷毛	-	44	高部2/3 底部1/3	褐色	褐色	第1灰白	近代	
239	118	SAU0225	W.8 - 木砂上	漆器	刷毛	-	57	褐色	褐色	褐色	第1灰白	近代	
240	120	SAU0225	W.8 - 木砂上	漆器	刷毛	55	59	40	全体1/3 底部2/3	褐色	褐色	漆器	近代
241	121	SAU0225	W.8 - 木砂上	漆器	刷毛	-	42	全体1/3 底部2/3	褐色	褐色	漆器	近代	
242	25	SAU0201	-	漆器	刷毛	124	-	74	全体1/2 底部1/2	褐色	褐色	漆器	古代
243	51	SAU016	W11グリッド	漆器	刷毛	-	45	全体1/3 底部2/3	褐色	褐色	漆器	古代、近代	
244	53	SAU016	W12グリッド	漆器	刷毛	130	-	40	全体1/3 底部2/3	褐色	褐色	漆器	古代
245	115	SAU0225	W.8 - 木砂上	漆器	刷毛	73	35	28	全高1/8 底部1/3	褐色	褐色	漆器	近代、江戸時代
246	83	SAU0225	W.7グリッド	漆器	刷毛	小判	-	30	全体1/3 底部1/2	褐色	褐色	漆器	古代
247	85	SAU0225	W.7グリッド	漆器	刷毛	小判	86	38	全体1/2 底部1/2	褐色	褐色	漆器	古代
248	117	SAU0250	-	漆器	刷毛	60	-	28	全体1/3 底部1/2	褐色	褐色	漆器	古代?
249	22	SAU238	-	漆器	刷毛	108	-	60	全体1/6 底部5/6	褐色	褐色	漆器	褐色
250	33	SAU0282	-	漆器	刷毛	-	42	底部1/3 底部2/3	褐色	褐色	漆器	褐色	
251	55	SAU0226	-	漆器	刷毛	-	48	底部1/2 底部3/4	褐色	褐色	漆器	褐色	
252	46	SAU016	W11グリッド	漆器	刷毛	-	47	全体1/3 底部2/3	褐色	褐色	漆器	褐色	
253	93	SAU011	W26カクラン	漆器	刷毛	142	-	全高1/9 底部1/9	褐色	褐色	漆器	褐色	
254	81	SAU025	W.7グリッド	漆器	刷毛	142	-	40	底部1/4 底部3/4	褐色	褐色	漆器	褐色
255	80	SAU025	W.7グリッド	漆器	刷毛	136	-	40	全体1/7 底部6/7	褐色	褐色	漆器	褐色
256	113	SAU0225	W.8 - 木砂上	漆器	刷毛	124	-	40	全体1/6 底部5/6	褐色	褐色	漆器	褐色
257	84	SAU0225	W.8 - 木砂上	漆器	刷毛	-	40	全体1/6 底部5/6	褐色	褐色	漆器	褐色	
258	TA	SAU101	-	漆器	刷毛	26	13	10	全体1/4 底部3/4	褐色	褐色	漆器	褐色
259	24	SAU129	-	漆器	刷毛	-	11	10	全体1/4 底部3/4	褐色	褐色	漆器	本が短縮して
260	114	SAU0225	W.8 - 木砂上	漆器	刷毛	-	11	10	全体1/4 底部3/4	褐色	褐色	漆器	褐色
261	20	SAU0242	-	漆器	刷毛	-	11	10	全体1/2 底部1/2	褐色	褐色	漆器	褐色
262	76	SAU026	W.7 - ト彫	漆器	刷毛	-	11	10	全体1/2 底部1/2	褐色	褐色	漆器	褐色
263	56	SAU126	-	漆器	刷毛	-	10	10	全体1/3 底部2/3	褐色	褐色	漆器	褐色
264	6	SAU2490	-	漆器	刷毛	-	10	10	全体1/5 底部4/5	褐色	褐色	漆器	褐色
265	116	SAU020	-	漆器	刷毛	28	39	39	全体1/5 底部4/5	褐色	褐色	漆器	褐色
266	110	SAU0251	W3グリッド	漆器	刷毛	-	32	40	全体1/2 底部1/2	褐色	褐色	漆器	褐色
267	47	SAU016	W11グリッド	漆器	刷毛	-	41	底部1/2 底部1/2	褐色	褐色	漆器	褐色	
268	152	SAU016	W12 - 上彫	漆器	刷毛	92	-	40	全体1/7 底部6/7	褐色	褐色	漆器	褐色
269	122	SAU0250	-	漆器	刷毛	-	136	105	全体1/6 底部5/6	褐色	褐色	漆器	九谷
270	75	SAU0225	W.7 - 上彫	漆器	刷毛	220	-	105	全体1/6 底部5/6	褐色	褐色	漆器	褐色
271	69	SAU0226	-	漆器	刷毛	180	-	90	砂片	砂片	砂片	漆器	褐色
272	49	SAU016	W11グリッド	漆器	刷毛	-	288	140	全体1/4 底部3/4	褐色	褐色	漆器	褐色
273	139	SAU0225	W.8 - 木砂上	漆器	刷毛	-	92	-	砂片	砂片	砂片	漆器	褐色
274	71	SAU0242	-	漆器	刷毛	-	105	全体1/6 底部5/6	褐色	褐色	漆器	褐色	
275	148	SAU01	W27下	漆器	刷毛	-	90	砂片	砂片	砂片	砂片	漆器	褐色

その他の

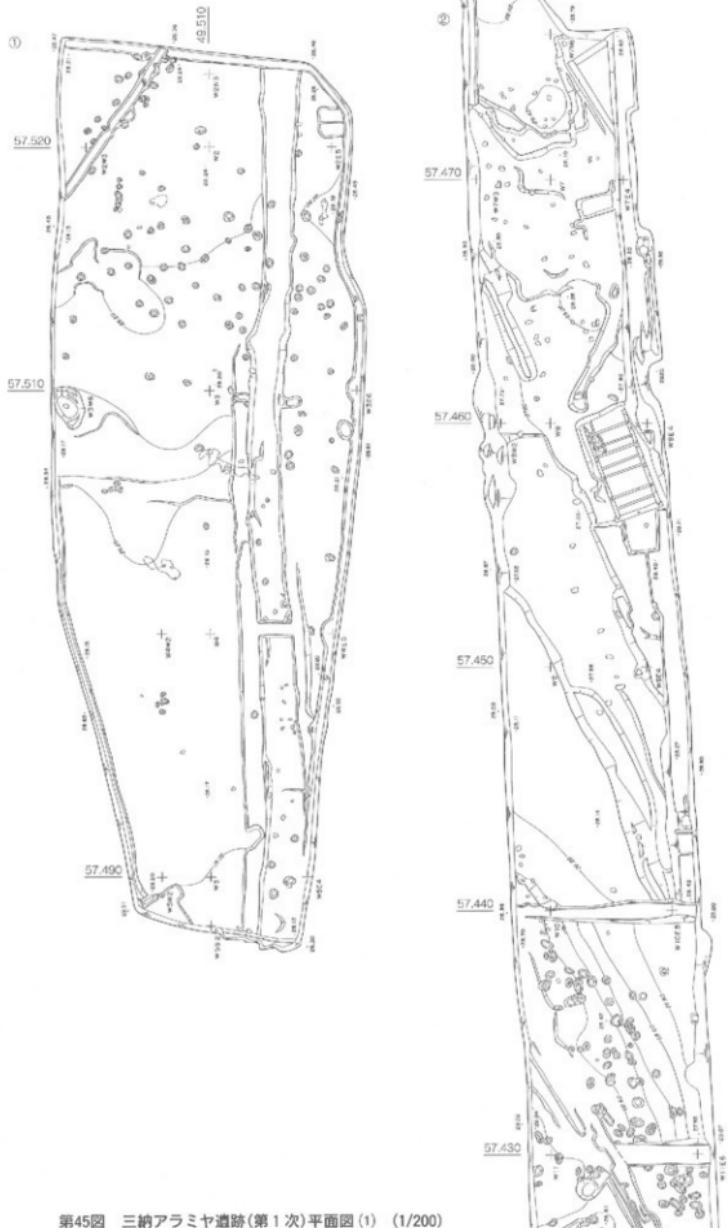
実測番号	番号	出土地点	No.ほか	種類	器種	口径 (mm)	底径 (mm)	高さ (mm)	我存率	色調	色調	出土資料物	備考
276	59	SAU016	W12 - 上彫	石製品	砥石	-	-	-	-	-	-	板状、長さ18cm、幅50mm、厚4mm、重165g	
277	127	SAU0251	W3グリッド	石製品	砥石	-	-	-	-	-	-	長さ88mm、幅7mm、厚3mm、重165g	
278	34	SAU011	W2fa	石製品	砥石	-	-	-	-	-	-	研磨工具、長さ115mm、幅45mm、厚2mm、重128g	
279	38	SAU0119	X18m	石製品	砥石	-	-	-	-	-	-	砂7号? 研磨、長さ18cm、幅3mm、厚1.5mm、重138g	
280	19	SAU011	-	土製品	土器	-	-	-	-	-	-	長さ40.5mm、幅28mm、内径16.5mm、底径13mm、厚3mm、重310g、重121g	
281	20	SAU011	-	土製品	土器	-	-	-	-	-	-	長さ34.5mm、幅22mm、内径15mm、底径10mm、厚2mm、重23g	
282	35	SAU016	W12グリッド	土製品	土器	-	-	-	-	-	-	長さ27mm、幅26mm、内径10mm、厚3mm、重26g	
283	36	SAU016	W12グリッド	土製品	土器	-	-	-	-	-	-	長さ25mm、幅25mm、内径12mm、厚3mm、重24g	
284	66	SAU0226	-	土製品	土器	-	-	-	-	-	-	長さ40mm、幅28mm、内径18mm、底径15mm、厚3mm、重373g、重123g	
285	124	SAU0225	木砂上	木手足	木手足	-	-	-	-	-	-	木手足? 長45mm、幅12mm、厚2mm、重42g	
286	23	SAU014	12	-	漆器	-	-	-	-	-	-	漆器? 長45mm、幅12mm、厚2mm、重42g	
287	22	SAU014	-	-	漆器	-	-	-	-	-	-	漆器? 長45mm、幅12mm、厚2mm、重42g	
288	23	SAU031	-	-	漆器	-	-	-	-	-	-	漆器? 長45mm、幅12mm、厚2mm、重42g	
289	182	SAU0224	8	-	鉢深	-	-	-	-	-	-	漆器? 長45mm、幅12mm、厚2mm、重42g	
290	5	SAU019	10	漆器製品	漆	-	-	-	-	-	-	漆器? 長45mm、幅12mm、厚2mm、重42g	
291	33	SAU016	W12グリッド	漆器製品	漆	-	-	-	-	-	-	漆器? 長45mm、幅12mm、厚2mm、重42g	
292	73	SAU0242	-	漆器製品	漆	-	-	-	-	-	-	漆器? 長45mm、幅12mm、厚2mm、重42g	
293	32	SAU011	-	漆器製品	漆	-	-	-	-	-	-	漆器? 長45mm、幅12mm、厚2mm、重42g	
294	3	SAU016	W12グリッド	漆器製品	漆	-	-	-	-	-	-	漆器? 長45mm、幅12mm、厚2mm、重42g	
295	125	SAU0225	W.8 - 木砂上	漆器製品	漆	-	-	-	-	-	-	漆器? 長45mm、幅12mm、厚2mm、重42g	
296	126	SAU0225	W.8グリッド	漆器製品	漆	-	-	-	-	-	-	漆器? 長45mm、幅12mm、厚2mm、重42g	
297	72	SAU0225	-	ガラス	半乳瓶	-	-	-	-	-	-	ガラス? 半乳瓶? 長45mm、幅12mm、厚2mm、重42g	
298	77	SAU0225	W.7 - 中彫	ガラス	瓶	38	-	-	-	-	-	ガラス? 瓶? 長45mm、幅12mm、厚2mm、重42g	
299	28	SAU0225	W.7 - 中彫	ガラス	瓶	-	-	-	-	-	-	ガラス? 瓶? 長45mm、幅12mm、厚2mm、重42g	
300	80	SAU0225	W.7グリッド	セラロイド	漆	-	-	-	-	-	-	セラロイド? 漆? 長45mm、幅12mm、厚2mm、重42g	



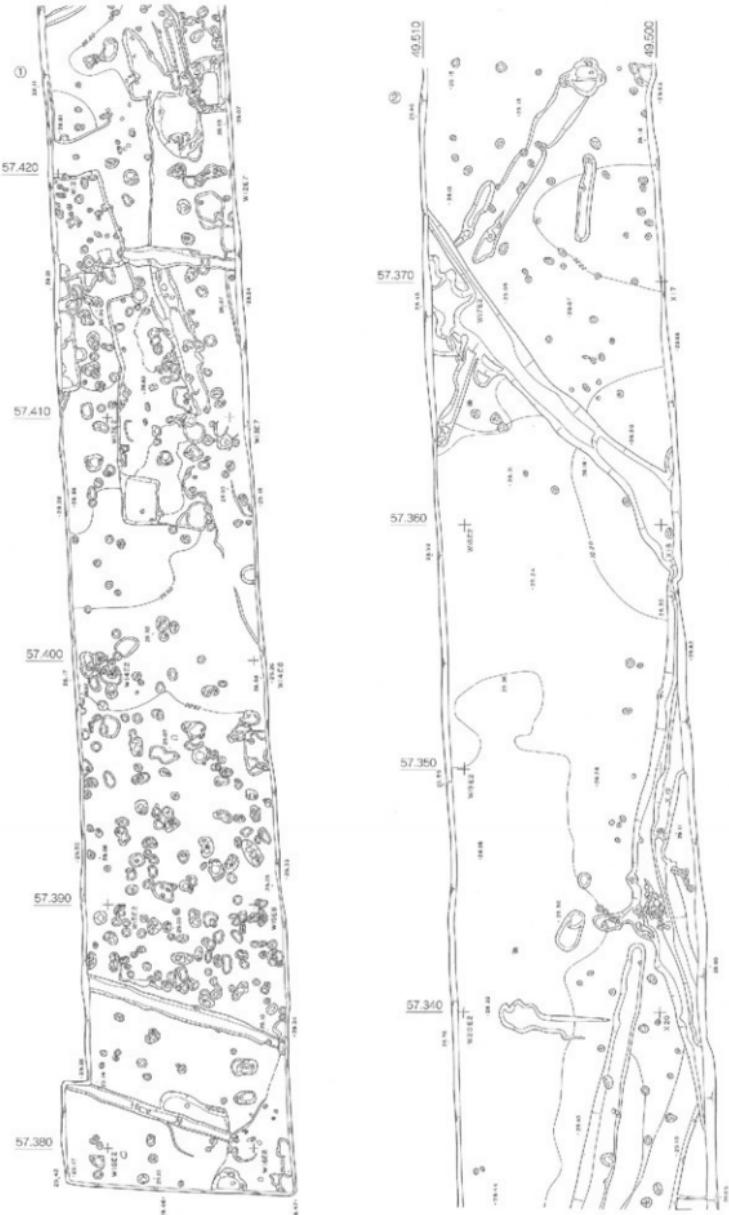
第43図 三納アラミヤ遺跡(第1・2次)遺構分布図(1) (1/1,200、1/400)



第44図 三納アラミヤ遭跡(第1・2次)遺構分布図(2) (1/400)



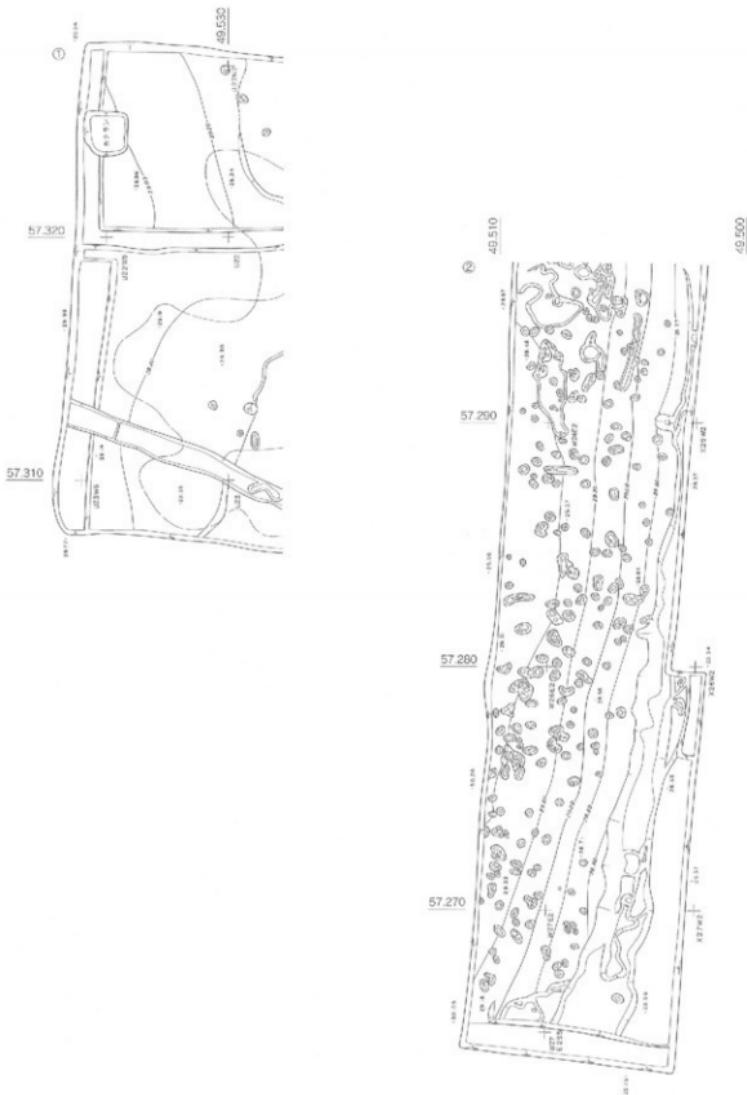
第45図 三納アラミヤ遺跡(第1次)平面図(1) (1/200)



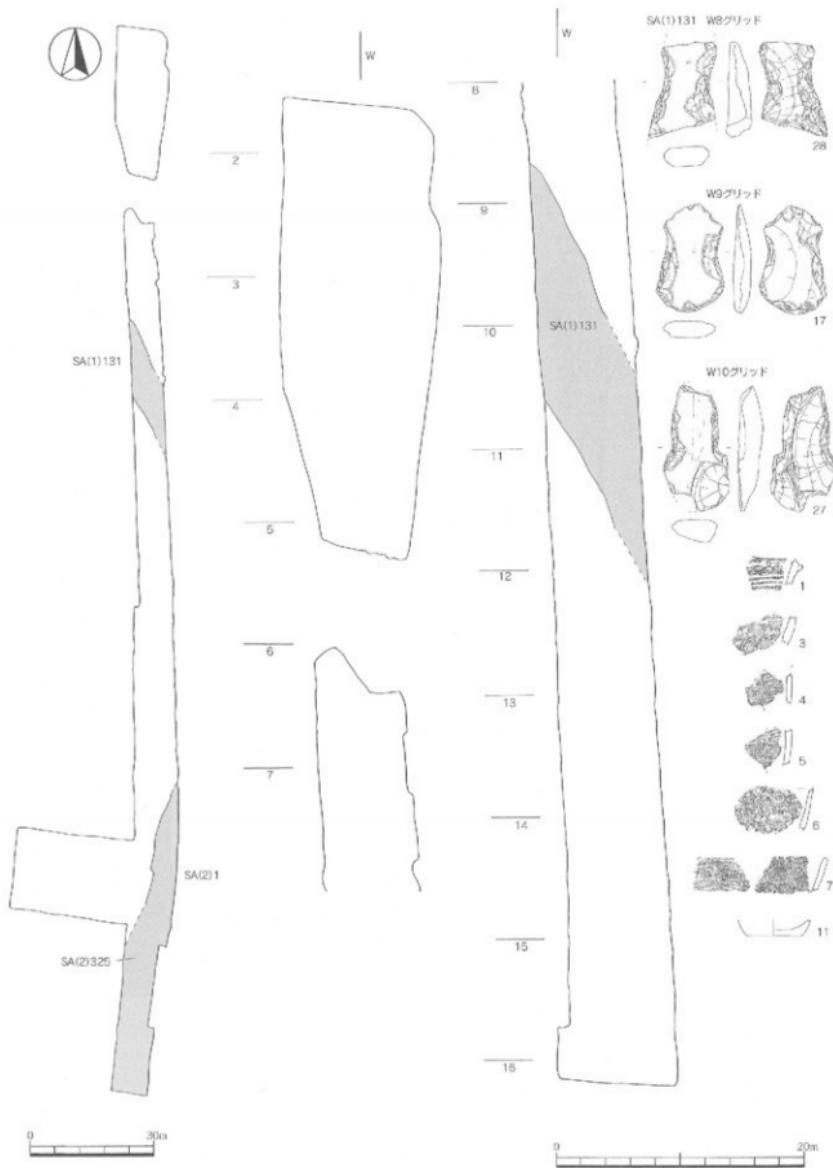
第46図 三納アラミヤ遺跡(第1・2次)平面図(2) (1/200)



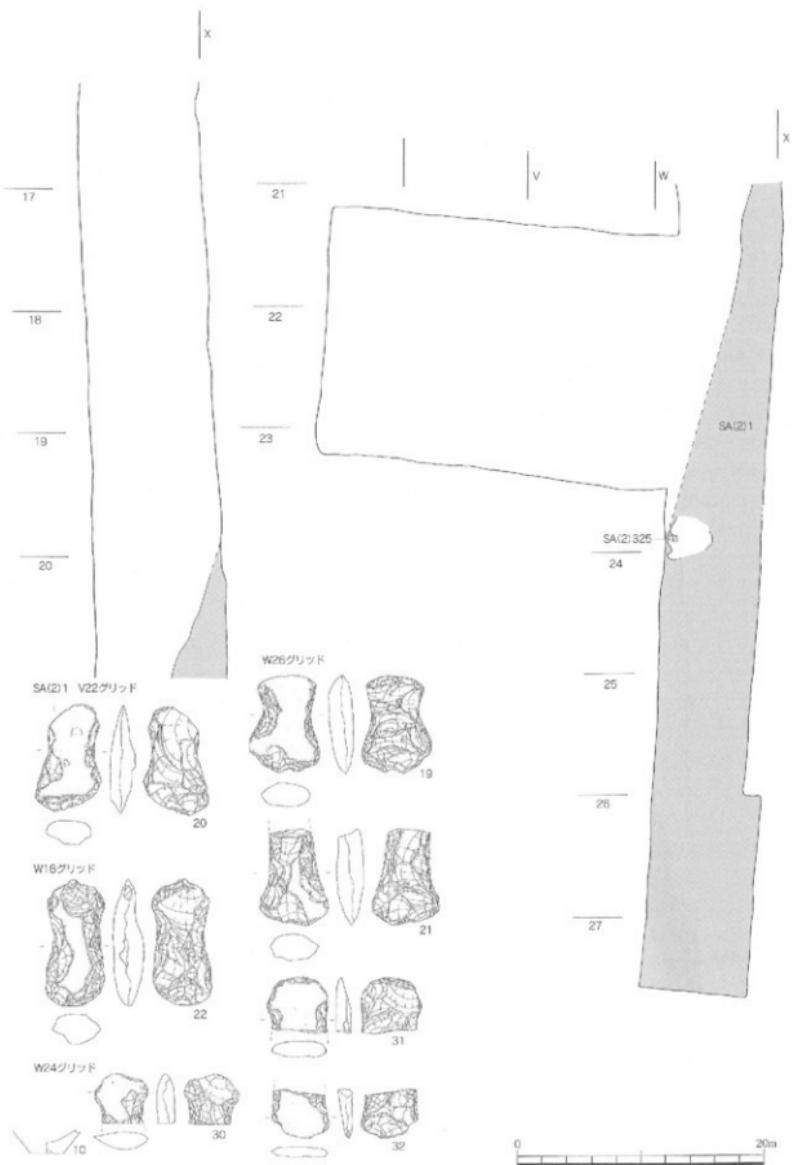
第47図 三納アラミヤ遺跡(第2次)平面図(3) (1/200)



第48図 三納アラミヤ遺跡(第2次)平面図(4) (1/200)

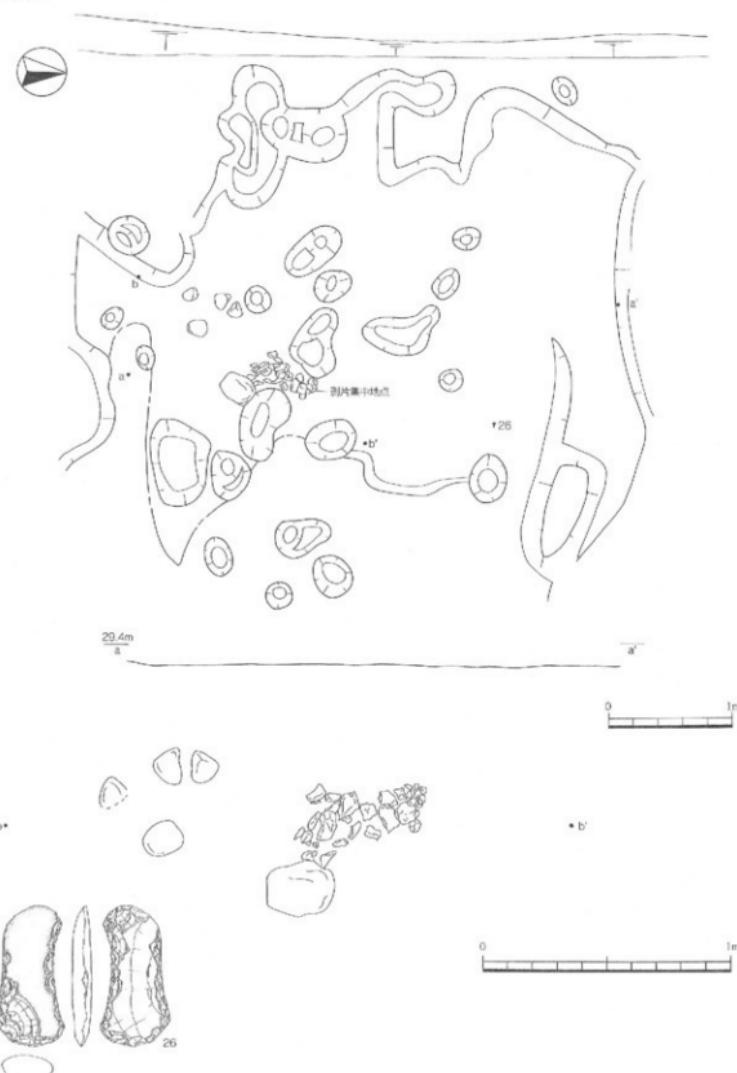


第49図 繩文時代遺構全体図(1) (1/1,200, 1/400)



第50図 繩文時代遺構全体図(2) (1/400)

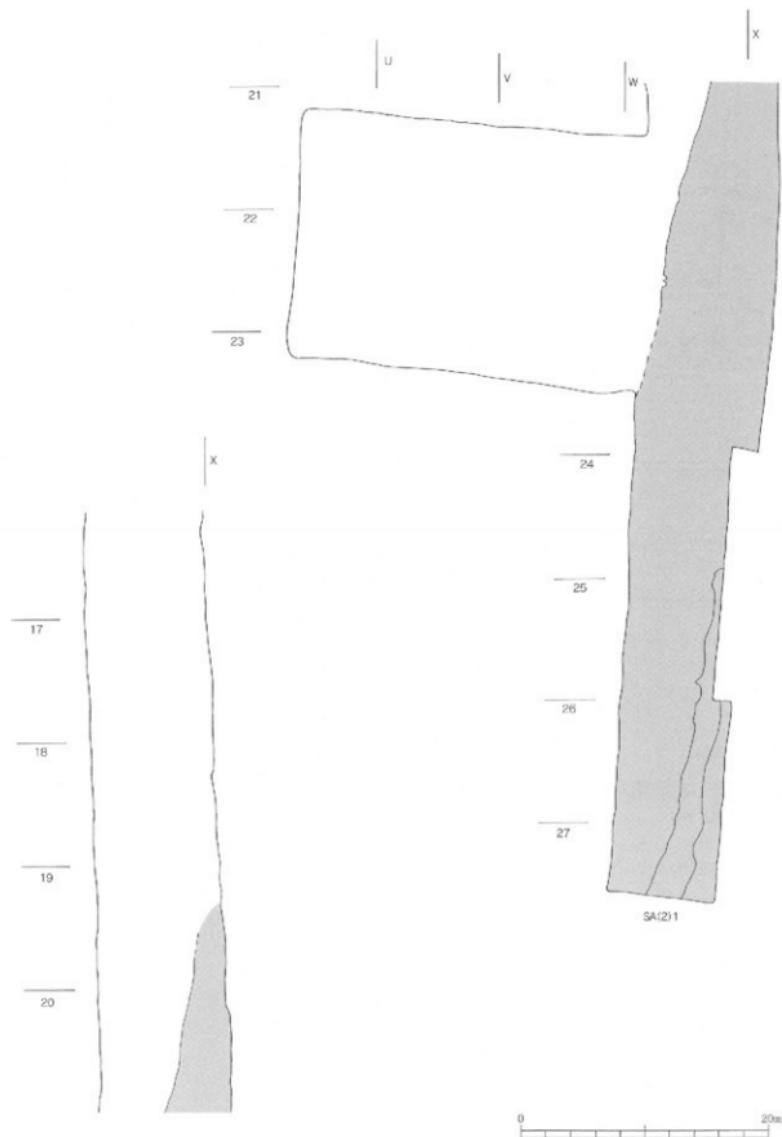
SA(2)325



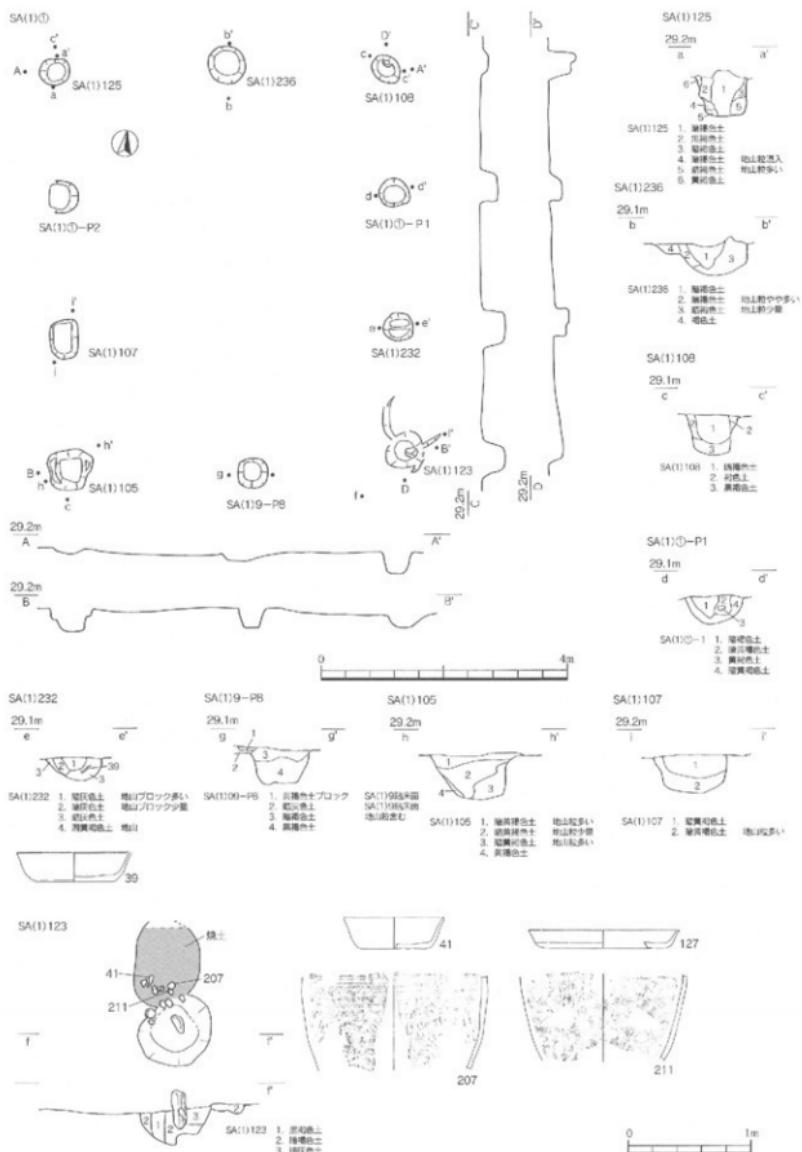
第51図 透構実測図 SA(2)325 (1/40、1/20)



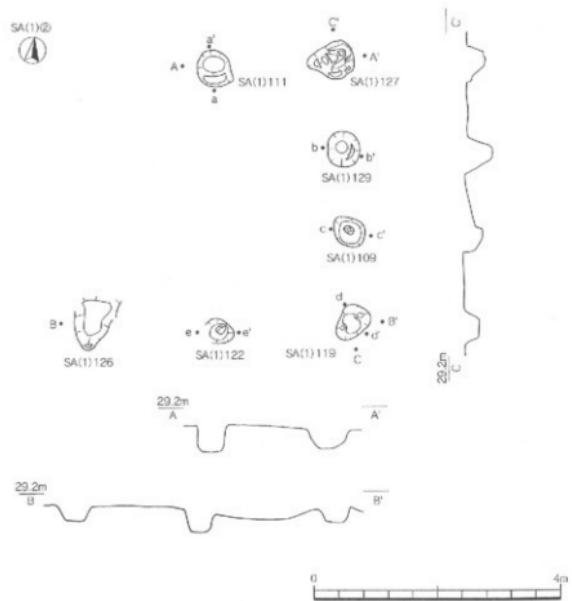
第52図 古代遺構全体図(1) (1/1,200、1/400)



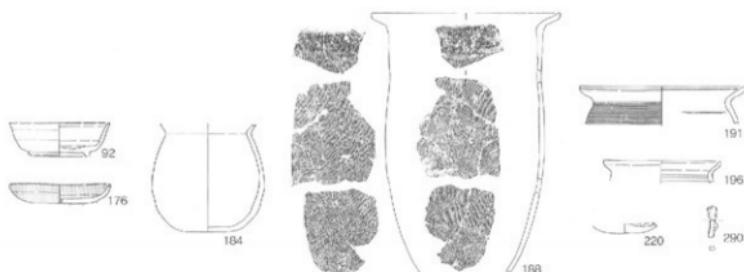
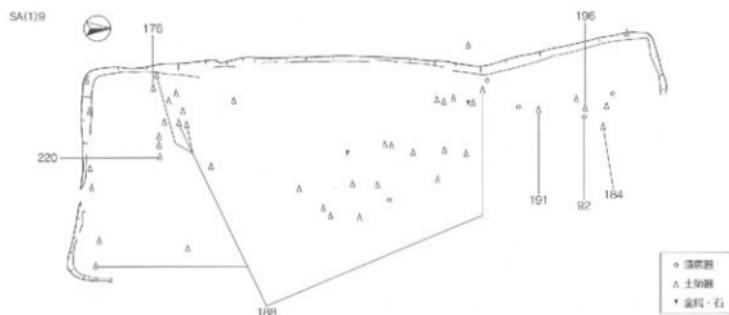
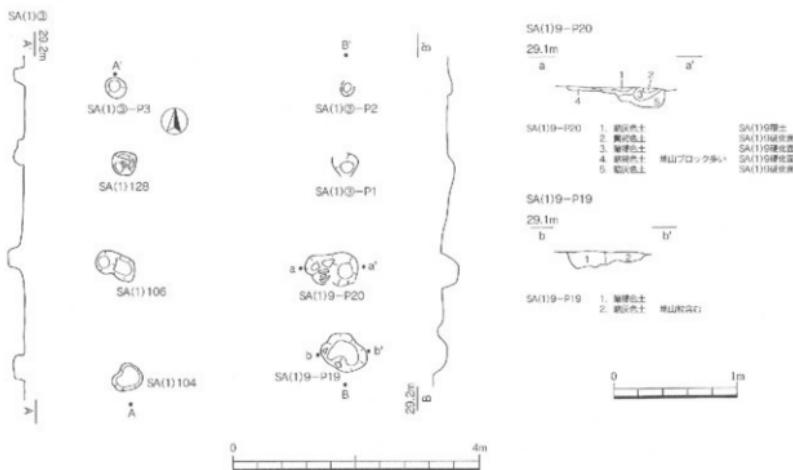
第53図 古代遺構全体図(2) (1/400)



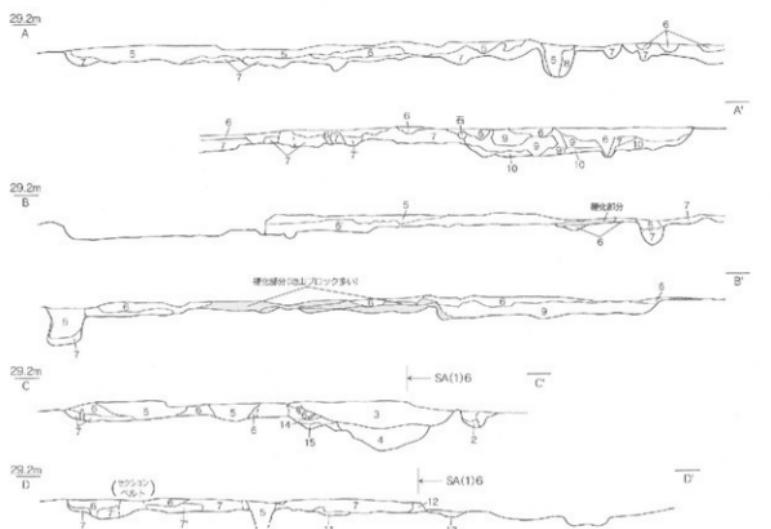
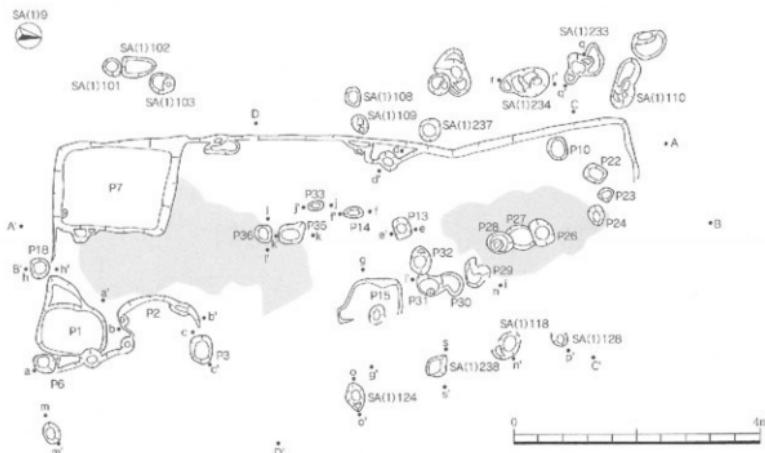
第54図 遺構塞測図 捩立柱建物SA(1)① (1/80、1/40)



第55図 遺構実測図 摺立柱建物SA(1)② (1/80、1/40)

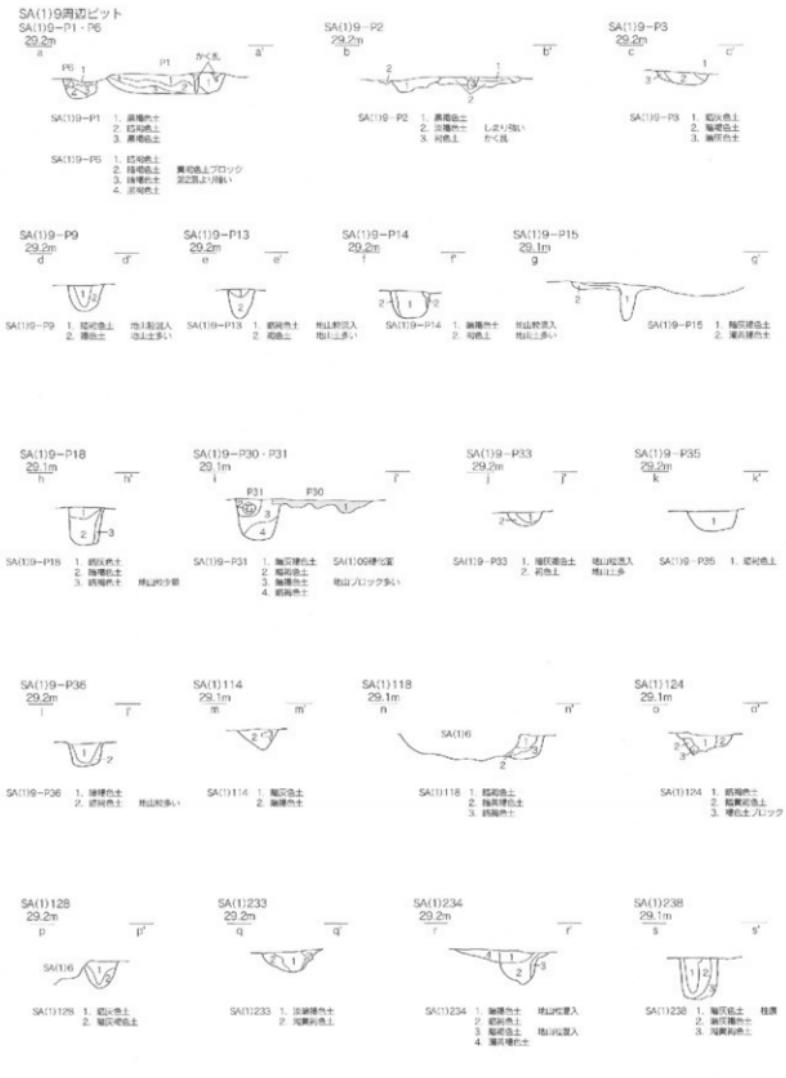


第56図 遺構実測図 挖立柱建物SA(1)③・遺物出土状況図 窓穴建物SA(1)9 (1/80, 1/40)

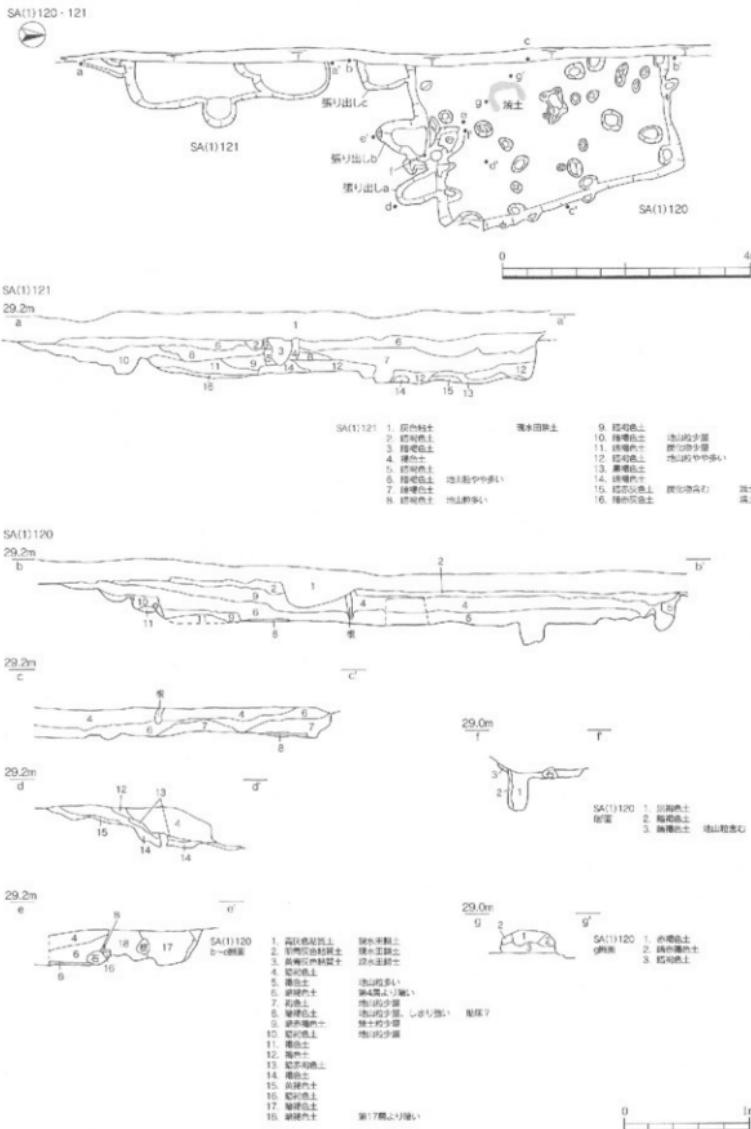


SA(1)9	1. 利用者土 2. 地形地盤上 3. 沿河段地盤 4. 沿河段地盤 5. 陸域地盤 6. 陸域地盤 7. 海岸地盤 8. 海岸地盤 9. 港湾地盤 10. 沿河段地盤 11. 陸域地盤 12. 沿河段地盤 13. 陸域地盤 14. 陸域地盤 15. 陸域地盤	ピクト要素 SA(1)9 SA(1)6西二 SA(1)6西二	9. 働地土 10. 地内土 10. 沿河段地盤 11. 陸域地盤 12. 沿河段地盤 13. 陸域地盤 14. 陸域地盤 15. 陸域地盤	沿山地帯 地内地帯 沿河段地盤 地内地帯 地内地帯 地内地帯 地内地帯 地内地帯 地内地帯 地内地帯 地内地帯 地内地帯 地内地帯 地内地帯 地内地帯	地内地帯 地内地帯 地内地帯 地内地帯 地内地帯 地内地帯 地内地帯 地内地帯 地内地帯 地内地帯 地内地帯 地内地帯 地内地帯 地内地帯 地内地帯	
--------	--	---	---	---	--	--

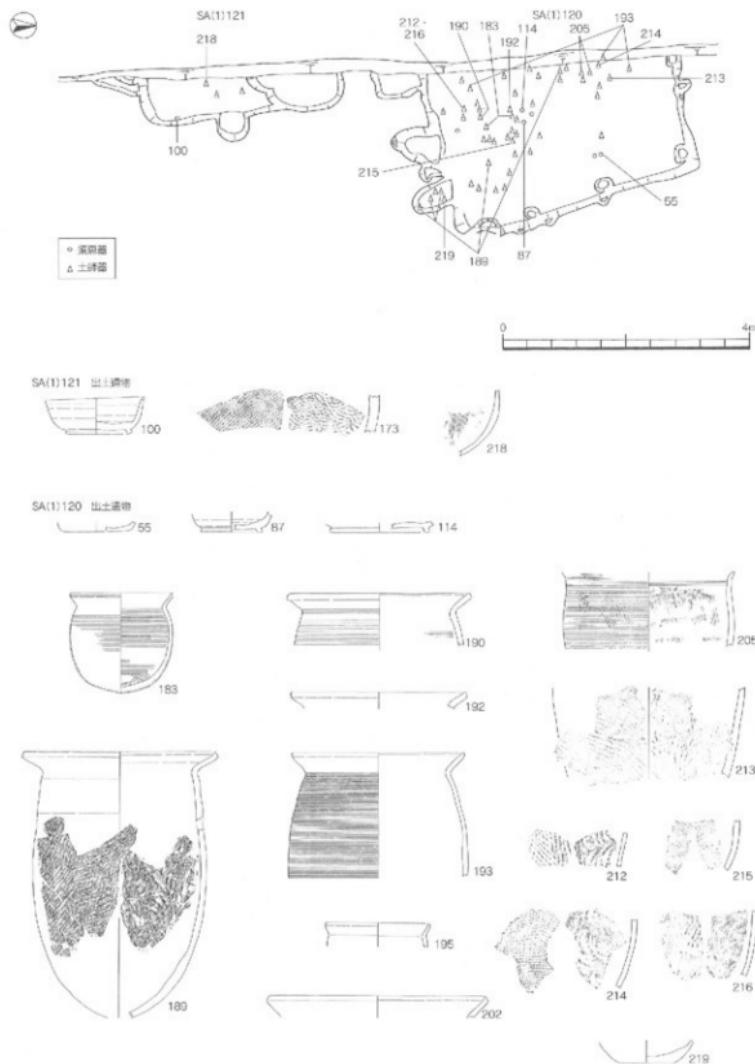
第57図 遺構実測図 駒穴建物SA(1)9(1) (1/80- 1/40)



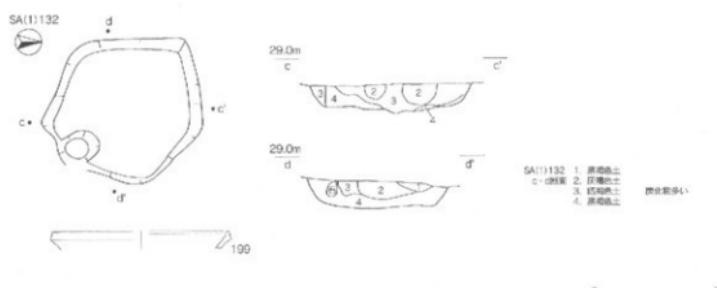
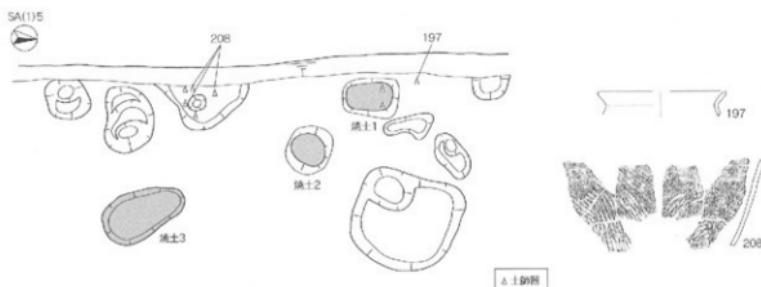
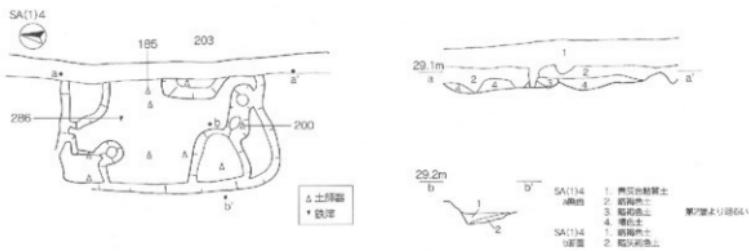
第58図 遺構実測図 坪穴建物SA(1)9(2) (1/40)



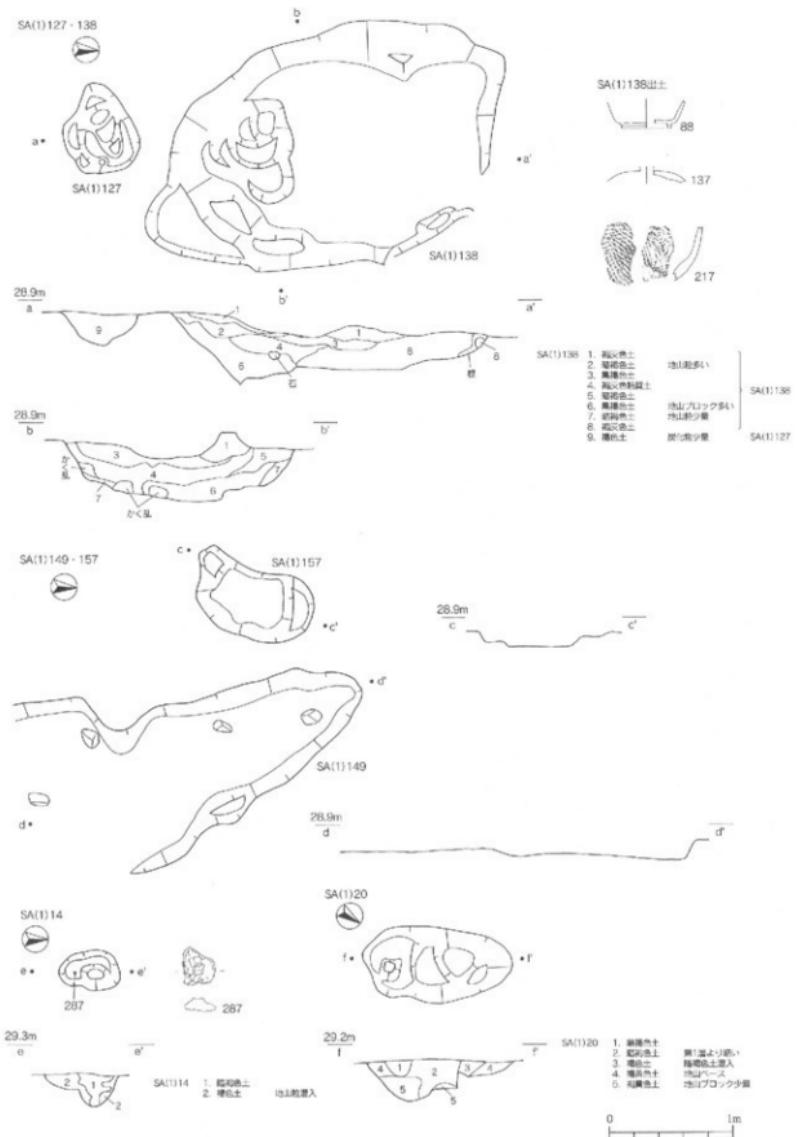
第59図 谷横塞測図 穹穴建物SA(1)120・121 (1/80、1/40)



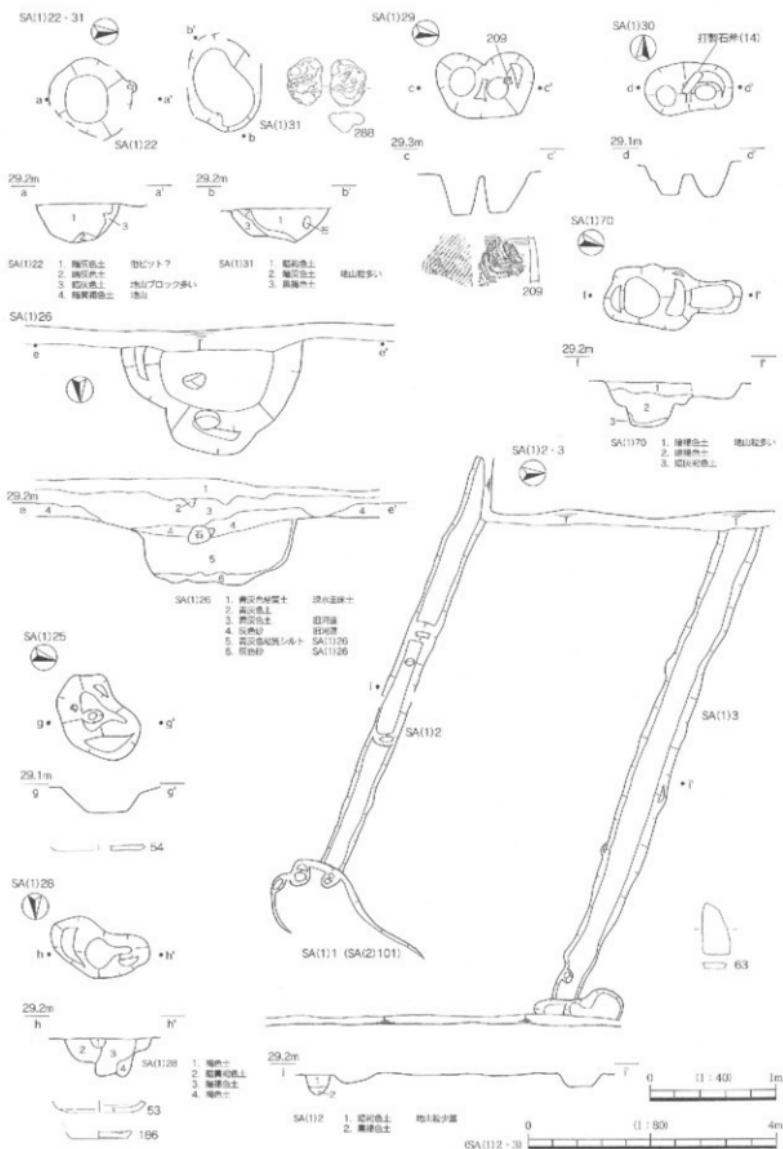
第60图 遗物出土状况 钧窑建物SA(1)120:121 (1/80)



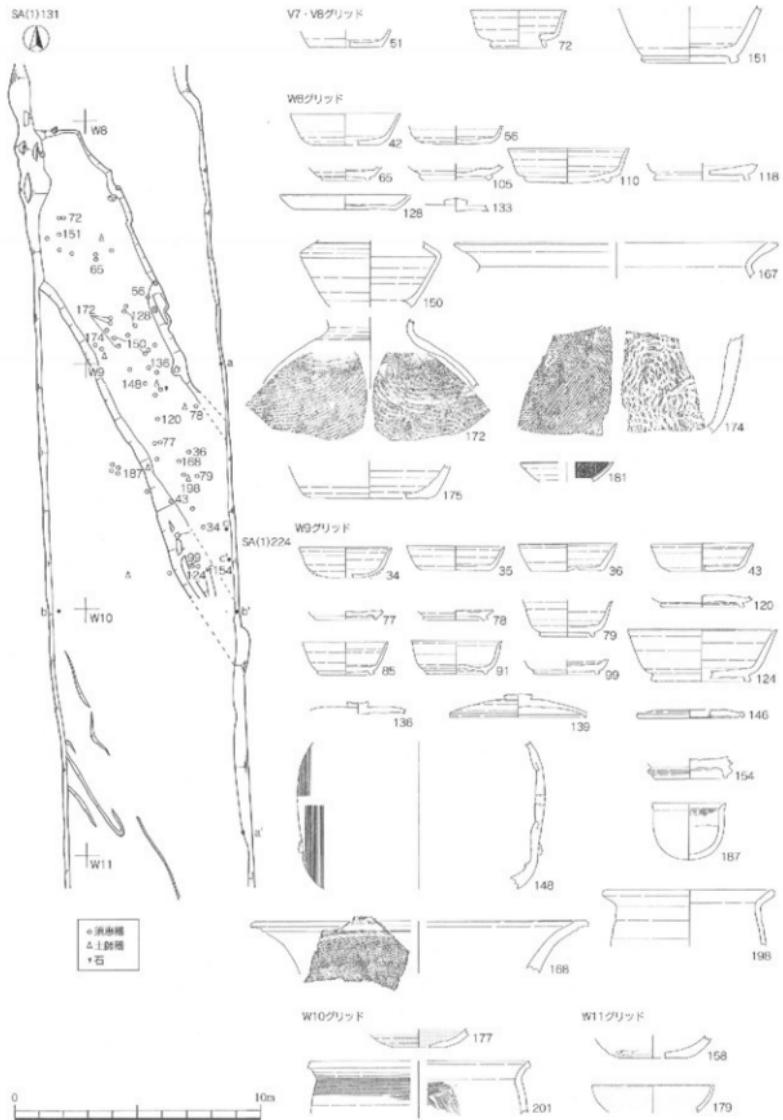
第61図 遺構実測図 土坑SA(1)4・5・132 (1/40)



第62図 遺構実測図 土壇SA(1)14:20:127:138:149:157 (1/40)



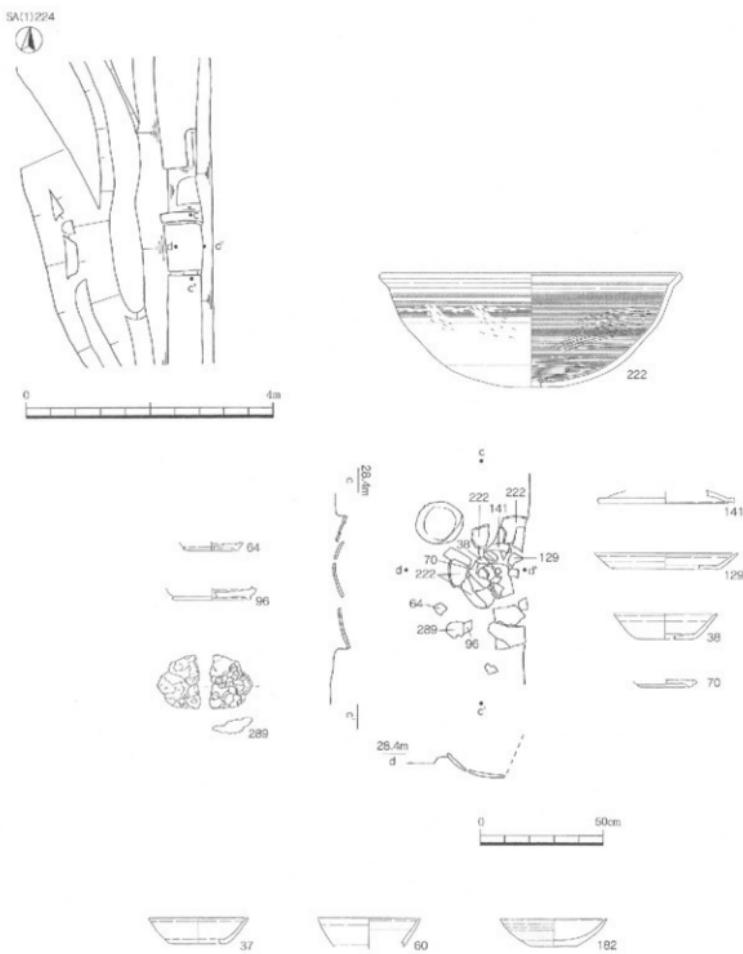
第63図 遺構実測図 ピットSA(1)22・25・26・28~31・70・90、溝SA(1)2・3 (1:80, 1:40)



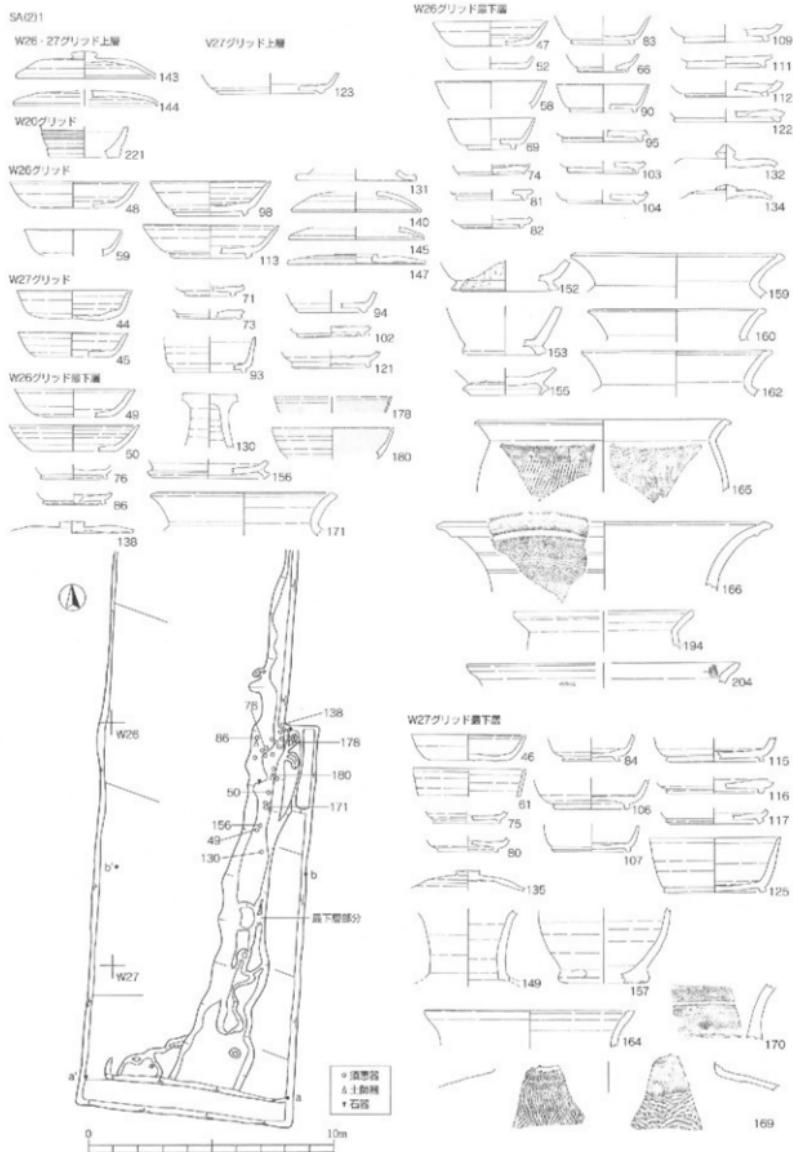
第64図 遺物出土状況 河川SA(1)131 (1/200)



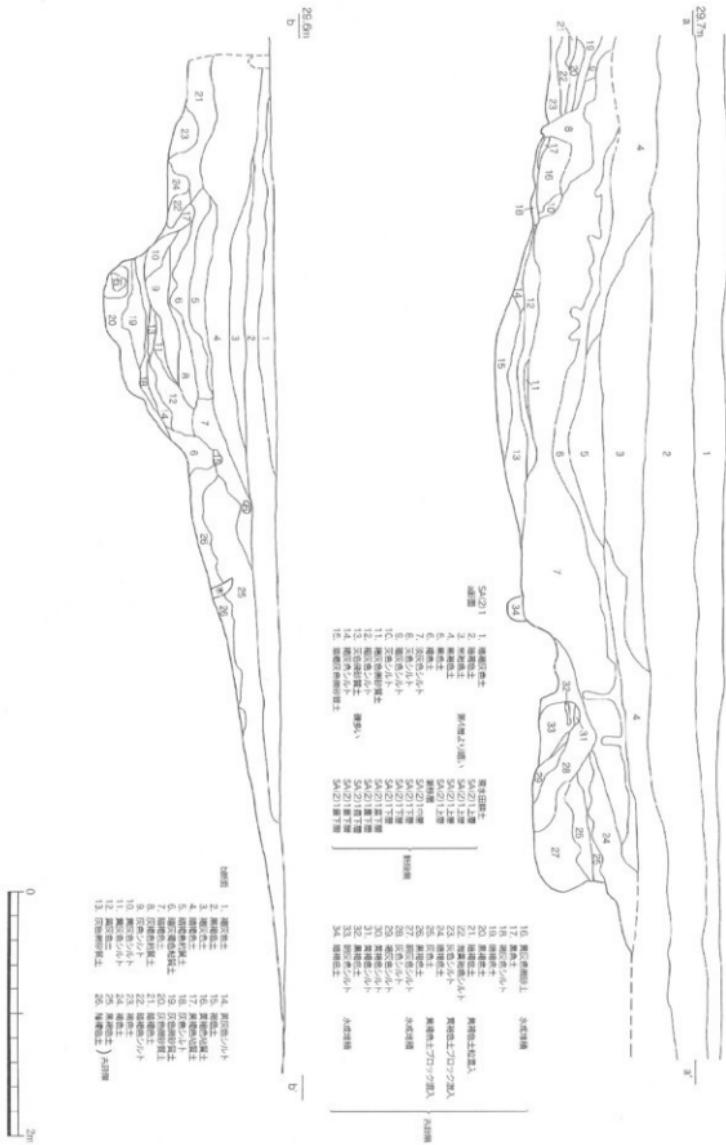
第65図 遺構実測図 河川SA(1)131 (1/40)



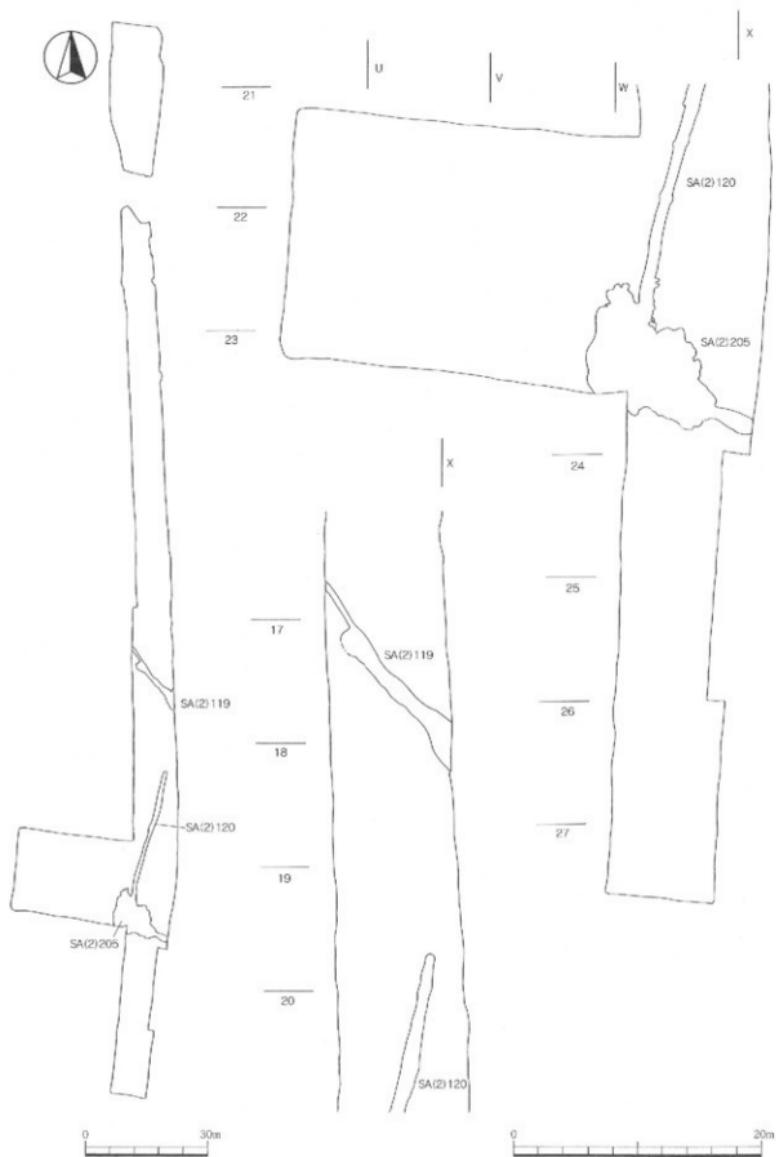
第66図 遺物出土状況 遺物集中区SA(1)224 (1/80、1/20)



第67図 遺物出土状況 河川SA(2)1 (1/200)



第68図 遺構実測図 河川SA(2)1 (1/40)



第69図 中世遺構全体図 (1/1,200、1/400)

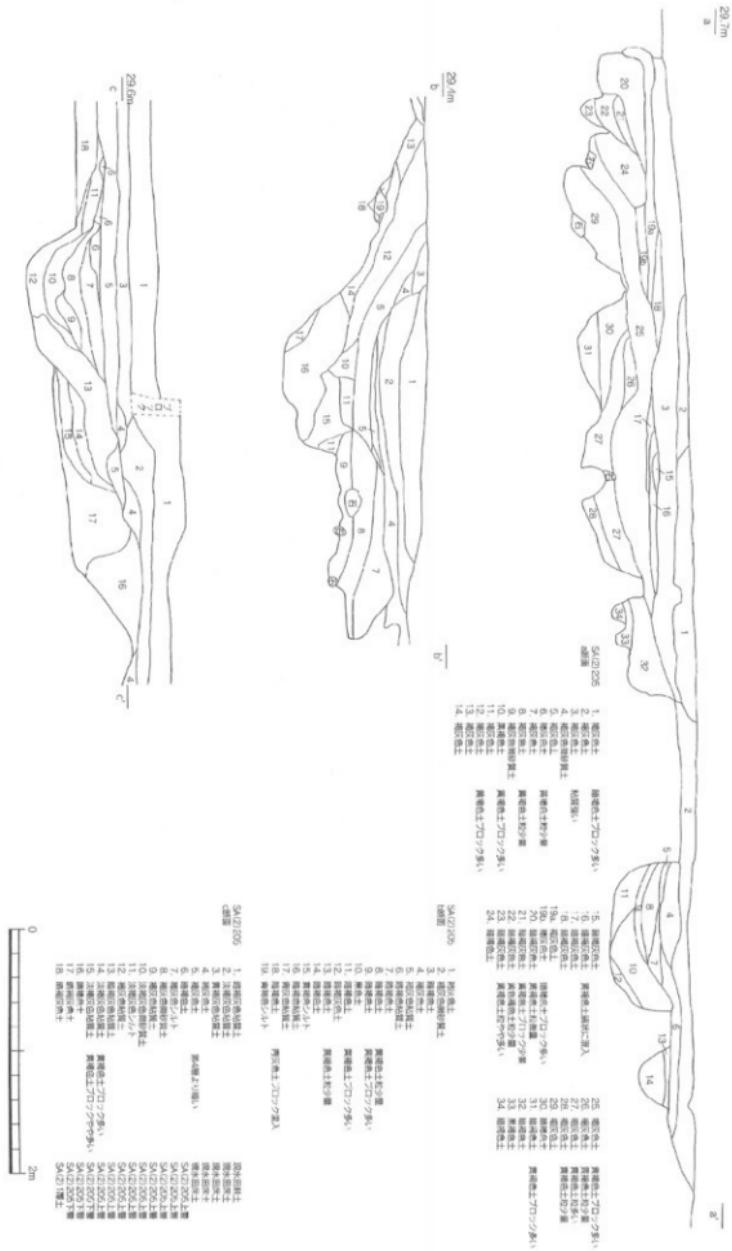
SA(2)205

(A)

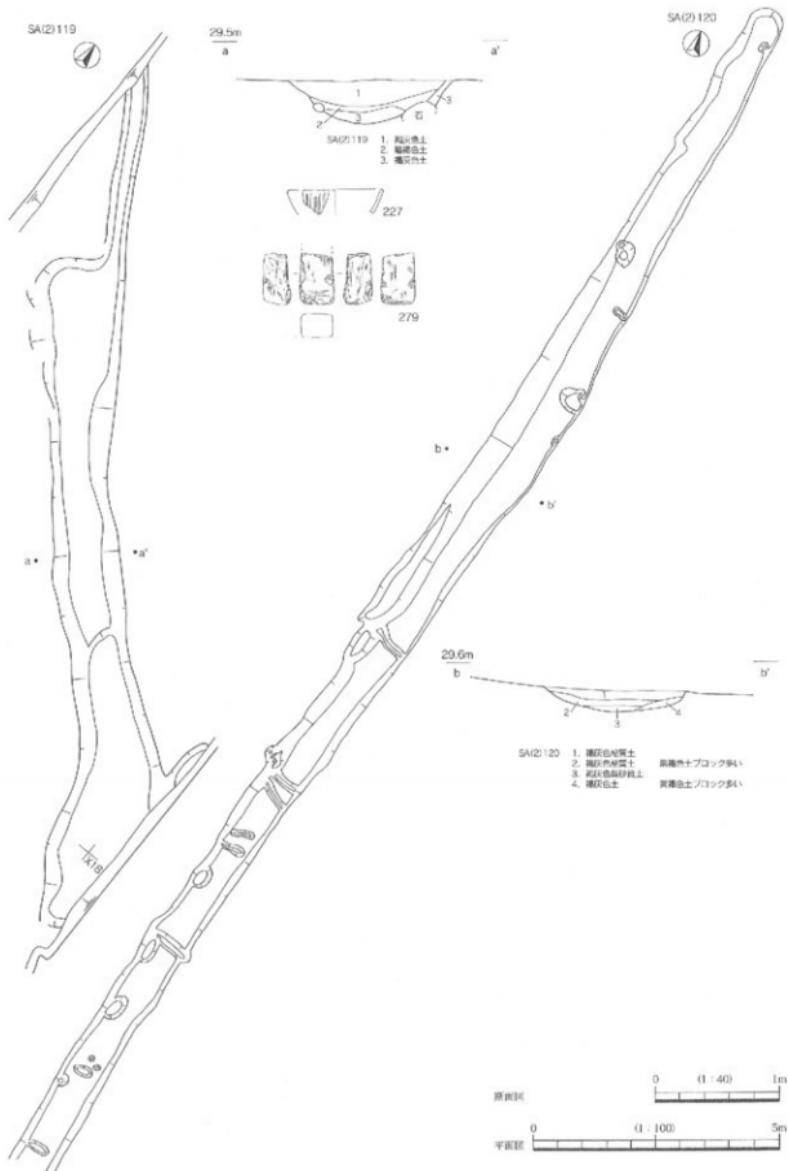


0 5m

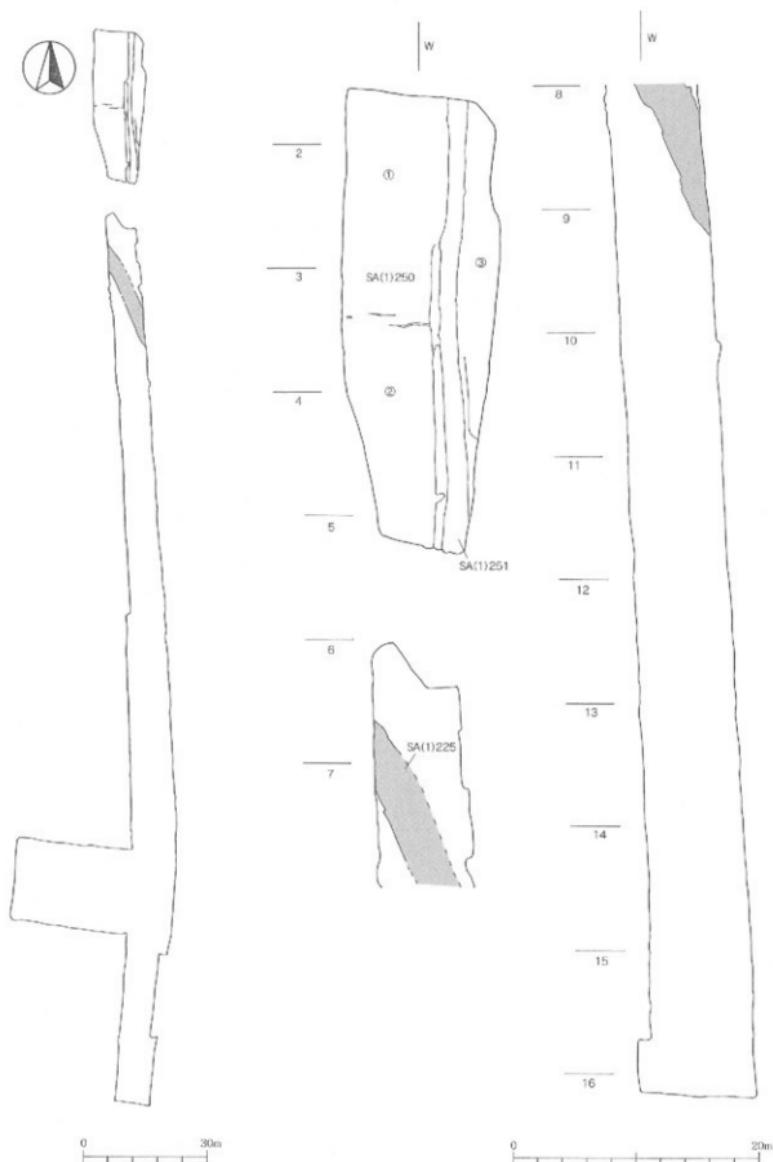
第70図 造構実測図 利水関連施設SA(2)205(1) (1/100)



第71図 遺構実測図 利水関連施設SA(2)205(2) (1/40)

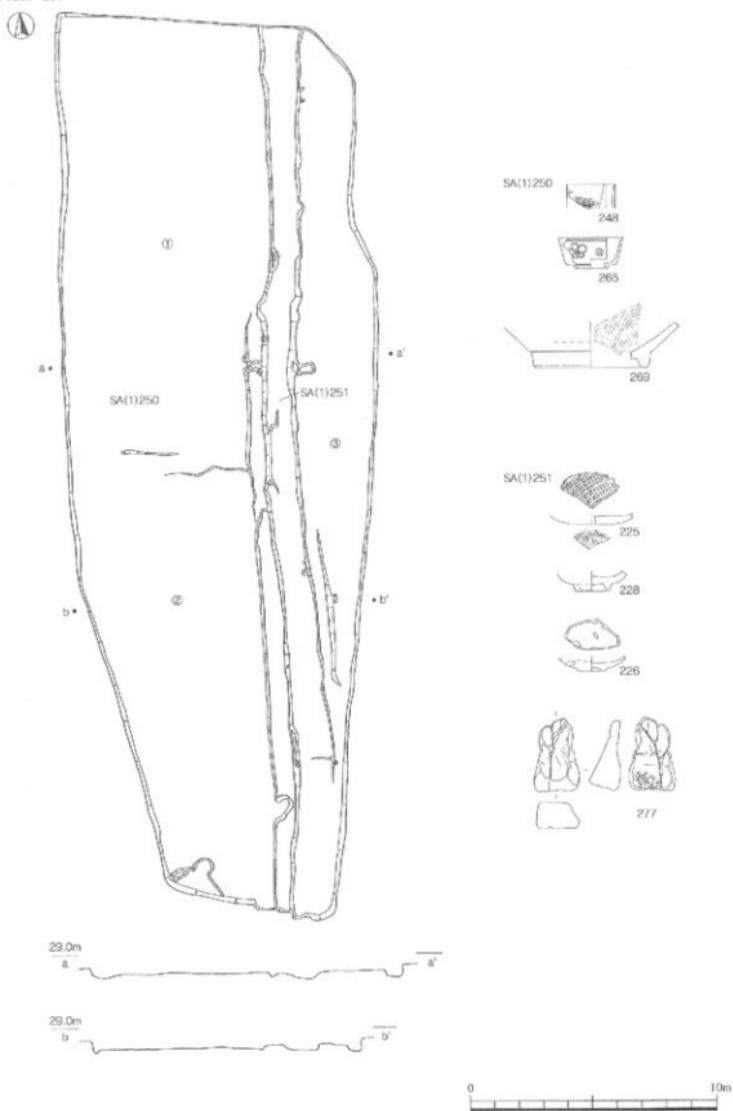


第72図 遺構実測図 満SA(2)119・120 (1/100、1/40)

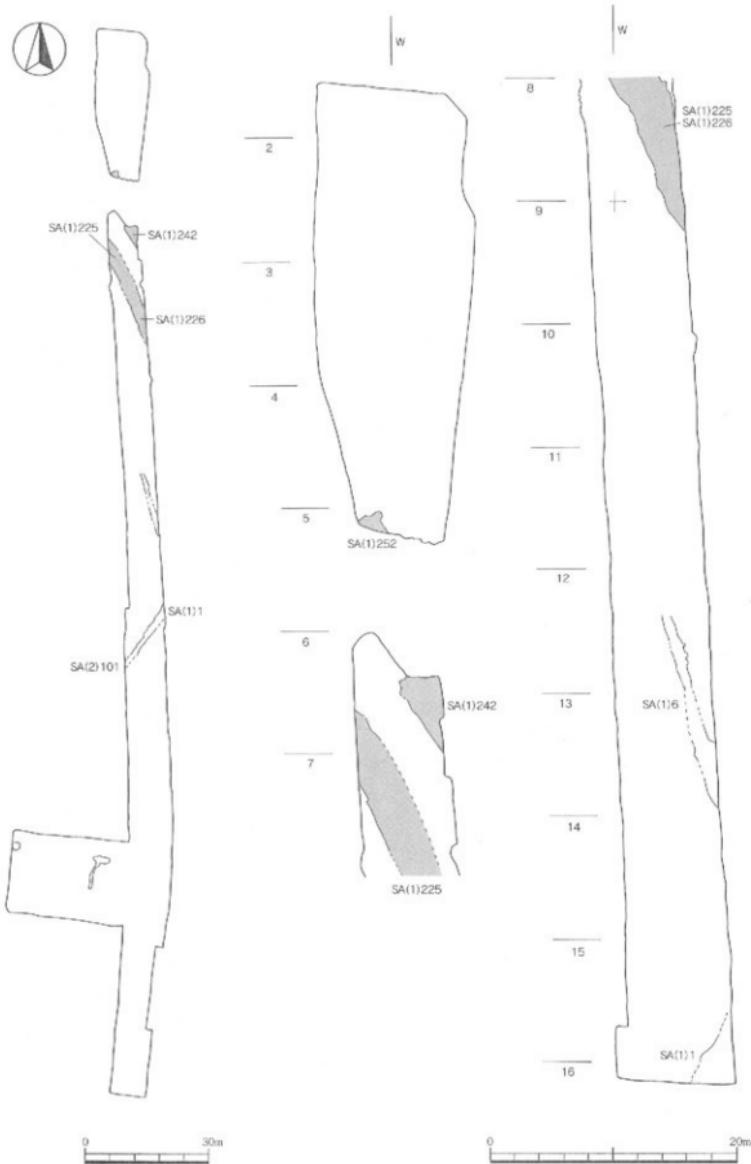


第73図 近世遺構全体図 (1/1,200、1/400)

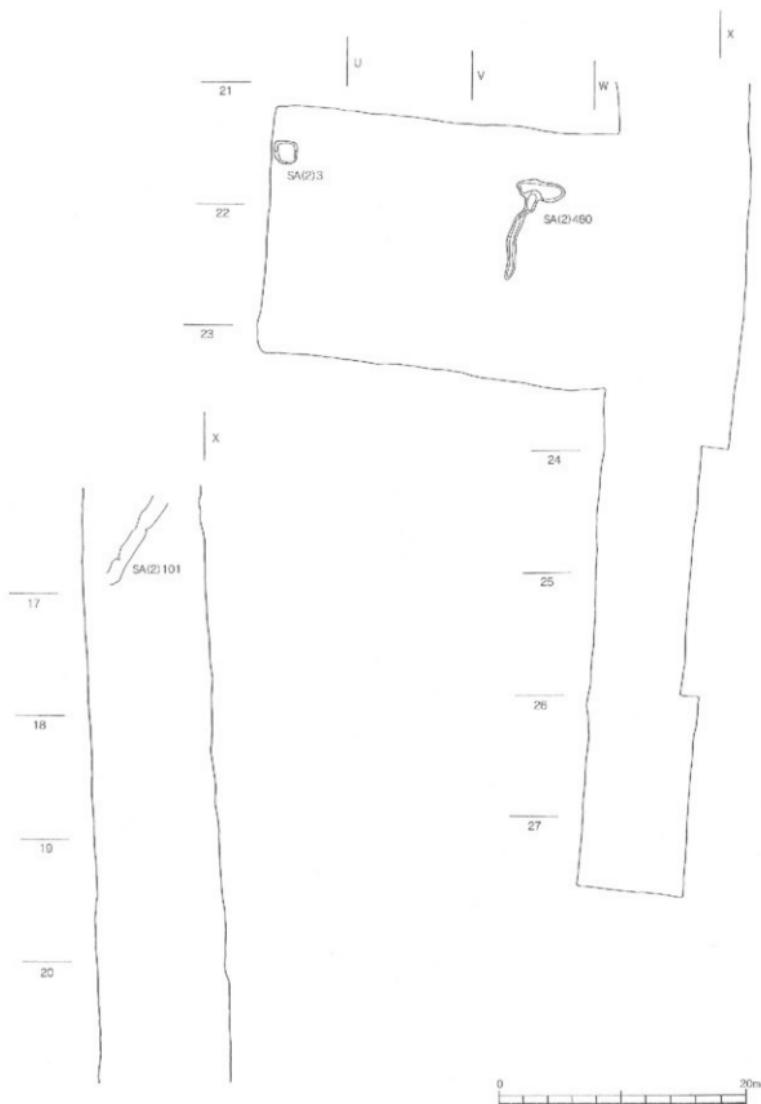
SA(1)250・251



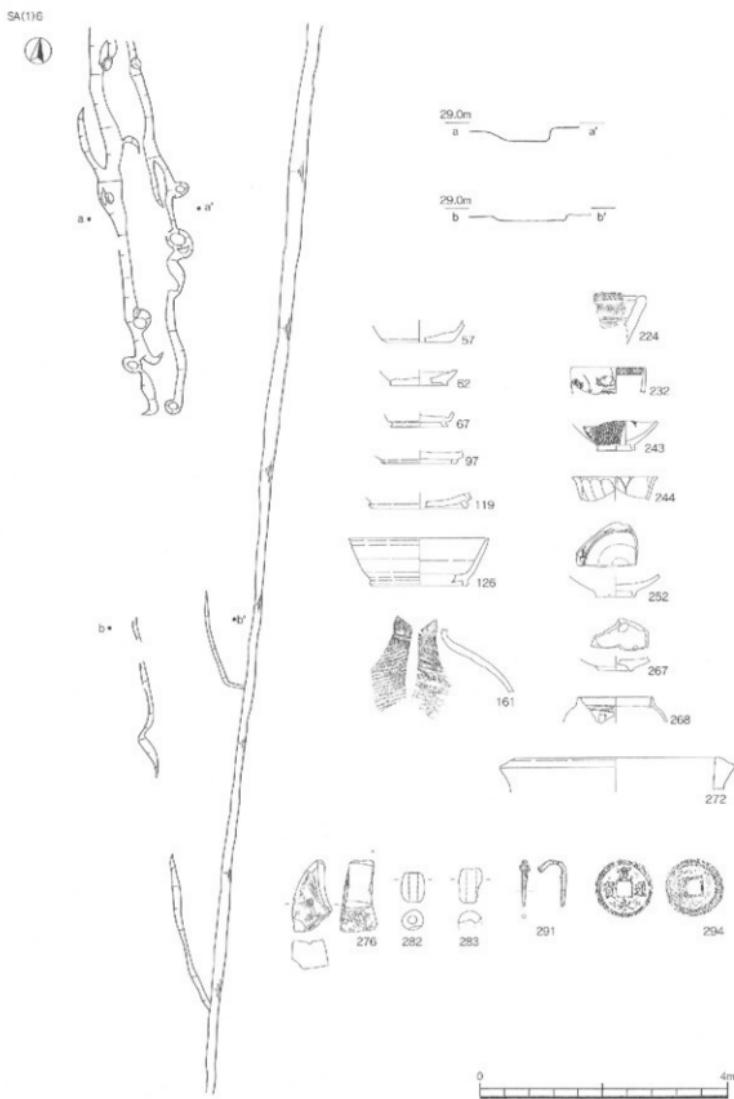
第74図 遺構実測図 水田SA(1)250、用水SA(1)251 (1/200)



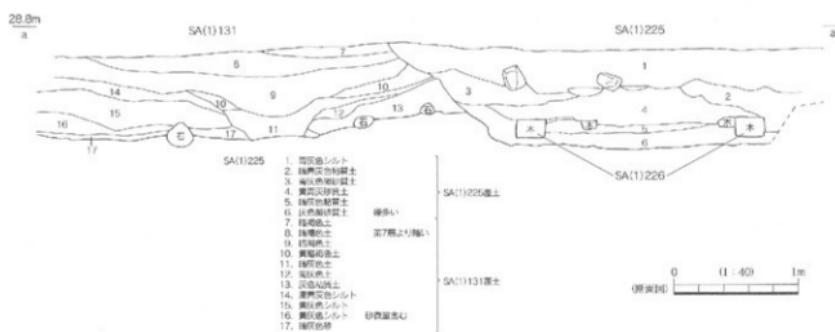
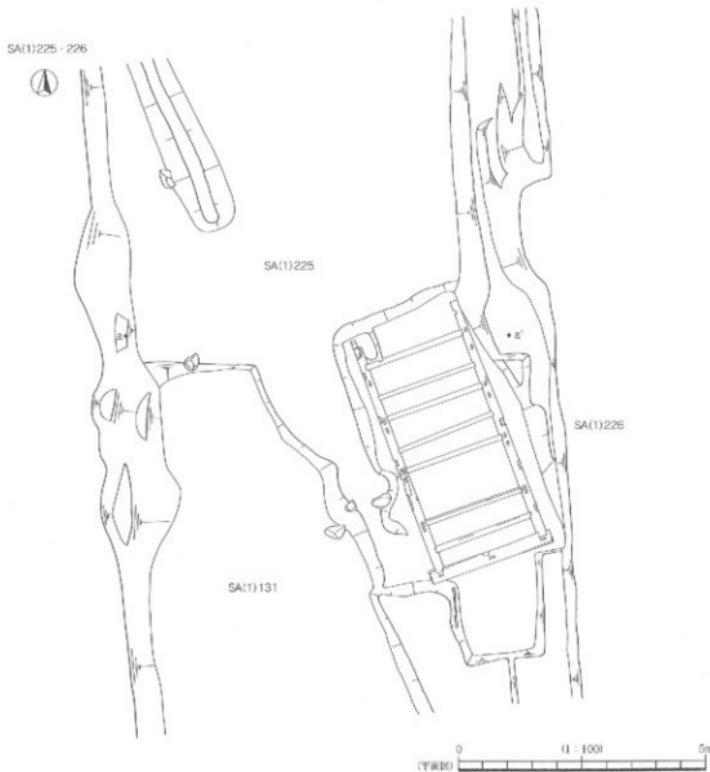
第75図 近代以降遺構全体図(1) (1/1,200、1/400)



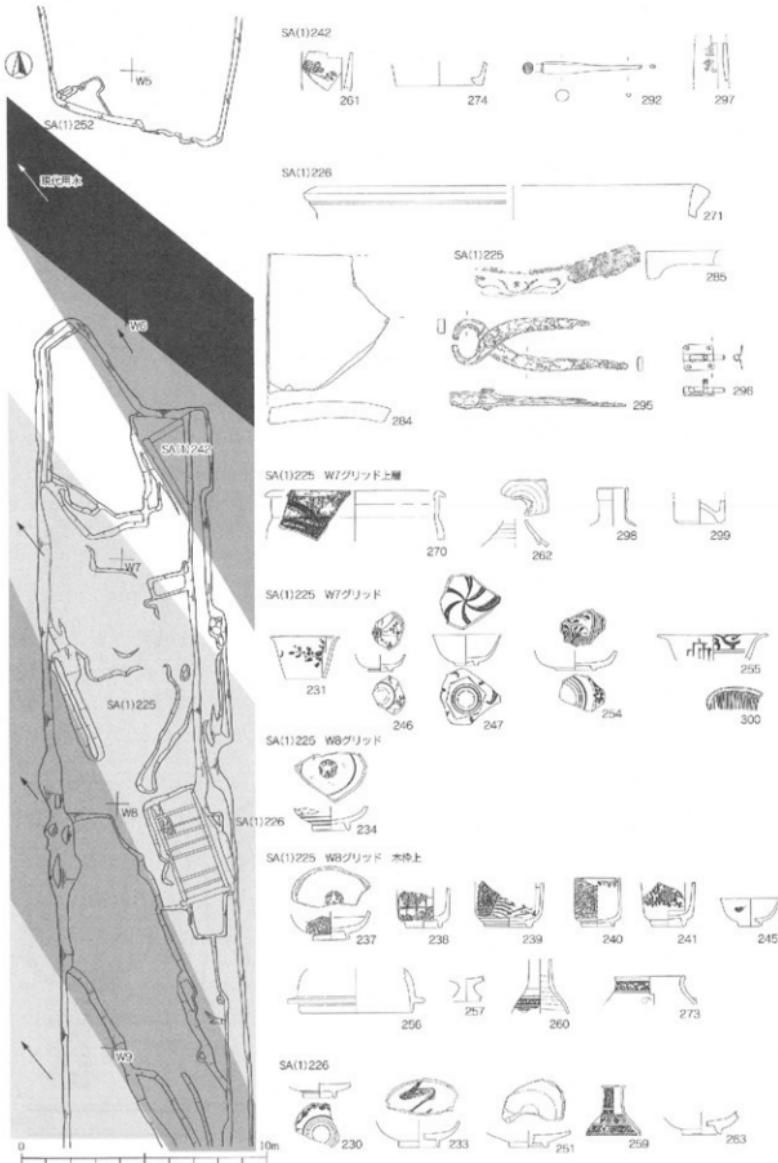
第76図 近代以降遺構全体図(2) (1/400)



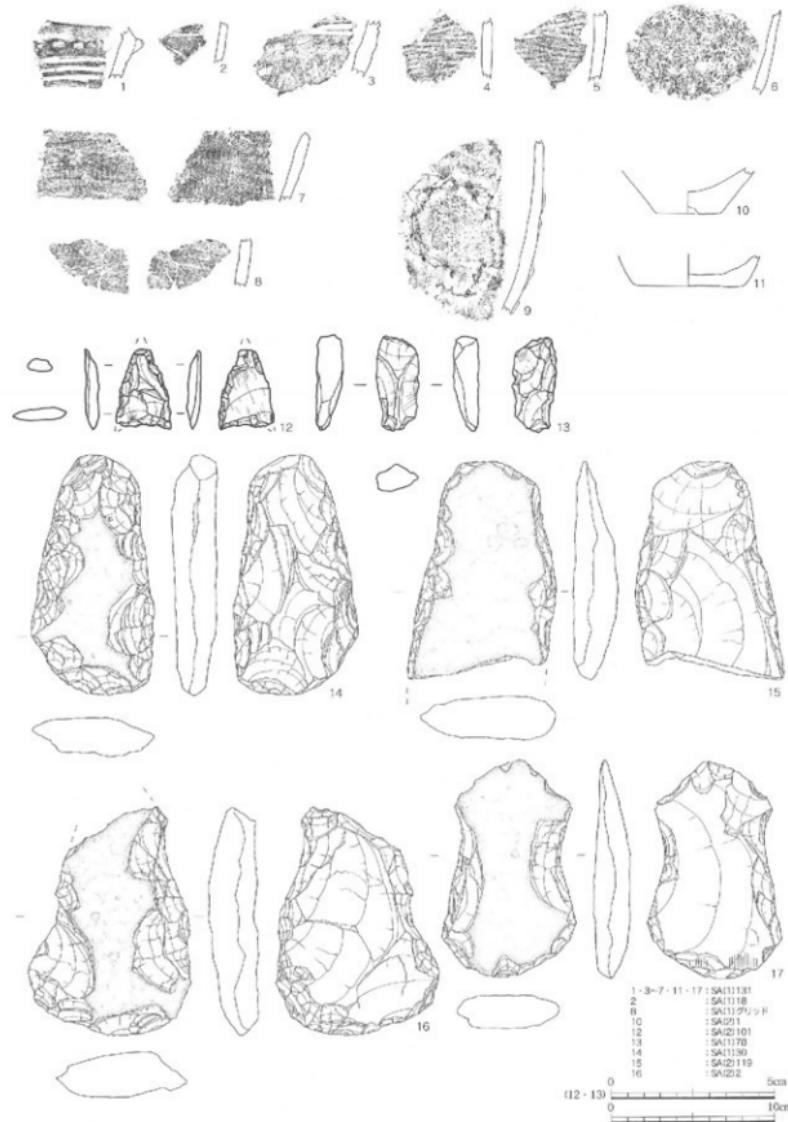
第77図 遺構実測図 満SA(1)6 (1/80)



第78図 透構実測図 河川SA(1)225、取水施設SA(1)226 (1/100、1/40)



第79図 遺物出土状況 河川SA(1)225、取水施設SA(1)226・242 (1/200)



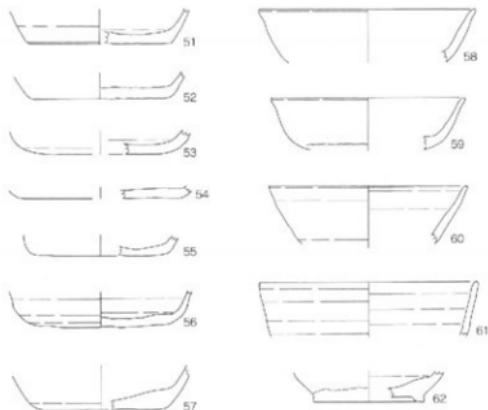
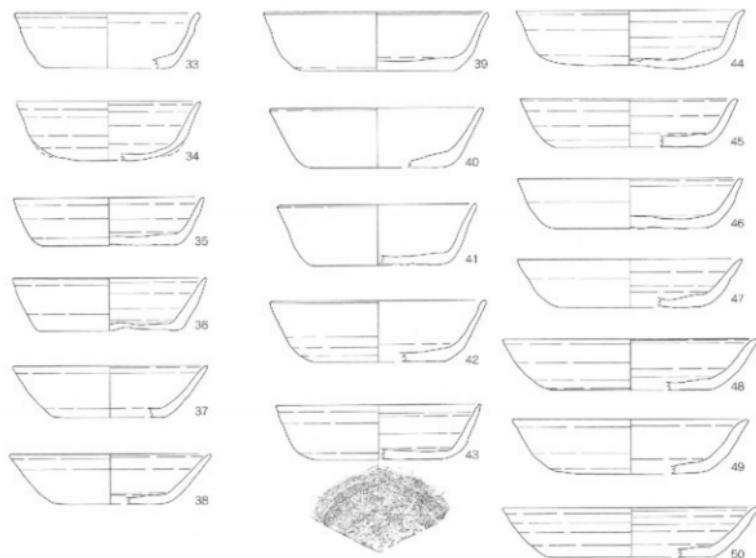
第80図 三納アラミヤ遺跡(第1・2次) 遺物実測図(1) (2/3、1/3)



第81図 三納アラミヤ遺跡(第1・2次) 遺物実測図(2) (1/3)



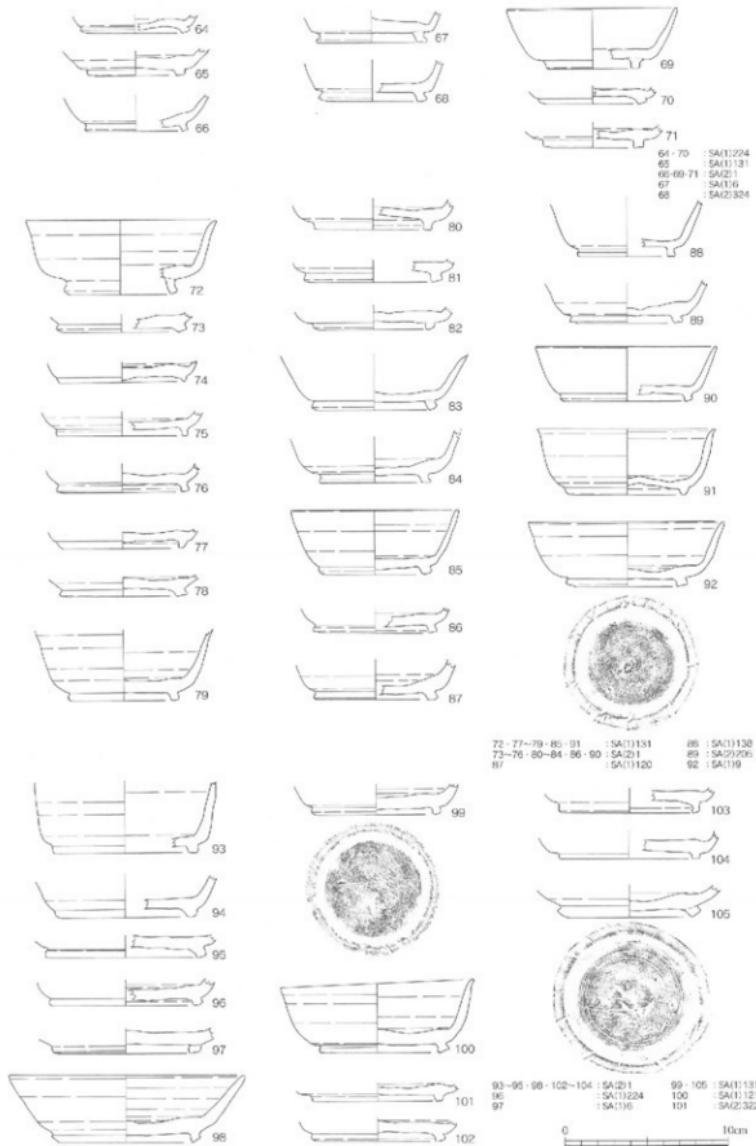
第82図 三納アラミヤ遺跡(第1・2次) 遺物実測図(3) (1/3)



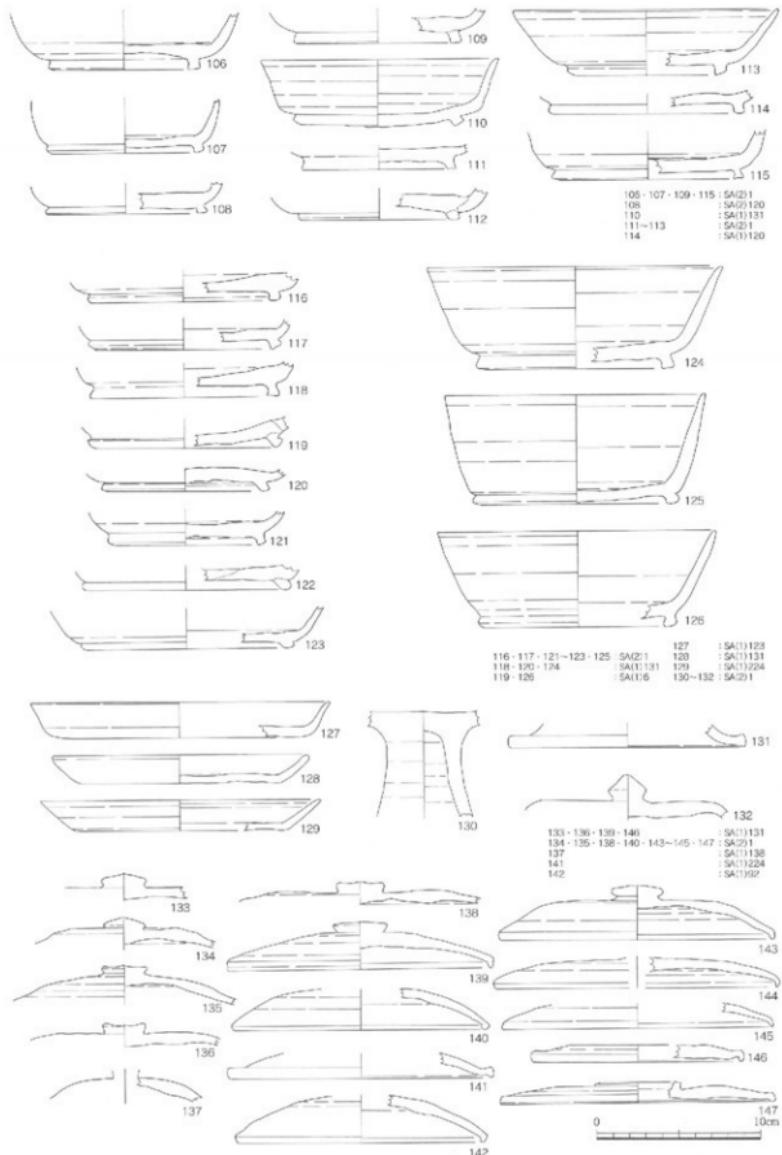
33	SA(I)110
34-36・42-43・51-56	SA(I)131
37-38・60	SA(I)144
39	SA(I)1232
40	SA(II)119
41	SA(I)1773
44-50・52-56・59-61	SA(I)1288
53	SA(I)129
54	SA(I)125
55	SA(I)1120
57-62	SA(I)118
63	SA(I)132

0 10cm

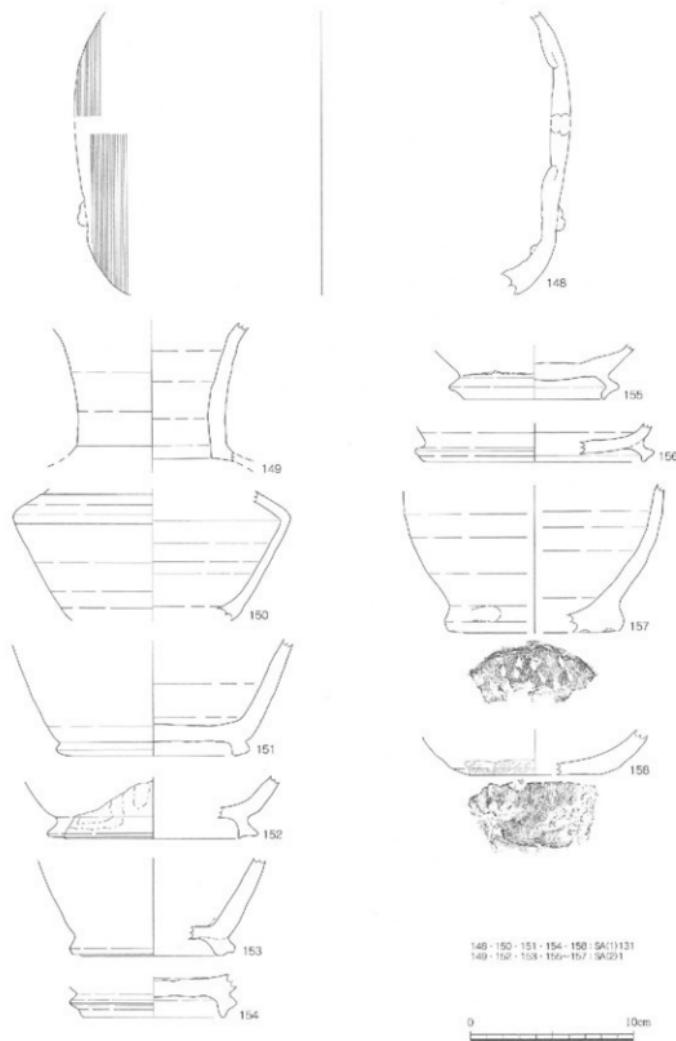
第83図 三納アラミヤ遺跡(第1・2次) 遺物実測図(4) (1/3)



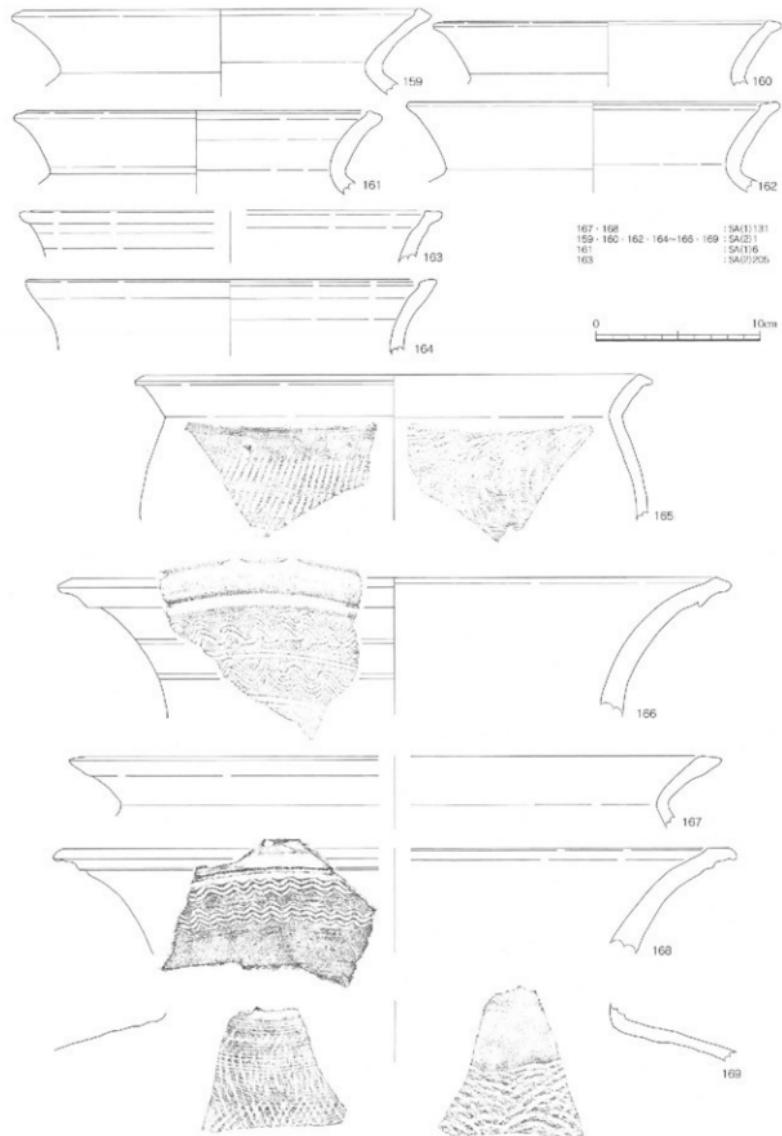
第84図 三納アラミヤ遺跡(第1・2次) 遺物実測図(5) (1/3)



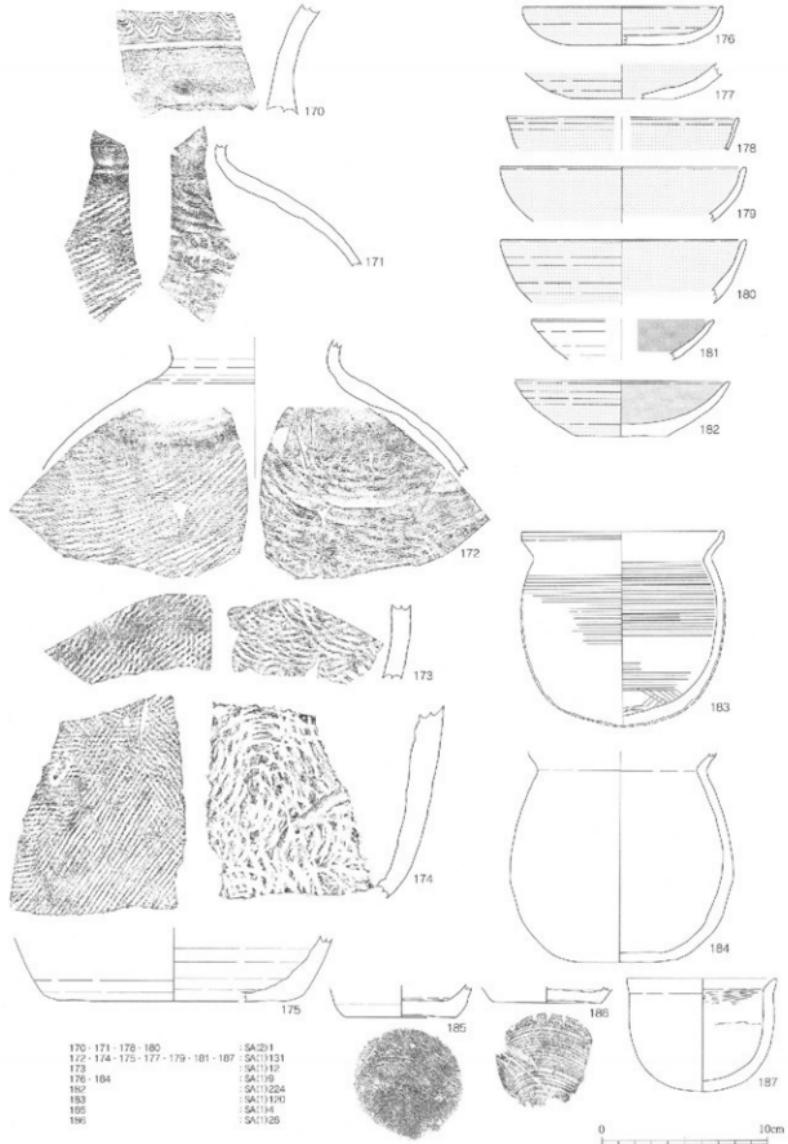
第85図 三納アラミヤ遺跡(第1・2次) 遺物実測図(6) (1/3)



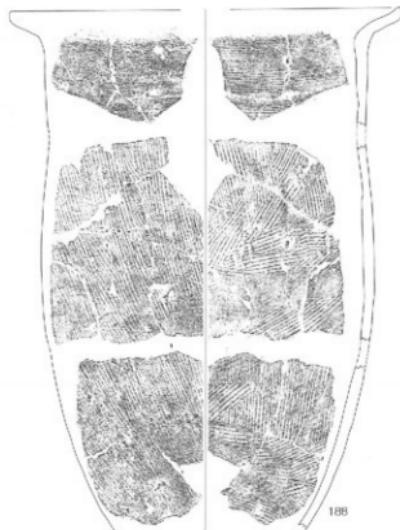
第86図 三納アラミヤ遺跡(第1・2次) 遺物実測図(7) (1/3)



第87図 三納アラミヤ遺跡(第1・2次) 遺物実測図(8) (1/3)

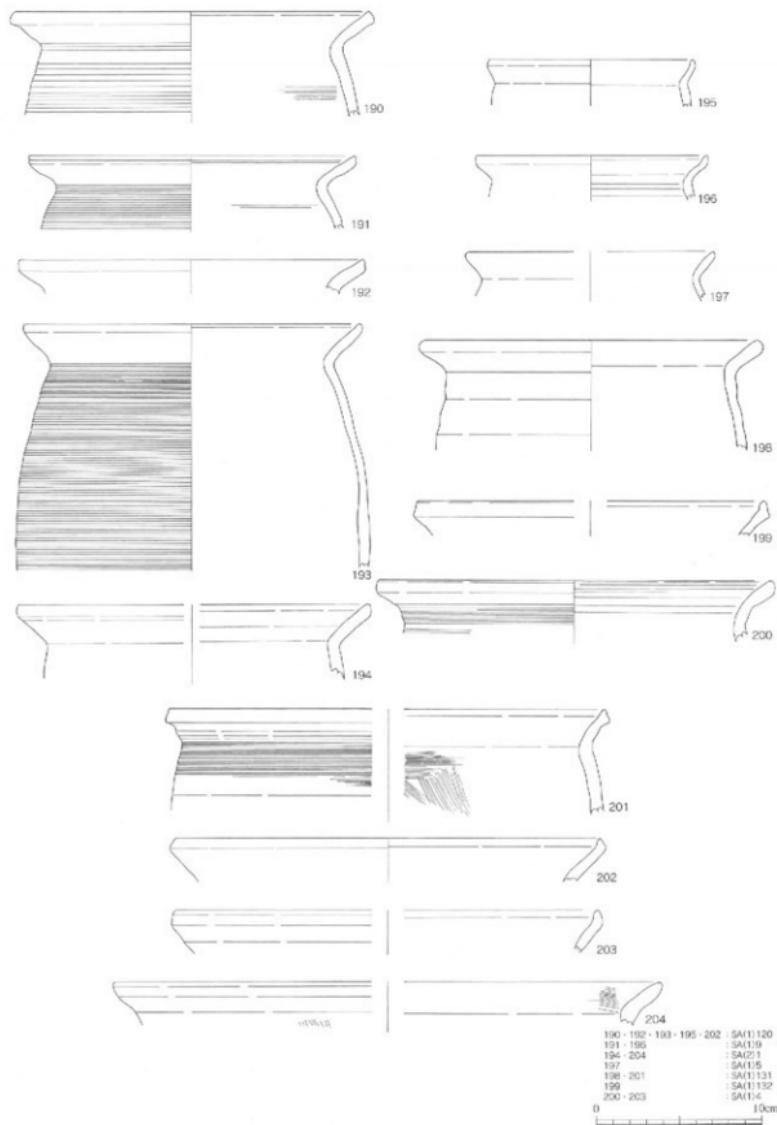


第88図 三納アラミヤ遺跡(第1・2次) 遺物実測図(9) (1/3)

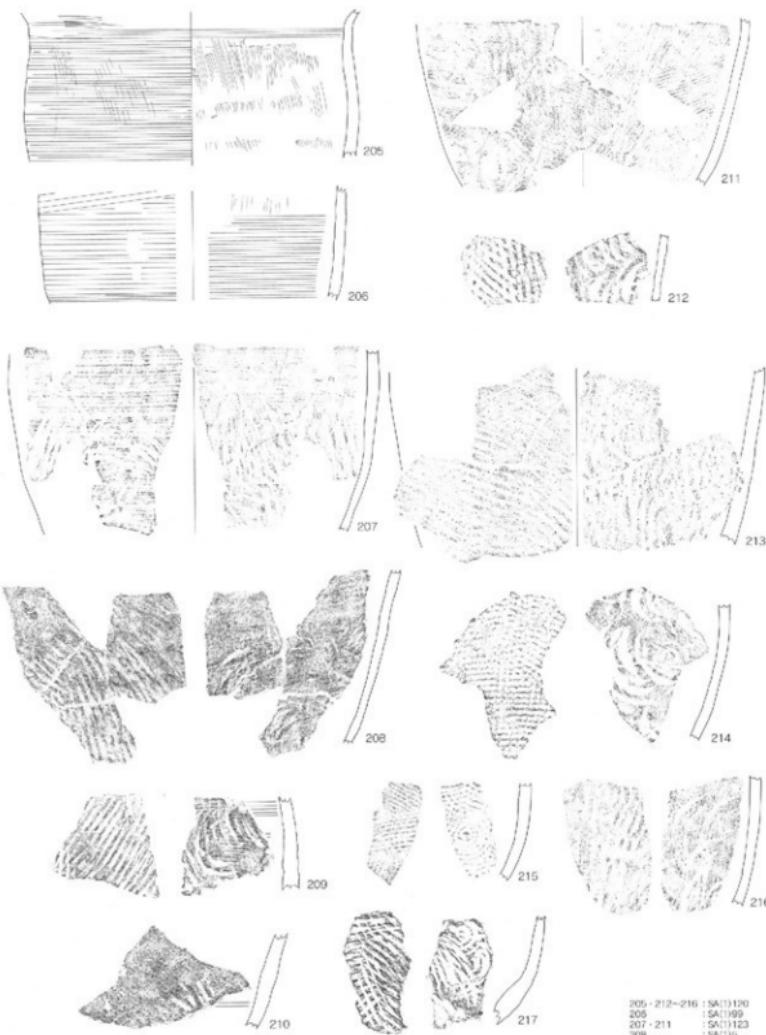


188: SA(1)19
189: SA(1)120

第89図 三納アラミヤ遺跡(第1・2次) 遺物実測図(10) (1/3)



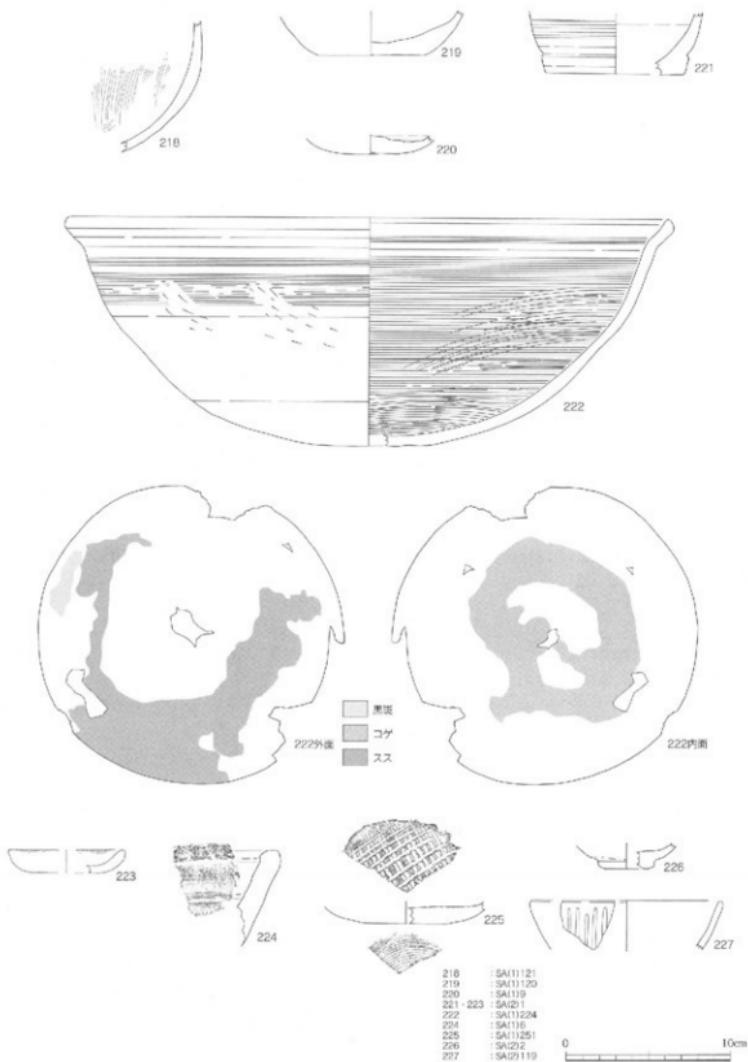
第90図 三納アラミヤ遺跡(第1・2次) 遺物実測図(1) (1/3)



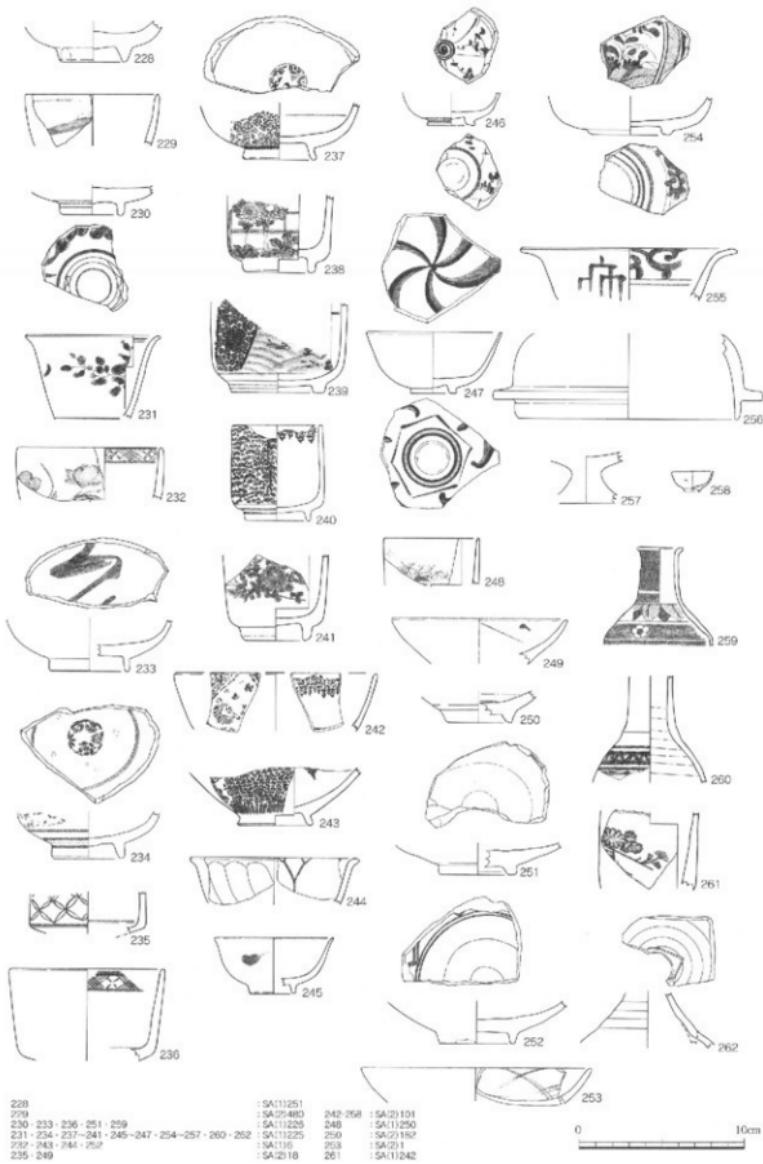
205・212・216 : SA(1)120
 206 : SA(1)99
 207・211 : SA(1)123
 208 : SA(1)10
 209 : SA(1)29
 210 : SA(1)34
 217 : SA(1)138

0 10cm

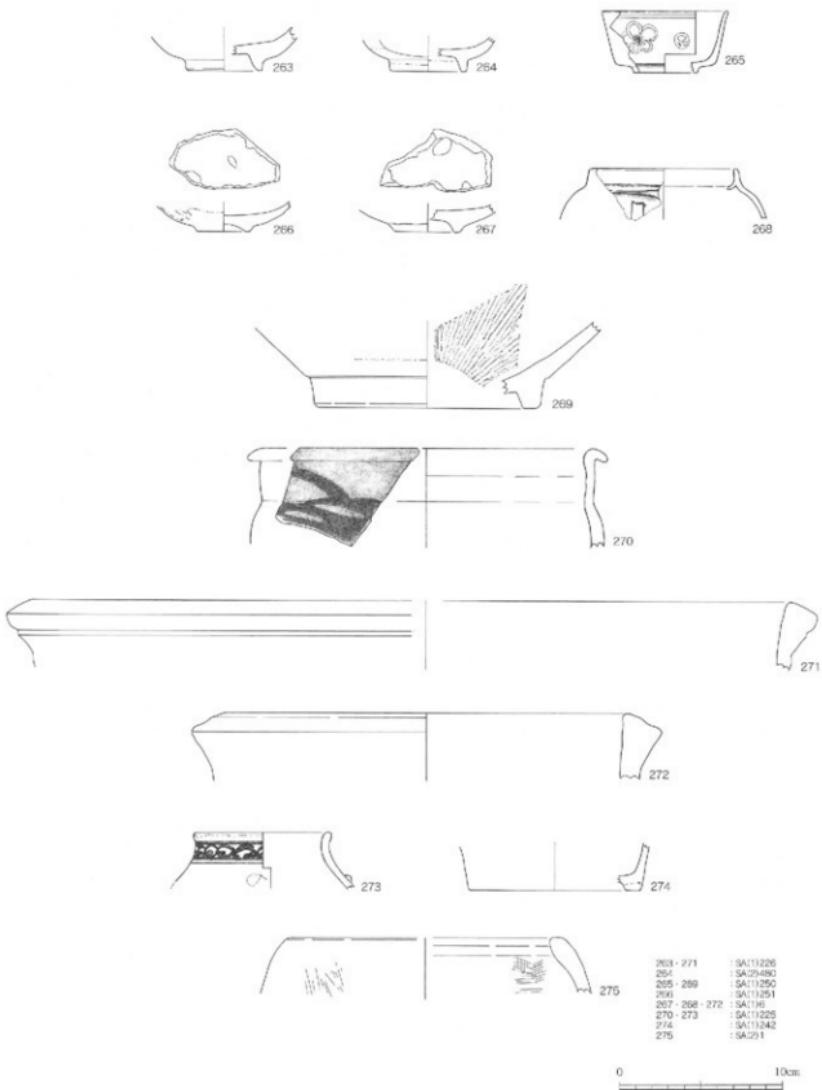
第91図 三納アラミヤ遺跡(第1・2次) 遺物実測図(2) (1/3)



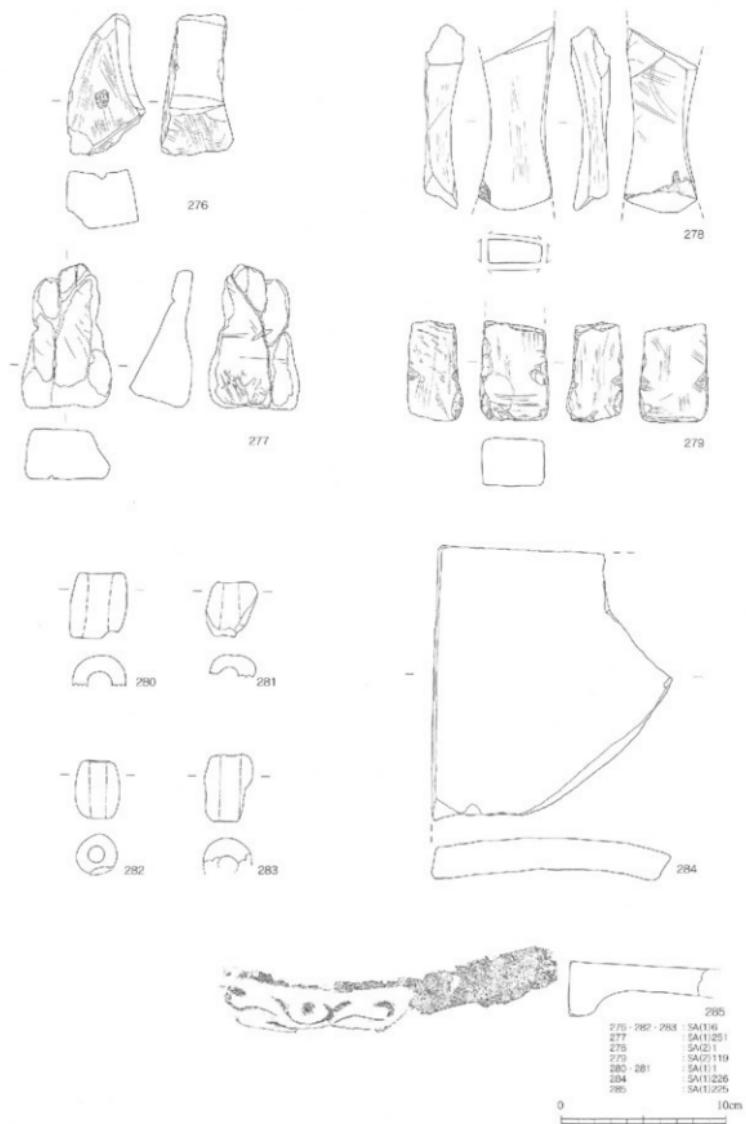
第92図 三納アラミヤ遺跡(第1・2次) 遺物実測図(3) (1/3)



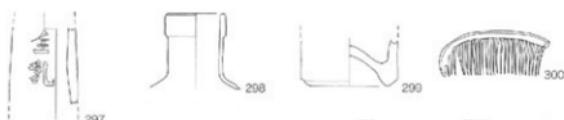
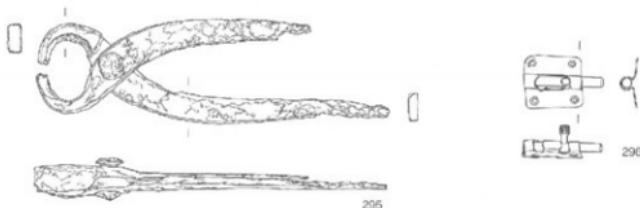
第93図 三納アラミヤ遺跡(第1・2次) 遺物実測図(4) (1/3)



第94図 三納アラミヤ遺跡(第1・2次) 遺物実測図(5) (1/3)



第95図 三納アラミヤ遺跡(第1・2次) 遺物実測図16 (1/3)



286	: SA(1)4
287	: SA(1)14
288	: SA(1)31
289	: SA(1)34
290	: SA(1)9
291-294	: SA(1)6
292	: SA(1)242
293	: SA(1)21
295-296-298-300	: SA(1)225

0 10cm

第96図 三納アラミヤ遺跡(第1・2次) 遺物実測図(7) (1/1、1/3)

第6章 三納トヘイダゴシ遺跡(第1・3次調査)

第1節 遺跡の概要(第104・105・109・110図)

当遺跡は縄文時代と中近世を主体とし、古代や近世以降の遺構・遺物も僅かながら検出されている。調査区のほぼ全域で遺構が確認されたが、その種類は各調査年次で若干異なり、第1次調査区では耕作地・旧河川・倒木跡・土坑・ピットが、第3次調査区ではピット・土坑・溝・旧河川が主として検出された。全体的な崩壊は各調査区の調査区単にかかる遺構の部分で確認している。近代の耕地整理により、ほぼ全ての場所で遺構確認面までの削平が行われているため遺物包含層は遺存せず、遺構内に堆積しているのみであった。遺構覆土は古代以前の黒褐色～暗褐色土と中世以降の褐灰色～灰色土に分かれるようである。なお、第1次調査区は農道を挟んで2区画に分かれ、南側を南調査区、北側を北調査区と呼称する。

古代以前の遺構としては旧河川・落ち込み・倒木跡群が確認され、縄文時代の土器・打製石斧・土偶、弥生時代の甌、古代の須恵器が出土した。遺構・遺物とともに希薄であり、縄文時代においては一時的な活動の場所、古代においては周辺で三納アラミヤ遺跡など古代の集落跡が確認されていることから、集落の縁辺部もしくは耕作地などの生産域と考えられる。

中近世は旧河川と耕作地、平行溝群が検出された。耕作地は方形区画内に耕作痕跡と見られる小ピットが多数確認されたもので、平行溝などを伴わないことから水田跡の可能性が高い。当該期の水田跡は野々市町では初めて確認されたものであり、周辺の遺跡と併せ今後の環境復元の一助となろう。中世の遺物は中世土器・珠洲・瀬戸美濃式、近世の遺物は土器・陶磁器類である。なお、新野々市町役場建設に伴う第2次発掘調査により、中世の集落跡が確認されている。

近代以降は、遺構は土坑が検出された。遺物は土管やガラス瓶などである。集落ではなく、空閑地もしくは耕作地と考えられる。

第2節 遺構

(1)古代以前の遺構(第104～106図)

a)土坑

ST(1)6 (第107図・図版29)

X3グリッドに位置する。平面形は不整円形で、径323×160cm、深度40cmの土坑である。土偶(10)が出土した。

b)旧河川・流路

古代以前の旧河川は調査区内に2か所、流路は3か所確認された。

ST(1)1 (第104～106図・図版29)

第1次南調査区の南端に位置し、北北西方向に流下すると見られる旧河川である。V～W(-5)～(-2)グリッドに広がり、西側は調査区外のため幅は不明であるが、東側は底が緩やかに上がりて岸となる。長さ37m、最大幅15m、深度約50cmである。覆土は暗褐色土を主とし、最下層のみ黒褐色土が見られ、上色から古代以前の遺構であると思われる。また、第4層の埋没後に第3層が入る地点が確認されるところから、この地点には再び小流路が作られ、その時期は出土遺物から中世と考えられる。須恵器有台杯(16)、中世土器(21)が出土した。

ST(1)20 (第108図)

X7～8・Y8グリッドに位置し、J字状に緩く屈曲する。ベースとする黄褐色の面で確認され、濁黄

褐色の地山質土が覆土として入っていた。流路は長さ23mにわたって検出され、最大幅5m、深度15~20cmである。東側の覆土中から縄文土器(1~6)がまとまって出土した。

ST(1)30 (第107図、図版29)

X~Y14~15グリッドに位置し北東方向に流下する流路である。最大長17m、最大幅8m、深度10~20cmで、北東で近世以降の溝ST(1)37に切られる。覆土は黒褐色土が主体である。弥生土器(11)が出土した。

ST(3)1 後述

ST(3)29 (第104・106図)

Z12~14グリッドに位置する、北北西方向に流下する流路である。長さ18m、最大幅4.5m、深度5~10cmを測る。浅く、遺構の平面形に不明瞭な部分がある。覆土は暗褐色土を主とし、下層に地山質の褐色シルト質土が見られる。遺物はない。覆土から古代以前と判断した。

c)倒木跡群

ST(1)3・5他 (第105図、図版29)

第1次南調査区のW~X0~2グリッドに点在する。覆土から古代以前と判断し、ここに一括して報告する。ST(1)3は径4.6×4.3m、深度約40cmを測る。覆土は上層に褐色シルト質土、下層に濁黄褐色土が見られる。打製石斧(13)が出土した。ST(1)5は北側の調査区壁にかかるため全形は明らかでないが、確認できた部分で径2.1×2.0m、深度約35cm、覆土は濁黄褐色土に暗褐色土が不規則に入り込んでいる。縄文土器(8・9)が出土した。

(2)中近世の遺構 (第109~113図)

a)溝

ST(1)2 (第110図)

W(-3)~(-4)グリッドに位置する。当遺構は旧河川ST(1)1の東側岸付近にあり、重複している。確認できた部分では、長さ9m、最大幅60cm、深度2~6cmを測る。覆土は暗褐色土を主とし、上層に灰白色粘質土がブロック状に入る。珠洲甕(23)が出土した。

ST(1)9 (第110・111図、図版29)

W4グリッドに位置する東西方向の溝である。北側に、ほぼ平行に走る同規模の溝を確認している。西側調査区壁にかかるため全形は明らかでないが、確認できた部分では長さ4.5m、幅90cm、深度10cmを測る。覆土は黒褐色土で、地山ブロックを多く含む。遺物は出土していないが、後述するST(1)8と同一の覆土であることから、これに関わる遺構と考え、ここに記述した。

ST(1)33・ST(3)26 (第109・111図、図版29・30)

X~Y15~16グリッドに位置する北西方向の溝である。上層では1本の広い溝として確認され、掘削時には2本の平行する溝が確認されている。北側の溝は長さ9.6m、最大幅1.4m、深度20~30cmを測る。覆土は暗褐色土を主とし、石が多く含まれる。南側の溝は3次調査区の溝ST(3)26に接続する。長さ22.5m、最大幅90cm、深度30~40cmを測る。覆土は地山粒が多く混じる暗褐色土である。遺物はない。覆土から中近世と判断した。

b)その他

旧河川

ST(3)1 (第109・111図、図版30)

第3次調査区の東側半分、A12~15・Z14~15グリッドに位置し北北西方向に流下すると見られる旧河川である。期間的制約もあり、トレンチ調査に留めた。最大長29m、最大幅12m、深度は最大で75cmを測る。覆土は暗褐色土を主とし、部分的に粘質が強い。上層の第1層は中近世、下層は古代以前の包含層となっている。須恵器瓶類(17)、中世土師器(19)、近世土師器(34)が出土した。

耕作地(第110～113図、図版30)

当遺跡では耕作地跡と考えられる遺構がいくつか確認された。ここでは、それらを一括して記述する。

耕作地A 第1次北側調査区南半で確認された。大きく分けてA1・A2・A3の3区画に分かれており、A1区画には東西方向の平行溝群からなる溝群③が入る。溝群③は北調査区の最も南に位置するもので、東側が調査区壁外へと続くものが多い。平均長は1.5m、平均幅20cm、深度は4～12cmと、溝群①とはほぼ似た深度である。最大長は③-9の2.95mで最大幅は③-6の25cmである。軸E-0～4°-S、遺物はない。いずれも東西方向に長く掘削され、南北方向のものはない。

A2区画は略方形の落ち込みST(1)8に溝ST(1)11と小ビット多数が掘り込まれる。落ち込みST(1)8は南北14m、東西10mの広がりを持ち、深度20cmを測る。覆土は暗褐色土を主とする。中世土師器(18)が出土している。小ビット群は溝ST(1)11の南側に多く、北側には少ないとからA2区画の北側の境は溝ST(1)11となると思われる。

A3区画はL字状に屈曲する溝ST(1)7と東西方向の溝ST(1)11で構成される区画で、区画内に小ビットが多數掘り込まれる。ST(1)7はA3区画の南・西側を区画する。L字状を呈し、西端で二股に分かれる。全長23mで、東西部分は幅2m、南北部分は幅90cm、深度5～10cm、覆土は黒褐色土である。碎片のため実測していないが、縄文土器・中世土師器・近世陶磁器が出土した。

A2・A3区画とともに小ビット群は不規則で掘り込みも浅いものが多いことから建物等を構成することは考えられず、耕作時の耕作痕跡と理解するほうが妥当と思われる。また、溝や落ち込みで区画されないA1区画には平行溝群があり、溝や落ち込みで区画されるA2・A3区画には小ビットが多く、平行溝群は分布しないことから、A1区画が畑跡、A2・A3区画が水田跡であると推定する。

耕作地Aにおいては、A2区画とA3区画の境となるL字状に屈曲する溝ST(1)7と東西方向の溝ST(1)11の間は、土坑は見られるものの、ビットは少ない。西側に遺構の肩が確認されているため概に言えないうが、農道的な役割を果たしている空閑地かと思われる。

耕作地B W8グリッド、W～X7グリッドの平行溝が連続して検出されている部分である。これらは覆土の観察から前述の水田遺構と同じ中世のものと考えられ、溝が作られる畑跡と推測する。W8グリッドを溝群①、W～X7グリッドを溝群②とした。

溝群①は平均長182cm、平均幅25cmで、深度は6～17cm、最も長い①-4で3m、幅は30cmである。軸はE-2～5°-Nで、遺物はない。溝群②は平均長149cm、平均幅23cm、深度は2～9cmで、溝群①に比べて浅く、全体的に短めのものが目立つ。もっとも長い②-4で2.8m、もっとも幅が広いものは②-5の40cmである。軸E-2～10°-N、遺物はない。

耕作地C ST(1)12と、その内部で検出されたST(1)37に平行する小溝群からなる。ST(1)12はX～Y6～9グリッドに位置する。遺構西側の深度は浅く、北と東側の遺構の立ち上がりは不明瞭である。確認できた部分で最大長25m、最大幅13m、深度5～30cm、覆土は暗褐色土である。近世土師器(31)と京焼？陶器皿(46)が出土した。ST(1)37などの小溝群はST(1)12内部で確認されたものでST(1)12に軸を合わせる。検出状況はST(1)12が埋まつた後に小溝群が掘り込まれた状態で確認されており、ST(1)37から近世土師器(30)も出土していることから、時期的には近世以降のものとすることができる。

(3)近代以降の遺構(第98図)

近代以降の遺構密度は希薄で、土坑ST(1)25・26が2基確認された程度である。調査区域は集落から離れているためであろう。ST(1)25からは肥前磁器碗(35)、京焼？陶器碗(44)のほか、近現代の瓦が出土、ST(1)26からは実測していないが、近現代の土管が出土した。

第3節 遺物(第8表)

当調査区では、縄文時代～近代までの遺物が出土した。種類と器種による分類は第5・6図に示した。点数はすべて破片数である。

(1)古代以前の遺物(第114・115図、図版31)

土器・土製品(1～11・16・17) 縄文土器9点、弥生土器1点、土偶1点、須恵器2点を図化した。1～9が縄文土器で、1・6が口縁部、他が胴部である。無文のものが多く時期的な特徴が不明だが、縄文時代の後晩期に属するものと思われる。1～6が流路ST(1)20、7が倒木跡ST(1)35、8と9が倒木跡ST(1)5から出土している。10は土偶の胸部片。右の乳房部分と見られ、大きく盛り上がった表現が目を引く。胸部には沈線文と沈線間に目の細かい単節斜縦文LRが施されている。これも小片であり時期の比定は難しいが、文様の特徴から縄文時代後期後葉から晩期中葉頃のものと思われる。土坑ST(1)6から出土した。11は弥生土器。産路ST(1)30から出土している。後期の甕口縁部片である。16が須恵器有台杯、旧河川ST(1)1からの出土。17が須恵器瓶類の底部で旧河川ST(3)1からの出土である。すべて古代以前の旧河川や土坑・倒木跡から出土している。

石 器(12～15) 12～14は打製石斧。12は完形で造構確認面から出土。13・14は欠損している。13が倒木跡ST(1)3、14がW3～5グリッド出土である。15は敲石。円礫の上下端に敲打の痕跡と敲打による剥離痕が残る。

(2)中近世以降の遺物(第116図、図版32)

土 器(18～21・30～34) 中世土師器4点、近世土師器5点を図化した。18～21は中世土師器皿で、18は耕作地ST(1)8、19・20は旧河川ST(3)1上層から、21はST(1)1から出土している。30～34は近世土師器皿である。21は油煙痕が見られる。30は溝ST(1)37、31は耕作地ST(1)12、32は溝ST(1)11、33・34は旧河川ST(3)1上層から出土している。耕作地ST(1)8から出土した18、耕作地ST(1)12と旧河川ST(3)1から出土した19・31・33・34以外は他時期の造構から出土している。

陶磁器(22～29・35～49) 中世は珠洲片口鉢(22)・甕(23)、越前甕(24)、瀬戸美濃皿(25・26)、輸入青磁甕(27～29)を図化した。碎片のため、詳細な時期は不明である。25・26は藤沢編年の古瀬戸後期II～IV期と考えられる。27～29は14世紀後半以降と考えられる。

近世以降の遺物としては磁器碗類(35～40)・皿(41・42)、陶器甕(43・44)・皿(45～47)・天目茶碗(48)・擂鉢(49)を図化した。産地は、35・36・40・41・43・49が肥前、47が越中瀬戸、48が瀬戸、44・46が京焼?である。耕作地ST(1)12から出土した46、土坑ST(1)25から出土の35・44以外は、他時期の造構から出土している。

石製品(50) 破石を1点図化した。

第4節 小結

三納トヘイダゴシ遺跡の中世の水田跡は、野々市町では初の検出である。近接する粟田遺跡第10次調査(第4章)、三納アラミヤ遺跡第1・2次調査(第5章)でも近世の水路・水田跡が確認されており、中世以降現代に至るまでの土地利用の変遷を考古学的に検討する資料が得られたこととなる。ここでは加賀・能登の中世の水田について概観し、当遺跡周辺で近代に行われた耕地整理前の地籍図を踏まえたうえで、粟田・三納地区における景観の変遷について考えてみたい。

加賀・能登における中世の水田跡 加賀・能登の遺跡で検出された耕作地の研究は、近年では安英樹氏による畑状造構の研究がある[安2005]。これは、粟田遺跡第10次調査・三納トヘイダゴシ遺跡第1次

調査で確認されたような平行溝群に関する研究であり、さらに畑で栽培されていた植物についても言及している。翻って、加賀・能登における中世以降の水田についての考古学的な研究は少ない。遺跡での検出例が少ないとあるが、加賀地方は近代に大規模な耕地整理が行われたために、目に見えるかたちで中近世の水田形態を確認しにくい所為もある。加賀・能登で中世以降の水田・水利施設が検出されているのは、貝田遺跡南調査区[石川県立埋文センター 1995]、四柳白山下遺跡[石川県埋蔵文化財保存協会 1996・1997]、漆町遺跡[石川県埋文センター 2005b]、四柳ミッコ遺跡[石川県埋蔵文化財保存協会 1998]、梅川B遺跡[石川県教委・石川県埋文センター 2004、2005a]、漆町遺跡白江・フジマキ地区[石川県立埋文センター 1989]が挙げられるに留まる。

貝田遺跡は富来町の富来川流域の丘陵部と沖積地に広がる遺跡であるが、ここでは11世紀後半～12世紀前半の「丘陵裾部から低地に展開する水田域」が検出された。具体的には畦畔によって区切られた「隅丸」の長方形の格子状の区画であり、間隔が判明した地点では東西約13m、短辺約6mの規模となる。調査区内ですべて同じ規模とはならず、水路も確認されていない。

四柳白山下遺跡は羽咋市の邑知潟北東部の複合扇状地の扇端部に位置する遺跡である。この遺跡や後述する四柳ミッコ遺跡が存在する邑知地溝帯の集落遺跡は磐石が峯・扇丈山の前線に帶状に張り出した微高地と、それより続く複合小扇状地の極めて狭い集落適地に等高線に沿うように帶状に分布し、縄文時代中期～近世初頭の集落が現在の集落域とほぼ重なるという大きな特徴を持つ。ここでは、C地区第II面(14世紀中頃を下限とする水田域)、D地区第II面(14世紀中頃を下限とする水田域)、E地区第III-2面で水田跡が確認された。いずれも正式報告は未刊であるが、概報によるとC・D地区の第II面は4°の傾斜をもつ地形を段階状に造成し幅15cm程度の畦で区画しており、C地区とD地区では畦畔長辺の傾きが異なることから、用水として使用されていた河川を中軸として扇状に水田が展開していた様相が想定されている。水田区画はC地区で最小12×7m、最大20×8m、D地区で21×10mである。D地区では水口や湧水口と思われるものも検出されており、特に湧水口は蛇行していることから、「ぬるめ」の可能性も指摘されている。E地区第III-2面は9世紀後半に埋没した水田跡で、水田1が南北7.5×9.4m、水田2が南北11m以上×東西12mである。それぞれ一箇所づつ水口が設けられ、幅1m程度の畦畔で区画されている。第III-2面の下の第IV面は8世紀～9世紀中頃であることから、水田は短期間で埋没したと考えられる。

四柳ミッコ遺跡は四柳白山下遺跡の北東に位置する遺跡で、四柳白山下遺跡と同様に多数の遺構面が確認されている。そのB区II面で中世以降近世前半の水田面が検出された。水利施設は未確認であるが、5×6mを標準とする16区画の水田で、畦畔の幅は50cm～1m程度である。

梅川B遺跡は、第3次調査A・B区と第4次調査1・2区上層で16世紀に掘削され、昭和20年代の耕地整理まで使用されていた用排水路が検出された。これは現・河原市用水の原形と考えられている。

漆町遺跡白江・フジマキ地区は、近世の水田と煙地が確認されている。第31号溝・第15号溝から水を供給される中央・東側ブロックと、第57号溝から水を供給される西側ブロックと畑状造構に分けられる。南調査区では三角形・台形・長方形の水田区画が見られるが、北調査区では長方形の水田区画が多い。特に北調査区では第1・2・5号水田状造構と第3・4・6号水田状造構の南北の長さがほぼ揃い、第6・8・10号水田状造構は東西幅も揃うなど、やや規則的な区割りがなされている。区画は最大で22×15m(ただし6分割される可能性あり)、最小で5×3mである。

以上、能登・加賀で検出された水田造構を見てきた。正式報告がなされていない遺跡もあり、時期については今後、若干の異同もあると思われる。遺跡は扇状地に立地するものが多いが、能登の扇状地は概して小規模であり、三納トヘイダゴシ遺跡が所在する手取扇状地とは異なる。区画の大きさについては、最大は漆町遺跡の22×15m、次いで四柳白山下遺跡D地区の21×10mである。最小は漆町遺跡の5×3m、次いで四柳ミッコ遺跡5×6mである。沖積地に立地する漆町遺跡白江・フジマキ地区は扇状地

の三納トヘイダゴシ遺跡より大きな区画のものもある。

なお、水田区画を設定する際に基準とされたと考えられている「条里」は、今回の事例では確認できなかつた。もともと中近世における「条里」は古代「条里」と異なって、国家権力によらない[金田1990]耕地整理手段でありまた地点表示方式に過ぎず[服部1983]。今回取り上げた遺跡では現地の状況により即した方法が取られたために、水田区画幅に規則性が見られない事例が多くなったと考えられる。今後、周辺の状況が明らかになれば立地や集落内の空間構成から耕作域の設定方法やその基準を考えることも可能であろう。水田区画や立地の問題については、それを持って再考したい。いずれにせよ、三納トヘイダゴシ遺跡の耕作地は、加賀地方における中近世の水田遺構を考える上で良好な資料と評価できよう。

地籍図にみる遺跡周辺の状況 野々市町は、明治～大正にかけて大規模な耕地整理が行われている。三納地区は大正3(1914)年～同11(1922)年[有田・村上・増山2004]、近隣の栗田地区は明治44(1911)年～大正6(1917)年にかけて行われた[有田・石田・増山2004]。栗田・三納地区にはこの耕地整理に伴う土地図が残されている。土地図は耕地整理前の状況を記録したもので、栗田遺跡第10次調査区(第4章)と耕地整理以前の地籍図を重ねたものが第97-1図、三納トヘイダゴシ遺跡第1・3次調査区(第6章)と三納アラミヤ遺跡第1・2次調査区(第5章)を重ねたものが第97-2図である。

第97-1図からは栗田遺跡の近世の溝AW0025が地籍図の溝に整合することが解る。この地籍図が描かれた明治44年には調査区とその周辺は水田であるから、水田化したのが耕地整理前のは確かであるが、いつから水田であったかという記載はない。しかし溝AW0025の東側に検出された溝AW0061は、周辺に柱穴こそ検出できなかつたがその形状から建物の雨落ち溝と思われ、栗田遺跡第10次調査区における遺物量のピークである17世紀後半～18世紀前半頃に溝AW0025の東側は宅地であったと想定している(なお、平成16年度に行われた第13次発掘調査では第10次調査区の東側が調査され、近世の建物を伴う宅地が検出されている)。第1章で述べたように、栗田集落は、鎮守神社の西側にあった村を「栗田川」(木呂川)の氾濫のため栗田新保に移した、という伝承がある[石川県石川郡自治協議会1927、「富奥村」の項]。伝承にある洪水の痕跡は基本層序では確認できないため、耕地整理の際に削平された可能性もある。集落が移動した時期は明らかではないが、18世紀後半以降に集落の移動があり明治年間には耕作地化していたことが考えられよう。

一方、第97-2図においては、三納アラミヤ遺跡の旧河川SA(1)225と取水施設SA(1)226が水路の分岐点及び水路と一致し、三納トヘイダゴシ遺跡の耕作地ST(1)12の西側肩部分が土地境と一致する。しかし、耕作地ST(1)7・8に一致する線は見られず、この地籍図が作成された段階には既に存在しなかつたものと思われる。三納アラミヤ遺跡の水田SA(1)25の中央部分に検出された区画も地籍図に見えない。

以上、地籍図と検出遺構を比較した。栗田遺跡・三納アラミヤ遺跡においては水路や取水施設が地籍図と一致し、三納トヘイダゴシ遺跡では耕作地の区画が一致した。一方、栗田遺跡では17世紀後半～18世紀前半に溝AW0025東側が宅地として機能した後に集落が移動した結果、地籍図作成段階では耕作地となっていたと考えられ、土地利用に変化があったことが判明した。

栗田・三納地区における耕作地の変遷 第1章で述べたように、栗田・三納地区ともに集落の成立は古代を待たなくてはならない。古代になると栗田遺跡第10次調査区には平行溝群A・Bが確認され、耕作地が展開してくる。また、三納アラミヤ遺跡第1次調査区南端には古代の道路状遺構SA(1)2・3と堅穴建物群SA(1)9・120・121との間に耕作痕と思われるピット群が検出される。このピット群は建物群と明確に場所を分けて存在していることから、耕作地と居住地を区別する意識があったものと考えられる。しかし一方で道路状遺構SA(1)2・3の南側に住居や耕作痕が検出されないことから、あくまで道路状遺構SA(1)2・3までが集落のまとまりとして認識されていたものと思われる。

中世には三納アラミヤ遺跡で利水遺構SA(2)205・119が掘削され、三納トヘイダゴシ遺跡でも耕作地A(ST(1)7・8)・B(ST(1)平行溝群①・②)が出現する。両者は調査区内に集落を伴わないか、周辺の三



第97-1図 粟田地区(約S=1/1,500、上がほば北)



第97-2図 三納地区(約S=1/750、上がほば北)

第97図 地籍図との対比状況(三納地区、粟田地区)

納ニショサ遺跡や三納トヘイダゴシ遺跡第2次調査で中世の集落が確認されていることからこれに関係したものと思われる。この耕作地が所謂「散村」的に個々の建物に付随した状況で展開するのか、「集村」的に集落域と分けて存在するのかは三納ニショサ遺跡や三納トヘイダゴシ遺跡第2次調査の正式報告を待ちたいが、いずれにしても、これらの耕作地は古代には土地利用がなかった場所に出現している点に注意したい。

近世になると、三納アラミヤ遺跡で水田SA(1)250・用水SA(1)251、旧河川SA(1)225と取水施設SA(1)226が作られ、三納トヘイダゴシ遺跡では耕作地C(ST1)12が成立する。栗田遺跡第10次調査区では溝AW0025・75などの溝が掘削されるが、耕作地は確認できない。この段階は耕地整理前の地籍図に若干ながらその姿を確認でき、三納アラミヤ遺跡と三納トヘイダゴシ遺跡では耕作地として利用された状況が変化していないことが分かる。一方、栗田遺跡では、出土遺物から18世紀前半までは宅地と考えられるAW0025東側部分が、それ以降に移動した後に耕作地化したことか地籍図からもうかがわれる。近代には耕地整理が行われて近世の地割りも姿を消して整然とした水田区画に生まれかわるとともに、三納アラミヤ遺跡の旧河川SA(1)225もSA(1)252へと付け替えられ、取水施設もSA(1)226もSA(1)242となった。

現在の栗田・三納地区は、発掘調査の契機となった土地区画整理が着々と進行している。近代から現代にかけて碁盤の目状に整然と区画された水田が一面に並んでいた景観は、宅地や大型店舗からなる市街地へと大きく変わりつつある。今回の調査では、水田が一面に広がる景観は近世以降に成立したもので、それ以前は集落や畠・水田が時代ごとに入れ替わりながら展開する状況にあったことが判明した。この報告書が、当地域での人々の営みを知る上での一助となれば幸いである。

参考文献

- 有田明子・石井文一・増山了昭 2004 「栗田」「野々市町史 集落編」野々市町史編纂専門委員会
有田明子・村上和生・増山了昭 2004 「三納」「野々市町史 集落編」野々市町史編纂専門委員会
石川県教育委員会・鶴石川県埋蔵文化財センター 2004 「梅田B遺跡」
石川県教育委員会・鶴石川県埋蔵文化財センター 2005a 「梅田B遺跡」
石川県教育委員会・鶴石川県埋蔵文化財センター 2005b 「四柳白山下遺跡」
石川県立埋蔵文化財センター 1989 「漆町遺跡IV」
石川県立埋蔵文化財センター 1995 「富来町貝田遺跡・貝田C遺跡」
石川県石川郡自治協議会 1927 「石川縣石川郡誌」
伊藤雅文 1998 「15 石川県」「治水・利水遺跡を考える(第1分冊 資料編)」第7回東日本埋蔵文化財研究会
金田章裕 1990 「国岡の条里プランと莊岡の条里プラン」「日本史研究」332
鶴石川県埋蔵文化財保存協会 1996 「鶴石川県埋蔵文化財保存協会年報7 平成7年度」
鶴石川県埋蔵文化財保存協会 1997 「鶴石川県埋蔵文化財保存協会年報8 平成8年度」
鶴石川県埋蔵文化財保存協会 1998 「鶴石川県埋蔵文化財保存協会年報9 平成9年度」
野々市町教育委員会 1992 「栗田遺跡 第二次発掘調査」
野々市町史編纂専門委員会 2004 「野々市町史 集落編」 石川県野々市町
服部昌之 1983 「律令国家の歴史地理学的研究」
安 英樹 2005 「石川県の畠状遺構と栽培植物」「石川県埋蔵文化財情報」13 鶴石川県埋蔵文化財センター

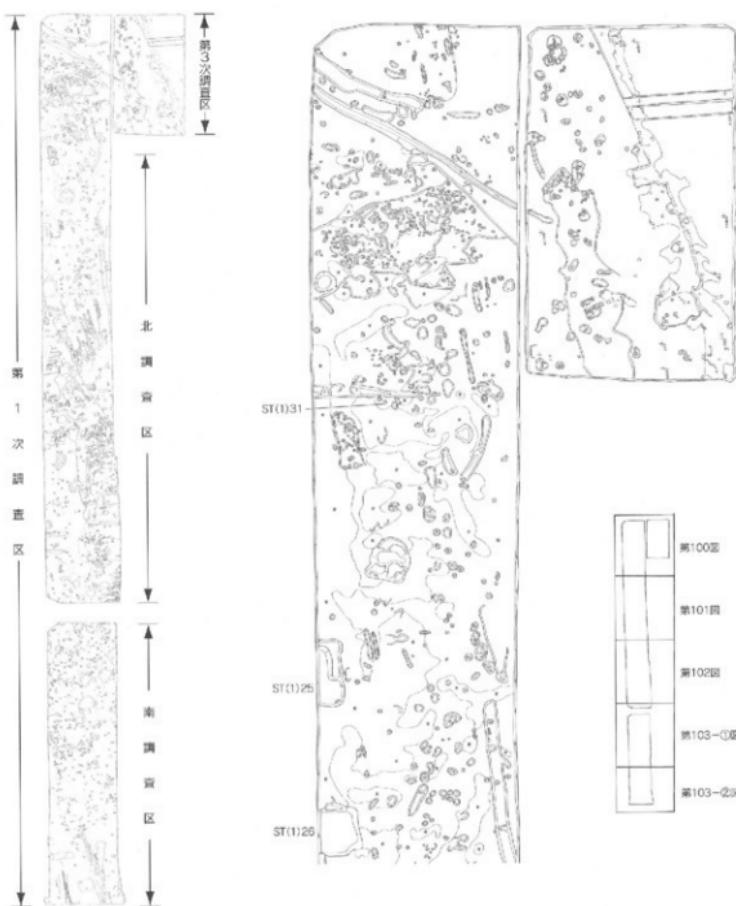
第8表 三納トヘイダゴン跡遺(第1・3次)遺物観察表

編 考 番 号	地 理 的 的 位 置	出 土 地 点	No. 記 号	種 類	器 種	口 径 (mm)	縦 高 (mm)	底 径 (mm)	残存率	色 調	色 調	胎 土 組 成	備 考
1	10	STU120	⑤	鍋文土器	深鉢				口幅1/4	外: にふい、黒	内: にふい、黒	砂質多	
2	12	STU120	⑥	鍋文土器	深鉢				縦片	外: にふい、黒	内: 削赤	石英多	
3	13	STU120	④	鍋文土器	深鉢				縦片	外: にふい、黒	内: 細赤	石英多	
4	14	STU120	①	縫文土器	縫片				縦片	外: 黒	内: にふい、黒	石英多	
5	16	STU120	④	縫文土器	縫片				縦片	外: にふい、黒	内: 削赤	石英多	
6	17	STU120	⑦	縫文土器	縫片				縦片	外: にふい、黒	内: にふい、黒	分析、石英多	外偏重付箋
7	19	STU120	縫物付窓	縫文土器	縫片				縦片	外: にふい、黒	内: 削赤	石英多	外偏重付箋
8	31	STU120	縫文土器	縫片	縫片				縦片	外: 黒	内: 削赤	石英多	
9	32	STU120	縫文土器	縫片	縫片				縦片	外: 黒	内: 削赤	石英多	
11	24	STU120	縫物付窓	縫片	縫片	195			縦片	外: にふい、黒	内: にふい、黒	シャ、石英多	外偏重付箋
10	15	STU120	素面	縫片	縫片	194			縦片	外: 黒	内: にふい、黒	石英少	
12	16	STU120	素面	縫片	縫片	165	75	25	縦片	外: にふい、黒	内: にふい、黒	石英少	中
13	1	STU121	青褐色土内 縫物付窓	縫片	縫片	156	93	29	全体1/3	外: 青褐色	内: 削赤	石英少	中
14	3	STU121	W3-2グリッド	縫物	縫片	156	82	19	全体1/2	外: 青褐色	内: 削赤	石英少	中
15	2	STU121	W3-2グリッド裏	縫物	縫片	116	70	49	空洞	外: 青褐色	内: 削赤	石英少	中

古 代	地 理 的 的 位 置	出 土 地 点	No. 記 号	種 類	器 種	口 径 (mm)	縦 高 (mm)	底 径 (mm)	残存率	色 調	色 調	胎 土 組 成	備 考	
9	STU01	西面	油壺	有孔杯	有孔杯				96	底部1/6	外: 茶白	内: 灰白	石英少	田舎初期
16	41	STU21	A14グリッド	油壺	油壺				76	底部2/3	外: 削灰	内: 灰白	石英少	

中 期	実測 番 号	出 土 地 点	No. 記 号	種 類	器 種	口 径 (mm)	縦 高 (mm)	底 径 (mm)	残存率	色 調	色 調	胎 土 組 成	備 考
18	22	STU121	西	土器	土器	67			全体1/6	外: 黒	内: 削赤	沙、石英少	シャ、石英少
19	19	STU121	W1-1グリッド	土器	土器	66	17		全体1/6	外: 削黄	内: 削黃色	沙、石英少	田舎N-1期
20	43	STU121	上層	土器	土器	66			全体1/6	外: 削黄	内: 削黃色	石英少	石英少
21	5	STU121	中層	土器	土器	70			全体1/6	外: 黑	内: 削白	沙、石英少	田舎N-1期
22	1	STU121	W-3グリッド下層	土器	土器	59			砂片	外: 黒	内: にふい、黒	石英少	
23	5	STU121	W-3グリッド上層	土器	土器	59			砂片	外: 黒	内: にふい、黒	石英少	
24	6	STU121	W2-3グリッド西	土器	土器	59			砂片	外: 黒	内: にふい、黒	石英少	中
25	36	STU122	中層	土器	土器	92	23		砂片	外: 黒	内: にふい、黒	石英少	中
26	37	STU122	中層	土器	土器	92	23		砂片	外: 黒	内: にふい、黒	石英少	中
27	44	STU121	土器	土器	土器	96			砂片	外: 黒	内: にふい、黒	石英少	中
28	21	STU121	W-3グリッド下層	土器	土器	96			砂片	外: 黒	内: にふい、黒	石英少	中
29	7	STU121	W-3グリッド西	土器	土器	96			砂片	外: 黒	内: にふい、黒	石英少	中

近世後期	地 理 的 的 位 置	出 土 地 点	No. 記 号	種 類	器 種	口 径 (mm)	縦 高 (mm)	底 径 (mm)	残存率	色 調	色 調	胎 土 組 成	備 考
30	27	STU121	①	土器	土器	92			口幅1/6	外: 陶灰	内: 陶灰	石英少	17C後(小屋下)による
31	26	STU121	青褐色土内	土器	土器	82			口幅1/6	外: 陶灰	内: 陶灰	石英少	17C後(小屋下)による
32	20	STU121	中層	土器	土器	77			砂片	外: 陶灰	内: 陶灰	石英少	17C中(小屋下)による
33	42	STU121	上層	土器	土器	77			砂片	外: 陶灰	内: 陶灰	石英少	17C中(小屋下)による
34	46	STU121	A16グリッド上層	土器	土器	146			口幅1/6	外: 陶灰	内: 陶灰	石英少	17C後(小屋下)による
35	35	STU125	中層	土器	土器	96			砂片	外: 陶灰	内: 陶灰	石英少	17C後(小屋下)による
36	47	STU125	A16グリッド中層	土器	土器	96			砂片	外: 陶灰	内: 陶灰	石英少	17C後(大櫛N面)による
37	56	STU125	A16グリッド中層	土器	土器	68			砂片	外: 陶灰	内: 陶灰	石英少	17C後(大櫛N面)による
38	30	STU121	中層表面	土器	土器	71			全体1/2	外: 透明	内: 透明	石英少	17C後(大櫛N面)による
39	46	STU122	中層	土器	土器	71			砂片	外: 陶灰	内: 陶灰	石英少	17C後(大櫛N面)による
40	30	STU121	南区表面	土器	土器	125			砂片	外: 陶灰	内: 陶灰	石英少	17C後(大櫛N面)～V期
41	28	STU121	中層	土器	土器	121			砂片	外: 陶灰	内: 陶灰	石英少	17C後(大櫛N面)～V期
42	45	STU121	Z14窓構造	土器	土器	68			砂片	外: 陶灰	内: 陶灰	石英少	17C後(大櫛N面)による
43	18	STU121	窓構造	土器	土器	36			砂片	外: 陶灰	内: 陶灰	石英少	17C後(大櫛N面)による
44	34	STU121	W-3グリッド	土器	土器	110			砂片	外: 陶灰	内: 陶灰	石英少	17C後(大櫛N面)による
45	23	STU121	W-3グリッド上層	土器	土器	44			砂片	外: 陶灰	内: 陶灰	石英少	17C後(大櫛N面)による
46	25	STU121	15区	土器	土器	41			砂片	外: 陶灰	内: 陶灰	石英少	17C後(大櫛N面)による
47	29	STU121	W0グリッド裏側	土器	土器	56			砂片	外: 陶灰	内: 陶灰	石英少	17C後(大櫛N面)による
48	38	STU122	中層表面	土器	土器	120			砂片	外: 陶灰	内: 陶灰	石英少	17C後(大櫛N面)による
49	39	STU121	中層	土器	土器	95			砂片	外: 陶灰	内: 陶灰	石英少	17C後(大櫛N面)による
50	40	STU122	中層	土器	土器				砂片	外: 陶灰	内: 陶灰	石英少	17C後(大櫛N面)による



第98図 三納トヘイダゴシ遺跡(第1・3次)遺構分布図(1) (1/1,200、1/400)

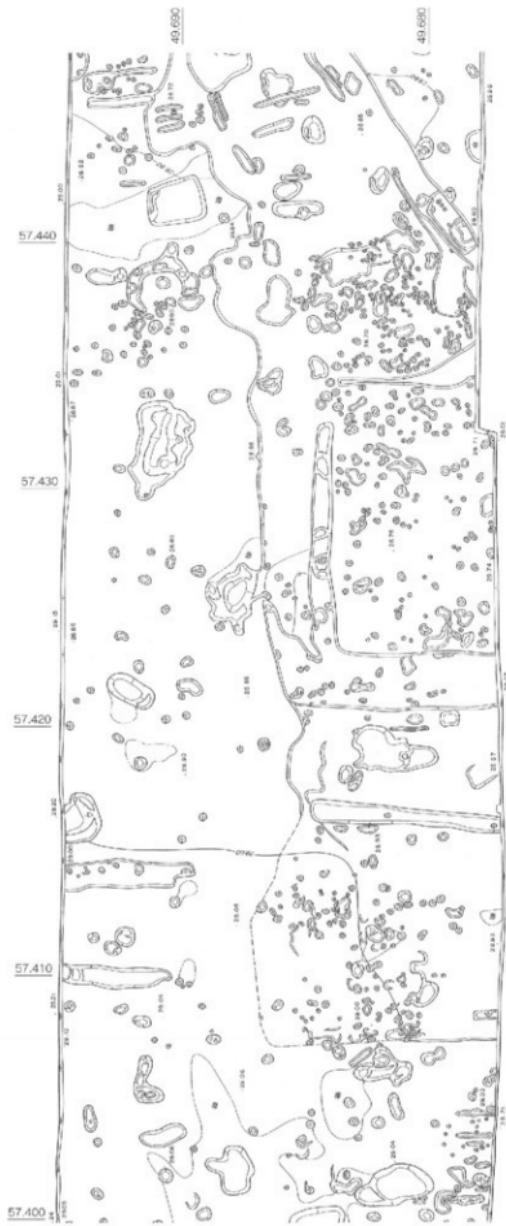


第99図 三納トヘイダゴシ遺跡(第1・3次)遺構分布図(2) (1/400)





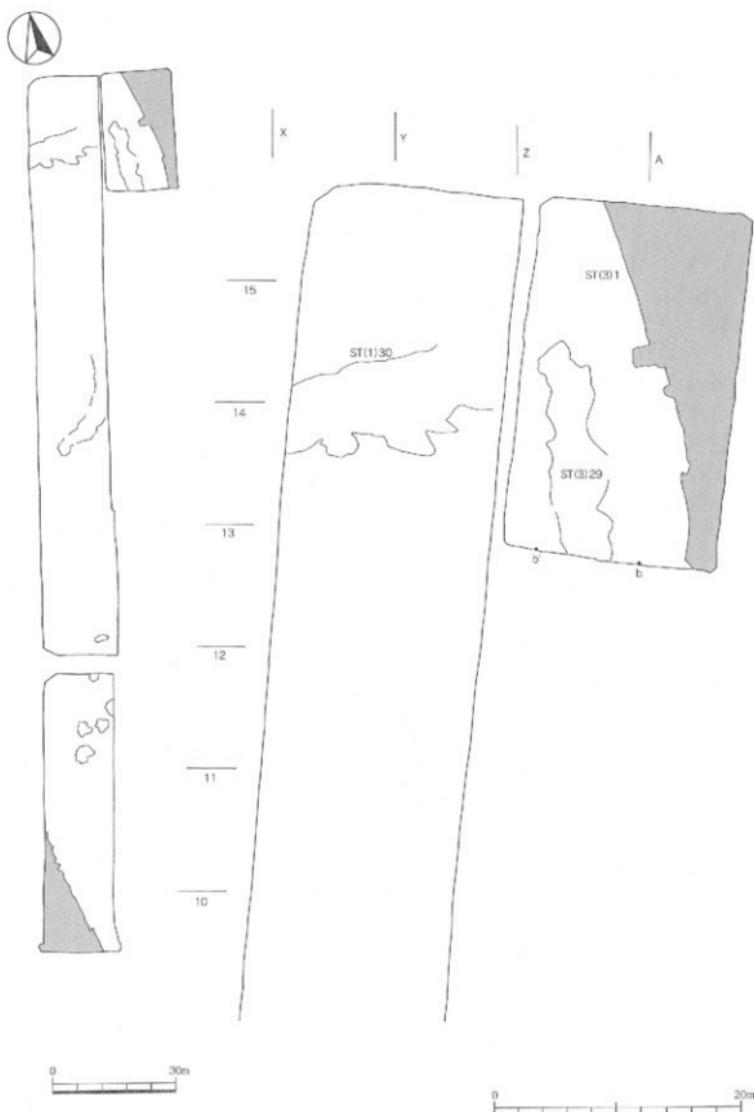
第101図 三納トヘイダゴシ遺跡(第1次)平面図(2) (1/200)



第102図 三納トヘイダゴシ遺跡(第1次)平面図(3) (1/200)



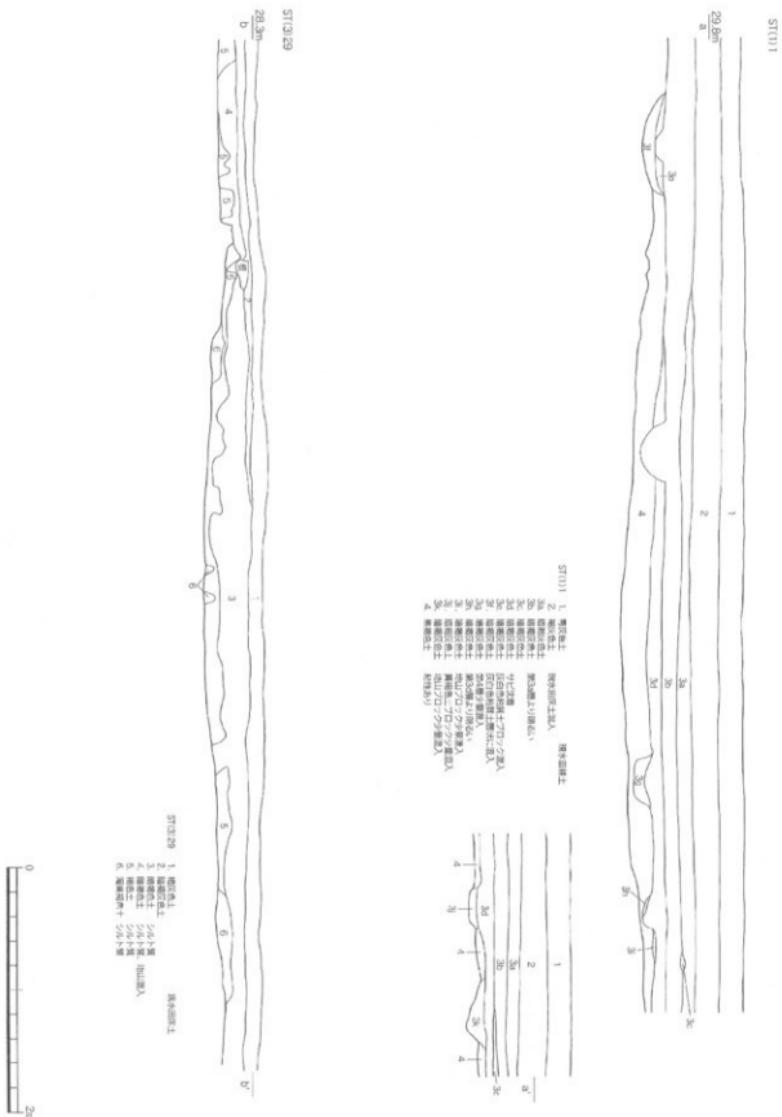
第103図 三納トヘイダガシ遺跡(第1次)平面図(4) (1/200)



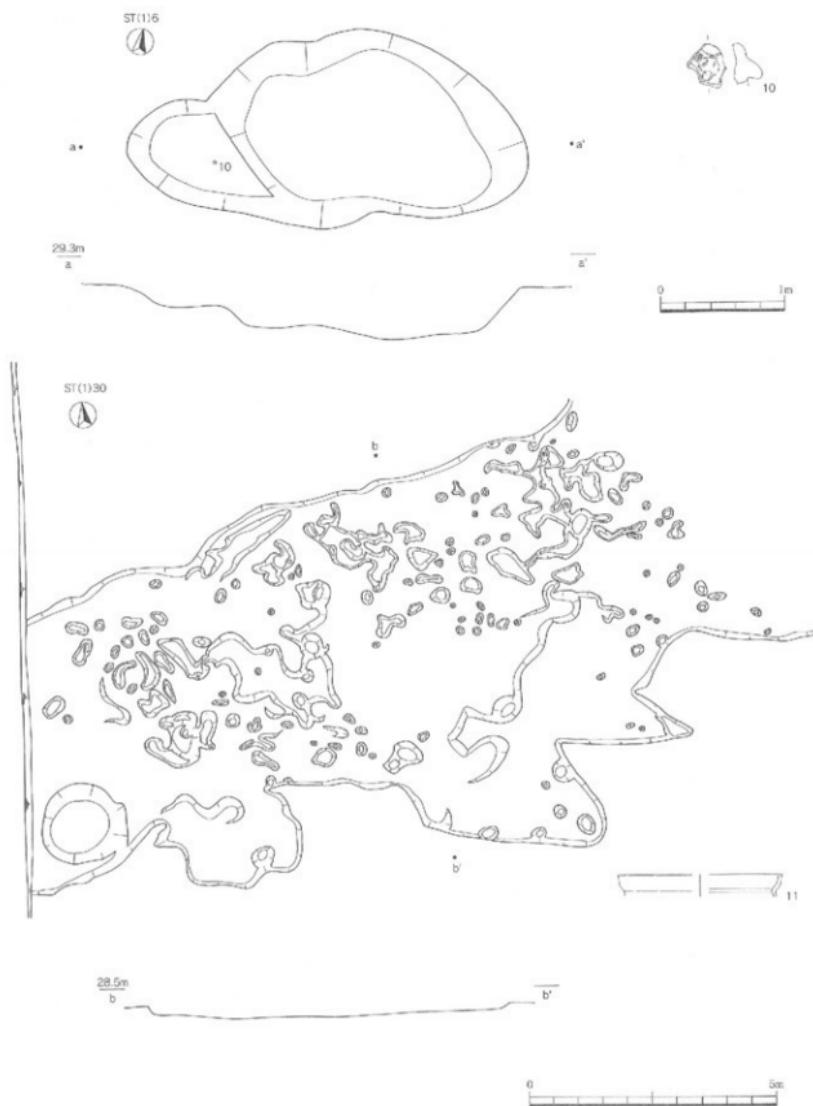
第104図 古代以前遺構全体図(1) (1/1,200、1/400)



第105図 古代以前遺構全体図(2) (1/400)



第106図 遺構実測図 河川IST(1)1、落ち込みST(3)29 (1/40)



第107図 遺構実測図 土坑ST(1)6、流路ST(1)30 (1/100、1/40)

ST(1)20



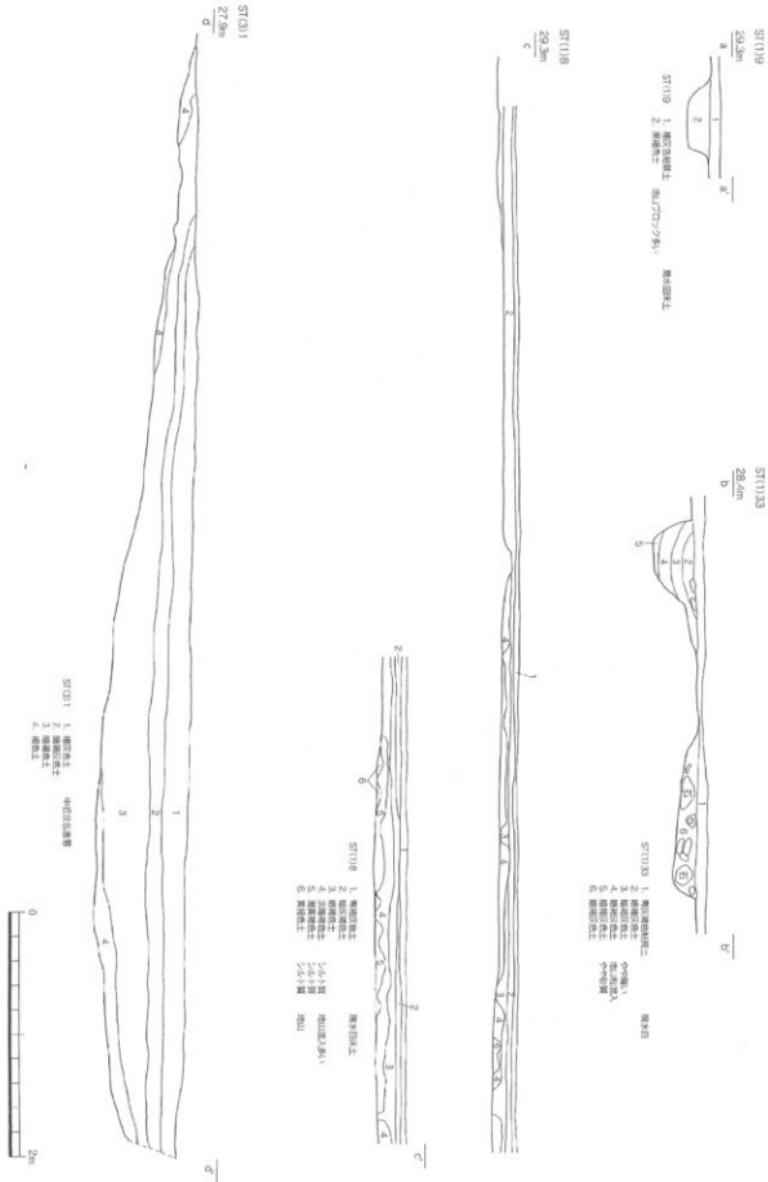
第108図 遺構実測図 流路ST(1)20 (1/100)



第109図 中世遺構全体図(1) (1/1,200、1/400)



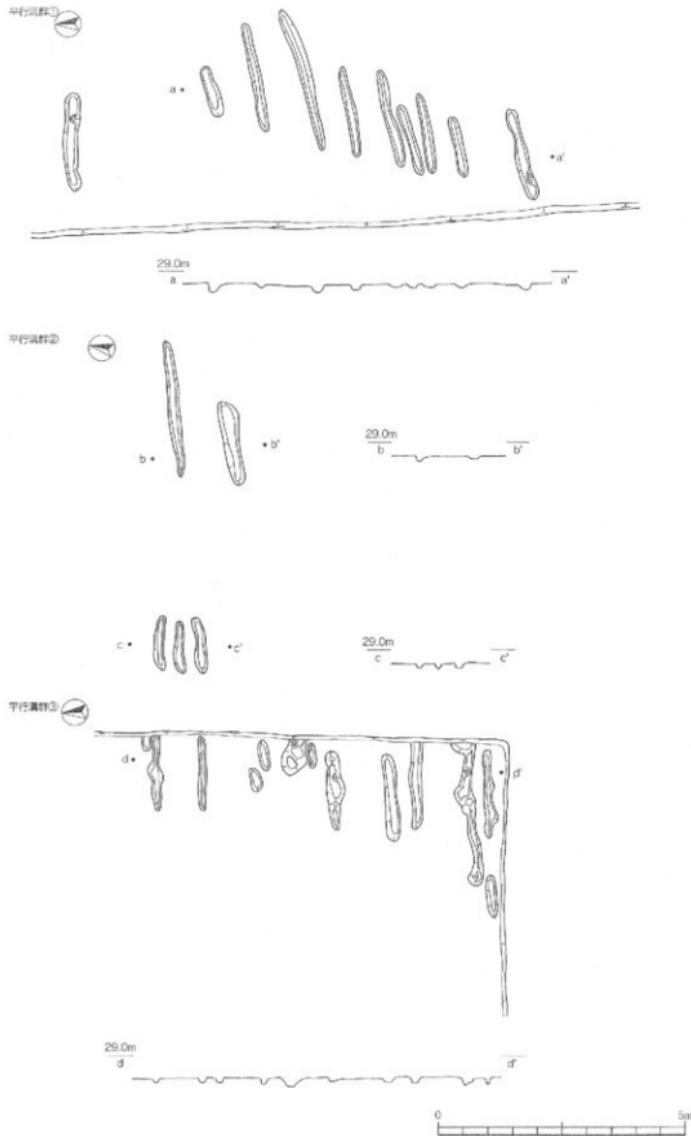
第110図 中近世遺構全体図(2) (1/400)



第111図 遺構実測図 溝ST(1)9・33、耕作地ST(1)8、河川ST(3)1 (1/40)



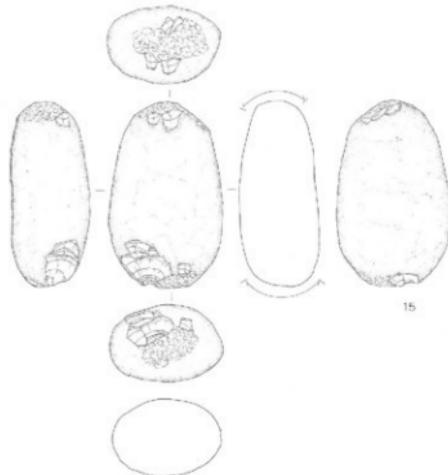
第112図 遺構実測図 耕作地ST(1)7・8・11 (1/100)



第113図 遺構実測図 ST(1)平行溝群 (1/100)



第114図 三納トヘイダゴシ遺跡(第1・3次) 遺物実測図(1) (1/3)



15



16

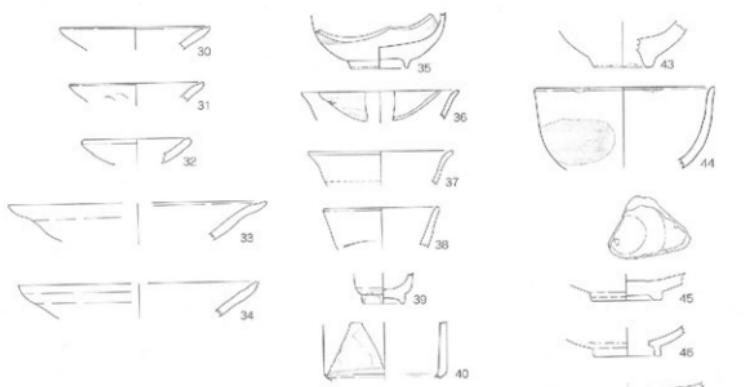
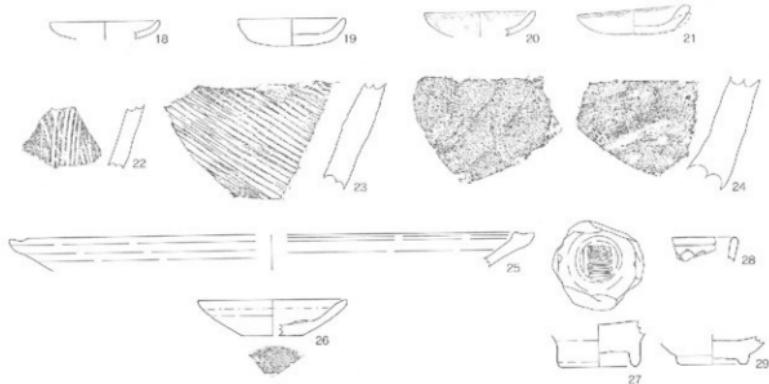


17

15: ST(1)グリッド
16: ST(1)1
17: SH(2)1

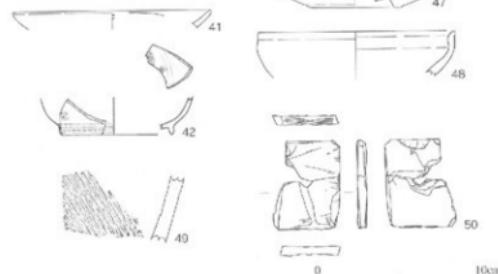


第115図 三納トヘイダゴシ遺跡(第1・3次) 遺物実測図(2) (1/3)



18
 19・20・21・33・34
 22・24・26・29・38・40・45・47
 23
 25・26・39・48・50
 27
 30
 31・46
 32
 35・44
 36・37・42
 41
 43

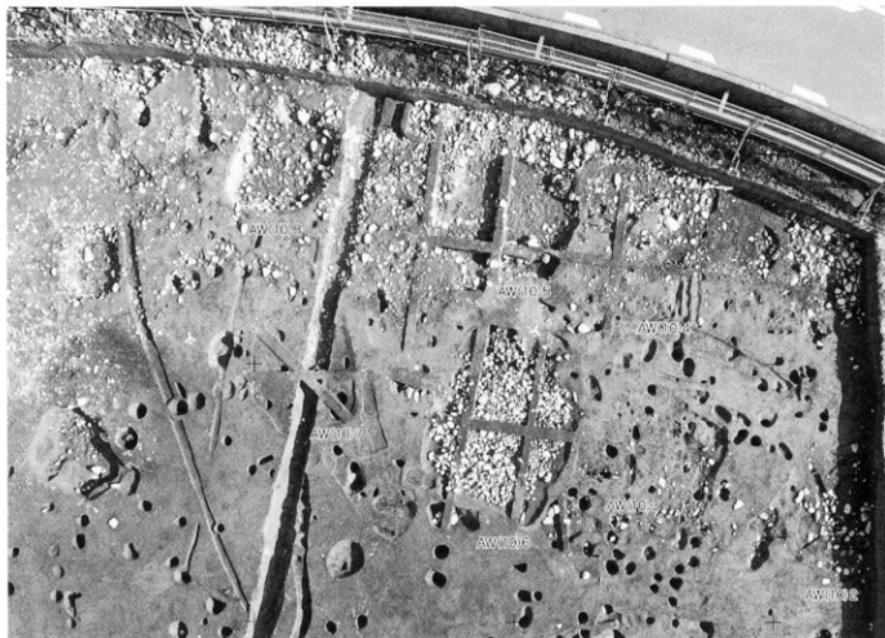
ST(1)38
 ST(1)
 ST(1)アリット
 ST(1)アリット
 ST(1)32
 ST(1)31
 ST(1)33
 ST(1)32
 ST(1)31
 ST(1)25
 ST(1)24
 ST(1)西原



第116図 三納トヘイダゴシ遺跡(第1・3次) 遺物実測図(3) (1/3)



竪穴建物(竪穴状遺構) AW10 2～8 検出(南から)



竪穴建物(竪穴状遺構) AW10 2～8 (西から)



ピットAW1048 断面(南から)



ピットAW1049 断面(南西から)



ピットAW1050 断面(東から)



ピットAW1051 断面(西から)



竪穴建物AW10.2 遺物出土状況



竪穴建物AW10.2 断面(北西から)



竪穴建物AW10.2 完成(北西から)



竪穴建物AW10.3 ピット遺物出土状況(南から)



竪穴建物AW10 3 断面(南から)



竪穴建物AW10 4 断面(南から)



竪穴状遺構AW10 5 断面(西から)



竪穴状遺構AW10 5 完掘(南から)



竪穴建物AW10 6 瓦面検出(北から)



竪穴建物AW10 6 作業状況



竪穴建物AW10 6 遺物出土状況



竪穴建物AW10 6 断面(南から)



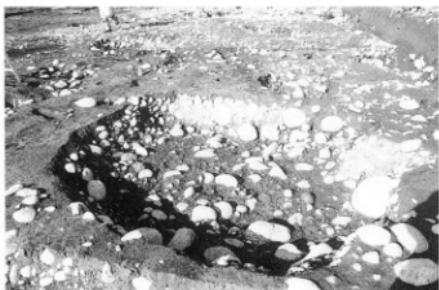
竪穴状遺構AW10 5・6 完掘(西から)



竪穴建物AW10 7 完掘(南西から)



竪穴状遺構AW10 8 断面(南から)



竪穴状遺構AW10 8 完掘(南から)



作業状況



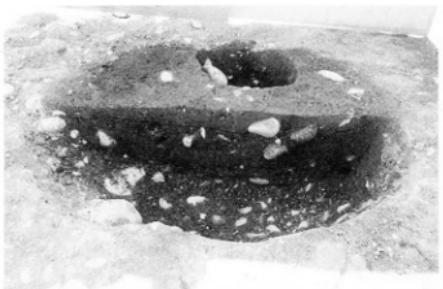
土坑AW10 9 断面(東から)



土坑AW10 10 断面(西から)



土坑AW10 18 断面(南から)



土坑AW1043 断面(南から)



土坑AW1060 断面(南から)



土坑AW1060 完掘(南から)



土坑AW1074 断面(北から)



土坑AW1074 完掘(東から)



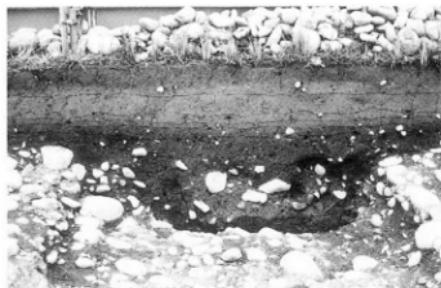
土坑AW10134 遺物出土状況(南から)



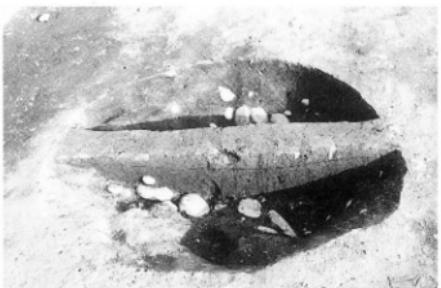
埋納遺構AW1042 遺物出土状況(南から)



土坑AW1028 断面(西から)



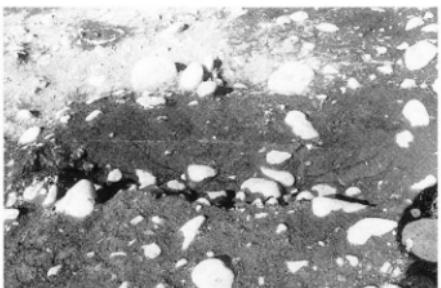
土坑AW1029 断面(西から)



土坑AW1052 断面(西から)



土坑AW1056 断面(南西から)



土坑AW1058 断面



土坑AW1062 断面



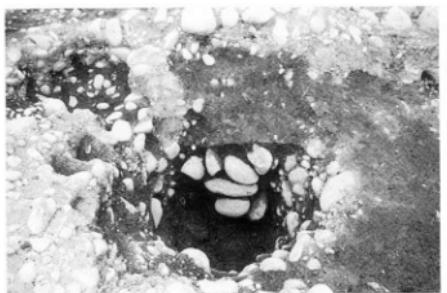
土坑AW10122 断面(東から)



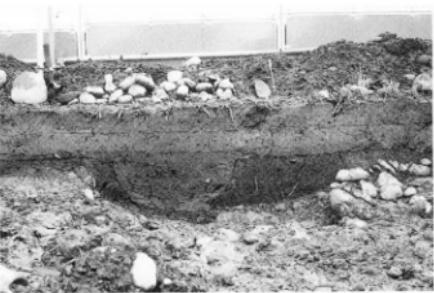
土坑AW10122 遺物出土状況



土坑AW10122 木棒(部分)



土坑AW10/72 断面(南から)



溝AW10/24 断面(西から)



溝AW10/25 調査区壁断面(西から)



溝AW10/25 断面(南から)



溝AW10/61 断面(南から)



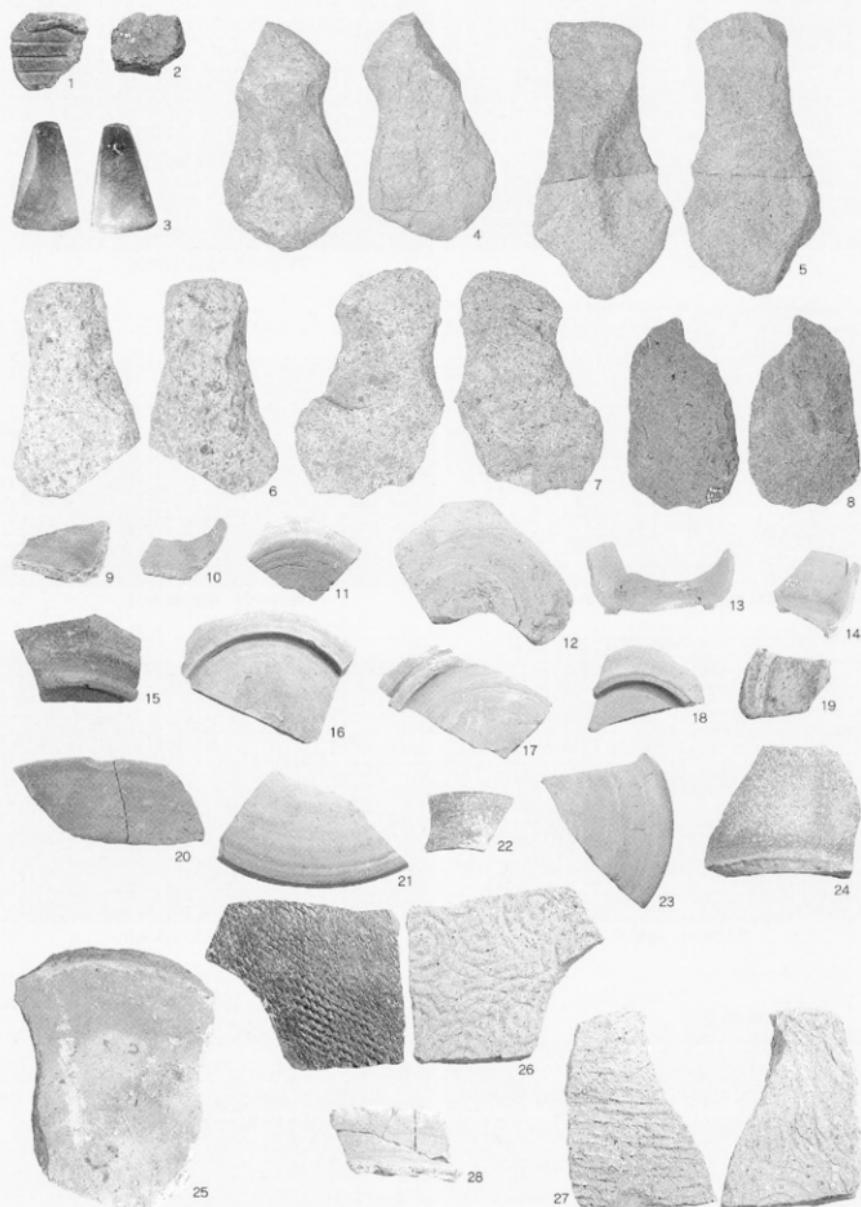
溝AW10/61 完掘(西から)



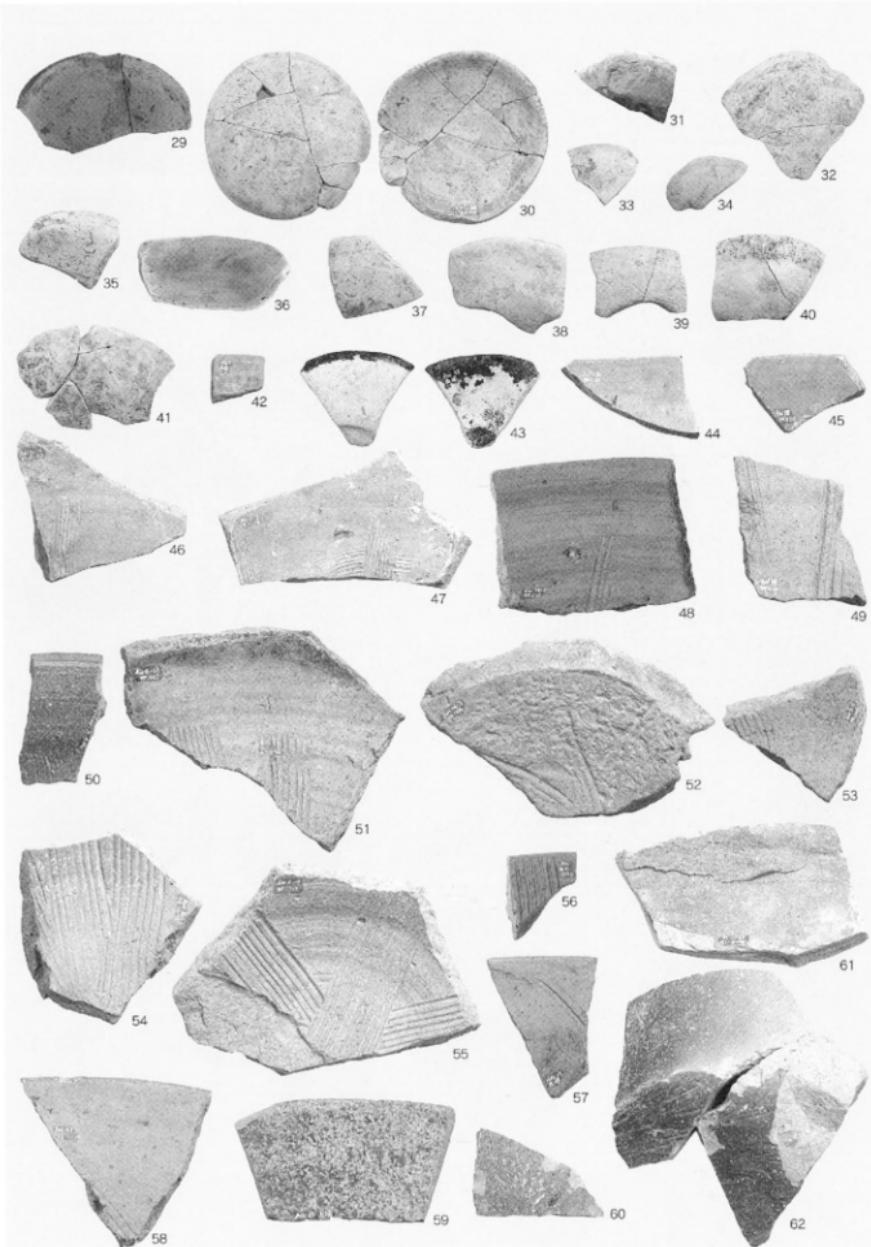
溝AW10/75 断面(南から)



溝AW10/25・75 完掘(南から)

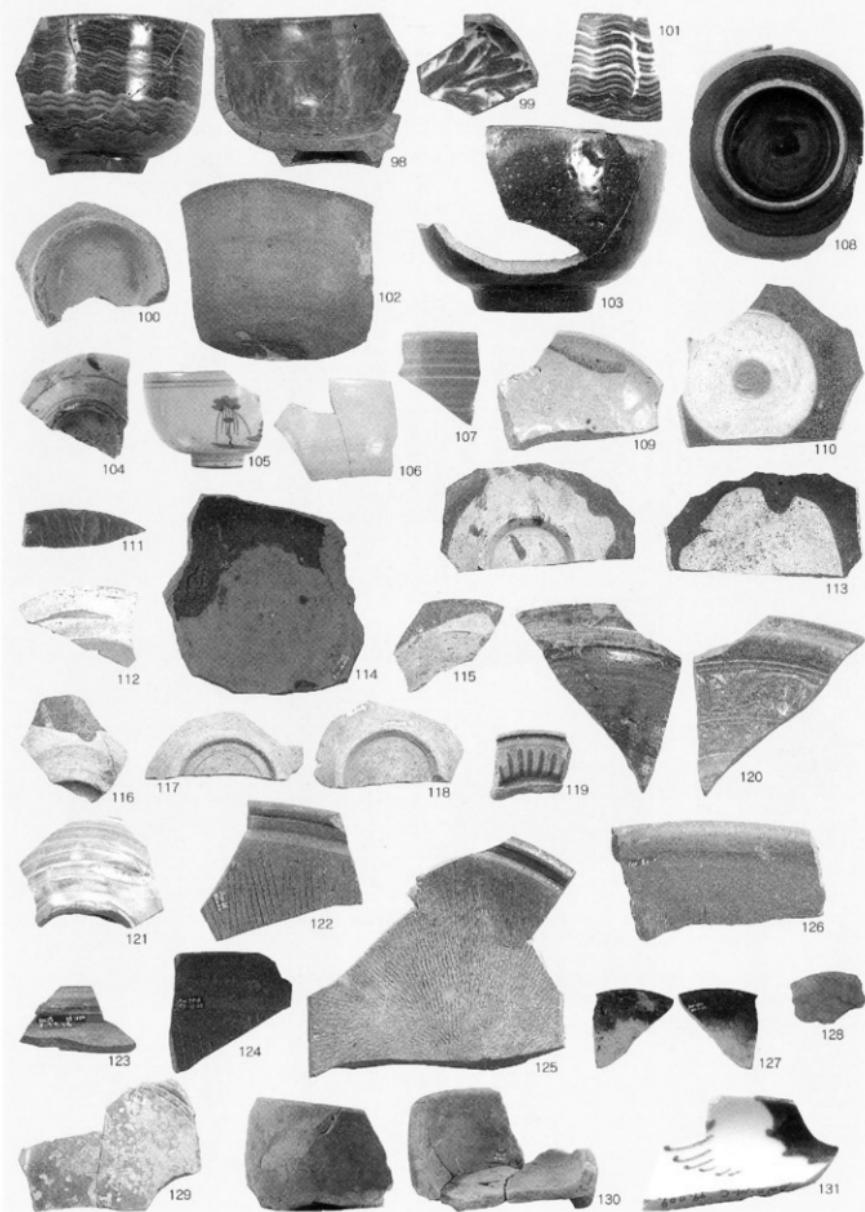


遺物(1)





遺物(3)

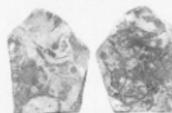


遺物(4)



132

133



134



135



136



137



138



139



140



141



144



142



143



145



146



147



148



第1次調査区南半 検出(南から)



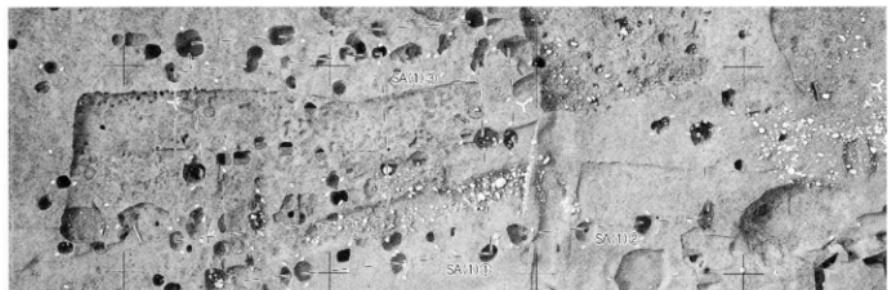
第1次調査区北半 検出(南から)



石器製作跡SA(2)325 (東から)



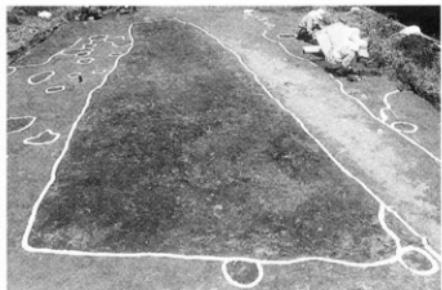
石器製作跡SA(2)325 遺物出土状況(東から)



掘立柱建物SA(1)①～③・竪穴建物SA(1)9・120・121 完掘(東から)



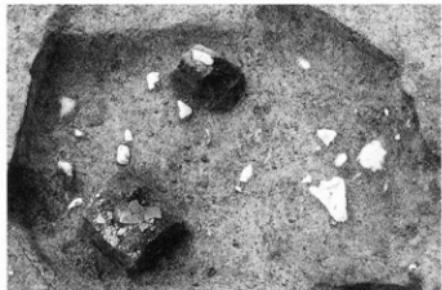
掘立柱建物SA(1)①～③ 完掘(南東から)



竪穴建物SA(1)9 検出(南から)



竪穴建物SA(1)9 遺物出土状況(南から)



竪穴建物SA(1)9 - P 1 遺物出土状況(東から)



竪穴建物SA(1)9 遺物出土状況



竪穴建物SA(1)9 作業状況



竪穴建物SA(1)9 C・D断面(南から)



竪穴建物SA(1)9 A・B断面(部分: 東から)



竪穴建物SA(1)120 検出(東から)



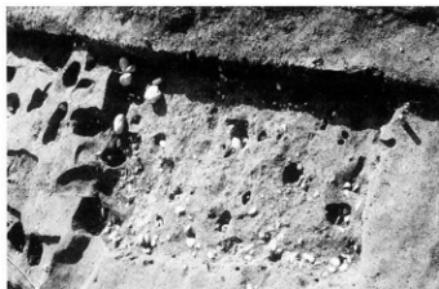
竪穴建物SA(1)120 遺物出土状況(東から)



竪穴建物SA(1)120 作業状況



竪穴建物SA(1)120 断面(東から)



豊穴建物SA(1)120 完掘(東から)



豊穴建物SA(1)120 遺物出土状況(南から)



豊穴建物SA(1)121 断面(東から)



豊穴建物SA(1)121 完掘(北から)



土坑SA(1)4 床面検出(東から)



土坑SA(1)4 断面(東から)



土坑SA(1)132 断面(南から)



土坑SA(1)138 断面(南から)



遺物集中区SA(1)224 (SA(1)131内：西から)



河川ISA(1)131 東西断面(南から)



河川ISA(1)131 完掘(南から)



河川ISA(2)1 遺物出土状況(北から)



河川ISA(2)1 南壁断面(北から)



河川ISA(2)1 完掘(北から)



溝SA(1)2 断面(東から)



道路状遺構SA(1)2・3 完掘(南から)



溝SA(2)119・120 検出(北から)



溝SA(2)119 石出土状況(東から)



溝SA(2)119 断面(東から)



溝SA(2)119 完掘(北西から)



溝SA(2)120 断面(南から)



溝SA(2)120 完掘(南から)



利水道横SA(2)205 東壁断面(西から)



利水道横SA(2)205 完掘(南西から)



溝SA(1)6 断面(南から)



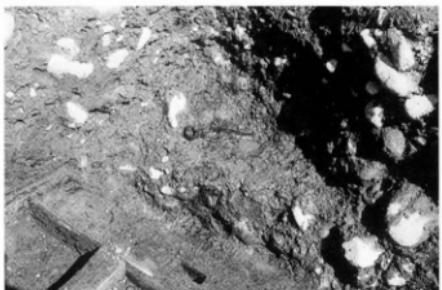
水田SA(1)250 (北から)



用水SA(1)251 断面(南から)



取水施設SA(1)226 断面(南から)



取水施設SA(1)226 遺物出土状況(南から)



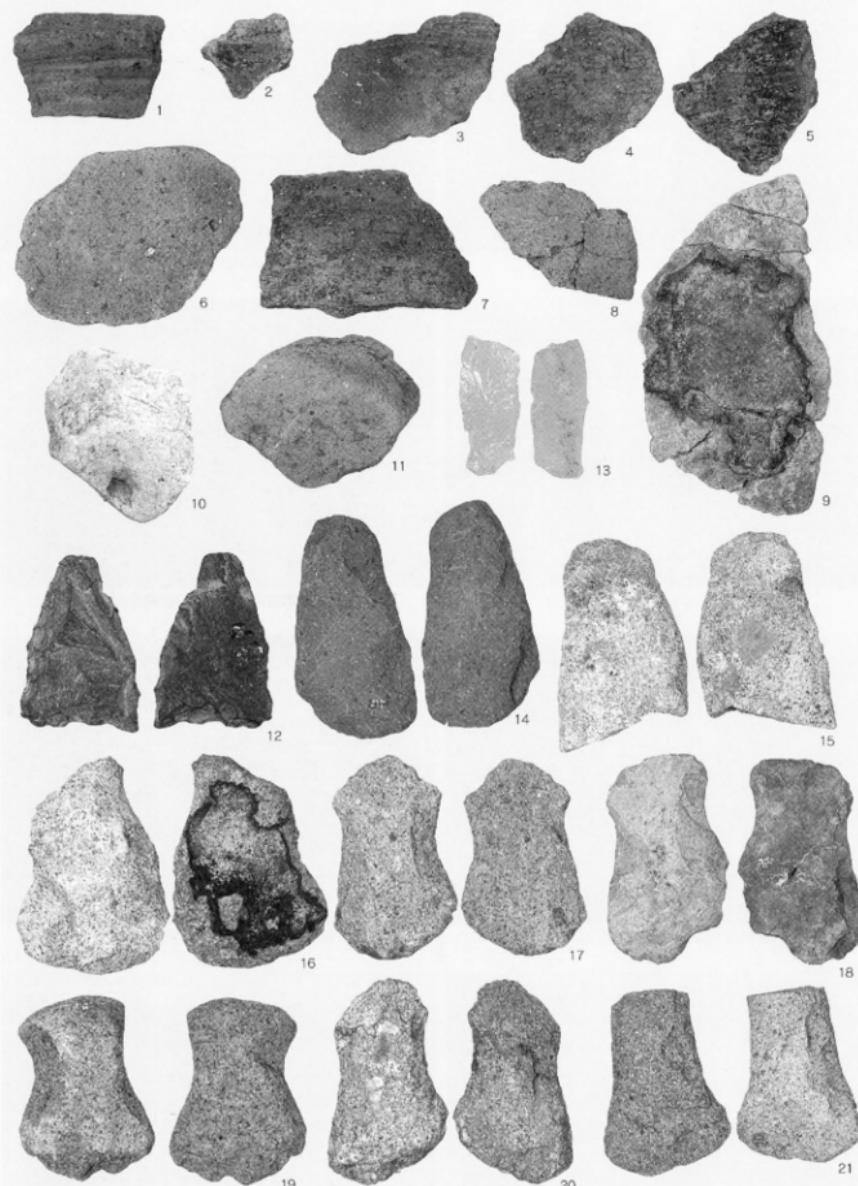
取水施設SA(1)226 完掘(北から)



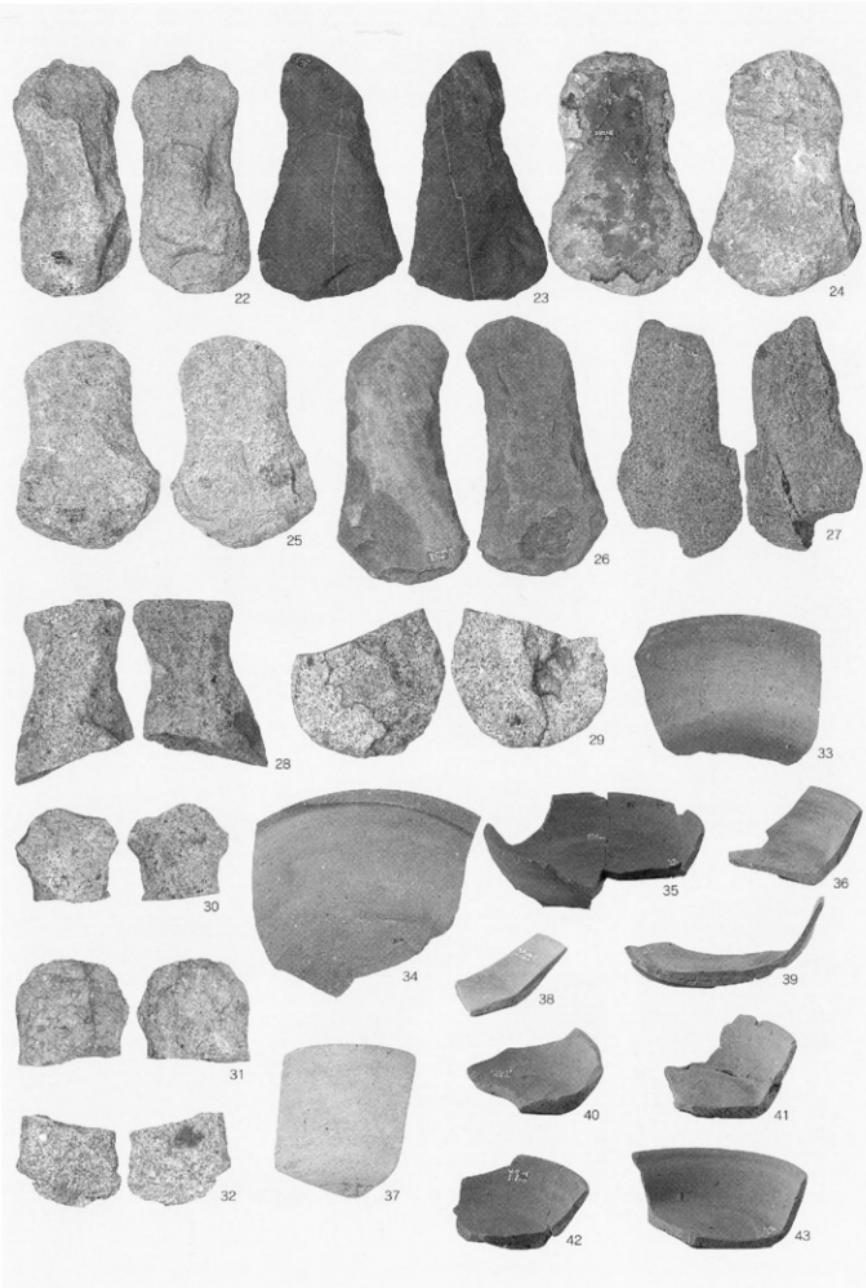
SA(2)T~V22~23グリッド 完掘(東から)



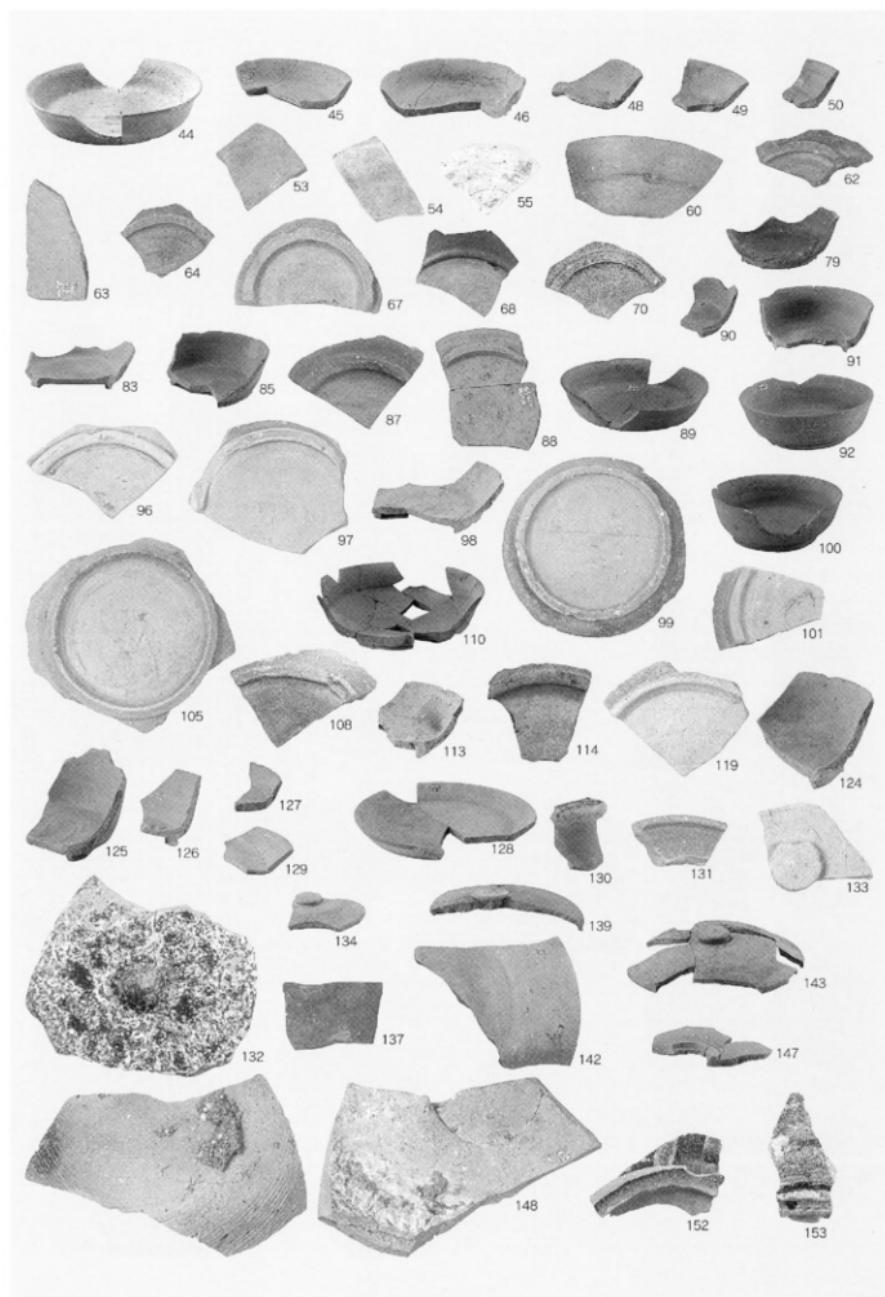
SA(2)W16~21グリッド 完掘(南東から)



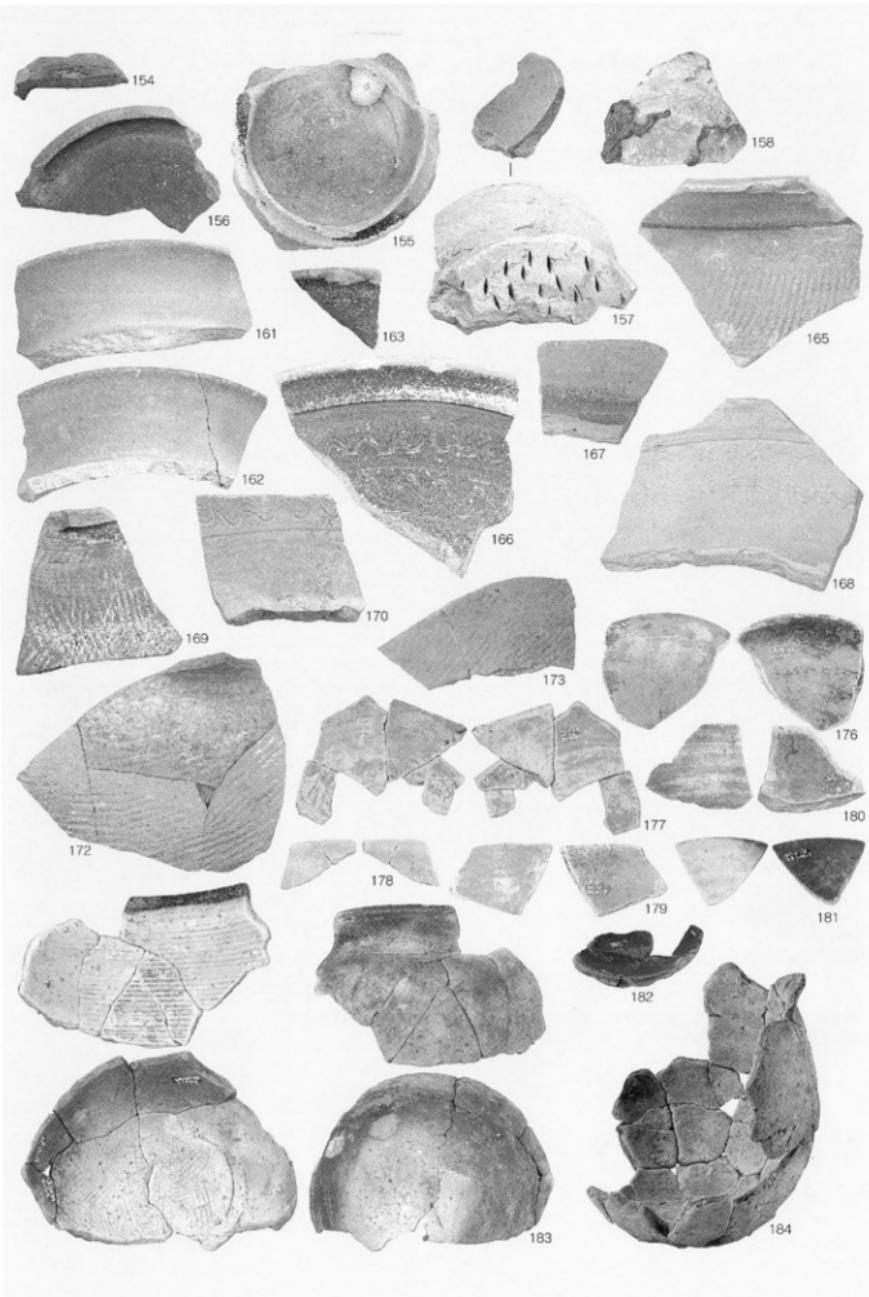
遺物(1)



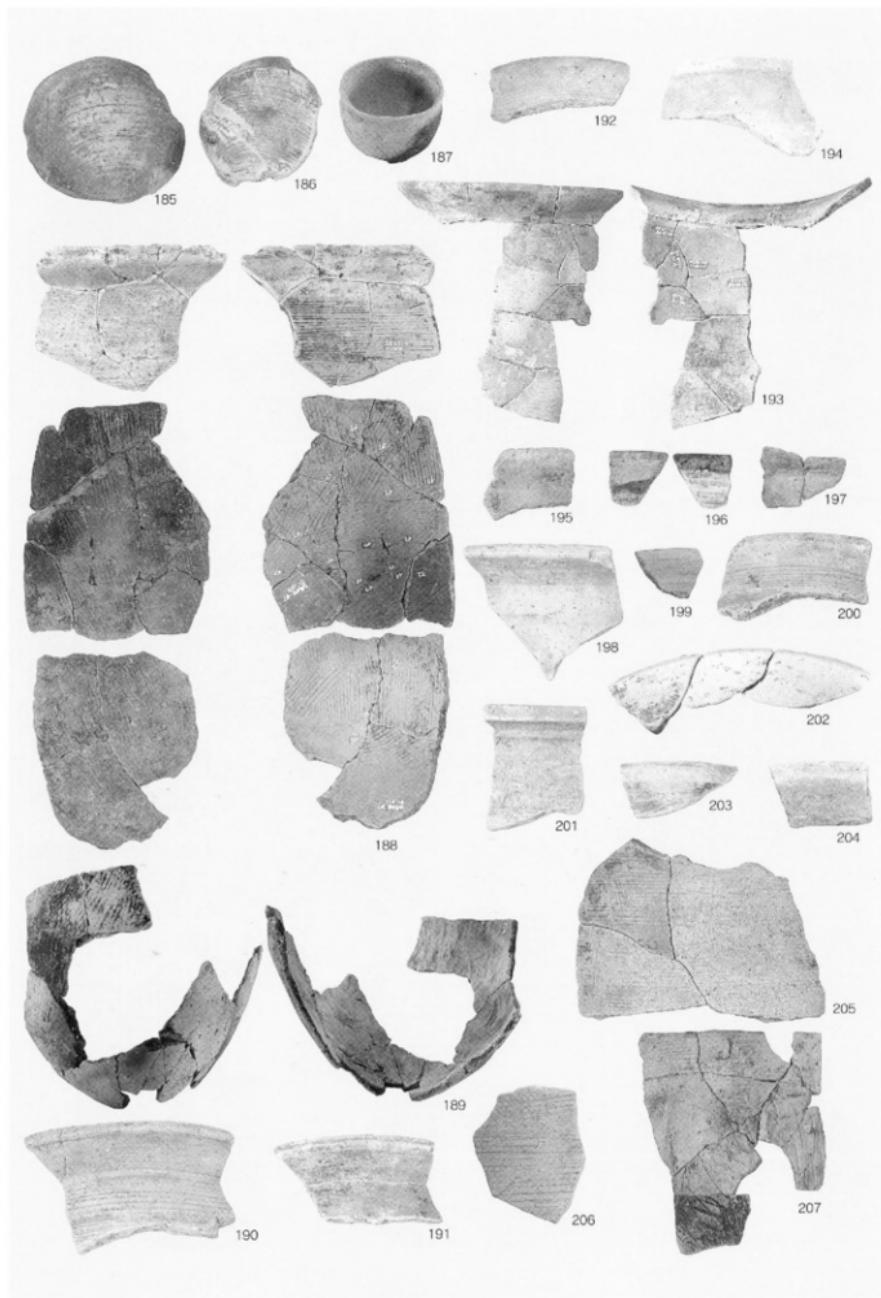
遺物(2)



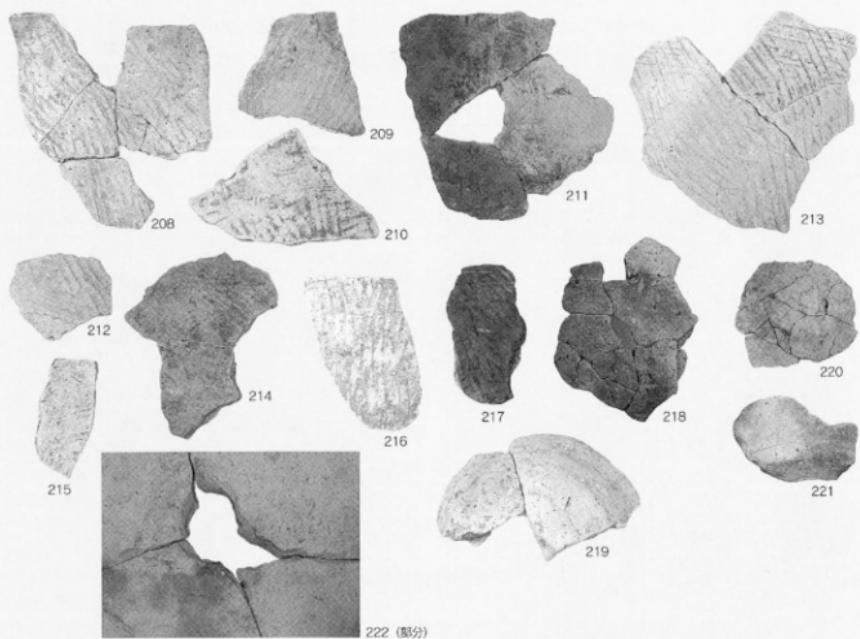
遺物(3)



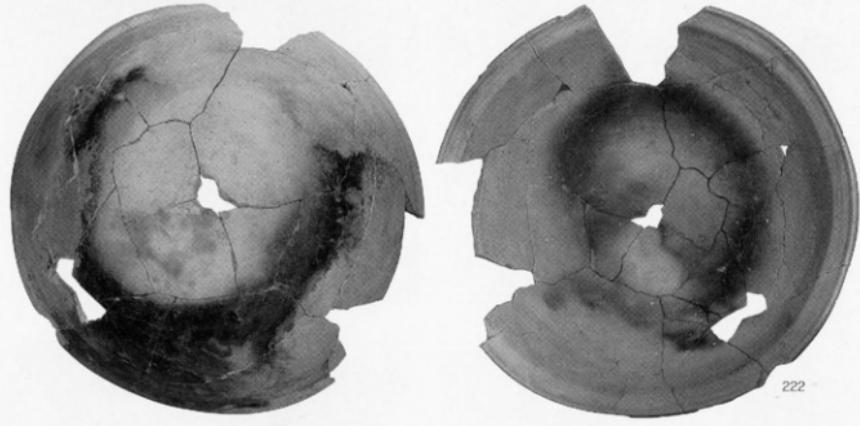
遺物(4)



遺物(5)



222(部分)

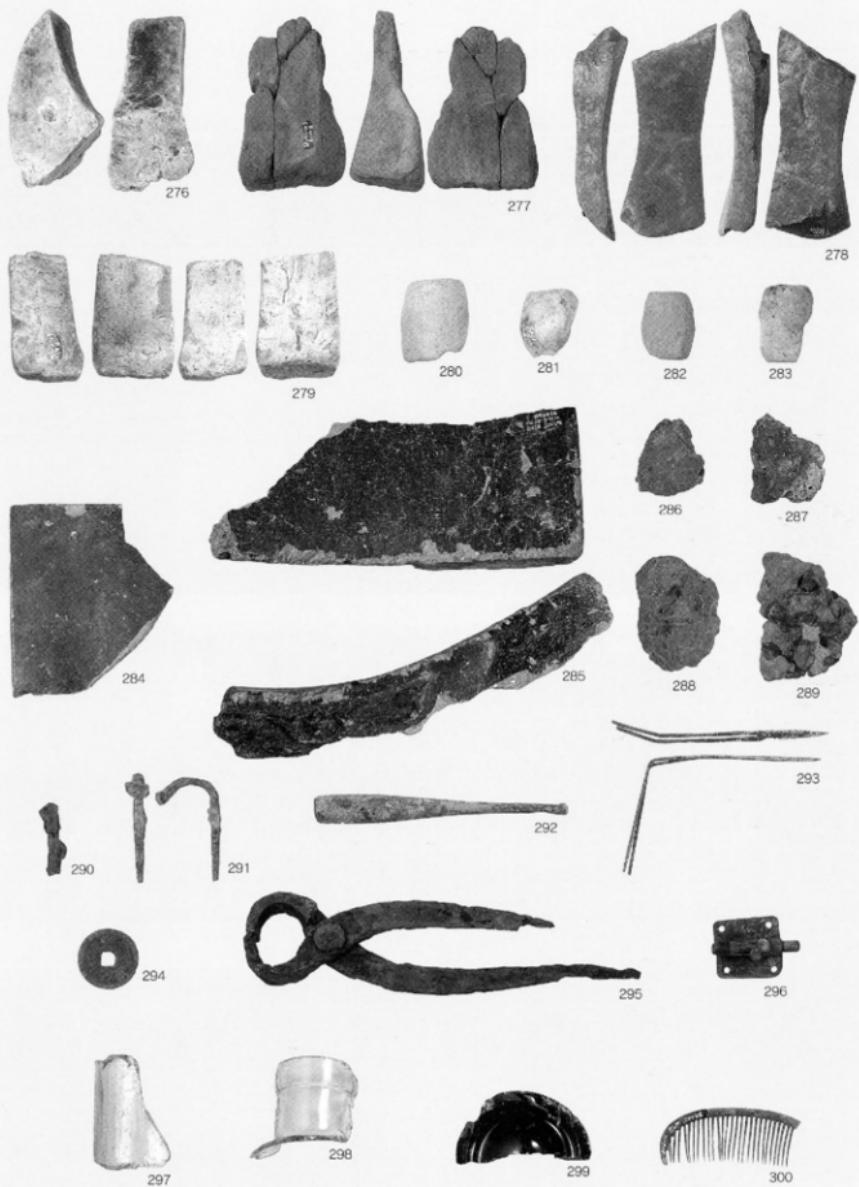


222



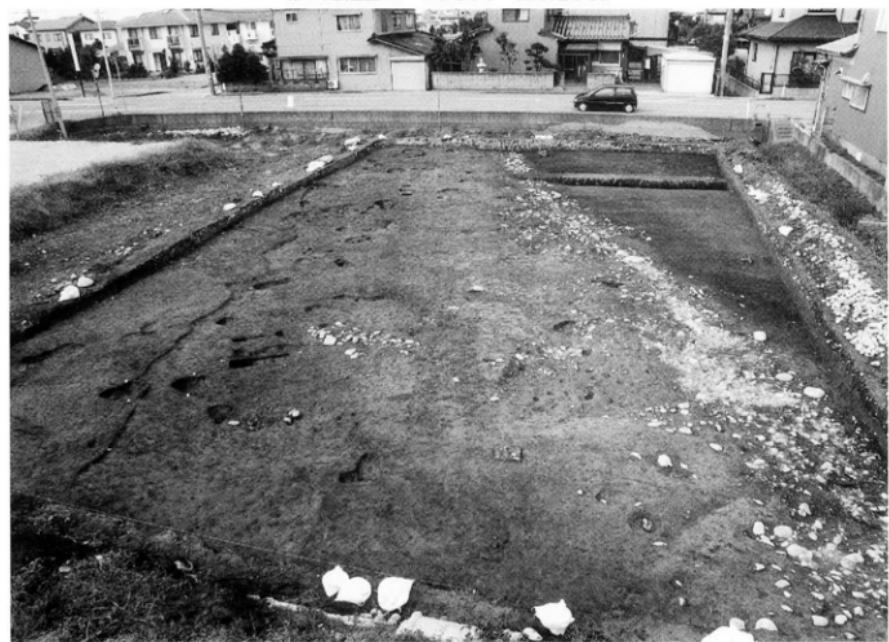
遺物(6)







第1次調査区X7～9グリッド 検出(北から)



第3次調査区 完掘(南から)



河川IST(1) 断面(北東から)



流路ST(1)30 完掘(東から)



土坑ST(1)6 遺物出土状況(西から)



土坑ST(1)6 完掘(西から)



ST(1)倒木跡群(南東から)



溝ST(1)9 検出(東から)



溝ST(1)9 断面(東から)



溝ST(1)33 作業状況



溝ST(1)33 断面(西から)



溝ST(1)33 完掘(東から)



河川IST(3)1 検出(北から)



河川IST(3)1 断面(南から)



水田ST(1)7-8 検出(北から)



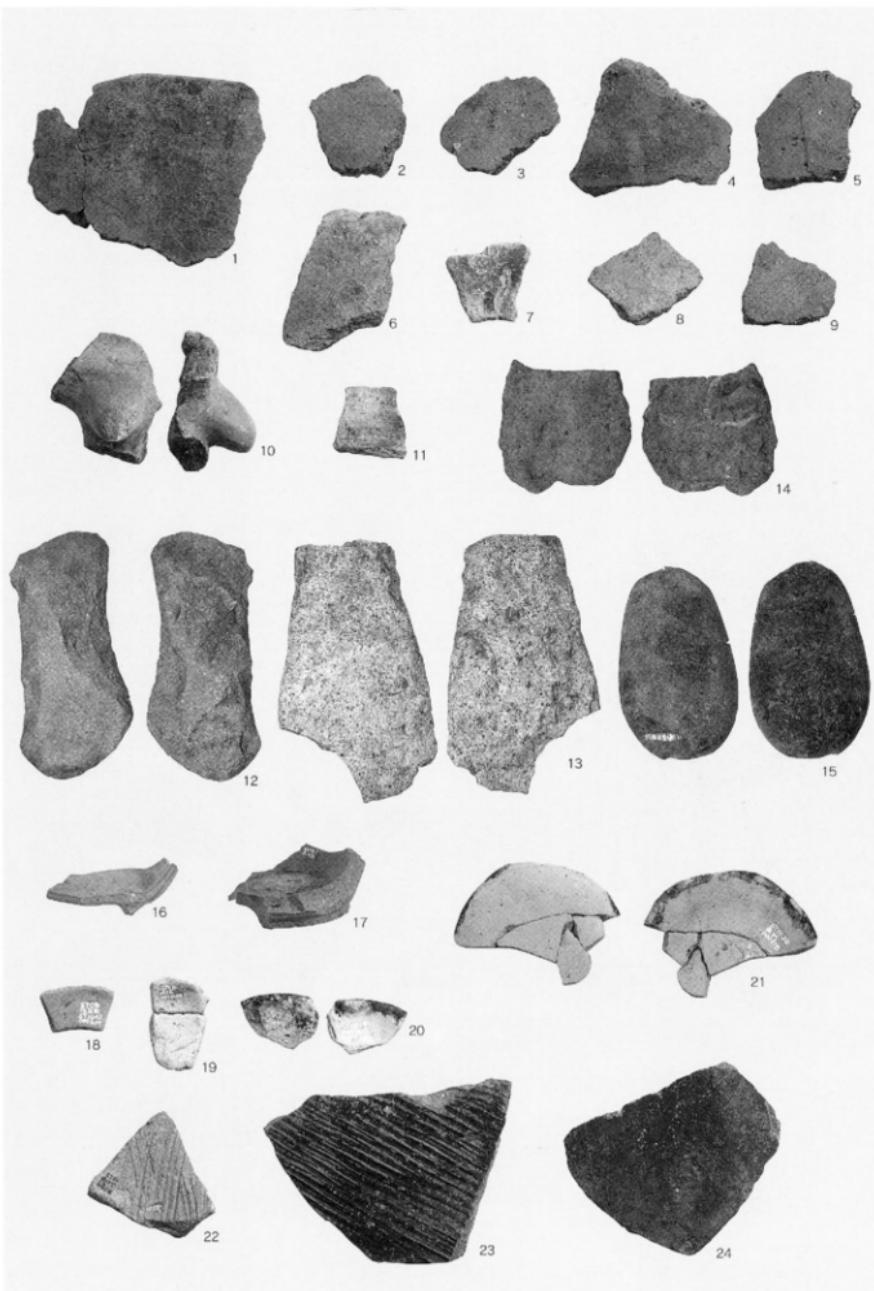
水田ST(1)8 振り下げ(北から)



ST(1)平行溝群①(北から)



ST(1)平行溝群③(北から)



遺物(1)



遺物(2)

報告書抄録

野々市町中南部上地区古墳群事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書

粟 田 遺 跡 (第10次調査)
三 納 ア ラ ミ ャ 遺 跡 (第1・2次調査)
三 納 ト ヘ イ ダ ゴ シ 遺 跡 (第1・3次調査)

発行日 平成18年3月30日
発行者 野々市町教育委員会
〒921-8510
石川県石川郡野々市町三納18街区1
電話 076-227-6122
bunka@town.nonoichi.ishikawa.jp
印 刷 高桑美術印刷株

